大正元年十一月二十八日印刷納本
大正元年十二月一日發行（毎月一回一日發行）

THE CENTRAL REVIEW

中央公論

第廿七年第十二號

第二百八十五號

此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

◎東京かるた會競技用　△萬朝報遊技部發兌

小倉百人一首 **標準かるた**

讀札定價四拾錢、取札定價四拾錢、郵税八錢同一組拾貳錢、

愈よ歌かるたの時節が來ました、歌かるたは東京かるた會で用ふる標準かるたに限ります是で無くては巾がきゝません東京では最う何れの家庭孰れの學校でも標準かるたを用ふる事になりました標準かるたは假名文字ばかりで誰にも取れます殊に御婦人お小供達には結構です、取辯や得手不得手が出來ず是れほど愉快に取れる「かるた」は他にありません

▼東京かるた會練習用○かるた界最新の發明

練習用 **標準かるた**

此かるたを使用すれば立處にかるたの名手となる事が出來ます

定價六十錢　郵税八錢

大正二年當用日記

定價五拾錢　郵税八錢

特徴

紙質善良、製本堅牢、明治天皇御製一日一首入、毎日の總菜獻立入

◎大正元年當用日記（七月三十日より十二月一日至る）定價卅五錢　郵税六錢

體力養成叢書

◎醫學博士遠山椿吉先生述

第五篇 **深呼吸** 定價廿九錢　郵税四錢

第一篇 大澤醫學博士述 冷水浴と冷水摩擦 價廿錢　郵税四錢

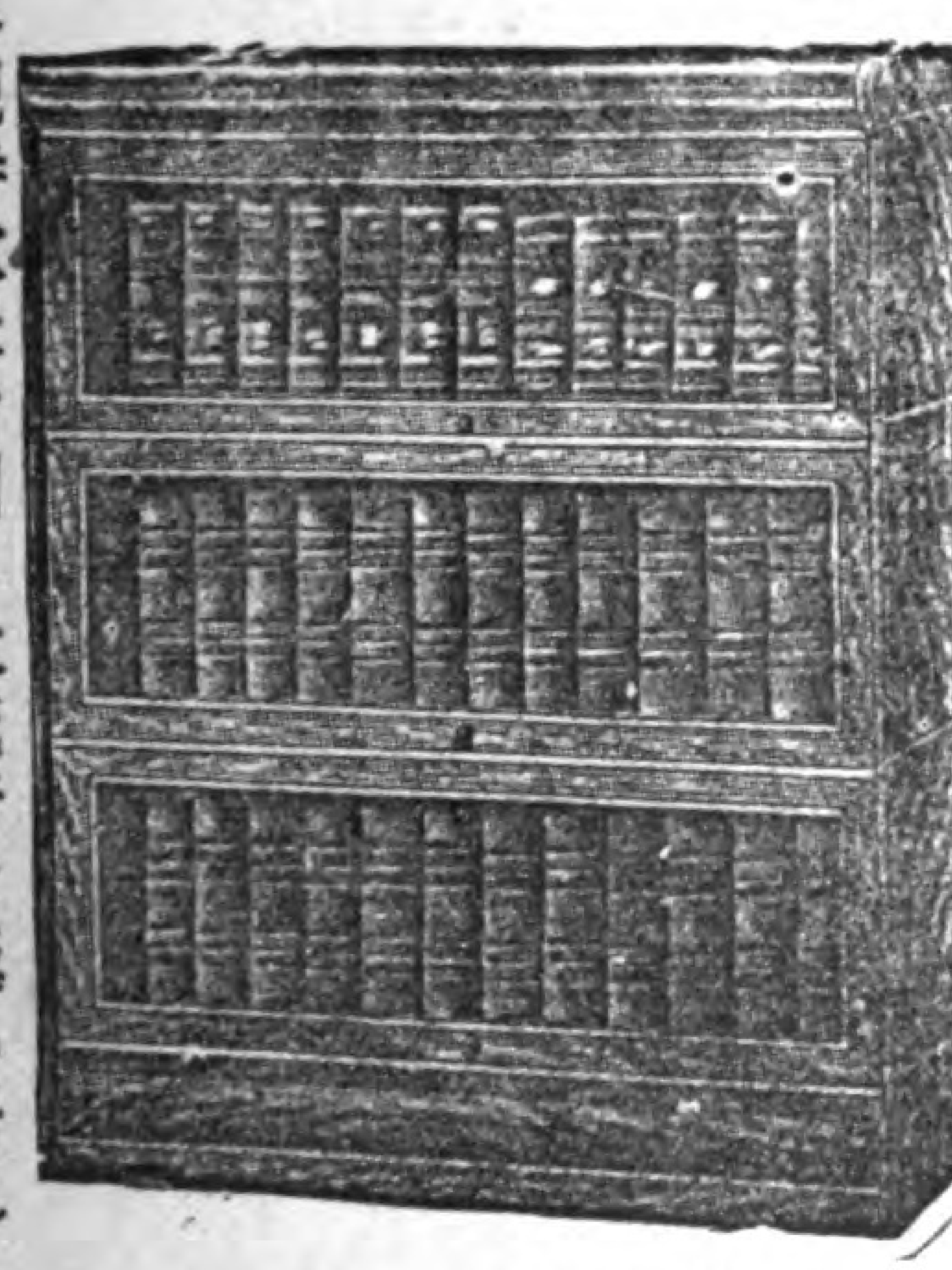
第二篇 二木醫學博士述 腹式呼吸 價廿九錢　郵税四錢

第三篇 大澤醫學博士述 海水浴 價廿五錢　郵税四錢

第四篇 樫田醫學博士述 滋養物の攝取 價五十錢　郵税六錢

組合せ本箱

◎文明の家庭に必備の家具!!!



▲某宮家大隈伯爵家を始め其他の諸名家より御注文の榮を辱ふせる本箱!!

▲多數の優れたる特徴を有る

▲しし現時歐米諸國に大流行を極め居れる本箱!!

構造を示せる目錄は往復葉書にて御報次第進呈

定價
金廿六圓　檜製
金廿八圓　欅製
金三十圓　櫻製
運賃荷造費御自辨

東京市新橋銀座際　**新橋堂書店**　振替東京二〇〇番　電話新橋一九一九番　一九九一番

信用なき店舗及卑猥なる賣品の廣告掲載は謝絶す

高橋五郎先生譯（新刊）

エピクテタス遺訓

二千年來天下無比の安心立命經と稱せられ、羅馬の賢帝として名高きマーカス、アウレリアス皇帝は生涯本書を其座右より離さゞりしと云ふ、其快論滔々辨じ去り論じ來る所痛辣骨を刺し深刻肉を抉り問々交ふるに絕妙なる譬喩、諧謔を以てす眞に天下の絕稱に背かず高橋先生苦心の名譯成る敢て一讀をすゝむ。

中版總クロース金文字入美本
全一冊
紙數四百餘頁
正價金壹圓
郵稅金拾錢

戸川秋骨先生譯

エマーソン論文集

(四版)上卷目次

◉歷史論 ◉自恃論 ◉報償論 ◉靈法論 ◉戀愛論 ◉友情論 ◉細處論 ◉勇壯論 ◉大靈論 ◉圓環論 ◉智力論 ◉藝術論

(再版)下卷目次

◉詩人論 ◉經驗論 ◉人格論 ◉作法論 ◉進物論 ◉自然論 ◉政治論 ◉名目論（及實在論） ◉改革論

總クロース金文字入

◎上卷 正價一圓四十錢 郵稅十四錢

◎下卷 正價一圓二十錢 郵稅十二錢

發行所 東京神田雉子田 振替東京七九九五番 玄黃社 ◉ 全國書店賣捌

關莊一郎傑作・島守寒光裝幀傑作（最新刊）

後の多情多恨

全一册菊判
紙質最上等
表紙精巧コロタイプ刷
函入瀟洒優美
定價九十五錢
郵稅八錢

△一代の文豪故尾崎紅葉氏を承知したる天下の士女は、同氏傑作たる「多情多恨」の著あるを夢裡にも忘れざるべし、又同時に日本文壇中、斯く迄て人情の玄微を穿ち得たる作品は稀なりとして、當時新聞雜誌が、筆を極めて嘆賞措かざりし事實をも亦忘れざるべし。

△更に又、現時流行の口語體の文章が、如何に其の敎へを此の妙文章なる「多情多恨」に蒙りしかをも忘れざるべし。猶更に「終篇金色夜叉」「荒尾讓介」なとの新著ある每に、何故に「後の多情多恨」の公刊せられざるを怪みたるも亦事實也。

△而して讀者は又「前多情多恨」の終末に於いて、主人公柳之助とお種との將來が此末如何なる情緒と如何なる色彩を以て發展し行くかを、最も興味ある人生問題として空想せられしなるべし。

△果然、其空想は活字によりて發表せられたり。新作家關莊一郎氏が、苦心慘憺の餘に就れる本書「後の多情多恨」すなはち是也。著者の奇拔にして清新なる着想と、流暢にして華麗なる文章とは、先著者紅葉氏の面影を傳へて些の遺憾なし。更に其の內容に至つては、前篇主要の人物たる主人公柳之助、葉山誠哉、同お種などの外、お種の從妹たる若き美しき音樂家、及び奇人にして義俠に富める藝妓茱子などの人物が點加されつ。紙上に活躍しつ、ある有樣は言はぬ花也。



東京本郷區三組町　有文堂書店　振替東京二三七番

此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

模範的最良日記

大正三年 重要日記

東京朝日新聞より曾て「多數日記中最も實用に適す」と激賞せられ且つ積年諸新聞の最大激賞と江湖の最大歡迎を縱にせる我が社發行の日記は改元と共に益々完備を極めたり**紙質善良、印刷鮮明、製本堅牢、**これ愛用者が我が社の日記に呈せる讃美の辭也。以て本書が如何に實用に適せるかを證するに足らん。加ふるに挿入せる繪畫は滿幅の趣味を添へ、卷尾の附錄は**家庭百科辭典**の代用となすに足る。

實業之日本社編
中版上製美本
定價四拾錢
郵稅八錢

大正三年 懷中ノート

特製總革美本
定價參拾錢
上製總布美本
定價拾八錢
郵稅各二錢

發行所 東京京橋南紺屋町 實業之日本社 振替貯金口座東京參武六番

信用なき店鋪及卑猥なる賣品の廣告掲載は謝絶す

(廣付の四)

此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

本年掉尾の偉觀

文藝倶樂部

十二月一日發行 第十八卷 第十六號 正價廿五錢 郵税二錢五厘 ● 金前六十分冊圓三十九錢

歳晩號

▼脚本喜劇 **小學教員**（榮二譜） 巖谷小波

▼小說 **三人の舞姫**（春汀譜） 本山荻舟

▼小說 **大和屋**（春帆譜） 鈴木秋風

［演藝界］

□演藝當座帳……鬼太郎

□鬼一法眼簡略卷……覺阿彌

□浪花節を聽く……闊太郎

□驚異の花ヘッダ……一白生

□露國女優氣質……空々閑人

□死せる市川紅車……竹の島人

□家弟の爲めに……中村秋湖

□呂昇と團司……春波生

□太棹變調誌……孔雀船

［活社會］

△暮の疊屋……迎月子

△鐵砲鍋の科學觀……岡本霞城

［長廣舌］

▲競 吳服……白水生

▲專賣局の女工……藪野掠鳥

［花柳界］

△花柳界覺え帳……お春

△東京花柳界の今昔……近藤焦雨

［忙中閑］

▲大久保物語……柳葉

▲世界便覽……一二散史

▲本町誌……石橋思案

▽講談 伊賀の水月 **死諫問答**（燕亭講） 一龍齋貞山

▽落語 **一人酒宴**（竹舟講） 入船亭扇橋

東京本町 **博文館**

（前付の五）

信用なき店鋪及卑猥なる賣品の廣告掲載は謝絶す

此の廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ



本會員帽章

第三回新學期開講

此際入會者に限り種々の大特典を與ふ!!!

本會に入會すれば

本會員には大家の所論と會員の作品を滿載せる機關雜誌新文學を無代進呈す◉本會員には文章其の他無料添削の特典を與ふ◉本會員には各種の大特典を與ふ◉本會卒業生には學資貸與の特典あり◉本會卒業生には各新聞雜誌記者其の他に就職紹介の便宜を與ふ◉本會卒業生を會友とし會員同樣種々の便宜特典を與ふ◉教授法の最新講義の平易會費低廉短期の卒業之本會員の常に多とする所なり

講義錄 見本附き
無代進呈
規則書 申込次第

文學講義錄



本會員徽章

初等科 五ヶ月卒業

教授科目

論文（小說、新體詩、和歌、俳句）。書簡文。國文。漢文。外國文學。日本文學。文學概論。新聞學。日本文典。創作百話。添削實例。雜科

高等科 五ヶ月卒業

教授科目

近世文藝思潮史。藝術概論。哲學汎論。詩歌論。演劇通論。明治小說史。各國文學史。文章術。近世々界文豪傳。名著梗概。名文評釋。創作百講。

東京神田西小川町（電話本局四五四七番 振替東京五二一九番）

大日本文學會

信用なき店舗及卑猥なる賣品の廣告掲載は謝絶す

前田文學士著。特製貳圓六拾錢 送料拾六錢 並製二冊 各冊壹圓卅錢 送料拾二錢。

内容見本進呈

訂正增補 英語自由自在

第拾六版

僅々五十日間にて英語を最も完全に修得する秘法如何?

本書の偉大なる効果は既に數萬の講習者に依て證明せらる

最新刊

物集文學博士監修

新式作文大辭典

物集文學士 蘇武文學士 共編

四六判千四百頁頗美本 函入正價貳圓三拾錢 特價壹圓九拾錢 送料拾六錢

本書は類書中の長を採り、短を棄て、新考案になる組織の下に編纂したるものにして、一言にして云へば從來の普通辭典と作文辭典と文章辭典とを併合して組合せたるものなり、故に本書一冊あれば類書百冊に勝る、是れ本書が辭書界に誇るべき最大特長なり、本書を座右に供へ置かんか其便利と利益は蓋し莫大なるべし。

内容見本進呈

發賣元 東京本郷區森川町 文成社 振替四六一七九番



中央公論第廿七年第十二號目次



一九一三年度 海外新聞雜誌

豫約期……遲るゝ時は一月號の送達を遲ふし且或は缺號の憂あらん

豫約價は特に交渉數回して協訂したる出來得る限りの最低限度也、其送達は正確にして且迅速也、弊社を通じて申込まるゝは本國發行元に直接御注文あるよりも却て低廉にして且安全也

各種見本陳列

▲海外新聞雜誌改訂目錄御申越次第進呈

丸善株式會社

東京日本橋區通三丁目
大阪東區博勞町四丁目
京都三條通麩屋町西入

SOROLLA Y BASTIDA



"THE SHORE"

中央公論



第二十七年
第十二號
第二百八十五號

政局當面の問題

(二個師團增設案を評論す)

(一)

吾人は是まで暫らく政局の評論を避け居たり、然る所以は他なし、黨人といひ官僚といふも、畢竟張李蝸牛角上の對抗に過ぎずして、國民より視れば幾んど全く沒交渉なれば也。

唯だ近頃に至りて、永く口を緘し能はざる一事あり、彼の軍事問題、殊に陸軍問題を以て、純乎たる黨爭の具に供せんとするが如き、極めて輕佻なる傾向ある是れ也、吾人は眞に國事を憂ふる人々と共に、之を議して以て其の趨勢を矯むるに黽めんと欲す。

（二）

吾人の聞く所によれば、陸軍は其の經常費に於て二百萬圓。臨時費に於て二千百五十萬圓を節約し、此の內より約九百萬圓を以て二個師團建設案を立てたるが如く、其差引き計算は大略左の如しといふ。

陸軍の國庫へ提供する額	
大正二年度	七百十一萬圓
仝　三年度	百七十萬圓
仝　四年度	百六十餘萬圓

國庫より陸軍に支給額	
大正五年度	二十一萬圓
大正六年度	九十八萬圓
大正七年度	百五十萬圓
大正八年度以降	二百六十萬圓
大正十二年度以降	二百八十萬圓

然るに內務大臣原敬は、絕對に此の計畫に反對し、師團增設に要する費額を轉用して、自個の所管なる地方の港灣修築鐵道延長費等に振向けんと欲し、陸軍大臣上原勇作男と暗鬪中にありといふ、是れ今日十一月十六日までの狀態也。

此の事實に就て問題たるは、內務大臣の主張する港灣開修鐵道延長を重しとするか、將た二個師團增設を必要とするかに在り、而して兩者が全く國家の必要より打算せられしものにして、何等の黨略をかへず、何等の黨緣を有せざるや否やも、亦政局を覘ふに於て逸す可らざる問題たらずんばあらず。

更に聞く所によれば、大藏大臣山本達雄氏も亦師團增設に反對なりといふ、然れども同時に內務大臣に加擔して、港灣修築鐵道延長にまでも同意するや否やは未だ詳らかならず。

此の場合に於て、西園寺總理大臣自ら明快なる裁斷を加へずして、其の態度の故伊藤公又は桂公の如

くならず、殊に平生に似ざるは吾人の怪む所也、是れ必らずしも陸軍を憚かりてのみにはあらずして、別に事情の存するものなるべし。

若し此の兩個の議論をして、調和する所なく、又裁斷する所なくして、彼の新聞紙の傳ふるが如く、元老會議の開催を俟つまでに押詰めん乎、其の結果や知るべきのみ、即ち松方井上の兩侯すら二個師團増設案に賛成したりといへば、元老會議が之を是認するや自明の理なれば也、山縣大山の兩公は陸軍の長者也、素より増設に異議あるべきに非ず、桂公は宮中に入仕せるがため、堅く口を結んで語らざるも、公の意向と雖も知るべきのみ、桂公は能く財政の事情に精通し、曾て軍事費に大なる繰延を決行したるとあり、然かも二個師團増設の費目(創設費)を擧げて陸軍省自辨すといはゞ、殆んど異議を挾む餘地莫かるべし、何ぞ況んや同じ財政通たる松方井上の兩侯すら同意したりといふをや。

然れども吾人の豫想する所によれば、西園寺首相は決して元老會議の裁斷を待たざるべし、侯は天成の總理大臣にして、面目を重んずると人に過ぐ、事の未定なるや、或は山縣侯を叩きて其の意見を求め、若くば其の斡旋を望むとは勿論是れあらん、故伊藤公は勿論、桂公も屢々之を繰返したれば也、明白にいへば、是れ寧ろ政界の常習なれば也、然れども總理大臣として當然自から裁斷すべきを裁斷せず、之を元老會議に待つが如きは、故伊藤公の斷じて爲さゞりし處、侯と雖も必らず之を成さず。

侯が其の親近者に語れる所によれば、陸軍省の要求(二個師團増設案)は之を撤回せしむべき底意なりしといへり、然れども陸軍側の意向強硬にして撤回を肯はずんば、侯は別に大に考慮する所あらざる可

らず、夫れ二個師團增設は少くも陸軍年來の輿論にして、上原男の如きは其の入閣以前に在ても熱心に之を主唱したりし一人なりき、故に其の要求容れられざらん乎、男は決然として其の職を去るや必せり、男にして去らば、幾んど其の後任たるもの莫かるべし、二個師團增設を容るゝに非ずんば、何人も陸軍大臣たるを肯んせさることは素より多言を俟たされは也、是れ陸軍側の一種のストライキに非ず、事情洵に然る也。

天下或は軍人以外のものを陸軍大臣たらしむべしと主張するものあり、現在の官制に變改を加へば、是れ必らずしも行はれざることには非ず、然れども軍人以外のものを以て陸海軍大臣と爲すの弊は、我が同盟國に於て痛切に感ぜし所也、今にして軍人以外のものを軍事當局たらしむべしといふが如きは、時勢遲れの甚だしきもの也、然らば則ち上原男の去る時は、即ち現內閣破壞の時なりと視ざる可らず、西園寺侯たるもの今や實に大なる考量中に在らざる可らざる也、是れ侯が平生の態度に似ず、依違として決せざる所以にして、其の踔勵風發する時は、即ち斷じて原氏等を抑ゆる乎、然らずんば一躍雲表に飛び去る秋なりと想定するを當然とす。

（三）

日露戰役の結果に鑑みて、西園寺侯の第一次內閣が、御前會議に於て陸軍を二十五個師團にまで擴張することを決して御裁可を經たりし事は、少しく事情を知るものゝ尙ほ忘却せざる所なるべし、唯だ即時之を實行せざりし所以は、財政の狀態未だ之を許さゞるものありたれば也。

今や支那の將來の最も關心すべきあり、而して露國との平和を堅持するに於て、また全く武裝を弛む可らざるものなくんばあらず、武備の擴張實に一日を寬ふす可らざる也、夫れ先帝陛下の鴻謨雄圖、大略成らざるなし、唯だ僅かに剩れるは支那問題の解決のみ、然り、此の解決が大正新政に於ける最も重大にして、又最も急要なる問題たるは、識者の齊しく認むる所にして、我が日本主として其の解決の任に當らざる可らざるとも、亦國論の一致する所ならずや、唯だ其の手段としては第一に武力を要するの一點に於て、俗論動もすれば紛々たるは、吾人の常に怪む所也。

軍備擴張に反對しながら、常に外交の軟弱なるを攻擊し、動もすれば無造作に開戰論を主張する矛盾は、今の我が政界の通弊也、事あるに方つては軍人を謳歌しながら、一び平和に復するや、軍人を攻擊して一歩も假さゞる輕薄は、我が言論界の宿弊也、彼等が常に模範の如く推稱する歐洲列國の外交を看よ、現に巴爾韓問題に於ても墺露兩國は互に動員令を布告して、砲火直ちに相見るも曾て遺漏なきを期せるに非ずや、外交の背後には必らず强大なる武力なかる可らず、區々の口舌のみを以てしては、到底平和を支持するに足らず、武力を控ゆる外交にして、初めて功を奏すべきのみ、支那問題の如き、彼の秩序を保全して四億の民衆を安堵し、以て東洋の康寧を支持せんとせは、主として强大なる武力に由るの外なき也、且つ露國との交情今や漸く密なりと雖も、彼の國情に精通するものは、亦寸時も武裝を弛むべからず、彼の國の開進主義者は素より深く日本と相結ぶの利なるを悟るも、他の有力者間には、尙ほ復讎戰を期圖するもの少からず、僅かに一のノヴヲ、ヴレミヤ新聞社中に於てすらも、親日主義者と

排日主義者と兩々相對立するに非ずや、英國との同盟が主として日本の武力の恃むべきにありと知らば、露國との平和を確實に支持するの途も、亦武力を以ては容易に彼れに讓らざる地位を堅守するに在るとを察せざる可らず。

此の二個の事實より觀るも、軍備擴張洵に已む可らざる也、陸軍が多くの犧牲を拂ふも尙ほ强いて二個師團增設を主張するは、實に茲に顧念せざる能はざるが故ならずや、抑も政府の行政整理によりて得んとする節約額は幾許なりや、特別整理委員會の初度の提案は實に二千萬圓なりしと聞く、更に三千萬圓とするも、五億七千萬圓の歲出總計に比すれば、僅かに六分弱のみ、然るに陸軍省は假令大部分繰延に由るとするも、尙ほ八千三百餘萬圓中より一千萬圓を節約して之を一般會計に提供すといふ、是れ一割二分を節約するものにして、一般整理の六分弱に比すれば正さに二倍に相當す、政府は素より陸軍の誠意を諒とせざる能はざるべし、何ぞ況んや此の外二個師團創設に要する九百萬圓の全部も、亦自から節約額を充當して、毫も國庫を累せずといふをや、之をしも頑强といふは寧ろ酷に過ぎずや。

或は陸軍の主張を以て、强ひて內閣を壓迫し、一部官僚のため內閣を破壞する計略に出づと做すものあり、事實は何者よりも雄辯也、陸軍が一千萬圓の節約を提供し、更に九百萬圓の增師費を自辨するといふの一事は、其の妄を正すに於て餘りあるべし、且つ彼の所謂官僚派なるものも、今假かに起ちて政局を擔當する氣力と欲望となきとは、吾人の推想し得る所、强ひて之をいふは、是れ疑心暗鬼乎、然らずんば故らに構造して以て世を欺瞞せんとする計略のみ、即ち陸軍の要求が國家の軍事上より出でたる

純の純なるものたることは、多言せずして明白なりとす。

港灣を修築し、鐵道を延長するは、地方の開發と產業の進步を促がすに於て有益なる、素より辯論を要せず、然れども一面に政費を節約し、一面に租税を輕減せんとする時、尙ほ且つ之を强行すべきものなりや否や、國防の費用を割きてまでも之を實行せざるを得ざるものなりや否や、三尺の童兒と雖も之に迷はざるべし。

（四）

且つ斯の如く主たる地方問題には、多くの因縁あることを知らざる可らず、今の內閣を支持すと稱する政友會が、先年來地方に勢力を扶殖したりし一の口實は、正さしく港灣問題若くば鐵道院問題にありしにあらずや、少しく善意を離れて言へば、政友會の領袖たる原氏が內務大臣として今や港灣鐵道等に費用を吝まさらんとするは、地方黨員に對する宿約を果し、更に益々黨の勢力を擴張せんとする計略に出てたるにあらさるや否や、即ち一の黨略にあらさるや否や、吾人は素より悉く之を肯定せざるも、又全然否定する勇氣なし、少くも其の一部分の傾向あるを認めざる能はざる也。

夫れ國家の大計上より出てたる必須急要の軍備擴張と、若干の黨略を加味したる地方問題と、果して何れが急切にして孰れか不急なる、苟くも日と月との明に迷はざるものは、鐘と提灯との輕重を疑はざる者は、之を問題にするだも尙ほ恥づべきに非ずや、而して滔々たる天下之に惑ひ、而して總理大臣以下閣僚尙ほ之を決せずといふ、天下の至恠にあらずして何ぞ。

（五）

内務大臣原氏等にして、飽まで其の主張を貫かんとし、而して西園寺首相亦之を抑ゆるなしとせば、是れ彼等自から其の内閣を破壊する也、求めて自から其の地位を捨つる也。

事果して玆に至らん乎、吾人は其の結果の輕からざるを察すると共に、嚴正なる批評者として、豫め切に之を警め置かざるを得ず。

先帝の俄かに崩御し給ひて、國家の大故に遭遇せる内閣の苦心は、吾人の大に諒とする所也、殊に其の立場として、減税的税制整理を公約せる心事を悲むものなり、曾て行政整理を打切りたりし勇氣ある西園寺侯は、何故に斯る公約を敢てせざるを得ざりしや、軍備擴張の急要は、其の第一次内閣の時代に於て夙くも承認したりのみならず、第二次の内閣組織後、未だ一ヶ月半を經ざるに早くも支那の動亂ありしに於て、更に痛切に之を感ずべきにあらずや、然るに税制整理に於て單に國家負擔の公平を期して、寧ろ國庫の收入を多くするを原則とせず、却つて減税的主義を執るとを闡言せるは、吾人の歎惜を禁せざる所也、然れども政府としては公約必らず實行せざるべからず、宜しく若干の減税を斷行し、且つ之に必要なる政費節約を行ふべし、且つ眞に行政整理を行はんとせば、中央地方に渉りて根本的更革を斷行するがため、急速の成功を求めず、審議精査を重ぬべく一の機關を設け、差當り減税と軍備擴張に必要なる政費の節約を爲すに止むべし、即ち陸軍の要求の如きも、快く之を容るゝを上乘とす。

吾人は素より世上一部に傳はる豫算實行不能説を信ずる能はず、又實業家殊に銀行家の愁訴を以て、内

閣の致命傷なりとも視做す者にも非ず、假令難しといふと雖も、内閣が能く之を斬拔けて以て國務の進行に鋭意せんことを促さゞる能はざる也。

然れども此の難境に忍ぶ能はずして去る乎、宜しく其の事相を明白にして、苟くも疑似の餘地を貽す可らず、萬一『我れ既に減税的税制整理を行ひ、且つ行政整理を實行せんと勗めたりしも、陸軍頑強にして、二個師團增設案を堅持するがために阻せられて、事志の如き能はざるを以て、竟に勇退したり』と言ふが如き事あらん乎、吾人は批評者たる天職として、寸分も之を寬假するを得ざる也。

夫れ陸軍擴張は、先帝陛下の御前に於て討議せられ、陛下の御裁可を得たりしもの也、大正の新政中最も重大且つ切要なる支那問題解決のため、將た露國と堅實なる平和を支持するがため、缺く可らざる國家の事業たり、之を定むるに方りて區々の黨略を用ゆる斷じて非也、殊に一種惡辣なる新聞操縱策を用ひ、無識なる俗論家をして無責任なる言論を恣にせしめ、由て以て國民と陸軍とを離間するが如きは、是れ國家の平和を攪亂するもの也、幾んど叛逆行爲に類するもの也、記せよ、陸軍は天皇陛下の陸軍にして、而して又實に國民の陸軍也、山縣寺内の陸軍に非ず、長閥の陸軍に非ざる也。

更に思へ、國家急須の陸軍費を省略して、港灣修築鐵道延長等に轉用せざるを得ざる程、此等の地方問題は、必要緊切なりや、然かせざるを得ざる程に陸軍には冗費贅費多きや、抑もまた軍事を閑却してまでも政黨のためにせざるを得ざるや、土耳其がブルガリア、セルヴィアの如き小國に撃破せられしを看よ、陸軍を閑却する罪惡は、覿面に至り、面目を汚し運命を危ふせるに非ずや。

尙ほ更に思へ、二個師團增設に要する全額九百萬圓は、陸軍自から之を支辨して、事實國庫を累せずといはずや、勿論二個師團を支持すべき經常費は、國庫之を負擔せざるを得ずと雖も、然かも陸軍は一千萬圓の節約を爲すといふにあらずや、大正二年度に於ては、七百萬圓の節約額を提供して、而して五年度に於て國庫に要求する經常費は、僅かに貳拾壹萬圓に過ぎずといふに非ずや、內閣は陸軍より一千萬圓を提供せしめて、而して尙ほ行政整理を阻止せられたりといふや、輕減的稅制整理の進行を妨害せられたりといふや、陸軍が一千萬圓を提供するは、寧ろ世間意料の外に出づ、然るに內閣自から他省に涉りて十分なる整理を斷行する能はず、輕卒にも減稅的稅制整理を公約して其の實行に苦みながら、却つて責任を二個師團增設案に嫁せんとするは、是れ正さしく國民を欺瞞するもの也、國民を欺瞞するに止まらず、天皇陛下の陸軍を誣ひ、國民の陸軍を侮辱して、國民と軍隊とを離間せんと欲するもの也、其の罪や斷じて許す可らざる也。

陸軍擴張は、海軍擴張と齊しく國家急須の重要問題たり、前次の西園寺內閣が御前會議に於て討議し、旣に陛下の御裁可をも仰けるものにして、全く國防の大方針より出づ、之を以て區々陸軍一省のみの事とするは、餘りに國事に不親切也、況んや之を目して遞信省の電話擴張と一般、全然一省の事のみと爲すをや、日露大戰役の結果に鑑みずや、支那問題解決の準備を要せずとする乎、露國との平和支持を必要ならずとする乎、吾人は先づ根本問題に於て俗論及び黨人の私論を正さゞる可らざる也。

內閣は其の死處を擇ぶに智を盡すべし、然れども事實を枉げ、陸軍を誣ひて國民を欺瞞するが如きと

は、必らず之を避くるを要す、今の難局に耐忍する能はず、輕卒にも之を抛け出すに方りて、徒らに黨略のみに殉するは、吾人の執らざる所、抑もまた識慮ある國民の許さゞる所ならん。聰明にして器度ある西園寺侯にして之を爲すが如き、吾人の到底想像し能はざる所也。

（六）

吾人をして更に轉じて事實の成行を想像せしめよ、西園寺侯にして萬一陸軍の要求を斥けて、竟に自から内閣を破壞するが如きとあらん乎、之に代るべき内閣組織者は必らず寺内伯なるべし。寺内伯の内閣は必らずや陸軍擴張を實行すべく、其の經費を議會に要求すべし、衆議院に多數を擁する政友會は、勢ひ之に反對せざるを得ざるべし、原氏の伶悧なる、私かに寺内伯に通じて政友會と提携せしむべしといふが如きは、全く空想のみ、果して然らば寺内内閣たるもの、勢ひ政友會と戰はざる可らず、之と戰ふ爲めには、伯の性質として頗ぶる思ひ切たる手段を執るべく、政友會を七花八裂せざれば止まずと爲すべし、其の結果政界に不良なる影響を及ぼすと素より免かる可らざる也。

大隈伯は西園寺侯の不眞面目なるを難じ、武斷と雖も寧ろ懸命なる寺内内閣を歡迎すと言へり、然れども國防問題の如き國家の重要事を孤注として政府と政黨と相戰ふは、憲政上悦ぶべき趨勢に非ず、勢ひにして避くる能はずんば已むを得ずと雖も、努めて之を緩和するの妙なるや言なき也。

唯だ多數黨の恣睢は、世上の憚ばざる所、現狀打破もまた必らずしも妙ならずとせず、此の點よりいへば、寺内内閣の起つて大に政友會と戰ふとを歡迎する、恰かも大隈伯の如きものも少なからざるべき

乎、而して政局の進歩亦其の間に認むるを得ん。

唯だ政局の如何に變化するに關せず、我が國主となつて支那問題を解決せんとは、國の大精神大主義ならざる可らず、而して其の手段中重要なる一として、速かに軍備擴張を實行せざる可らず、而して眞正なる國論も、亦竟に之に一致せざる可らざる也。

* * * * * * *

陸軍の要求が如何に決すべきかは、十一月廿日以後に非ざれば視ることを得ず、本誌の世に出づる時、或は既に其の決せし後乎、兎にも角にも、十二月以後は彌々政治期節として世を賑はすこと大なるべし。

鐵道政策を難ず

(一)

財政整理のため、國有鐵道を民營若くば半官半民の經營に移すべしと主張するものあり、今の内閣は多くの故障を排して國有を實行したりし當局者丈けに、曾て斯の如き考慮も調査も爲したることなきが如し、吾人は以て智なりとす。

國有以後既に僅かに六年を經過せるのみ、今俄かに之を更改するは餘りに輕卒に過ぐ、且つ國有後の經過は、民有時代に比して若干の改良と進歩とを明示せるに於て、何人も之を非難す可らず、例せば車

輛の改良、輸送力の增加、運賃の統一及び乘賃運賃の低減の如き、民有時代に比して聊かながら改善せられたりと謂ふべし、此の事實を無視して、國有方針を變ずるが如き、輕卒にあらずして何ぞ。

或は鐵道建設改良費として、年々五千萬圓を要し、其のため預金部より融通し、或は大藏證劵を增發する等、國庫の累を爲すと少からざるが故に、之を民營若くば半官半民とすべしといふ乎、然れども我が國の鐵道方針は抑も之を如何するや、年々五千萬圓の建設改良費を投ずるを以て多きに過ぐると爲す乎、將た少きに失すると爲す乎。

松方侯は此の五千萬圓のために國庫を累するを非とし、當分は鐵道の益金（年々一千萬乃至一千三四百萬圓あり）のみを以て之に充當し、一切國庫を煩はす可らずと做せりといふ、是れ已むを得ざる一時の便宜に過ぎざらんも、然かも侯は未だ國有方針を變易すべしとは爲さゞる也。

民營又は半官半民論の主張者は、五千萬圓の建設改良費を少きに過ぐると爲し、寧ろ大に資本を吸集するがため、國有策を一擲すべしと爲すものゝ如し、然れども外資を輸入するも、內債を募集するにも政府の手を以てすると、民設會社又は半官半民の手を以てすると、孰れが便にして孰れが不便なる、幾んど問題にもならざるにあらずや、且つ政府の手を以てするも、他の手を以てするも、國の經濟全體に於て何等の差異を視ざるにあらずや。

南滿洲鐵道の半官半民たるは、事實已むを得ざるのみ、他國の領土、即ち租借地に於て、國家自から鐵道を經營するが如き、實際に於て妙ならざるがために、敢て半官半民と爲したるのみ、近時世界の趨

向は、寧ろ鐵道を國有と爲すにあり、國有より民有に移して失敗したるものに伊太利國あり、今にして早くも國有方針を變せんとするは輕卒のみ。

(二)

斯くいへばとて、吾人を以て今の國有鐵道に滿足するものと做すこと勿れ、吾人は我が鐵道政策に對して多くの不平を懷く、試みに其の重もなるものを擧げん。

第一は貨物輸送に重きを措かずして、乘客收入を主位となすこと也、吾人が鐵道國有を可とせる根本理由は、實に之に由て大に運賃を低減し、貨物の輸送を圓滑ならしめて、以て産業の發達を促がすにありき、即ち鐵道收入を減ずるも、大に産業の發達を視るを得ば則ち足ると爲したりき、然るに今の鐵道院當局は、收入主義に偏するが如く、多くの收入を得るを以て其の功績の如く信ずる形迹あり、隨つて乘客收入を得るに汲々として、彼の觀光團の類を歡迎し、此がため大なる割引を爲し、甚だしきは各驛に内命して、觀光團を勸誘せしめたりしことあり、觀光團は名の如く單に風光を觀廻るものにして、國民の奢侈を奬勵する結果を齎らしてこそすれ、生産の發達には多く資する所あらず、鐵道院にして若し眞に經綸の心あらば、斯の如きは寧ろ之を排するを可とす、逆まに之を歡迎して、單に收入の多きを求むるは、殆んど國有の根本義を忘却したるもの也。

(三)

鐵道院が産業の發達に重きを措かざるは、其の貨物運賃に對する措置に於て明瞭也。

英國が其の石炭を外國へ輸出するに至りしは、議院の決議に由て著るしく其の運賃を低減したる結果たるとは、人の知る所也、印度にても近時大に輸出石炭の運賃を低減するや、其の石炭は漸次に日本の石炭を驅逐し、孟買は勿論、新嘉坡方面にまでも其の販路を擴張して、全く日本石炭の跡を絶たんとする傾向あり、試みに今七十五哩間に於る彼我石炭の運賃を比較するに、印度は一噸僅かに三十五錢七厘なるに、日本は一圓五十五錢にして殆んど其の四倍に當れり、我が國の鐵道運賃の不廉なる多言せずして明白ならずや。

石炭は工業用燃料として缺く可らざるものたり、然るに其の運賃の高きがため、工業家の苦痛は甚だ大也、今試みに一噸の運賃を左に表示せん。

常磐炭（湯本より搬出）一噸の運賃

岡谷	三圓〇七錢	甲府	二圓八十七錢
濱松	三圓四十一錢	靜岡	三圓十錢
名古屋	三圓八十六錢		

若し九州炭を馬關より名古屋まで輸送せば、四圓六十四錢を要すべし、斯の如く重き運賃を支拂ふことは、工業家の最も苦痛とする所ならざるを得ず、故に山元に於ける炭價少しく騰貴すれば、靜岡濱松地方の如きは、往々工業機械の運轉を中止するに至ると珍らしからず。

鐵道院は石炭を一級品とし、其の通常噸扱ひに於ては一哩三錢を單位とし、貸切に於ては約二錢に相

當せしむ、若し貸切とすれば、百哩に於て一錢八厘九毛、三百哩に於て一錢四厘二毛、三百哩に於て一錢一厘九毛の割合となる、然れども關東に於て九州炭を用ゆるが如きは少く、遠きものは寧ろ船運に由るを例とするが故に、大抵二三百哩を程度として大に之を引下ぐるを要す、印度の如きは一哩一噸五厘未滿の割合也、我が鐵道院は宜しく獨逸に倣ふて燃料率を設け、工業用石炭の運賃を少くも今の半額に低減すべし、工業の發達を促がすためには、素より此の英斷なかる可らざる也。

看よ、彼の南滿州鐵道すらも、石炭を四級品とし、普通一噸一哩の運賃を二錢とするも、之を會社用として五十噸貨車を用ふれば、一噸賃に九厘に相當するにあらずや。

(三)

木材も亦一級品とせられて、其の運賃石炭と同額也、是れ亦頗ぶる高きに失す。

獨逸の森林が大抵平坦なる原野にして、輸送上甚だ便なるに反し、我が日本の森林は殆んど總て山間にあり、輸送甚だ不便なるがために、山元に於ける木材價格は驚ろくべく低廉にして、山主に取て殆んど多くは不引合なるに拘らず、需要地に至れば却つて驚ろくべき高價と爲るを例とす、蓋地勢の罪にして、未だ俄かに鐵道のみを咎むべからずと雖も、若し我が鐵道にして、著るしく其の運賃を低減せば、幾分か需要地に於ける木材價格を引下げ得ると同時に、山元に於ては却つて若干の引上げを看るを得べし。

我が森林は實に二千二百四十餘萬町歩の面積を有す、若し鐵道運賃の引下げによりて、森林所有者が一町歩毎に二圓を利するとせば、其の總額は四千四百八十餘萬圓となり、僅かに一圓とするも二千二百

四十餘萬圓の利を擧げ得るにあらずや。

（四）

輸出品に對しても、亦輸出賃率なるものを設けて盛んに之を奬勵するを要す。

佛國は其の特產たる葡萄酒の輸出を保護するため、特別に低廉なる運賃を定め、露國は砂糖に之を應用し、而して獨逸は輸出先によりて其の率を特定し、東阿弗利加賃率に於ては、阿弗利加、埃及、小亞細亞地方の輸出に對し、著るしく低廉なる運賃を定め置けり。

我が政府は輸出品に對して戾稅の法を實施せり、斯く注意するに拘らず、輸出品の運賃を特別に低減せざるは奇なりと謂べし、是れ吾人の甚だ不平を有する所、一日も速かに其の實行を促さゞるを得ざる也。

且つ海外移民のため、其の乘車賃を半減し、或は其の携行貨物に對して特別の運賃割引を行ふが如きも、亦太だ必要也、移民は今後國家の必要事業として大に之を奬勵すべきこと、猶ほ產業の發達を奬勵せざる可らざるが如し、看よ遞信省外國爲替課の取扱ふ海外よりの送金額は一千三百四十五萬八千圓、正金銀行の海外定期預金爲換信用狀三百五十萬圓、同銀行送金爲替によりて米國布哇より來るもの五百二十八萬圓、秘露より來るもの十八萬九千圓、其の他より二十萬圓にして、我が海外移民が毎年日本に送金し來るもの、少くも二千萬圓を下らざるにあらずや、移民は其の生活費の殆んど全部を彼の國より取り、更に純益として二千萬圓宛を本國に送るもの也、其の利益多き何ぞ多言を要せんや、政府は素より

之を奬勵せざる可らず、其の奬勵の一手段として、汽船運賃の割引は勿論、先づ國有たる鐵道の賃錢に大割引を行ふべき也。

（五）

鐵道の速達便は、益々之を實行するを要す、鐵道院が近時之に意を用ひたるは太だ可也、然れども其の運賃の著るしく不廉なるは何ぞや。

試みに最も速達を要する生繭一噸を高崎又は上田より岡谷に輸送すと假定せよ、其の運賃は實に左の如くなるに非ずや。

高崎より（百二十五哩一）　十三圓六十錢
上田より（七十三哩七）　十一圓九十錢

是れ豈甚だしく高價にあらずや、試みに之を普通便とすれば、貸切扱として一噸の運賃は左の如くなるべし。

高崎より　四圓六十四錢
上田より　二圓五十三錢

（通常噸扱ひとすれば左の如し）

高崎より　六圓五十五錢
上田より　四圓三十錢

遠達便との差額の大なると想ふべし、然かも繭の如きは必らず遠達便に由らざる可らず、故に其の賃率は殊に大に引下ぐる必要あり、況んや生繭は我が重要輸出品たる生糸と爲るものたるをや。

鐵道院の當局は、遠距離の賃率を引下げたるを以て、大功績の如く得意の色あり、然れども生糸の輸出地は横濱也、遠く長崎神戸より輸出することなく、奥羽關東は素より九州炭を使用せざる也、故に眞に生産の發達を促がさんとせば、斯の如き實際に迂なる便法を立てんより、更に有効適切なる方法を定むるを要す、殊に貨物の賃率を定むるがために、相當の諮問機關を設定し、商業會議所議員其の他老功にして且つ公平なる實業家を委員とし、其の説を聞くを賢なりとす、鐵道院は其の建設に於て多くの技師を有し、技術の方面には多くの遺漏なきも、運賃決定の如き場合には、頗ぶる迂遠なる所あるを缺點とす。

今の鐵道院總裁は、一大政黨の首領也、常に其の黨のために盡力することは之を聞く、鐵道の運賃に改良を加へ、以て鐵道國有の最大目的たる産業發達に資することの如き、幾んど風馬牛相關せずと做すに似たり、是れ頗ぶる痛嘆すべき也。

公論

支那分割の運命及び救亡の一策

石川半山

支那の運命が最早や亡滅を免れず、結局列國の分割に歸するて有らうとは、世界の多くの識者が公認する所て、我輩も其の大體に於て異論はないが、若しも袁世凱氏を初めとして、支那の有力者共が、ドウか分割だけを免れたいと希望するなら、敢て一策の無いワケてもない。

▲亂麻の如き形勢

愛親覺羅氏の威力が衰へて、革命軍が到る所に蜂起し、四百餘州が亂麻の如くになッたのを見て、誰れも彼れも驚いて居るが、之れは支那の歴史上に屢々有ッた事て、敢て珍らしいことてはない、遠い昔には春秋戰國時代も有り、降ては六朝時代も有り、近く明末の支那の如きも、矢張今日と同じ情態てある、草澤の英雄が各所に起て、王と稱し、帝と稱し、各々覇を一方に唱へて、我れこそは天下を統一せんと意氣組んだのは、今日各地に於て革命軍の都督が、各省に割據して居る情態と同じ事だ、之を統一する大英雄が起らぬ間は、幾年ても此の混亂情態を繼續して往くばかりだ。

▲統一には兵力を要す

春秋戰國は秦に依て統一された、六朝の亂麻は、唐に依て統一された、明末の混亂情態は、滿洲の一角から現はれ來りし愛親覺羅氏に依て統一されたが、此等

の統一は決して空文に依てなされたのではない、皆兵力に依ッた者だ、白起の如き、王翦の如き名將に依て訓練されたる軍隊の力は、秦をして天下統一の大業を成さしめ、李世民が今の山西省の太原に於て養ふたる兵力は、唐の天下を成さしめた、明末の天下大に亂れて、皇帝は宮城に縊れて死し、西安を根據として大順國王と稱したる李自成は、更らに皇帝の位に卽き、蜀に入て大西國王と稱したる張獻忠は、成都を西京と改め、丞相、尙書、將軍等の官を設け、儼然として一國を成して居る時、空文は固より何の權威をも有することではない、此の天下大亂を鎭定したる者は、滿州の一角に於て養はれたる愛親覺羅氏の兵力で有ッた、故に今日と雖も若し此の大陸を鎭定すべき兵力を擁する者が、此の大陸の中に在るならば、四百餘州統一の大業も、決して爲し難きことではないが、我輩の見る所を以てすれば、ドウも其人が無い樣で有る。

▲規律ある兵

勿論支那に兵の無いことはない、然かしながら規律あり訓練ある兵でなくては、其の大業を成すの用をなさない、無規律無訓練の惡兵は、國家統一の大業をなすに害が有るばかりで、到底之を用ひて、天下を統一することは出來ない、而して此の規律あり訓練ある兵が、現今の支那には至て乏しい樣に思はれる、或る支那通が袁世凱氏の手に一萬五千の良兵を有することを語ッたが、我輩は之を信ずることは出來ない、假りに百步を讓て、袁氏が之れだけの兵を擁して居るとしても、僅かに一萬五千では足らない、四百餘州到る所に散在せる大小無數の匪徒を鎭定するには、少くも七八萬の良兵を要するが、現今の支那人から、之れだけの良兵を得ることは、至大の難事なりと考へる。

▲現今の支那兵

然らば現今の支那兵なる者は、如何なる者で有るかと云へば、歐米人や日本人が到底想像の出來ない惡兵で有る、彼等は募集兵で有るから、生活に苦しむ所の下級の人民が、多く募集に應じて兵營に入て居るので無敎育、無智識で同時に不道德で有る、忠君愛國の思

想などは諒解し得ない者が多いのだ、それ故に戰爭をして一身を君國の爲めに犠牲にする精神は乏しくして、出陣したら沿道の良民を刼掠することを專念にして、眞面目に戰爭をする意思はない、昨冬の戰爭に付ても、歐米人や日本人が想像の出來ない樣な、珍談奇談が多いので、要するに此の如き無規律、不節制の兵を以て、四百餘州の統一を企てることは、到底不可能の事だ。

▲解兵の困難

曾國藩の書いた者の中に、「兵を募るは易く、兵を解くは難し」と云ふ句が有る、日本あたりでは徴兵忌避者も有る位で、兵を募るは難いが、徴兵の義務を免して、兵を郷里へ歸してやれば、何れも欣々として歸るから、兵を解くは易い、即ち此の曾國藩の言とは全くアベコベて有る、故に日本の軍人には曾の此の言の意味は分かるまいが、支那に於ては無數の貧民窮民が有つて、之れが平生は種々の賤業苦役に從事し、或は乞食となり、或は小盜となッて生活して居るので、政府に於て兵を募集し、衣服と住所とを與へ、一ケ月四五弗の給料を與へるといへば、數日にして十萬でも二十萬でも兵を募ることが出來る、革命軍が俸給十弗を與へると布令出したら、俸給の少い官兵迄が、ドシ〳〵降參して加はつた、それ故に兵を募るは至て易々たることだが、さて一旦募つた兵を解くのは大變だ、彼等が兵營から追ひ出されるのは、日本の官吏が免官になる場合と同じ苦痛を感ずるので、十分手當ても貰はないと、不平を起して暴動を始め、所在の良民を刼掠するから、兵を解くことは一代の名將曾國藩さへも之を難しと嘆息したのだ、此の一事を以て考へて見ても、支那に於ける兵の種類は歐米や日本の兵と異なる事が分かるて有らう。

▲暴動兵士の慰撫

兵士が暴動をしたら之を制するが普通てあるが、規律ある兵力を有せざる支那政府は、兵士の暴動を制する力がない、其の最も著るしき一例は、本年二月二十九日から數日間北京城内に於て列國環視の前に起つた

暴動である、我輩共も現に其の彈丸を浴びたる一人で有るが、彼等は連日連夜、良民の邸宅に亂入し、貨物を盜み、家に火を放ち、或は人を殺し、或は婦女を强姦し、兵器を濫用し、彈丸を亂發したけれど、大總統袁世凱氏は毫も之を制する所以を知らず、却て懷柔の策を取り、汝等は湖北より歸り、定めし無聊なるが故に、此の如き惡戯をなす者と思ふが、然ながら軍人は軍規軍律を尊重すべき者であるから、成るべく靜穩にして貰ひたい、就ては臨時賞與として俸給一ヶ月分を給與するから、どうか以後は亂暴をしない樣にして呉れと云ふ慰諭をした、凡そ今の世の中に强盜、放火、殺人、强姦の惡事を行ひながら、臨時賞與として一ヶ月分の俸給を受取る兵士と云ふ者は、外には有るまい、之れは所謂中華民國特有の出來事と謂はざるを得ないが、支那の事と云ふ者は、先づこんなものだ、之を以て四百餘州統一の大業をなさんなどとは、以ての外の事と思ふ。

財政上の困難

袁世凱氏の北京政府が、現在の兵力を以て、支那統一の大業を成し難しとするも、若し其の政府を支持して、徐ろに計畫を立て、國民に教育を施して、其の思想を開發し、漸次に良兵を作ることが出來るならば、尙望みが有るが、財政上の困難は到底此の政府の基礎を鞏固にすることは出來ない、滿州朝廷時代の中央政府は歲出三億二千萬兩、歲入二億九千萬兩、差引歲入不足三千萬兩を如何にすべきやが問題であつた、之れは資政院に提出されたる宣統三年度の豫算案で有る、此の歲出の中に就て軍事費は九千萬兩だが、之れは今日は更らに增加して居ると思ふ、革命戰の起つた爲めに、軍隊は大に增加して居るから、軍事費はどうしても一億以上であらうと思ふ、南方の事情に通じたる支那大官の談に依ると、上海から武昌に至る間の楊子江沿岸に在る革命軍は、約二十萬で有つた、此の兵士一人一ヶ月十弗とすると、二十萬人の俸給だけが、一ヶ月二百萬弗、一年二千四百萬弗入る、此外に將校の給料も入れば兵營の修繕費、被服費、馬の糧食費も入る

のて、どうしても一年八千萬弗はかかる、孫逸仙氏が袁世凱氏に兜を脱したのも、此金に窮したる結果で有る、勿論今日では革命軍の數も大分減少したで有らうが、全體に於て各省から中央政府へ金を要求して來る高は少からぬ事と思ふ、それから歲入の方は、地租などは先づ取れない者と見なくてはならぬ、古來革命ある每に人民は租税を免れ、愛親覺羅氏の如きも天下を取つてから三年租税を免した先例が有るので、今回の革命を賛成したる人民も、二年や三年は無税と思ふて居る、今若し之れに直接税を課したならば、それこそ大變だ、忽ち第二の革命が起るに違ひない、それ故に現政府の財政は滿州朝廷時代のそれに比して、歲入は減少して、歲出は增加した者と見なければならぬ、兎ても收支の償ふわけがない、そこで袁氏は頻りに借款を企で居るが、此際一億や二億の金は燒石に水て、右から左へ無くなつて仕舞ふ、兎ても財政の基礎を打ち立て、チヤーント整頓した政府を見ることは六ケしい、縱令六國借款團が二十億の金を貸しても、此の政府の財政整理は六ケしいと思ふ、それに政府の役人の性質が、歐米人や日本人の想像す可らざるほどに腐敗して居る、勿論其中には清廉の人のないでもないが、それは至つて少なく、在來の慣習上官吏は公金を以て私腹を肥やすことを惡事と思ふて居ない、借款で金が來れば、其の大半は當局官吏のポケットに入り、財政の基礎などが立つワケの者でない、六國借款團から財政顧問を入れると云ふ話もあるが、此の大亂脈の中へ、一人や二人の外國人が財政顧問になつた所が、何の仕事も出來るワケの者ではない、其の顧問になつた人は、ロバート、ハートの如くに富をなすことは出來るかも知れぬが、財政の整理は、兎ても六ケしい事と思ふ。

▲外國の干涉

若しも支那が昔の如くに、鎖國の情態で、列國との交際が無かつたならば、此の混沌たる情態を以つて幾年も推移するであらうが、不幸にして今は外國と交際を開いて居る上に、外國から合計十七億圓の借債をして居る、列國は此の元利の償却を受取らずには居ら

ない、それ故に列國は心配して、袁氏を助けて財政整理の出來る者なら、此上にも尙金を出す相談をして居るのだが、いよ／＼整理の見込みがなく、其の儘にして置けば、自分の債權がフイになると云ふ日には、列國は決して損をして引込む者ではない、ソコデ各々自分の平生着目して居る方面に向て、其の爪牙を向けるに違ひない。

▲遲速は歐洲の形勢に依る

支那の亡滅は既に問題ではない、列國が之を分割すると云ふことも、最早や問題ではない、早晩來るべき運命と思はれるが、唯其の遲速は歐洲の形勢如何に依ることだ、歐洲に於てモロッコ問題が紛糾したり、以土戰爭が起つたり、バルカン半島の風雲が捲き起つて居る間は、慾の深い列强も、足下の事に急忙にして手を東洋の事に延ばす餘地がないが、之れが段々落着いて、歐洲が小康を保ち、其の餘力を東洋に伸ばし得る日が來たら、支那大陸の運命は、直ちに危殆に瀕するワケで有る、勿論如何に慾の深い者でも、一時に澤山を取るワケには往かないから、第一期、第二期と云ふ風に、順序を追ふて計畫を立て、着々と此の大陸を取るに違ひない、而して其の第一期に於ては、露國が蒙古を取り、英國が西藏を取り、獨逸が山東省を奪ひ、佛國が雲南省を掠めるであらふ、之れが第一期の分割で、それから第二期、第三期に至つては、段々中原に及んで來るに違ひない、之れは支那人の爲めに、實に氣の毒な話であるが、單に支那人の爲めに氣の毒と云ふて、對岸の火災視して居たら、其の次ぎには日本がヒドイ目に逢ふ時が來るワケで、結局世界の爭ひは、白人對黃人の爭ひとなる事だから、此際日本人たる者は、何とかして此の支那の亡滅を救ふ工夫をしなくてはならぬと思ふ。

▲救亡の一策

それに付て我輩の一策と云ふものは外でもない、袁世凱氏をして大英斷を以て、日本の兵力を利用せしめることだ、日本はコンな小さい島國には、殆んど不必要なる大軍を養ふて居るのだ、而して此の軍人は支那

兵の如き粗末な者ではない、文明の教育を受け、規律も有れば訓練も有り、何所へ出しても立派な者だ、良民を刼掠することもなく、放火もしなければ强姦もしない、而して戰ひには勇氣が有つて、惡漢を懲らす力は十分有つて居る、今袁氏が大胸襟を披て、此の日本兵を迎へて、四百餘州は勿論、支那大陸全部の鎭撫を依賴する事となつたら、それは立派に匪徒を鎭定して、統一の大業を成すことが出來るであらう。

▲十万の日本兵

支那大陸を鎭定するに、果してドレ位の兵力が入るのであらう乎、愛親覺羅氏は明末に二十萬の兵を以て、大陸統一の大業を完成したと聞て居る、滿洲朝廷の末路には三十六鎭の計畫を立てたが、さし當て統一を行ふに、ソンなに澤山の兵は入るまいと思ふ、明末の時よりも今日は交通機關が發達し、今日北京を出發すれば、明日は漢口へ達することが出來る世の中だ、それに今日精鋭なる武器を有する日本兵は、三百年前の滿洲兵と同一視することは出來ない、彼れ是れ考へ合はして見ると、先づ十萬の日本兵が有つたら、支那大陸を鎭定して、ゴトリとも言はない樣に出來ると思ふ、即ちザッと十個師團の兵だ、袁氏が之を借用して此の大陸鎭定の用に供するのだ、ソウすると内外から色々の議論が起るかも知れないが、袁氏が之を抑さへ附けるには、一家内の鼠が亂暴をするのを、自分の家の猫がボンヤリて役に立たぬから、隣家の猫を借りるに不思議は有るまいとか、外から小盜が家を窺ふに當て、自分の家の犬が役に立たないから、隣家の犬を借りて番をさせるのだと言つたら良からふ、ツマリ日本の軍人を猫か狗の扱ひにする樣な口吻を用ひたら、内外の苦情は治まる理屈だ、ソウして四百餘州鎭撫の役目を日本に引き受けさせるのだ、日本も之れは迷惑の至りかも知れないが、兎に角隋唐以來千餘年の交際をした仲だから、隣邦の友誼で、此の際一ト肩入れるが宜しい、大義侠心を以て此の厄介なる任務を引受けるが宜しい、日本は貧乏で外に何の取る所もないが、唯此の兵隊の强いと云ふだけの特色が有るのだから、コ

ウ云ふ時に飛び出して、其の特色を發揮しなくては、出る幕はない、全體日本が錢もない癖に、六國資本團の一に加入して、支那へ金を貸さうなどと考へるのはガラにないことだ、如何に小田切萬壽之助君の支那語が上手でも、無い者を有ると云ふ理屈にも往くまい、結局は英國か佛國の金を借り出して、支那へ貸し附けるので、高利貸の周旋屋か、利子のサヤ取りに過ぎない、卑やしいことだ、褒められた話ではない、それよりも無い者は無いとして有る者で往く方が、男らしいてはないか、而して日本に有る者と云へば、金ではない、腕力だ、兵力ばかりだ、コンな小さな島國へ十九師團とは、全體途方もない事をやつた者だ、獨逸の昔のフレデツキ、ウヰリヤムの軍隊道樂以上の道樂と謂ても良いワケだが、折角コウして澤山の玩具を作て居る事だから、之れを有益に利用するのは、所謂廢物利用の法だ、さし當りて此の中から十萬ばかり支那大陸へ貸して、民國政府に利用させるのは、世界的經濟の大なる者と考へる、然かし日本もコウして貧乏の中に苦しんでコンな軍隊を作て置いたのだから、ロハで貸すと云ふワケには往かない、相當の損料を取らなくてはならぬ、袁世凱氏だつて其の位の事は、分かつて居る筈だ。

▲報酬の出所如何

ソコで此の報酬の一點だが、それは支那政府が出すのだ、中央政府で出しても良ければ、又各省で出させても宜しい、日本の兵力で此の大陸の秩序を回復し、人民の生命財産を安全に保護することになれば、人民も喜んで租税を收める、袁氏が無用の軍隊を解散しても、それが叛反をすることはないから、財政の整理はドウにも出來る、若しそれも出來ないと云ふなら、其の時こそは日本から財政の出來る人間を貸してやらせても宜しい、今日の情態では如何なる財政家も手は着けられないが、日本兵で大陸の鎭撫をすると云ふ日には、それは見込みの有る話だ、日本には目下相當の能力を有して居て、適當の職業がなくて困却して居る連中が大分居る、早やい話が元老連中なども、實を申せ

は目下の日本には、先づ入用のない連中だ、試みに山縣公か大山公を支那大陸鎭撫軍司令長官に任命し、松方侯か井上侯を支那政府財政整理委員長に任命し、其の以下の有象無象を束ねて此の大陸へ追ひやつたら、日本も議論が少くなり、混雜を減じ、國民一體の氣分がセイ〳〵する事と思ふ、之れは一擧兩得のワケで有る、ソウして支那の財政を整理して、日本から貸した軍隊の費用は向ふ持ちにするのだ。

▲列國へ産業開放

日本が支那の鎭撫を引受けると、日本の慾張り論者は、直ぐに此の大陸の富源を悉く日本の懷中へネヂ込む積りになるだらうが、其の一點になると我輩は日本武士道で往きたいと思ふ、腹の奇麗な所を示して、此の大陸の産業を世界に開放すると云ふ宣言で往きたいと思ふ、ソウしないと支那人がブツ〳〵言ふのみならず、歐米列國が嫉妬して、默まつて居ない、故に我輩は日本が飽迄も武士道で、此の大陸の鎭撫は引受けるから、産業の方は、金が有て智惠が有て、人を能く使ふ者が、誰れでも來て、農業も開拓すべし、鑛山も採掘すべし、山林も經營すべし、工業も振興すべし、商賣も勝手だ、鐵道を布きたいと思ふ者は、勝手に布けと言ひたい、ソウすると慾の皮の突張て居る歐米列國は、此の大陸へ資本を放下して、十年か二十年の中に此の大陸の産業を開發し、此の大陸に五千年來未だ曾て見ざる所の文明の偉觀を見るに至るて有らう、我輩が袁世凱氏の地位に居るなら、先づ此の位の飛び離れた事をやるが、彼れは果して之を實行するの勇氣と膽略と識見が有るや否や、日本及び歐米列國をして之を實行せしめるだけの手腕が、袁氏に無くては出來ない事だ。

▲小策は無效なり

凡そ小刀細工に至ては、天下袁氏に及ぶ者はない、然かしコウ亂れて來ては最早や小策では持ち切れない、先づ日本の兵力を借りて、大陸を鎭撫し、歐米の資本を誘ふて、此の大陸の産業を開發すると云ふ大策を行ふの外、支那の亡滅を救ふの道は有るまい。之れ

は支那を救ふ所の唯一の道て、之れが若し實行が困難なりとすれば、將來十年か二十年の中には、支那人は亡國の民となり、支那大陸の地圖は中華民國の旗色の如く、五色位に分割されるて有らう、而してソウなつた曉には日本も頗る危いが、コウは言ふ者の、實は我輩の此の言論などは、兎ても今の日本、支那の目前の問題に狂奔して居る小人共には、理解することが出來ないと思ふ、ヤレ／＼可哀想な者だ。

國運の發展を沮礙せる財政策を排す

武富時敏

一體人間世界といふものにはよい事ばかりはない。よい事の裏には多くはわるい事がある。所謂樂あれば苦ありの諺の通り、一方に喜びあれば他方に悲みのあるのが普通てある。日本も露國と戰爭をして、歐洲の强大國に打勝ち、世界の一等國の班に到したといふ事は、國運發展の上から誠に目出度い事てあるが、日本の財政經濟の方面には、あの戰爭の爲めに大打擊を受けて居る。處が世間ては其大打擊の方面は一向に自覺しないで今日に至つた譯てあるが、一體あの戰爭にどの位金を使つたかといふに、凡そ十五億萬圓使つたのてある。十五億萬圓といへば今日の日本の身代から見て、なか／＼の大金てある。日本全國內に一年間に生産する所の農産物及び農業の副産物を總て數へ上げて見ても十五億になるかならぬか、恐らくはなるまいと思ふ。勿論工藝上の製品までも併せると大したものてあるが、農産物と副産物丈けてはヤット十五億になるかならぬかてある。一年間の農産物及び其副産物の金高を戰爭の爲めに使ひ盡したといへば、恰かも非常な天變

地異に遇つて、日本全國の總ての農產物及び副產物が一つも出來なかつたのと同じ譯になる。若しさういふ事が假にもあつたとしたら、日本の有樣はどうなるであらうか、殆んど何ともいへぬ悲慘な狀態になつて、人民は食ひ續くことも出來ない事になる。あの戰爭の爲めには恰度それと同じ害を蒙つて居る譯であるが、幸にして食ひ續くることが出來たといふのは、詰り外國の借金によつてあの戰爭をしたからである。若し外國から借金をせなかつたら、恰度一年間總ての農產物が無いのと同一の悲慘な狀況に陷るのを免れなかつたがそれを免れたのは全く外國債を起したお蔭である、此外國債の爲めに戰爭を繼續し得たばかりでなく、外國から金が入つた爲めに戰爭後一時經濟界に好景氣を呈したのである。それは明治四十年頃の景氣である。その金が經濟界に運轉した爲めに通貨は膨脹し、物價は騰貴し、事業に景氣がつくといふ譯で、所謂企業熱が勃然として起つたのである。滿鐵の株券募集に當つては募集額に千七十倍する申込高があつた位で、誠に狂氣の沙汰といつてもよい位の好景氣であつた。そこで世間では所謂戰爭熱に浮かれて、政府も經濟界も丸で浮足になつて了つた。政府は益々政費を膨脹せしめ、經濟界は空景氣を煽り立てゝ居つたが、元來が一時借金の金が入つた爲めの景氣であるから、其景氣が忽ち反動を起すといふ事は分り切つた話である。それで明治四十一年には非常の不景氣で、當時の西園寺內閣は公債の募集も出來ぬといふ狀態に陷り、爲に西園寺內閣は倒れたのである。そこで、元々さういふ大金を使つて戰爭をし、其れが爲めに大借金をして居る政府たるものは先づ第一に財源を緊縮することに心掛けねばならぬし、又國民は非常特別稅の苛酷な稅を負擔して居るから其肩も休めねばならず、又財政の爲に經濟を壓迫することをも避けねばならぬのである。そして其財政を緊縮した剩餘金を以て借金を返さなくてならぬといふ事は吾々が當時からして熱心に主張した所である。處が大聲俚耳に入らずとでも申さうか、政府は勿論、一般世間でも吾々の說を採用せぬばかりか、或は

悲觀說として斥け、或は消極論として笑ひ、甚しきは亡國論として罵つたのである。然し身代不相應な大借金を拵へて置いて、其借金を返しもせずに、只一時逃れの事をして、そして好結果を得られる譯はないのである。西園寺內閣は經濟の自然の理法に背いて積極主義など丶唱へて、漫りに政費を膨脹せしめたが、其因果は覿面で、四十一年に至つては、公債は下落し、新公債は募れず、終に其內閣を投げ出すことになつた。其後を引受けた桂內閣はどういふ事をしたかといふにこゝでは西園寺內閣の覆轍に顧みて根本から改革せねばならぬ位置にあつたのである。處がさういふ果斷の處置に出ることが出來ず單に一時の姑息彌縫を事とした。剩へ其時分の實業家の歡心を買ふ爲めに、外債を五千萬圓づゝ償還することゝし、又非募債主義を標榜した爲めに、一時公債の景氣を恢復することが出來た。が、桂內閣の四年間の財政策は丸で誤魔化してあつて其結果四十四年には四十一年よりも公債がずつと殖えて居る。償還するといひながら、實は誤魔化して償還するやうに見せ掛けたのである。五分利の公債を四分利に借り換へるとか稱して外國債で內國債を拂つたり、つまり國の負債といふものが、ちつとも減ぜずに却つて殖えて來て居る。畢竟世間のいふ實業家などいふものは、成程自分の利益からいへば、澤山の公債を背負込んで其公債の値が下るのは損であるから、其値を引上る政府の遣り方は何でも歡迎するのである。誤魔化しても虛僞でも、其手段を問はずして歡迎するに違ひない。然し政府たるものが實業家の歡心を買ふ爲めに一時の遣繰をするなどいふ事は、爲すべき事でもなく、又長く維持の出來べき事でもない。一家の身代を持つにしても同じ事で、借金支拂の途をつけずして、只右から左に遣繰りをする丈けでは、信用を維持することが出來ぬのは分り切つた話である。こういふ誤魔化し政策の爲めに桂內閣も終に持ち切れなくなり四十四年に至つて、今の西園寺內閣に向つて內閣を投げ出して了つたのである。こゝに至つても尚政府の當局も世間も悟らんといふのは眞に慨嘆すべき事である。昨

年西園寺內閣が桂內閣に代つて成立した時に、先きの苦い經驗もあるから、今度こそ大奮發をして大改革大刷新を實行するだらうと期待して居つたが、在職一年有餘の今日になつても、改革の端緒も見えぬ。新聞紙などでは行政整理とか何とかいつて騷いて居るけれども、之に餘り充分の望みを置いてならぬといふ事は吾々は昨年から豫言して居る。處が今日では此豫言が適中し、吾々をして先見の明を誇らしむるやうになりさうなのは、實に國家の爲めに不幸な事といはなければならぬ。のみならず今年の豫算も其實行が六づかしくなつて居る。今日問題となつて居る公債償還の中止——今年中に五千萬圓を償還しなくてはならぬのを、一向に償還しない。山本大藏大臣は東海道の汽車中に於て今年度は償還しないといふたと新聞に出たのが、今年度の度の字は今年內の內の間違ひてあると取消しが出て居るけれども、今年內に償還せずして果して來年の三月までに償還出來るかどうか。其出來ないといふ事は數の上て明瞭てある。一方には鐵道資金の如き、借金によつて計畫すべき事業が澤山あるが、其借金は容易に出來ない。若し强いて借金すれば甚だ不利益なる結果となるのである。大藏證券の日步一錢六厘で五分七厘五毛の割合となる。永久の公債が五分であるのに大藏證券は五分七厘五毛といふ甚だ頓珍漢なる現象を呈して居る。一方に借金によつて計畫すべき事業があるのに、借金が出來ぬとすれば、返す金を其方に向けるより外仕方がない。さうすれば今年の豫算は有名無實であつて、豫算通りに仕事が出來ぬといふ事になる。償還するといふ事を公布して而して償還せぬといふ事になる。現內閣はさういふ苦しい狀態に陷つて居る。何が爲めに陷つて居るかといへば畢竟戰爭の餘毒である。戰爭熱に浮かれて無暗に財政を膨脹させ、一般經濟を壓迫した結果今日に至つたのである。

抑々日本の經濟といふものは、是れ迄年々頗る長足の進步をなし來つたものである。外國貿易發達の歷史を考へて見ると、維新以來凡そ七年每に貿易額が一倍して居る。處が戰爭後といふものは此增加率がピタリ

と止つて居る。戰爭の初つた年の明治三十七年の貿易額は六億何千萬圓て殆んど七億圓てある。それから今日まて九年も經つて居るから其率て進めば貿易額が十六七億になつて居らねばならぬ筈てある。處が昨年中の貿易額は九億何千萬圓かて十億圓に充たない、今年は稍々十億を超すだらうと思はれるが、昨年中のは十億に充たなかつた。三十七年に七億に達して居るものが、同じ率て進めば十六七億に上るべきものを十億て足を停めて居る。それは何故かといふに、世界の經濟事情とか他にいろ／＼原因があらうけれども、主として財政が經濟を壓迫した結果と見なくてはならぬ。若しも財政が經濟を壓迫することがなかつたならば今日の貿易額は已に十六七億になつて居るに違ひない。已に貿易額が十六七億に上つて居れば、今日ては經濟界も餘程活氣を増して居るに違ひない。經濟界が活氣を益せば財政が膨張しても差支ないのてある。今日ては經濟が發展しさへすれば、財政が膨脹しても差支ないのを、只奈何せん日本に於ては誤りたる財政々策を取つたが爲めに、財政が經濟を壓迫し、終に吾々が財政の緊縮を叫ばなくてはならぬ不幸を來したのてある。故に我々はいふ、若し財政々策を誤らなかつたならば、今日は已に積極論者が唱ふる如き積極政策を行ひ得べき時機に達して居るのに、初めに政策を誤つたが爲めに、今日に至つて却て消極的政策を取らねばならぬ反對現象を呈したのてある。是れ積極論者が經濟自然の理法を無視したる罪てある。積極主義の政治家達は戰爭後の政治を誤つて此八年間國運の進歩を沮礙した責任を負はなくてはならぬ。戰後の經營を誤つた結果、八年間經濟の進歩を止め、其爲めに國運の發展をも妨げたのてある。若しあの時浮かれ立つて、矢鱈に軍備を擴張し、矢鱈に政府事業を膨大にし、矢鱈に外資を輸入して、物價を騰貴せしめ、輸入を激増せしめて經濟界を攪亂すること微つたならば、今日は決して不景氣てなかつたに違ひない。戰爭後直ちに復讐戰などの起ることは決して無いのて、あの時代に大騷ぎをして軍備を擴張する必要など毫頭ないのてある。却つて今

日こそ海軍の充實の如き是非やらねばならぬのであるが、財政の窮迫の爲めにそれが出來ぬ有樣になつて居るのである。

然し何としても此財政を改革して財政と經濟の調節を計ることをやらねばならぬ。然るにこゝに至つて世間甚だ誤解して居ることがある。財政の整理をすれば直ちに其日から經濟が繁華になり、又政府の仕事も樂になるやうに考へて居る。之が非常の大間違である。低い谷から高い山の絶頂に上るにはどうしても苦しい坂路を登らなくてはならぬ。今日財政を整理するには成るべく政府の仕事を縮少し、借金でやらねばならぬ仕事はやめても借金はせぬといふ事にすれば、世間は所謂不景氣を來すかも知れぬ。外國債を一切やらぬとなれば、在外正貨は忽ち無くなり、日本銀行の正貨準備も少くなる。そこで通貨は縮少し、物價は下落し、世間は不景氣に陷る、高い物を仕入れて安く賣ることになるから商家は損をする、諸製造業者も手控へにして世間一體が不景氣になる。從つて金融も六つかしくなつて來る。銀行業者も困難になつて來る。中には破産するものもあり、取附けに遇ふものも出來るかも知れぬ。外國の借金をせぬ代りに償還を中止する。公債の價は下落して經濟界の恐慌を惹起すかも知れぬ。目前の利害のみを打算して居る連中が財政の根本改革に反對するのも畢竟此邊の事情から起るのである。然し政府の財政といふものは今までのやり繰りで何時までも行けるものでない。借金の利拂の爲めに借金するといふ方針は決して長く續くものでないのは分り切つたことである。議論のない話だ。長く續かぬとすれば何時かは其苦しみを受けなくてはならぬ。すれば一日も早く之を切り拔けなければならぬのであつて、長くなればなる程益々其苦しみを深くし。終には收拾すべからざる事になるのである。つまりこういふ苦しみは八年前に遭遇せなければならなかつたのを只彌縫に彌縫を重ねて、今日まで推し移り、益々苦痛の度を高め來つたのである、然し苦しいからといて今やらなければ、先きに行つては益々苦しくなるばかりである。宜しく思

ひ切つて大改革を行ひ、大英斷を施すべきてある。然し今の當局に斯くの如き大英斷大勇氣ありや、否や、吾々は不幸にしてありと答ふる能はざるを悲しむのてある。

米國近狀

竹越與三郎

僕の曾て知つてをる米國は紐育を附近とした僅かなる部分に過ぎぬ、所が今回は先づサンフランシスコに到り、北はポーランド、シアトルを經て英領カナダに到り、南はサンジーゴの港を越えて一歩メキシコに入り、更に一轉してキヤリホルニヤの主なる地方を見、インタマウンテン諸州を經て紐育に出て、西南ヌオルリヤンスに下り一百年前佛蘭西が威力を逞しうした跡を見、當時奴隷賣買の取引所として使つたる大なる建物などを見て昔を偲びつゝ、更に西に向ひエルパソ、テキサスを經てサンフランシスコに歸つた、此道程海陸を合せて三萬里、而して從來見ざりし亞米利加、即ち西の亞米利加、西南の亞米利加、北の亞米利加と云ふ新たなる亞米利加を見て得るところ頗る多かつた。

今米國に於て問題となつて居る所は生活費が高まる如何にして之を防ぐべきかと云ふ疑問、而して是は保護貿易の弊であると云ふ説もあり、或は今日まで亞米利加が富を成したのは保護貿易の爲であると云ふ説もある、併ながら自分の觀る所を以てすれば、米國は自由貿易たるも保護貿易たるも一切問ふ所はない、即ち北はキヤナダ境に到れば、寒中不注意に水道の鐵管を握ることが出來ず、握れば寒氣の爲にやけどする憂がある、南サンジーゴに到れば亞熱帶であつて、原野到

るところ見る物は唯シャボテンの野を蓋ふのみてある又西南に至つてはメキシコ灣の暖かき空氣を受けて地味頗る良く、キヤリホルニヤに瀕したる地方に至つては全體デルタより成るが爲に地味亦大に良く、凡そ世界に產する所の物、亞米利加に產せざるはなく、米を作れば米も出來、綿を作れば綿も出來、寒さに適する麥を作れば麥が出來ると云ふことてが、亞米利加それ自身が一つの世界てある、猶ほ古の羅馬が一つの世界てあつた如きものてある、故にそれ自身國を鎖すも尙ほ生活が出來るのてあるから、唯物が有る無いと云ふ點から言へば、自由貿易たるも可なり、保護貿易たるも可なりてある、故に自由保護の如きは敢て今日の亞米利加を論ずる材料にならぬと思ふ。

今日の亞米利加は工業國てあると云つて工業上の生產品が百五十億弗ある、併ながら農業に至つては驚くべきものてある、昨年は唐蜀黍が十五億二千四百萬弗、之に亞ぐ物は綿て八億二千萬弗、之に亞ぐ物は小麥て六億二千萬弗、降つてヘーに至つては四億七千萬弗、燕麥は三億八千四百萬弗、是等の總ての物を合せて九十億弗てあつて、今日亞米利加の輸出物の三分の二は卽ち農產品てある、斯う云譯てあるから工業上の生產品と雖も單一に製造所て作るものてはない、農產品に加工した工業品てあるから、農業を除いて亞米利加の今日の位置を想像することは出來ない、故に亞米利加に於ては、我國に於て農は國家の大本と言ふが如く、同じく農は國の大なる錨てあると言つて居る位てある而して此亞米利加の土地が幾許あるかと言はゞ三百二萬六千七百方里てあつて、人口は僅に九千三百萬人に過ぎぬ、三百二萬方里と言はゞ我が本土と滿洲を合せて之を十倍した高がそれてある、而して人口は我が滿洲朝鮮を合せたものより僅か多いだけに過ぎぬのてある、此に於て是等の富を人口一人前に割付けて見れば其所有高甚だ多いことてあるから、亞米利加人が此點に於て幸福なることは言ふ迄もない。

さて此中日本人が如何なる地歩を占めて居るかと言へば、日本人は布哇に於て八萬人、亞米利加の本土に

於て九萬三千人ある、而して是等の多くはキヤリホルニヤ州に居るのであるが、キヤリホルニヤの人口幾許と問へば二百三十七萬人である、即ちキヤリホルニヤ全體の人口の二十三分の一は日本人である、併ながら此二百三十七萬人と云ふ中には老若男女、老廢して事に堪へざる者も這入つて居るが、日本人は如何であるかと言はゞ九萬三千人中、子供及勞働に堪へざる者と云ふのは一萬八千人であつて、殘る七萬五千人は年齡二十歲より四十歲、元氣勃々たる最中であるから、人間の割合に生產力の多きは言ふ迄もないことである、故に我が日本人が亞米利加に所有して居る土地は既に三萬千八百エーカーに達し立派な地主が出來て居る、而して此外に地代を出して亞米利加人の土地を借りて耕作して居る者がある、亞米利加の地主と利益分配の約束で農業して居る者もある、是等は小なるも一千エーカー、大なるは六千エーカーに至る大事業をして居る、是等のものを合せて日本人が關係して居る總ての畑は三十一萬三千エーカーに達して居る、以て日本人の事業が如何に手廣くやられて居るかと云ふことが分る、元來亞米利加人は燕麥、小麥の類を大なる機械を以て數千エーカー耕すと云ふのが亞米利加人の農業であつて、之を以て富を致したものであるが、亞米利加は機械の働きに於ては天下無雙に善美であると同時に、人の働きに於ては天下無雙の拙惡であると云ふ言葉がある、即ち機械を信賴するの餘り人が働かぬと云ふことである、是が爲に從來は大農、大耕作ばかりであつたが、日本人が之に加はると云ふことになつて、天下無雙の機械に加ふるに天下無雙の勤勉なる農業者が這入つて來たと云ふことであるから、機械の働き一層切實となつて來た、其結果苺、セロリー、砂糖大根と云ふやうな最少くして價高き物も大に出來ることゝなつて來た、其結果今日本人が生產する所のものは二千萬弗ある、キヤリホルニヤ全體の農產物が五億萬弗であるが、即ち二十五分の一は日本人が拵へて居ると云ふことになる、此中小麥、燕麥、ヘー、アリフアフアと云ふやうな日本人の關係せざるもの、即ち最多くして價廉

き物、之を除いた農業は幾許あるかと言はゞ、果物、野菜、是等は二億萬弗である、其二億萬弗の十分の一は即ち日本人がやつて居るのであるから、日本人が如何に手廣くやつて居るかと云ふことが想像が付くのである。

亞米利加は以上言ふが如き大耕作の土地であるが今日の狀態如何と問はゝ、キヤリホルニヤに於て畑の數が八萬千八百九十七ある、而して三エーカー以下の畑は千二百六十九て、二十エーカー以上五十エーカー以下の畑が二萬六百十四、而して千エーカー以上の大きな畑に至つては四千六百九十三しか無いのである、之に依て見れば最も多きは二十エーカー以上五十エーカー以下と云ふことてあつて、即ち新に此所に中農と云ふものが盛んになると云ふ傾向が見えて居る、是は少くとも日本人が這入つて來て、機械に加ふるに人のサービスを以てすると云ふことが大に與かつて力がある、是が爲に農業が小農と雖も大に利益あり興味あると云ふことが認められた結果と云はねばならぬ。

斯う云ふ譯てあつて日本人の事業は案外に根柢あり案外に成功し、而して前途大に望みがある、而して是等の農業者なる者は日本より大なる資本を持つて行つた者てあらば又別な問題てあるが、彼等の或者は書生てあり彼等の或者は契約勞働者の成上がつた者て、而して今や彼等は立派な地主となつて居然たる邸宅を構へて自からバギーを乘り廻し或は自働車を走らす、而して或者は亞米利加人と共同して果物會社を起し、仲買の手を離れて紐育へ直接に果物を送る、或者は亞米利加人と共同して市場を作つて、亞米利加の金持の專横を極める市場と對抗して之を淩いで居る、或者は其村の村長の實權を握ると云ふやうな事をして居る、是等の者が曾て嚢中一物なき者てあつて、彼等が稍貯金をして農業に從事した時ても、其馬たるや瘠馬てあつて機械たるや古物て、恰も佐野源左衛門の鎌倉討入と云ふやうな有様てあつたものが、今日は一轉して一頭六百弗位もする立派な馬を使つて、而して其馬も馬を使ふ以上は五頭六頭づゝを使ふ、小なる者と雖も其位使

つて居る、而して良い馬てあればあれは日本人の馬てあらうと言はれる位になつて來たと云ふ事は、如何に彼等が勤勉に且つ成功しつゝあるかと云ふ事が分る、亞米利加人は機械に信頼し大きな仕事にあらずんば爲さゞる人種てあるから農業は彼等に適さない、而して之に代つて如何なる外國人が農業をするかと言はゞ、多くの者が來てやつて居るが、先づ日本人と抵抗し得る者は獨逸人位のもので、吾々が農村を通過する時に、一望靑々として如何にも盛んなる畑を見れば是は日本人の畑である、而して彼方此方に枯草あり如何にも勢ひが惡い畑を見れば是は外國人の畑であると云ふやうなことて、吾々は農村を見て日本人が一文不通の身を以て土地の習慣の異る所へ突入して、而して尙ほ能く成功するを見て、如何にも我が人種の血液は貴いものであると云ふことを益々信ずるやうになつて來た。

假に二千萬弗が農民の所得の總てゞあるとして、而して此外に勞働者が澤山ある、此勞働者は如何なる事をして居るかと言はゞ、少くとも一日二弗の賃金を得る、多きは二弗半、甚しきは一日の賃金にあらず請負仕事となれば一日七八弗を取る勞働者がある、勿論此期節は甚だ短いが、併し桃が終れば葡萄の期節になり、葡萄が去れば苺の新しき期節が來る、苺が終れば更に他の仕事に從事すると云ふやうなことて、三百六十五日は續かないが併ながら空しく手を束ねるやうなことは多くはないので、彼等は曾て賃錢が廉くて白人を稼ぎ倒すからいかぬと云つて攻擊せられた時があつたけれども、今日は日本人の勞力のエフエシインシーが多いと云ふことを認められて居るから白人より高い賃金を得て居る、一日二弗の賃錢を得る者は少くない、中には自分の働く場所よりも七八哩も離れた土地に住居して居る者もある、それ等はオートバイシツクルに乘つて自分の働く所へ一定の時間に來て仕事が終れば又オートバイシツクルを走らして自分の宿に歸る、若し吾々が東京に於てオートバイシツクルを用ゐるや否やと云ふ時に至つては、四五百圓づゝも掛かるとすれば考へなければならぬが、亞米利加に於ける我が勞働者

の或る者はそれを考へるまでもなく用ゐて居ると云ふことて如何に彼等の報酬が良いかと云ふことは是て分る、て吾々の同胞は尚ほ雇はれて居る最中の者もあるが、併し地主となつて居る者は最早メキシコ人を使ひ伊太利人を使ひ葡萄牙人を使つて農業をやつて居る、果物を干す皮を剝くと云ふやうな仕事には亞米利加人を使つて居ると云ふやうなことで、最早同胞は純然たる被傭人に非ずして傭人の位置に立つて居る、是等の勞働者と云ひ地主と云ひ商業上の利益を數へて見れば隨分多いものであつて、先づ亞米利加に於て吾々の同胞が得る所のものを數へて、而して之を假に元金をインベストしたものであるとすれば、三億萬弗は亞米利加てインベストして居ると云ふことになるてあらうと思ふ、實際インベストした譯ではないが勞力の得るところ勤勉の得る所を數へれば斯の如き割合になる、世間若しインベストした金に對して十分尊敬せねばならぬと云ふならば、勞力をインベストしたと云ふことも亦十分尊敬せねばならぬ、吾々が今日の位置に至るまて種々なる非難を受けた中には賃錢が廉いと云ふことてあつたが、此賃錢の廉い時代は最早過ぎて今日は日本人の方が賃錢が高い、而して日本人は多くの金を取つて日本へ送る、地方の發達に少しも助力することがないと言はれたのてあるが、今日日本人が行つた爲にキャリホルニャの地方到るところ發達して、日本人無かつせばキャリホルニャの農業は今日の如く發達せぬのてある、一例を擧げればフレシノと云ふ地方は從來非常に暑い所て、フレシノの畑の中に卵を入れて置けばそれが半熟になる、フレシノのレールを踏めば靴の上から熱が足の中まて通ると言はれた位暑い所て、今日と雖も室外百四十度位のことは珍らしくない、斯の如き炎熱の地てあるが故に其土地の價が廉く、十弗、十五弗、二十弗位のものてあつたが、今日は百弗若くは百五十弗する土地が澤山ある、是は僅かに一例に過ぎぬが他にも澤山あり。是等は日本人無かつせば斯の如き發達はしないのてあるから、日本人か地方の發達に助力する所が無いと云ふ非難も理由が無くなつて來

た、斯う云ふやうな譯て我が日本人は今日は地方の發達を助け賃錢も高くなつて來た、而して學校を建てると言へば一エーカーや二エーカーの土地を寄附する人も出て來た、教會の寄附金だと云つて亞米利加人が一弗出す所を日本人が二弗出すと云ふやうな人も出て來た、斯う云ふ譯て吾々の同胞は今日のキャリホルニヤの農業を開くに當つて助力する所がないどころか大にあつて、是が爲に到るところ最早累々として墓が出來て居る、彼等の或者は老いて死んだ者もあるし、或者は不毛の地を拓くが爲に疫癘に罹つて死んだのもある是れ我が同胞は既に彼等の理想通り人間到る所に青山を築いて居る、他の言葉を以て言へばキャリホルニヤを開く爲に我が同胞は既に血を流して居るのである、故に之を假に元金に積つて見れば三億萬弗をインベストしたと同じ所の我が同胞の事業權利は十分に保護してやらねばならぬと思つて居る、是れ我が朝野の政治家に大に深く思ひを致して貰ひたいと思ふ所である。

それて亞米利加の農業は主として今回自分の見た所てあるが、第一に最も驚くべき所は、亞米利加の文明に於てはオーガニセーションのあること、システムのあること、イフエシエンシーのあること、此三つてあるが、僅かな農業と雖もシステムと云ふことを現はさぬものはない、例へば日本人がシユーガビーツを植える、ビーツ成熟すれば械械て悉く掘上げて、而して勞働者が庖丁を以て大根の頭を切つて大根の根と葉を分けるさうして畑に之を其儘にしてある、而して此大根を汽車に積んて製造場へ送つて仕舞ふ、見渡す限り畑はシユーガビーツの葉を以て蓋はれて居るが、此葉を以て蓋はれたものは如何にして掃除するかと云ふと、人を雇つて掃除すれば非常な費用が掛かるが、斯の如き時はシステムの働きてあつて、豚の持主、羊の持主が千エーカー幾らと云ふ價を出して借りるので、其契約が出來れば數千頭の羊を其畑に追込む、羊は喜んで此葉を食べ土の中に殘つて居る大根の餘りを食べる、而して一冬過ごし羊の退散する時には畑は羊の糞を以て蓋はれて、地味が肥へ肥料を施す必要がなくなる、斯う

云ふやうな譯て一つの仕事をするにも他の仕事との聯絡てシステムが立つて如何にも完全に能く出來て居る是が一つの敬服したことてある。

第二はエリゲーション即ち水利てあるが、此水利無かつせば米國今日の農業は中々今日のやうな工合には行かぬ、我國て海拔五千尺六千尺と云へば富士山の中腹て農業の出來る所てはないが、亞米利加に於ては五千尺六千尺の所ても機械を以て井戸を掘つて水を出す是が爲に如何なる所ても畑が出來る、是は昔佛蘭西のアルトワと云ふ所てやつた方法て、初め深い井戸を掘つて見たが水が出ない、それから屈折して段々掘つて行くと遂に地の底になつた、其地の底も掘拔いたる所が其下は滾々たる湖水てあつた、それて地の底には水があると云ふことが分つて來て、斯の如き掘拔井戸をアルテジャンウエルと云ふ、此方法は亞米利加の到る所に應用せられて、少きも百尺多きは二千尺まて掘つて地の底を打割つて水を取て居る、日本人のやつて居る所は多く不毛地と言はれて居る所て、此システムを應用せざる所は無い、而して此システムの利益ある所は、深い地下から水を機械て吸上げるのて、必要てない時にはポンプを止めれば水は出て來ない、日本ては水の利益があれば水の害を受けるけれども亞米利加に於ては水の利益あつて水の害が無い、三十エーカー四十エーカー位の畑に幾らの井戸が要るかと言ふと直徑五六寸の鐵管を埋ければ宜いのてある、井戸の深さに依て價も違ふが先づ四十エーカー位の畑には掘賃とポンプとを合せて千弗を以て足れりとする、吾々が試みに其機械を動かせば見る間に水が出て來て畑の溝を潤ほす、一度それを止めれば水忽ち止まつて仕舞ふと云ふやうなことて、殆ど理想的てある、而して之を更に大きな所へ使つて居るのは、テキサスの西原氏の如きは三百五十エーカーの畑を潤ほすに三千弗拂つた大きな井戸を掘つて居ると云ふ有樣てある、而して此エリゲーションの方法は單り農業を利するのみならず又都會を利して居る、今日我國に於ては年々水道の爲に國家が多くの費用を支出して居るが、亞米利加に於ては

斯の如き迂濶なことはしない、舊市街は舊式な山から持つて來る水を以つてやつて居るが、人口三萬か四萬位な新に出來た都會に於ては皆掘拔井戸を以てやつて居る、都會の大小に依て違ふが中には三本四本の井戸を掘つてある所もある、一つのポンプで吸上げ七十尺八十尺の上へあげて而して其タンクから市中の各戸に配水するやうになつて居る、水を漉すとかどうするとか云ふ必要がない爲に非常に廉く水道が出來る、我國ても年々國家が地方の都會に何十萬と云ふ金を水道に使つて、半分づゝを國庫補助として出すと云ふやうな事をして居るが、今後地方の水道は斯の如き輕便のことにしてやつたら大に利益あるだらうと思ふ。

斯う云ふやうな譯てエリゲーシヨンは大に米國を富まして居るが、キヤリホルニヤ州て幾ら使つて居かると言へばエリゲーシヨンの爲に七千二百萬弗使つて居る、之をキヤリホルニヤの畑に分配して見れば一エーカー二十弗づゝ掛けてエリゲーシヨンをやつて居ると云ふ譯てある、之を以ても如何にエリゲーシヨンに力を費すことが多いと云ふことが分る。

斯う云ふやうな譯てあるが、兎に角米國に於ける我が農民は非常に根據を有し非常に前途に望みを有して居るから、之に對しては十分に保護を與へてやり、出來るだけの力は盡してやらなければなるまいと思ふ、斯の如くして根柢より既に一つの社會を拵へて居るから多くの問題が現れて居る、即ち子供が澤山出來る、其子供は法律上亞米利加の子供てあるが親は日本人てある、法律上亞米利加の子供てあるが故に亞米利加のグランマースクルへやらなければならない、敎ゆる所のものは英語てある、親は終日農業に從事して子供と語る機會は無い、夜になれば子供は寢て仕舞ふから日本語を使ふ機會は少い、而して子供は終日學校に居つて英語を習ふと云ふのてあるから、子供の日本語は頗る怪しく中には全く通じないのもある、英語は極めて自由自在に使ふと云ふことてあるから、言葉は即ち思想なのであつて、思想の方までも亞米利加流になつて來て居る、是は亞米利加の臣民てあるが故に如何ともす

ることと出來ないが、同時に我が戸籍法に依れば、如何なる所で生んでも日本人が生んだ子であるならば日本人であると云ふことになつて居る、此に於てか亞米利加に於ける我が同胞の生んだ子供の法律上の位置は頗るおかしき位置である、是等の事も如何に處置すべきかと云ふことも一つ考へなければならぬのである、又日本人であらしむると言はゞ其教育法も考へなければならぬ、亞米利加人であらしむるとすれば又其教育法を考へなければならぬと云ふやうなことで、是等のことに關係して色々の問題が出て居る、又宗教上の問題もあり自治上の問題もあるが、是等は追つて卑見を公けにして世論に問ふ時があるであらうと思ふ。(終)

新年號の論壇が如何に光彩を放つべきかは卷頭の豫告によつて明かなるべし

日本國及び日本國民の強點弱點

日本人の長所と短所

文學博士 井上哲次郎

日本人の長所短所を攻究することは非常に有益でもあり、又趣味の多い問題でもある。そして政治にせよ教育にせよ、其他社會萬般の事に關して、日本人の長所短所といふものをよく攻究して掛らなければ、どういふ方面に最も力を用ふべきかといふ事が分らんからして、それで此問題が極めて大切となつて來る次第である。即ち長所は長所としてそれを發展させると同時に、短所は一日も早く矯正して行かなければならんのである。

先づ日本人の短所の方からいふと、日本人はどうもコセツいて居る。餘り考が小さくして相互に排擠して小競合をやつて居ることが多く、大度量といふものが餘程缺乏して居るやうに見える。それで人が少し何か仕事をして手柄をなさうとすれば、どうもそれにケチをつけて陷さうとするものが多い。又幸にして多少勳功がありとすれば、それに泥を塗るやうな事を色々試みる。詰り妬嫉猜疑の念に富んで居る。恰度御殿女中の睨み合ひのやうな汚たらしい所が隨分あるやうに思はれる。そして人が稍々地位を成して居るのを排擠してそれが落ちて行けば密かに喜ぶといふ風がある。そして人の名譽を得、地位を爲して行くやうな事は非常に忌み嫌ふが、之に反して人が難儀な目に遇へば初めて賞讃する。何か餘程困つた事になれば賞讃しても差支ないものだからして賞讃する。例へば非常に貧困て

あるとか、非常な逆境に陥つて居るとかいふ場合には、それに對して同情を寄せることはあるけれども――それはまアいくらかいゝ方であるが――人の幸福を妬んで叩きつける、叩き落すといふ事は實にいけない側である。も少し大度量を養ふやうにしたいものである。

それからして又日本人は餘程考が小さい。萬事につけて考が偉大でない。土地が廣くないからして、家なども小さい家に住つて居るのは止むを得ずとしてもどうも志が小さい。少しの事をやればそれで滿足して了ふやうな事がある。偉大なる抱負を以て何處までも遣り遂げて行くといふ氣象精神が割合に少いやうに思はれる。そして小さいものを美しいやうに考へて來て居る昔からの風がある。小さくして美しいものもあるが大きいものにも美しい所があるから大きなものに着眼する所もなくてはならぬ。然し今までは兎角大きなものよりも小さいものを喜ぶ風がある。之は多く志の小さい所から來て居る、それも女ならばまだよいとして堂々たる五尺の男子はそれては行かん。殊に之から先き世界の大舞臺に於て他民族と競爭せねばならぬ地位に立つてゐるからして、大いに偉大を期して行くべきであると思ふ。

それから日本人の弱點に數ふべきは短氣であるといふ事である。どうも氣が短い。之は一つは氣候の故であるか分らんが、どうも感情的で、動もすれば激怒して破裂に及ぶ。どうなつても構はんといふ具合に滅茶苦茶になつて喧嘩をしたり、甚しきは擲り合ひをやりそして後には大變困るといふやうな事をする。中には喧嘩をして後に忽ち謝罪るといふ人もある。そこに又少しいゝ側もある。大嵐が通つて後はよい天氣になるやうな具合て、喧嘩をして後は忘れて了つたやうな人もある。無邪氣て淡泊てよいといへばよいといはれぬ事もない。何處までも根性わるく拗れて行くといふのは少いんて、一旦は激怒して喧嘩などをするけれども、後は忘れて了ふといふのが多い。例外もあるけれども概して淡泊てあるのは長所といへば長所といつてもよい。けれども感情に驅られ易いといふのはいかぬ。

理性の力乏しくして、兎角些細な事にも激怒するのはいけない側である。

それから又依頼心が強い。何でも自分で遣り遂げて行くといふ力は少なくして大抵は人便りをする。人が遣つて呉れさうなものと思つて、父兄や若くは先輩のみを頼みにする。そして先輩がやつて呉れぬ、父兄がやつて呉れぬ、どうも一向に口が無いなど丶いつて、人が遣つて呉れないのを恨みがましくいふ。自分で自分の運命を開拓するといふ自主獨立の精神が盛なればやれるけれども、自分は何等の技能なくして、只人の力によつてよい職業に就かう、よい仕事を得やうと考へて居る。そして思ふ通りに行かぬと人を怨む人が多い。それがよく出來ない奴程甚い。出來さへすれば、口を求めずとも、人が其人を探し出しに來る。世間は人才を求めて居る。一方には人才の缺乏を慨嘆するものが多い。だから出來さへすれば何等かの地位が得られるのであるが、無能にして人便りをして、そして仕事のないのを怨む程愚な事はない。然し其愚な事をやる連中がなか〱多い。出來ないものをいくらよい地位に置かうとした所が、到底駄目な事である。さういふ依怙の沙汰はすべき事でない。又される譯のものでもない。さういふやうな事が非常に日本人のいけない側である尤も歐羅巴のやうな所でも人便りをするのもあるけれども比較して見ると日本の方が遙に多い。

又日本人のいけない側は何事でも買ひ被り易い。古い漢學の盛んな時代には、漢學に感れて支那を崇拜した。支那の事は何でもエライと考へた時代がある。今日から見ると實に馬鹿〱しい事だが全く支那を買被つて居たのである。王政維新と共に其夢は覺めて今日では寧ろ支那を輕蔑して居る。それは詰り日本人の感れ易い所から來て居る。今日では又佛蘭西に感れ、獨逸に感れ、英吉利に感れ、亞米利加に感れ、小説家は西洋の小説に感れ、藝術家は西洋の藝術に感れ、皆それ〱感れて居ることが餘程甚い。尤も西洋の長所を見て之を採り入れることは忘るべきでないが、それ丈の取捨鑑別の力なくして漫りに心酔して了ふものが多

い。矢張り自主獨立の精神が乏しいものだからして其傾向が多い。宗教でも耶蘇教に感れる。感れて後困つてやめて了ふ。耶蘇教になつてそしてやめた人が大變に多い。

それから又移氣の多いといふ事も一つの短所である。流行を追うてガラリ／＼と變つて行く。勿論變つて行く必要もある。然し日本人のは必要以上に變遷を喜ぶ氣味がある。同じ所に固着してもいかぬが餘りに甚しい。そしてそれは忍耐力の乏しい所から來て居る。人間には變化推移も大切であるが、又コンスタンシーもなくてはならぬ。一方には鞏固なる態度が必要であるのに、無際限に移り變ることを喜び、暫らくも移り變らずに居られないやうに不確定の狀態で居る。それが非常に日本人にステッドファストの缺乏して居る所である。之も亦一つの短所である。

けれども又日本人のいゝ側もない事はない。樂天的であるといふやうな事はよい側である。樂天的も只淺果敢てあるといふ位では今後は足らぬが、然しながら厭世悲觀といふ事よりは樂天的である方が國民として積極的に發展する上に適して居る。厭世悲觀の多くなつて來た時にはどうしても將來は危まれるのである。日本人はまア兎角愉快で居る。笑癖の多いといふ事は餘程著しい事實である。何事につけても笑ふ、途で二人行逢つても先づ笑ふ。甚しきは悔みに行つても笑ふ。葬式に行て笑ふのなどは隨分多い。或日本人が西洋人と田舍の道を歩き居つた時に西洋人が土手から落ちて痛い目に遇つた所が、日本人は上から之を見て I am sorry, I am sorry といひながら大變笑つた。それで西洋人は非常に怒つた事があるが、日本人は何でも笑ふ。それは樂天的である爲めである。樂天的であるから少し淺果敢の嫌があるけれども陰氣だよりはよい。又日本人は概して淡泊である。これは生活法からしてさうである。食物から、住宅から、交際振りから總て淡泊な方が勝つて居る。交際するにしても西洋人は手を握つたり接吻したりするが、日本人は接吻などをしない。手を握ることは今日少し眞似るが、先づ大

抵はやらぬ。交際振りでも西洋人は念入りでヒタ〳〵と入る所があるが日本人は淡泊である。無邪氣にして少し小供らしいといへば小供らしいが自然的な所がある。又日本人は自然其物とも親しい關係を有て居る。草花を愛することは西洋にもあるが、草木に對しては西洋人よりヒタ〳〵とした關係が深い。銘々庭などを作る。盆栽を作る。其他天然自然の美を愛することに於ては西洋人よりも一層甚しい。殊に蟲の聲を喜ぶといふ事は西洋には殆んどない事である。自然其物と一所になるといふ事は日本人のよい所であると思ふ。

それから又日本人は餘程素直な所がある。近頃大分いけない奴も出て來たが大體からいふと餘程素直な所が見える。そして皇室に對して忠誠の心を抱いて居るといふやうな點に於ては恐らく如何なる國民も及ばぬであらう。どこまでも、如何なる場合にも忠誠の心を失はぬといふのが、日本人の最も秀でゝ居る點である而して之は日本人の長所であつて、且つ同時に又國としての非常なる强味となつて居る。日本の國が小さい割合になか〳〵强くして淸國に打勝ち、露國にも打ち勝つことが出來たのは、只兵器ばかりによつて説明すべきことでない。矢張り國民全體の忠誠の心が非常に篤い所があるからして、さういふ結果が得られたのであつてそこに國民として又國としての非常の長所がある。さういふ長所を長所として、よく諒解して深く之を自覺することが必要と思ふ。國民の元氣は何處から出るかといふに、さういふ自覺にあるのである。日本には何等の長所はない、日本ほど誇らぬ所が無いとなると、日本人たるの面目が無くなるから、我々は日本人なるぞといふ名譽心といふものゝ源泉が無くなつて了ふ。日本は他國と餘程違つて國民一般帝室に對して深大なる忠誠の心を抱き、イザ國家の急とあれば身命を拋つて君國に盡すといふ一致協同の力が最も多大であるが爲めに如何なる大敵と雖も之を擊退して之を殲滅せしめずんば止まずといふ事になる。そこに日本人が日本人たるの名譽を有する源泉がある。かゝる美點を有して居る所の、世界唯一無二の國の臣民である

といふ所に、元氣のよつて起る本があるのである。之が國家としての最大の長所である。

其外いろ〳〵長所短所があるであらう。が今は只二三の思ひついた點丈けを述べて置くが、要するに長所は長所として益々之を發展せしむると同時に、大正年間に於ては出來得る丈け其短所を矯正して行くやうに努力しなければならぬと思ふ。

人民の善きは強點 役人の惡きは弱點

松村介石

先づ一つ強點の方から行かうか。

日本人が歐羅巴人と競爭して勝てるものであれば、先づ強點であるといはなければなるまい。最近米國から歸つて來たもの、それは米國カリフォルニアの農園で働いて居たものであるが、其人に向つて私は、「君はどれ位の給料が取れるか」と問ふと、「日に二弗取れた、初めは一弗位しか取れなかつたが此頃は二弗づゝ取れた」と答へた。「さうか、白人はどれ位取るんだ」と訊くと「白人は一弗半だ」と答へた。「さうすると日本人の方が白人よりも半弗多く取るのだが、それは何故か」と問ふて見ると、之は實に近來の現象で、昔は白人の方が多く取つたが、今ではそれが顚倒した。それは何故かといふに、日本人は元、仕事をするのに、煙草を吸つたり怠けたりしていけなかつた。けれども近來は西洋人に負けないやうになつて、働く時はよく働き、遊ぶ時はよく遊ぶ、つまり勞働と遊樂との調和を取ることを知つた。そこへ以て來て日本人は非常に役に立つ。草を引かしても培養をさしても氣が利いて細かい所へも注意が届く。西洋人はノロ〳〵していかん。それだから向ふの雇主も日本人を使ひたがる。それに日本人には案外封建時代の習慣が殘つて居ると見えて主人を敬ひ、よく柔順に事へる。西洋人のやうに主從同權などいふことを振り廻さず、素直に忠實に事へる。之も亦日本人を雇ひたがる一つの理由だ。そこで米國の勞働者は日本人を妬んで例の日本移民排斥などいふ事も起つたのだ。印度人や支那人や朝鮮人などが勞働して居る所には西洋人が十人廿人と隊を組んで襲撃して嚇かしをやる。オイラの繩張りを侵すと命を取るぞ、酷い目に遇はしてやるぞ。廉く働くとよいが、オイラと同じ賃銀を取るゝ承知しないぞといふやうな事をいふ。そこで皆縮み上つて、白人の殘したホンの零れ物を拾ふといふ具合で、廉い賃銀の所で勞働するといふやうな傾向であつた。この同じ筆法を持つて來て日本人を襲撃し初めた。初めは日本人も不意打を喰つて敗北をしたが、然し今度は此方でも覺悟をし、ピストルや刀を用意して武裝して居る所

にやつて來る。あつちで一人殺せばこつちでも一人殺すといふ具合にやつた。こつちからは絕えて襲撃せぬ、只之を防ぐことをする。之は度々やつたが、例へば五人と五人、十人と十人の相手ならば何時でも日本人が勝つに極つて居る。そこで初めは日本人をも馬鹿にして居つて、支那人よりも躰が小さいなど〻見縊つてかゝつて見ると、恐ろしく獰猛なので閉口して了つた。そこで到底も仕樣がない。それで移排斥などいふ規則を拵へたのであるが、然し白人の資本家は皆日本人を欲しがつて居る此勢で行けば農家でも商家でも日本人を使ふのが利益であるから、あの排斥の規則さへ弛めば日本人が大いに發展し得るに決つて居る。

それから日本人で餘り長く米國に行つて居るものは精神が拔けて了ふそして酒を飲んだり、賭博を打つたり丸で西洋風になつて了ふ。どうも我は日本人也といふ氣骨を失つて墮落して了ふ。然し西洋人は如何に墮落しても兎に角千何百年といふ間耶蘇敎が血や肉に浸み込んで居つて、幼時の習慣風俗を養成して居るのであるから、何時かしら本心を發揮する事がある。處が日本人は全くの動物になり戾つて再び取り返すことが出來ない。それで以て見ると日本人とふ自覺の中には、風俗、習慣、氣慨等を維持するに大切なる尊いものがあると感ずるのである。そこで只濫りに西洋化するといふ事は餘程考へねばならぬ事と思ふ。日本人が、日本人としての風俗習慣を維持して居る中は西洋人に優る活動力を有つといふのは、今日まで西洋人に優る國風の然らしむる所である。之は一般の人にも大いに心して貰ひたいと、其人が言つて居つた。私共の知つて居る範圍でいつて見ても、所謂基督敎界の先輩といはれる人は、皆一時の俊才であつて、學識も人格も俊秀の人であるから、一般の日本人と同じにいふ事は出來ぬけれども、あちらから來て居る宣敎師などに比へて見ると總ての點に於て月鼈の差があるやうに思ふ。あちらで相當の學問をして相當の見識のあるものでもどうも西洋人としてのプライドがあつて、敎を受けることが餘程六つかしい。多くは偏狹にして僻見に富み天下の公道大道が分らぬやうである。西洋でもエライ學者は分つて居るやうであるが、今后は寧ろ東洋人の長所に目をつけ、東洋人に學んで基督敎を改革せなければなるまいと思ふ。日本人は此點に於て先鞭をつけて萬物一如、——道は一なりの旗印を押し立てゝ天下に呼號すべきであると思ふ。

それから日本人のよい所は義理と人情であると思ふ。之は西洋人のよく味うて居らぬ美點である。長くバンクーバーに居つた田村新吉氏の話であるが、將棊を挿すに當つて、あつちの奴がフット大切の處を手落をやる。すると日本人は其の不注意な點を氣の毒だと思つて一寸注意をする。Thank you, thank you といつて喜んで直す。こつちは大様に人情で以て敎へてやつたのだ。處が今度こつちで見落しをした時は一寸も待たぬ。手早く駒を取つて知らん顏をして居る。勝負だから仕方がないといつて濟まして居る。其間に少しも義理といふものがない。西洋人に道德なしといふのではない。宗敎もある、正義もある。が日本人の有つて居るやうな義理といふやうなものが乏しい。又之は大倉孫兵衞といふ人

の話であるが、紐育に行つた時に、或爺さんが仕事をさして呉れといつて來た、其爺さんの話を聞くと其息子は何百萬弗といふ大金持である。而かもそれは本當の息子だといふ。そして父には少しも金を呉れぬ、父を養はぬ。曾ては賃錢を貰つて息子の家に傭はれて居つた事もあるといふ。之は西洋人から見れば當り前である。父は父、息子は息子と金を分けた。父は力なくして命を亡くし、息子は成功して金持になつた。銘々各々獨立である。父だからとて助ける事がない。弱いからとて助けて居れば、失敗したからとて助けて居れば、獨立心が無くなつて此競爭の激しい世の中に生存が出來ぬ。人に物を呉れても長く呉れぬ、獨立自尊の主義から行けばさうあるべきであらう。けれども其處には日本でいふ人情も無い。義理もない。涙も無い。只理屈ばかりだ。私は獨立自尊も日本に必要と思ふ。然し人情と義理とは失ひたくない。西洋の文明は最早や此極端なる個人主義の弊に陷つて居る。人情と義理のない世の中は、オアシスのない砂漠である。荒涼たる、寂寞たる、無味なる、果てしなき砂漠の旅よ。私はかゝる生活を呪ふ。溫かなる、互に思ひ思はれるといふ生活は日本人が西洋人に勝つて居る美點と思ふ。其他澤山あらうが美點の方はそれ丈けにして置く。

日本の缺點の方をいふと、先づ第一に日本の役人は一般にいけない。只威張り散らす。役所といへば概して繁文縟禮て、役人といへば別種の人間と考へて居る。これが爲め日本の政治は滅茶〳〵だ。實業も、教育も、悉く其弊を受けて居る。こんな風では到底今日の文明國といはれない。石川半山君の話であつたが、君が米國に行つてタフトに遇ひに行つた時の事である。紹介状を持つて行つて見ると小使が門に居る。タフト氏に逢ひたいから取次いで呉れといへば、二階に上つて行けといふ。それで二階に上つて行つてタフト氏に逢ひたいといふと、今直きに逢ふから一寸待つて呉れろといふ。待つて居ると直きにタフト氏が出て來て、簡單に用事が濟んで了つた。恐ろしく單純で恐ろしく簡單なもので、之ならば逢ひに行く方も樂、小使も樂、金もかゝらなければ時間もかゝらない。此流儀で行けば行政整理も財政整理も朝飯前だ。下らぬ取次などを澤山に置いて人を勞し、金をかけ、時間を潰すのは何事ぞ、一事は身事、亡國の端緒はさういふ所にあると思ふ。教育でも海軍でも陸軍でも皆同じ事だ。私は所謂官僚政治とかいふものばかりを攻めるのでない。政府は實に人民の爲めにあるのだといふ根本思想を確かにして貰ひたいのだ。陸海軍といつても皆人民の爲めのものでないか。然るに今の政府なるものは只政府の爲めといふ事を考へて居る。役人は人民よりも上等のものと考へて居る。こういふ政府が國民の眞中に頑張つて居つては國家の眞の發展などいふ事は覺束ない。それから今の政治家なるものには僕のいふ宗教心といふものがない。之が非常の弱點である。今日所謂朝野の名士なるものを見渡して見ても、多くは名利にのみ奔るの徒であつて、一誠以て國の爲めに盡し、民の爲めに盡さうといふ人がない。天より遣はされた——責任を天に持つ政治家がない。日本でいへば西郷南洲とか吉田松陰とか、西洋でいへばビスマルクとか、グラツドストーンと

かいふ人がない。獨逸のウイルヘルム陛下でも、米國のルーズヴエルトでも會堂へ出て行く。日本の皇室では　先帝陛下といひ、今上陛下といひ其お歌によつて分る如く祖宗に對して大なる責任を感じて居らるゝ。若し　先帝陛下に對して政治家といふ言葉が許さるゝならば、私は　先帝は確かに天に對して責任を感ぜられた大なる政治家――明治時代の唯一人の大政治家であつたと思ふ。今の紛々たる俗政治家は何だ。金を溜める、勳爵が欲しい。そんなものは何だ。金が欲しかつたり、勳爵が欲しかつたりして一國の政治が出來るか。情けない話だ。堂々たる我日本帝國を率ゆるに、左樣な粗末な、小さな人物しかないといふのは最も大いなる弱點である。

日本の國民は案外よい。日本の役人は一番にいけぬ。私は日本國民の勞働に堪ゆることを以て、日本の强點と思ひ、政治家の誠心誠意なきを以て日本の弱點と考へる。

自己の短所を知悉せる是れ其長所

伯爵　大隈重信

日本の長所短所が何かといふ問題は面白い問題だ。昔のやうな空想の時代は已に過ぎ去つた。總て實驗事實の上に物事を比較研究する事の出來る時代となつた孟子の所謂權して而して後輕重を知り、度して而して後長短を知るといふ具合に、何事にも尺度量衡を用ひて其長短輕重を測るやうになつた。全體物に絕對の善もなく又絕對の惡もない。國にも亦よい事もありわるい事もある。日本が只一つ絕對に世界に勝れて、他の國は絕對にわるい――盲目的に日本は世界無比である――といふ事は、如何なる大膽なる愛國者と雖もいふ事が出來ぬだらうと思ふ。

今は實驗の世の中、比較研究の世の中であるから、物を判斷するには尺度量衡を用ひて、他の物と長短輕重を比べて見なければならぬ。先づ第一日本民族の體格について考へて見るに、歐羅巴人若くは支那の北部邊の人と比べて見れば、日本人の體は明かに小さい。朝鮮人よりも小い位だ。丈けも短いし、目方も少い。歐洲の强國たる英吉利、獨逸、露西亞人などに比べると丈けは平均何寸と低い、目方も何磅と足らぬ。さう

すると如何に盲目なる愛國者も、お國自慢の先生も體格の點については、日本人は世界一といふ事が出來ない。

それから物質的文明の上について日本人はまだ世界に勝れて居るとはいへぬ。之も亦實地について見れば明かな事である。東京の帝國大學でも又京都の大學ても又此早稻田大學でも圖書館があつて、そこに澤山の參考書がある。そして參考書の多くは英、佛、獨、米等の書である。博士とか學士とかいふ人達が參考にする本は何かといふに、多くは近來の歐米の學者の著述である。毎日講義して居る其講義の基く所は多くは、其等の參考書てある。帝國大學を卒業しても學士となつても直ぐに大先生にはなれない。三四年も歐米に留學して、向ふて學問をして來なければ大學教授などになれない。さうして見ると智慧の方面に於ても、日本は世界一てあるといふ事は何人もいひ得まいと思ふ。

日本の軍隊は實に强大てある。然し軍隊其物は何で以て强いかといへば愛國心忠義心などの根本てあることはいふまでもないが、如何に愛國心や忠義心が强くても、今日ては弓矢、刀劍では兎ても鐵砲や速射砲や大戰鬪艦や無煙火藥やの前には立てんのである。如何に正宗の名刀ありと雖も、加藤淸正、武藏坊辨慶の勇ありと雖も連發銃の前には何等の力が無い。然るに今日の戰爭に必要なる軍艦、大砲、火藥などは如何にして得るかといふに、日露戰爭當時などは多くは外國から買つた。今ては餘程日本ても出來るやうになつたが尙且つ充分に出來ぬ。かく比較硏究して見れば如何にお國自慢の人も智慧の方面で、日本が外國に勝れて居るとはいひなくなる。

又日本が金持てあるか貧乏であるかといふに、之れ亦如何なるお國自慢の人も富國とはいひ得ない。如何となれば、戰爭も外國の借金によつてやり、戰後經營も借金によつてやる。今日支那が借款に困んて居るのを笑ふけれども、是れ所謂五十步を以て百步を笑ふものてある。口を開けば人皆富國强兵といふが、富國にあらざることは最も明かて、又强兵とはいふもの丶、

今日の如き兵器がなくては戰爭の出來ぬ時代に於ては兵器の獨立が無ければ眞に强兵であるとも斷言し兼ねる。

斯く話して見ると日本の弱點といふものが餘程多いやうである。殆んど指を屈するに遑ないやうである。維新後直ちに知識を世界に求めよとの御誓文が出たのも偶然でない。所謂彼の長を採つて我が短を補ふの御趣意て、我のみ優つて彼劣れりとすれば彼の長を採るといふ事がない譯てある。維新の大方針といふものは明かに彼の長を採るといふ事にある。然らば日本が今日の如く發展したといふ根本は、日本がよく自らの短所を知つて彼の長を採つたといふ所にある。よく日本の短所を知つて、知識を世界に求むるやうにしたといふのは英明なる　先帝陛下の大業の基てある。日本には弱點が多い、短所が多い。然し日本の長所强點とする所は實に日本が自己の短所弱點をよく知つて居るといふ所にあると思ふ。支那が今日の如く衰へたのは全く自己の短所を知らなかつた爲めてある。今日でも尙中華民國といふて居る。中華とは何事ぞ。支那の文明が世界一のもので他は皆野蠻であるといふ排外的思想から來て居るのである。之に反して日本はよく自己の短所を知つて居る。之が非常なる日本の長所である。今日でも尙且つ何處までも世界の文明を採らうといふ事を孜々營々として努力しなくてはならぬ。何時でも善と見たら直ちに遷る。立憲政治を見れば直ちに立憲制を採用する。徵兵制度を見れば忽ち古來の封建制度――武士の魂とした刀を取り上げて徵兵制を布く。西洋の戰術、西洋の軍隊組織を學ぶ。そこで日本の長所は、よく日本の短所を知り、短所を知れば直ちに之を改むる所にあるのである。之は獨り明治維新の時に初まつた事ではなく、日本古來の國是がさうであつた。朝鮮の文明を採り入れる、支那の文明を採り入れる、印度の文明を採り入れる。宗教、文學、美術あらゆるものを大陸から採り入れた。世界の如何なる所に如何なる文明が起つても之を採用し全化するのは日本の勝れた長所である。

日本は世界無比の國體を有する。上に萬世一系の皇室あり、下に言語、人情、風俗を一にする國民がある未だ一度も外國の凌辱を受けた事がないなどいふ事は之は絶對に世界に勝れた點であるが、之は寧ろ日本の天祐といふべきて、今更ら長所として擧げるの要がない。日本今日の盛運を來したるは全くよく自己の短所を知り、彼の長を採つて之を補つたにあるので、盲目なる愛國者やお國自慢の先生が、日本に短所なしなど考ふるのは、之こそ我日本の國是に戻つたものである。

「日本國及び日本國民の强點弱點」に關する大木遠吉伯の意見は次號の本欄にあらはるべし



誘拐された女

（東半球に彌蔓する無籍者の世界）

細井柏村

　松崎天浪老兄足下、未だ謦咳に接するの機なしと雖も、予は足下の「淪落の女」その他を多大の興味を以て讀了せる一人也。同時に端なく想起したるは、予が往年南清各地を放浪したる際、實際に目撃したる醜業婦の悲慘なる狀態なりき。

　一日予は香港の日本旅館の露臺（ベルコニー）に於て、年齡十二三歲の少女が誘拐の兇手に捉はれて遙々長崎より香港に誘致せられ、病める母、盲ゐたる父を戀ふるの餘り欄に倚つて痛泣せるを見たり。就てその細情を訊すに及んで側隱の情禁ぜんとして禁ずる能はず、遂に多少の危險を冒して『誘拐者と破戶漢』の中に入り、やゝ裏面を見、歸途故らに無免狀の移民若くは醜業婦の常用せる『南京船』に搭乘したり。船中日本人は唯予一人のみにして他は悉く清人なりき。

　歸來、世道人心に訴へんとして讀賣新聞紙上約二ケ月に亙り『密航婦と誘拐者』の題下に、彼等の裏面を揭記したり。而かも誘拐の兇手は毫も衰ふることなく、今尙一ケ年約二萬人の醜業婦は各地より續々海外に誘拐せられつゝありと稱せらる。かつてスチッドは喝破して曰く、支那は世界に勞働者を供給し日本は世界に醜業婦を供給すと、これ豈我同胞が雲煙過眼視すべきの事ならんや。

　予は不幸にして足下の如き流麗の筆を有せず、文辭意を盡さざるもの頗る多しと雖も、而かも足下が『淪落の女』に對して淺からざる興味と同情を以て犀利なる觀察を下し玉ふを見て、足下が參考の一端に供すべく、不文を顧みずしてこゝに『誘拐された女』一篇を草したり、敍するに小說の體裁を以てし、聊か所謂『無籍者』の社會を描すべく餘事を列ねたるは、偏へに足下の宥恕を請ふところ、惟ふに之が根本的救匡の方策を研究するは、蓋し重大なる社會問題也、婦人問題也、德義問題也、人道問題也、かつて佛陀を有し基督を有したる我等は、今尙『輪姦の公認』とも云ふべき『娼婦』の一階級を如何ともすべから

ざる文明の程度にあり、婦人開放論の如き先づこの『輪姦の公認』を社會の表面より抹殺するに非ずんば、畢竟糞泥に陷つて鼻端に香水をかざすの愚と何ぞ擇ばん、足下の高見果して如何。

「無籍者ッ!!」

縊れて死ねと云ふよりもまだ毒々しい、對手を恁うまで蔑つた罵殺の聲がまたとあらうか!? それは恰當、鳥も啄むを敢てせぬ腐爛の屍肉に吐き懸けた唾沫にも等しい侮辱である。凡そ内地に行はれる有りと有らゆる惡罵を一口に引ッ括めてもまだ及ばない程、鋭い侮辱の意味を含んだこの一語が、醜業婦の散在して居る上海、香港、星嘉坡、乃至南洋諸地方の邦人間に行はれる。

總じて各國人の寄集ふ此等の開港場の街の隅には、必らず各國人の自在に入浸つて一夜の春を購ふに便利な暗い一廓が、夜の燈火を耻らうが如くに横はる。其處には歐洲婦人、支那婦人、扨ては我等の同胞など思ひ／＼の扮飾に嬌態を作つて、各國の人種を對手に媚を售る異様な光景が描き出される。

中にも、一際目立つて見られるのは、往還に面した一室を開放げて、花瓦斯の眩しく照り輝いた圓卓子の花瓶の周圍に三五人づゝ團居を作り、いづれも雪白の肌を惜氣もなく胸のあたりまで露出し、男の膝に垂枝れ懸りもするかのやう、玉の腕を片肱突いて、飽迄も蓮葉な表情に客を釣らうとする金髮婦人の店頭である。酒よりも濃き歡樂の夜の空氣に憧れて氣もそゞろに醉歩を移す漂客は、男の胸に鋲を打込む星の瞳と、齒並の美しい笑顏とに魅せられて、女の差出す腕に身を托しながら幾人と云ふこととなしに窓帷の奧へと吸込まれて行く――、一夜五弗、時としては一弗そこ／＼の墨西哥銀に一夜の春を刻む此等の金髮婦人が、概ね『錢』を生命とする猶太人であるやうに、南淸一圓の此等の一廓に各國人を對手の支那の私窩子を總稱して『廣東婢』と呼做して居る。

廣東婢は大抵捨兒か、さなくば誘惑の罠に落ちて、銀二三兩に賣飛ばされた所謂『無籍者』に過ぎない。――て、此等の儚い運命に囚はれた廣東婢は、十一二歳

の頃から始めて賣笑婦の群へ投げられて、艶も脂も乾干びて終ふまで光線も見ない無殘な生活をつゞけて行かねばならぬのである。

内地人の眼には、動物園の、あの獸類を檻禁する鐵柵を、單に取外づしの自由な丸太に取替へたとしか思はれない程無造作な建物の中に、長細い木椅子を一脚横へて、それに七八人も腰を卸して何事か互ひに饒舌を鬪はして居るのであるが、四隅のカンテラは油煙に煤けて、充血した眼のやうな燈火は、灰色の壁に暗い陰鬱な影を投げ懸けて居る。——

強い脂肪のいぶり立つやうな惡どい臭氣と、物の腐れを思はせる濁んだ泥溝の匂ひとが鋭く鼻を拊つほの暗い街頭を、偷むが如き跫音に彷徨ひ歩く人の群は、やがて丸太の柵の前に足を停めて、陰暗な灯の下に客を待つ女共の群を白い齒に打眺める。

女共は漂客の影を見る每に、とつかは身を起して我勝ちに木椅子を離れ、血色の黃濁な顏面の筋肉を故らに和らげて、遊興費の交涉を試みるのであるが、床虫に螫されながら石の褥のやうな蓆一枚の寢臺の上に、四五時間も六七時間も安臥することのできる者は、恐らくこれも無籍者の類に過ぎなからう、大抵十錢銀貨二三枚を投げ出して、十分か二十分で其丸太の檻へ放たれるのを常とする。が、終日殆んど食物を供給されずに捨置かれる女共は、先づ必らず客に對して饂飩、生瓜、時としては菓子、バナヽ、林檎の類を强請り、客の貰入を奪ふやうにして、鼻を鳴らしながらセカ〳〵と貪ぼり食ひ貪ぼり吸ふては、脂ぎつた唇をなめずり汗ばんだ鼻頭を押拭ふて居る。

東洋人の血に肥太らうとする猶太人よりも、蠻子を對手に一夜の春を刴む廣東婢よりも、一層適切に『無籍者』を體現した者は、支那特有の彼の苦力である。

無帽は勿論のこと、洋袴の釦を一つ懸け外づして居ても、紳士の對面を損ふものとして容赦なく罰金を料せられる香港の街頭に、彼の苦力のみは、陽に焦けて赤銅色に染められた素肌を憚る氣配もなく露出して力役に從ひつゝある。彼等は住ふべき家、炊ぐべき竈、着すべき衣服のいづれをも有たない。唯腰部を掩ふ短かい袴の外には、草鞋を購ふ資力さ

へ絶へ〳〵の時が多い。

斯くて彼等は、眼前の空腹を眼前の汗に滿すのであるが、それさへ文字其儘のパンと水——時あつてか生瓜の類をこれに代へて僅かに饑渇に抵抗するに過ぎぬ。

南滿の開港場を見舞つた人々は、垢と脂と汗とに黝ずんだ顏の中から獰猛な眼を怪しく光らした獸のやうな臭い蠻子の群を埠頭に見出すであらう。そして彼等の或者が、路傍に落ち散つた一枚の蜜柑の外皮、さては擦り截れて何人かの穿捨てた草鞋片つらにさへ、血を流さんばかりに諍み合つて、宛ら已れの生命の如く相爭ふのを見るであらう。銀杏色の歯を剝出して生瓜を嚙むもの、一厘二厘を投じて白湯を購ふもの——總じて此等の無籍者は、鄕貫も姓氏も不分明なところから、假定踏み殺し擲り殺したにしても、十弗乃至二十弗の葬儀料で事濟みになるのが普通である。

この幾千萬の人族の大半は、生涯異性の肌を知らず、只不自然な作用の下にのみ其性慾を慰めるより他はない。されば、偶然女の乳房を垣間見た丈けでも全身の血の逆流する程に鋭い刺戟を感じて、中には絶倒する者すらある。

憐れなるこの人族は、尤も開放的な公園にすら立入る自由を拘束せられ、極端なる屈辱と極端なる侮蔑を、屈辱とも侮蔑とも感ずることなしに、只默寂として刻々の光りを消して行く——

「何？ この無籍者奴」

海外各地に散在する所謂世界破戸漢が、口論の揚句苟且にも徭う口走つたが最後、罵られた一方は必らず匕首の鞘を拂つて血走つた眼に血を見ねば已むまじく逸り立つのである。

香港の東端、支那特有の傾斜の巷不老長春のワンチャイ街こそ、我等の同胞數百名が各國人を對手に醜業を營む一廓である。

駢然と建並んだ洋風の四階建には、軒別にNo1.No2.……と二十何番館まで、入口の赤地の壁に白く番號が書拔かれて居る。——恰當内地の官舍風の建物で、何の氣もなく行過ぎるが、七八間も步かない間にこの一廓の空氣が如何に艶めいたものであるかゞ分る。

「貴郎大層澄してらッしやるのね、顏位見せておやんなさいよ。」

聲に驚いて振仰ぐと、二階の露臺に舞踏服を着た日本婦人が、賣女に特有な、荒んだ猥りがましい眼元で凝つと往還を見下して居る。塗りたくッた厚化粧が剝げて、血色の惡い、皮膚の生地がまざ〳〵と眼につく。

「遊んでらッしやいよ。」

恁うした甘ッたるい言葉が續いて女の唇を洩れる、それは恰當、女が身も心も男の膝に打任せた時でなければ聞くことのできないやうな馴々しい音調に響く。——軒別の番號は內地の樓名に代るべき符號である。

更に二三軒も行過ぎると、泥々に醉白れた外國水兵の一群が亂調子のピアノに靴音を揃へて幾組も〳〵床の拔けるばかりに踏り狂ふ態が窗帷越しに見える。

そこにも四五人の同胞は胸をはだけて正體もなく、或者は毛むくぢやらな外國水兵の腕に身を投げ懸け、或者はコリ〳〵し相な頰髭へ、生卵の生目をそのまゝな美しい頰を息の通ふ程に摺り附けて居る。——

お蝶は恁うした空氣の中に浸つて尤う彼れ此れ三年を過ごした。始めてこゝへ連れられて來た時はまだ十三歲、勿論肩揚げがあつた。

お蝶は長崎の十善寺管內に生ひ立つた。十善寺管內と云へば、恰當下谷萬年町のやうな、富

んだ者の住まはない一區域である。光線と空氣に背いて陰暗卑濕を極めたこの貧民街には、鏃落人夫、石炭人夫、沖仲仕、夜店商人、世間師など、無數の日傭取や其日暮しの輩が棲んで居た。——又これ等の細民を對手の安宿や唐婢宿(淫賣宿を長崎にては斯く呼做せり)が多い。

年久しく子宮癌を病んで身動きもできないお蝶の母は、絕えず局部から出血したり穢い下り物がして病勢は日增に重るばかり、父親は、市中に玩具の風車を鬻いで僅かに一家三口を糊する丈けの料を得て居たが、兼ねてよりの黑障眼が嵩うじて到頭盲目になつてからは、其日暮しの悲しさに明日からはハッタリ炊煙の立てやうもなくなつた。それは一年中で誰しも一番生活の壓迫を感ずる二月の初旬であつた。

港の地勢が鶴の嘴に酷似するところから、鶴の港と呼做されて居る長崎港には、絕えず二三艘づつ外國通ひの船舶が、假泊の數日間を利用して舷側に附着いた

鐵鎚を落すのであつた。

幾萬重の潮路を乘切つた永い間の疾勞を養ふと云ふ見えて、港の中に横はつた巨舩大舶の舷には、老ひたるも若きも、男も女も、棧橋の邊から見ると怜度傳馬船に船虫の爬動するが如くに、架空の繩梯子に身を托して、朝から晩まで鐵槌を握つては舷側の銹を叩落すのであつた。

鼓膜を突徹して腦天を打拔くやうな鋭い音波が、幾百人の鐵槌の尖端から簇出して遠くの冲合までカンガン響き渡つた。

人夫共から親方〳〵と呼ばれて居る監督が四五人は居た。親方は腕を組んだまゝ、右往左往に舷側を往來して絶えず人夫の勤怠を見回るのであつた。纖細い女子供が、どうして朝から晩まで鐵槌を鐵板に打附ける激しい力役に堪えられやう、大抵は親方の來た時丈け忙しく相にカン〳〵叩き立てはするが、通り過ぎると又手を休めて、卑猥な俗謠を唄つたり、ペチャ〳〵百囀りの饒舌を闘はすのであつた。お蝶は父の盲目に落ちてから二三日目にこの銹落人夫の中に立混つて居た。

手頼りない繩梯子は、鐵槌を擧げて舷を一撃下する毎にゆら〳〵と揺れて、ともすれば身體の中心を奪はれて眞ッ逆様に海中へ陷り相な瞑眩を感じた。お蝶はその都度胸を騒がせた。一緒に連れて來てくれた隣りの小父さんは……と思つて、怯えた小さな瞳を擧げて方々見回はしたけれど、仕事の難易によつて組を別たれて居るので何處に居るのか影さへ見えなかつた。只一筋に十錢内外の賃銀を貰つて歸つて、盲ゐたる父、病める母に温かな粥をすゝめる心うれしさを幾度となく胸に繰返して凝つと我慢した。それて火脹れのやうに眞ッ赤になつた手の甲を息て温めながら力の續く限り鐵板を打つた。

併しお蝶が恁うして父母を喜ばせたのはほんの一週間そこ〳〵てあつた。梟のやうな眼を睜つた密航誘拐者は、船員に賄賂を送り親方と結托して、この饐えあざれた女共の群にも誑惑の罠を布いた。お蝶は遂にそ

の兇手に拔はれて、或日煙りの如く其姿を搔消したのであつた。

それは割合に快明な日であつた。對岸の稻佐嶽は、女人の仰向けに大空を仰いだ半身像のやうに、長崎灣を抱いて眠るが如くに横はつた。麓の三菱造船所は、林立して煙突から盛んに煤煙の渦を巻立てゝ、餘煙は風と共に薄れ〳〵と港外に點在する島影に消えて行く。藍色の絨氈を布詰めたやうな港内を、輕快な小蒸氣船が時々獸の咽喉を洩れるやうな太い笛聲を發てゝは駛走した。——お蝶の工事を急いで居る外國通ひの商船は、明日の黎明に上海へ向け出帆の豫定で、反對の舷の右舷では頻りに杠重機が上下されて居た。尤う石炭は積終つて、積荷も殘り少なであつたが、鎖の捲上げられ捲下ろされる度毎に、氣慌しい音響が船體をゆるがすばかりに響き渡つて、水夫と言はず、火夫と云はず、船員は皆忙し相に甲板の上を往來した。

今日を限りに工事を終つて明日は又別な船舶に移つて行く鏽落人夫の群は、恁うしたせかしない混雜の中て晝のお辨を開いた。

「お前は艫の方へ回るんだ、此方へ來な。」

お蝶が辨當行李を開き懸けた時、親方は恁う云つてお蝶を麾いた。

お蝶が顏を赤らめて躊躇ふのを見た親方は。

「此方へ來るんだ。」

と二たび頤で呼ぶのであつた。——お蝶は開きかけた行李を收めて甲板へ行つた。

親方はお蝶の顏を見ないやうにして委細搆はず梯子を降て行つた。脂臭い、籠つた、蒸つとした匂ひが船艘の體内からいきれて、お蝶の鼻を搏つた。それをも厭はず直立した危い梯子を幾つも〳〵降りて行つた。お蝶がどうしてこの親方を疑ふことができやう、小さな掌に確かり梯子の一段〳〵を握り占め一生懸命に親方に遲れまいと努めた。

やがて梯子を下り盡しての行詰りらしいところで鐵

の扉が重く開かれた。

「此處で待つてるんだ。」

と突入れられた部屋は、地中の穴倉のやうに薄暗い、陰慘な石炭艙てあつた。驚いて顧眄つた後方にズシンと音して鐵の扉は堅く鎖された。見れば其處には三四の人影がこの暗黒裡に蠢いて居る。——

お蝶は何の爲めに恁る暗黒裡へ投げられたかを解することが出來なかつた。——て、そこに蠢めく人影に近寄つた。意外にもそれは三人の若い女であつた。

「あんたも朝鮮さへ行かすとな。」

其内の一人は、お蝶の口を利く前に恁う問懸けた。

「朝鮮？　朝鮮て何處な。」

「呀ッ、あんたも詿されなはつた。」

「なして姐樣。」

お蝶は惶々となつた。

「だから云はない事ッぢやない、朝鮮へ連れて行くなんて赤嘘さ、外國へ連れて行くに定つてるんだよ諦めが惡いね。」

「尤う泣いたつて追つ附きやしないわよ。」

默つて居た他の二人が、愚かさを嘲笑ふやうな、勝誇つた口吻で恁う云つた。

「口惜しい、妾や詿された、詿しくさつた。」

と物狂はしく立上つてフラ〳〵と扉の方へ歩いて行つた。

お蝶は始めて事の意外なのに驚いた。

「姐樣妾はどうなるとへ。」

「外國へ連れて行かれると、ゑヽどうしやう、早う此處開けて……もし、誰ぞ來て助けてくれまッせ、助けて……」

お蝶も泣出した。

二人は扉を押開かうとして、か細い腕の力を限りに幾度も〳〵無益な努力を繰返した。

「旦那も旦那だねえ、彼麽肩揚のあるのを連れてッてどうするんだらう。」

「眞個にさ——あの大きいのだッて最初から妾達のやうに樂屋噺しに打明けて、得心さしときや能いんだわ

ね。」

暗黒裡で二人は恁麽事を呟いた。

到頭船は出た。

お蝶は船暈と悪感の爲めに頭が割れ相で死人のやうに呻き通した。それを煩い事に思つて憚らない開放げな聲で情夫の惚話を話合つたり、猥らな俗謡を唄ひつゞける二人の憎い仕打に引き換へて、一人の九州者らしい女は懇ろにお蝶を劬はつてくれた。九州者は名をお民と呼んだ。

歯切れの能いキビ／＼した東京語を使ふ二人の女は、淺草の六區にも京城にも、安東縣、遼陽の邊りにも居たやうな事を話合つて居た。一人は名をお仙と呼び、も一人はお夏と云つた。

「朝鮮人をお客に取つて御覧それこそ息が塞るやうだよ、何しろ朝鮮人つて奴や半年に一度位しきや銭湯に入らないんだもの身體中垢でザラザラしてゝね、それに蒜臭いつちやありやしない、倩々厭になつちまうよ。」

「加之に執拗くつてね、一つが手取り二十錢だらうぢやないか、それを思へば外國へ行つた方がどれ程樂だかねゑ。」

二人は大つぴらに恁んなことを話した。するとお仙は、突然話の潮をお民とお蝶に向けて、

「お民さんや蝶ちやんなんかまだ全然初生だからね、妾達だつて散々泣かされたものさ、もつと／＼お泣きでなくつちや一人前になれやしないよ。」

泥に殺つた經驗を誇がましく恁う云つて、二人は誇り合つた。お民は涙の下からそれでも負けては居なかつた。

「一人前にならないでも能かですばい、喃お蝶さん。」

二人に對する反感がこの弱い者の怯えた心と心とをつないだ。

船は絶えず大きく揺れた。お民もお蝶も、石炭屑を蓆に折重つて尤ら泣く力もなく押默つて終つた。その中にもお蝶は全身冷えが回つて腹痛を感じ始めた。錐の穂で揉み砕かれもするやうな遣瀬ない激痛が漸次に激しくなり勝つて、最後には間斷なしにキリ／＼と痛む、果ては幾回となく下痢を催ふした。

お民は妹を劬はるやうに巳れの苦痛を打忘れてお蝶の面倒を見た。自分の膝を枕にさして、着て居た木綿物の羽織を脱いでお蝶の身體を掩ひ逕りと背を擦すつたりなどして甚麽優しく慰めた。——が其様此様する間にお民も一種の脳亂を感じ始めた。船が舷側へ傾く度毎に何處か恁う底ひ知れぬ深みへ引入れられもするやうな眩暈が頭を犯す、やがての事に蒸つとこみ上げて來たと思ふと猶豫もなく其場へ吐瀉した。それが片隅に垂れ流した汚物の臭氣と一緒になつて一層氣分を惡くした。

他の二人は船にも馴れて居るらしく、この血死期の苦みにも似た二人の悶絶を餘所事に巻莨を吹して色々な事を饒舌りつゞけた。真に火を移す度毎にマチの火がパツと燃えて、赤い瞬間の光りの流れが荒寥な石炭

艀を皆なの眼前に描出した。

食事時分になると天井の一角から握飯を投下してくれた。その都度淡い光線が薄らと射した。

『小父さん早う自家へ歸してくれまつせ、お父さんが待つとるけんでーー。』

お蝶は最初の間は聲を限りに怒ら叫んだ。それには何の答へもなく、又蓋をするやうな物音がバタンと響いて以前の暗黒に返る。お蝶が泣叫ぶ度毎にお仙とお夏はコロ〳〵と笑つた。

『執拗い兒だねえ、歸らうたつて歸れやしない、浪の上ぢやないか、船に乗つてるんだよ蝶ちやん。』

恁う云つて青い歯で笑つた。

長崎を出帆してから幾十時間を經たらう、船は遂に上海へ着いた。四人が石炭艀の舷門から船板へ移されたのは恰當眞夜中であつた。寒い潮は靜かに流れた。海岸に幾基となく定つた間隔に建てられたアーク燈は銀粉を投附けるやうな鮮やかな光りを放散して、眠りの眞中に沈んだ夢の都を見守つた。

お蝶もお民も船板へ移された時は半ば死んで居た。窶れきつたお蝶は肩で息を刻みながら眼を見開くと、そこには見知らぬ小父さんが一人立つて居た。横肥りのした四十格好の逞ましい洋裝の紳士で、胸には金鎖を光らかして居た。燥ぎ切つたお仙にお夏もこの人の前では輕擧に口を利くことをしなかつた。

『小父さん、目の見へんお父さんが一人て困つとらすけんて早う長崎さに歸してくれまつせ。』

お蝶は突として云つた。

『諾〳〵二三日すると長崎へ歸してやる、何も心配するな。』

『嘘云はすとぢやらう、妾を外國へ連れて行かすとぢやろう。』

『嘘ぢやない眞實だ、さあ音なしくして皆なのやうに寢てなくちや不可い。』

『又誑しなはるよ肯かんぞなし。』

紳士は輕く笑つた。

『誑しやしない、さあ少しの間だ辛棒おし。』

四人は毛布に掩はれて船底に寢かせられた。燈を滅した船板は靜かに〳〵ゆるぎ始めた。

舸子の座子は身をこゞめて低く〳〵櫓を掩遣りながら、動くともしない黒い一塊物は凄い潮の上を辷つた。

四人が幽閉されたのは腰壁の高い暗い六疊の部屋であつた。遙かに市のどよめき、汽笛の響きを聞く丈けで、光線さへ射さぬ部屋の中は、恰當座敷牢のやうな觀があつた。夜具が五六枚室の一隅に積重ねられて白い瀬戸物の便器が片側に置かれてあるばかりで、何一つ装飾とてはない。

室には堅く錠が卸りて一歩も外へ踏出すことはできなかつた。食事時分になると外から開く五寸四方位な小窓に蠻子の顏が顯はれた。

『別嬪お腹餓くあらうか。』

ニヤ〳〵と笑ふ。

『お腹が餓いたらどうしたんだよ。』

お仙は生際の抜け上つた醜い女だ。面倒臭相に億う云ふと、

『別嬪怒るペケあります、私飯食べさせない死ぬあります、死んだんぢペケあります。あちやさん萬歳〳〵頼むよろしい。』

『馬鹿にしてらあ。』

今度はお夏が憤氣になつて、

『誰が汝達に頼むもんか乾し殺せりや殺してごらん。』

と、平たい顏に興奮の氣を漲らした。

『へ、、、、、』蠻子は間抜けに笑つて、

『別嬪威張る皆ペケペケ、皆々助平寢ます、淫賣あります、長崎行く處好澤山あります、私好い男、一緒によろしか、金澤山〳〵ある。』

『馬鹿ッ。』

『豚尾漢。』

お仙とお夏は口を揃えて罵つた。蠻子は歯み剝出したり舌を出したりして、

『馬鹿、豚尾漢。』

と口眞似をして嘲み返した。

お仙は溜り兼ねて突と立上ると、蠻子は窓際を離れて廊下の向ふの戸板に身を退り、尚も『助平、唐姆』と面白がつて權扮つた。散々揶揄つて散々怒らして、それから南京米のボロ〳〵した握飯を投げ込んで行つた。――

数日を經て四人は南京船に移された。

南京船は主に貨物の輸送を旨とする千噸内外の小蒸汽船である。海岸に近い榮昌船局の持船で絶えず二三艘づゝ上海香港間を往復した。貨物船丈けに船客の爲めに準備された船室とてはない。船客は悉く下層階級の支那人に限られ、甲板船客たることを少しも苦痛とは感ぜぬらしく、甲板の上に蓆を布き毛布を擴げ、或は豆粕の上に仰臥して、例の吸烟管

をゴト〳〵云はせながら悠長に煙を吹かした。官憲の注意も怠うした隙々には及び兼ると見え。積荷さへ終れば航海規則を無視して眞夜中の一時でも二時でも任意に出港するのを其儘に放任して居る。臨檢巡査も大抵夜の十時頃に棧橋際を引取つて終ふので、煩瑣な手續や厳めしい取調を怖れる無免狀の密航移民や醜業婦は、十一時から一二時頃へ懸けて殆んど公然この南京船を捉へた。

船體の小さな千噸内外の小蒸汽船丈けに、沖合の風濤を突切つて進むことはできなかつた。常に沿岸から約二三哩の間隔を保つて泥醉者の千鳥足をそのまゝ、長汀曲浦を幾回りか迂回りにうねつて少しの風浪にも島影に難を避けた。されば、二日乃至三日も以後に上海を見捨てた日本郵船や獨逸汽船が追越して先へ香港へ著いて居るのは常住のことである。――普通一週間、風濤の激しい場合は十日も十二三日もかゝつた。

――て、僅かな浪風も激しく影響して船體は木の葉の弄ばれるやうに動搖する。船暈に勝え兼れて反吐した汚物が、船體の動搖につれて場取つた席の傍近くへヒタ〳〵と流れ漂ひ、それがペンキや脂肪の惡どい匂ひと混和して云ふべからざる醜穢を極める。

只水夫長になにがしかを攫ませれば、箱のやうにギコチない、兎も角も一人限りで寢られる部屋を貸與へる。それは疊一疊敷程の凹で、身を横へたとなれば人手を借らずに起上るとのできぬ程窮屈なものであつた。掩ひかぶさる天井の息苦しいのに加へて、光線や空氣の流通するのは兩手の指を輪形に丸めた程の、小さな圓窓より外には何にもなかつた。お蝶等はこの部屋に一人づゝ別々に容れられた。そして表からピンと錠を卸ろされて終つた。

二日目の朝まだき、圓窓に顔を摩り附けて窓外を瞰んだお蝶は、思はず聲を揚げて叫んだ。幾萬重の浪頭が轆轤の聲に砕けて白く泡立つ海原の潮は思ひもかけず黄色いものであつた。海の色は蒼いものとばかり思込んで居たお蝶にはそれが譬へやうのない恐怖であつた。そして、

『心配するな屹度長崎へ連れて去んでやる。』

と幾度も〳〵聞く度毎に大きく頷いた例の旦那の瞳の底に冷たい色の流れて居たのを子供心にも思出さずには居られなかつた。お仙とお夏がこの南京船へ乗りしなにも、

『眞個だよ蝶ちやん、旦那が長崎へ連れて歸つて下さるんだよ、そうして、ドッサリ青餅を買つて進げると。』

と云つて笑ひこけた容子の何如にも人を嘲笑ふやう

な氣配だつたのが思合はされた。

妾はどうなることぢやらうか――恁う思つて、『姐様お民姐様』と大聲に呼はつたが、素より浪音に掻消されて聲は徹らなかつた。殊に錠の卸りた扉は空しい反響を傳へたばかり、何の應へとてはなかつた。

お蝶は悲しくなつた。そして苦しい息の下から父と母との名を呼んだ。

其日の午後、扉を披いて逞ましい身體を心輕げにスリッパに乘せた旦那が突然と入つて來た。火酒の醉に染つた顏の色はテラ〳〵と脂ぎつて居た。

屈托のない顏に笑ひを皺疊んで、パッ〳〵と葉の煙りを吐きながら、

『どうだい蝶ちやん、頭が痛みやしないか。』

鷹揚に恁う云つた。

『小父さん』

お蝶はそれには答へず呼懸けて、

『この船は長崎さに行かすとな。』

『ウム、長崎へ行くんだ、尤う二三日もすれば長崎へ着くよ。』

『眞實?。』

『眞個だとも。』

『海の色が黄色いぢやないな。』

『泥が多いんだよ、來る時も黄色かつたが蝶ちやんは見なかつたんだ。』

旦那は筋ばつた手をお蝶の肩にあてゝ、倩々とお蝶の顏を見下した。お蝶にはそれが何と云ふことゝなしに恐ろしいことに思はれた。――で、身をにじらせて肩の手を拂ひ退けながら屹となつて問いた。

『外國へ連れて行かすとぢやらう。』

『小父さんが蝶ちやんの好きなものを澤山何でも買つて進げるから尤う長崎へ歸らずに外國へ行かうぢやないか、蝶ちやんの好きなものなら何でも買つて進げるからね。』

『妾や何にも要らん、お父さんが待つとらす。』

『ハヽヽヽ、又始つたな、お父さんよりも小父さんが大事にしてやるよ、今能いことを數へてやらう。』

『能い事つて何なり。』

お蝶は旦那の手を拂ひ退けやうとして身を悶掻いた。

『誰か來て、た、た、助けて――お父樣――』

血を喀くやうな悲鳴が一しきりこの室内に聞えた。

……

が、軈ての事に暴風雨のやうな酒くさい息と、地中に引入れられるやうな痛泣の聲とが響くのみてあつた。――

香港へ着いた時は四人共蒼白い死人のやうな顔をして居た。中にもお蝶は兩眼を泣腫して見るも痛ましい窶れ方であつた。

棧橋には雲のやうに苦力が群り立つて、意味の分らない大聲で猖々喚び合つては一個の行李を四五人で奪ひ合ふのが其處此處に見られた。八日餘りの潮路の疲勞に呆つとなつた頭が、棧橋へ下り立つと、今まで被つて居た髮を取外づしたやうにスツキリして、心臓は活潑に、空氣を味あるもののやうに深々と吸込むだ。

『旦那香港て隨分賑かな所ですれ。』

お仙は馴々しく恁う云つた。その窶くたれ髮ゝ荒んだ媚を湛えた眼とが何とも云はうやうなき蓮葉な心ざまを思はせた。

『妾まだ何だかフラ〳〵してよ、尤う船は懲り〳〵れゑ、旦那も馴れてらッしやるでせうけど隨分と御退屈でしたらう。』

お夏もお仙に和して恁う云つた。

旦那は尤う船の中のやうに優しい顔み見せず、六づかしい險のある眼をして、生返事をしてはサッサと先へ立つて行李と一緒に棧橋を出離れた。

遅れてお民とお蝶は力なく跟いて行つた。

『あんた甚麼にか苦しましたらうと思ゆて、心配で〳〵ならんかつた。逢ひたいと思うてもどうしても室の外へは出さんとぢやもん――眞個に鬼みたやうな奴よなし。』

と、屹と旦那の後姿を見据えた。お蝶は眼を俯せたまゝ只頷いて見せたばかり、お民の視線を怖れるものゝやうに眼のやり場に困つて見えた。

『これから妾がついとるけんで、氣を落しますな。』

『……』

『何處さ連れて行く心算ぢやらう、あの助平爺奴。』

『……』

お蝶の耳朶にはサッと紅が流れて、そして眼には涙の露が煌めいた。默つて受答へするお蝶の泣眼らしい瞳の奥には何となく大人らしい銳い色がうつつた。

『オイ姐様、話はホテルへ着いて湯にでも入つてからにしやうぢやないか、あゝやつて旦那が立停つちや待つてるんだ、早く歩いてくれないぢや困る。』

半ズボンを穿いた俥引はガミ／＼と急き立てた。

棧橋を出離れてから皆なで車に乘つた。梶棒を握つた苦力は辮髪をぐる／＼と卷上げたどれも同じやうな獰猛な顔をしたのばかりで、猿股一つの素ツ裸で走つた。

頑丈な、打附けても壊れ相にない内地の二人乘程もある車箱に、お蝶は小さくなつて俯首れた。不圖眼の前に、お民の車を曳いて走る苦力が足を擧げる度毎に割合に白い足の裏のチラ／＼と見へるのを何の氣もなく打眺めた。――すると突然、板に刺つて居た釘を踏拔いた。六尺大の苦力は小供のやうに聲を擧げて泣始めた。容赦もなく釘の折が肉に喰入つたその傷口から黒い血がダラ／＼踵を傳つて流れた。――お蝶はそれを默つて見て居るのであつた。痛いだらうと同情る程の餘裕さへ其時のお蝶は有つて居なかつた。

苦力は泣きながらも驅けり驅けつた。釘を拔取つたのは車賃を貰つた後ちである。――

電燈の眩ぶしく照り輝いた三階の奥の八疊の室にはこの土地での俠客の總元締とも云ふ荒木某を正坐に、四五人の仲買人がズラリと居並んだ。主人側は旦那一人、團坐の眞中に徑壹尺ばかりの大鍋が火爐の上に懸つて蒸々と湯氣を上げた。鯛のぶツ切りと白菜とを半々に堆く積上げた半疊數もある大皿がその傍らに置かれた。チリにして食べるつもりでもあらうか、橙子も取出された。

潮路の疲勞を湯槽に洗ひ流した四人は、目に餘る程の厚化粧をほどこし、いづれも大柄な浴衣に着替へて片隅に小さくなつて控えた。小童が順々に運ぶ皿小鉢、洋盃、獨逸麥酒などが主賓の間に配置された頃、旦那は四人を隨いて、

『みんな親分や旦那方に御酌をするんだ。』

と鋭い口調で云ひ放つた。

お夏とお仙は待設けたやうに笑ひを含んでにじり出て、コロップを拔取つたビール罎を高く持上げた。――

――がお民は垂頭れたまゝ身動きもしなかつた。お蝶は、無理强ひに責め立てられて塗りたくつた厚化粧の上に、淚痕が島と亂れて臉は痛ましくも腫上つて居た。

「オイ二人共そんな片隅に小さくなつてないてお酌をしないか。」

且那の聲は二人の心臓に鋭く響いた。

――市場の土間に投げ出された魚菜のやうに、今日は顏見せを兼ねての糶賣の當日だと思へば、二人共胸は充塞になつて、垂頭いた兩眼からポタ〳〵と涙が落ちた。

「サア世話を焼かせるぢやない。」

鋭い叱咤の聲は二人を居竦ませるのに充分であつた。到頭二人はお夏やお仙のするやうに酒間に立混つた。

四人には判然しない符牒が仲買人と且那の間に暫らく交換された。

やがて相談は纏つたらしく、いづれも坐を崩して飲み始めた。果ては三味線が持出された。

お仙とお夏は調子づいて卑猥な俗歌を可笑しげに唄つた。――が、お民とお蝶の顏は最後まで一線もゆるめられずに終つた。

お蝶等の泊つたホテルの二階の一室には、三百六十五日、一日の休みもなく賭場が開帳されて居た。

誘拐者の數々、又は誘拐者の上前をハネて無頼淫樂に日を送る博徒の群が、一基の卓子を取回んて俗においちよかぶと云ふ骨牌を弄ぶのであつたが、血走つた眼稜は刺あるもののやうに凄味を含んて、殺氣立つた面々の手から骨牌が開かれる度毎に、堆い金貨や紙幣が、甲より乙、乙より丙――と、瞬く間に形勢が轉換された。四五人の醜業婦を誘拐した誘拐者が、やつとの思で握り得た二千圓近い金を一日の賭場て拂叩いて終ふのは決して珍らしいことてはなかつた。さうかと思へば、墨西哥銀一弗の資本て數時間に數百金を贏ち得ることも格別大きな賞讃に價しない程、大ざつぱな輸贏が行はれた。且那は、その晩、スリッパーの運びも鷹揚に、莨を啣へて、麥酒の醉に陶然となつたまゝ賭場へ入つた。

お蝶は恁うして娼婦の群に投げられた。獸のやうな

外國水兵の爲めに、年歯もゆかぬ小娘と侮られて、有るまじきものを口中へ挿入されて氣絶したこともあつた。散々に弄ばれて或る要所を裂欠した爲め、多量の出血を見て其場へ昏倒したこともあつた。

少しばかり居馴れて見ると、外觀はお侠な、何事にも調子の高い朋輩が、案外涙脆い人達であることが分つた。折々は醉に乘じて客の頭上に拳を加へ、呂律も回らぬ捲舌に管を捲く女共ですら、故郷の話になると袖口を濕らして泣くのであつた。

いろ〳〵身上話の出るにつれて、涙なしに聞き得ない過ごし方を有つたものが多かつた。中にも彦根生れのお國さんと云ふのは、次のやうな事を話した。

お國さんの一家は貧しかつた。一家の活計を扶けたいとの希望から、僅かばかりの路銀を懐ろに住み馴れた故山を見捨てゝ始めて神戸へ出たのがお國さんの十八歳の秋だつた。

これと云つて親しい知邊とてもないお國さんは、桂庵の手によつて奉公口を見出すより他に何の手段も知らなつた。恰當上海の支那人紡績で工女の募集中であるが、一ヶ月三十圓位の收入はある、行つて見てはどうだ――と巧みな口車に乘せられて、世間知らずの若い娘は郷里へ送り得る金高を胸の裡に數へなぞして飛び立つばかりに喜んだ。

募に應じた工女は二十人ばかりあつた。或夜暗にまぎれて和田岬の一角から團平船に乘せられた。二十人の娘子軍を引率するのは二人の壯漢であつた。

『公然に乘れば船賃が高いから沖で乘るんだ。水上署の巡査に見附ると皆な懲役にやられる。靜かに〳〵。』

と一同を諭して、團平船は暗の波上に漂ふた。――凡そ二三時間も過ぎた頃、船體が激しく搖れ始めた。と思ふと、岩角にでも衝突てたやうな物凄い音がした。

『サア汽船へ乘るんだ、一人づゝ靜かに〳〵。』

と云はれて始めて船體から這ひ出して見れば、神戸の街はもう遙かに遠ざかつて只空を燒く灯の微光が朦朧と射して居るばかり、眼前には山のやうに聳えた一大汽船が走つて居る。――勿論速力は鈍かつた。

お國さんの番が來た。驚くまいことか、誰も皆銘々船上から吊り下げられた繩に身體を縛つて、舷側に垂下した繩梯子を上つて行くのであつた。――斯くして二十人の娘子軍は遂に一人殘らず石炭艙へ幽閉されて終つた。

今しがたまで物優しかつた二人の壯漢は、急に生れ變つたやうに荒々しく。

『泣いたつて笑つたつて駄目だ、愚圖〳〵云ふと打殺すぞ、貴樣達は俺

等二人が神戸で買つたんだ。』と云ひ放つ、皆なは聲を揚げて泣き始めた。

『どうせ二三人はうたはせなきや駄目だ。』

とピストルを手にして、手當り次第に弄ぶのであつた。——女共は只齒を喰しばつて泣くより他はなかつた。——お國さんは恁うして香港に賣られて來た。

お國さんと同じやうな方法で口の津や下の關から誘拐されたのが六七人はあつた。お蝶はまだ憂目を見るのが輕かつた方である。

お蝶は尤う三年をこのワンチャイ街に過した。同胞とさへ見れば長崎に殘つて居る盲ゐの父、病める母の上を尋ねた。悲しいことに所番地さへ判然とは知らないお蝶は、まはり諄いことを熱心に聞訊すのであつたが、音なしい人でも『色消しだね』と眉をひそめ、少し荒だたしい客は『煩せゑなあ』とてんで對手にもしてくれなかつた。

今日も又三年以來毎夜のやうに聞く彼の哀切た支那胡弓の音が何處からともなく響いて來る——お蝶は大理石の塑像のやうに瞳を据えて凝つと耳を傾けたが、やがて突と立上つて茶棚から火酒を取出してなみ〳〵と洋盃に注ぐのであつた。(完)

貴族院の政客

黑頭巾

其一

◉政友會は、官僚派の爲に、ジレンマに掛けられつゝあり。衆議院に於て勝つも、貴族院に於て制せらる。若し强ゐて貴族院に於て勝たんとすれば、內閣自から崩壞せずんばあらず。

◉官僚派は、不如意の時は、內閣を明け渡すを辭せず彼等は、內閣を退くも、其の威力は貴族院に於て發揮せらる。彼等は、つねに背後に光明を負へり。形隱るゝ如きも、其の影は掩ふ可らず。貴族院は官僚派の影なり。

◉或意味に於ては、官僚派は、嘗て、政權を失ふこと無しといふことを得可し。彼等は、內閣を退くも、つねに、貴族院に據つて、政友會の死命を制すればなり。

◉政友會は、或意味に於ては、官僚派の傀儡たらずんばあらず。官僚派は、其の政策の行き詰まるときにのみ、內閣を、政友會に讓り、行き詰まれるにも係らず其の主張をば、例へば軍備擴張の如き、之を保留して失ふことと無し。

◉官僚派の政策は、內閣を有すると否とに係らず、つねに進行しつゝあり。政友會は、內閣を得るに由りて何等、憲政の發達に貢獻する所以のものあるを見ず。政友會內閣は、於是乎、無意味の內閣たらずんばあらず。

◉官僚、政友の內閣が、有意味、無意味たる所以の、分水嶺は、唯だ貴族院に在り。

◉內閣を戰場とすれば、政友會は軍港を有せず。官僚派は、軍港を有す。軍港は貴族院なり。彼等は、優勢なれば、出戰し、不利なれば退いて軍港に據る。

◉政友會が、確實に政權を獲得せんには、這般の軍港を打破したる後にあらずんば不可なり。而して此の軍港を占領するは、近き未來に於ては、到底、見込無きに似たり。知らず貴族院は、如何なる政客ありて、能く官僚派の根據地を確守し得るや。

其二

●貴族院の政客、苟くも有力者を以て見る可き者は、殆んど皆官僚派ならざるは無し。貴族院には政友會無し。貴族院は、官僚派の貴族院なり。

●子爵談話會は、水の中の油の如くに、政友會の色彩を以て、貴族院の波の表に浮びしも、東の間にして、今、既に解散せられて、當時の政客、尚ほ有りと雖も勢力を爲すに足らず。

●侯西園寺が、談話會を見殺しにせしは、會員の憤慨するところなるべし。談話會は、當初、公伊藤、侯西園寺の意見を叩き、原、松田にも計りて、創立したるものなれば、政友會内閣が。之を見殺しにするは、不條理、且つ不義理なるやに見ゆれども、脊に腹は替へられず。侯西園寺は、腹の政友會を助けんか爲に、脊の談話會を見殺しにせるなり。

●談話會が、大に有力なれば可なり。其の活動の勢焔が多少、官僚派を威迫するに足るものあれば可なり。然れども有爲ならざる談話會を貴族院に置くは、政友會に取りては、恰も、大風の前に、弱き土塀を、母屋に近く置くが如く、其の崩壊は、偶、以て、母屋を、將棊倒しに、破壊するの恐あるのみ。

●談話會は、再燃するの見込無し。實は、あれほどの氣燄を擧げ得たる事すら、貴族院の歴史に於ては、珍事とするに足る。

●談話會は再燃せざるも、貴族院に、官僚系以外の一勢力、早晩、現出せずんばあらざるべし。然れども、其の時機は、甚だ遠く、近き未來に於ては、大同小異の團體、割據して、互に、地歩を爭ふに止まらん。

其三

●元老政治の存續する間は、内閣は、元老の干渉を受けずしては已む可らず。政友會と、元老との間には、貴族院といふもの在るように見ゆ。然れども、元老の政友會内閣に對する壓迫の味は、譬へば、「桂馬て王手」の如く、間隔は有りといへども、「間の手」は用を爲さゞる也。

●將棊に於ける詰手の趣味は、「桂馬て王手」に存せずんばあらず。詰める方よりは、これほど有力なるもの無く、詰めらるゝ方よりは、これほど皮肉なるものはあらず。

●桂馬は首將にもあらず、飛將軍にもあらず。全體の局面より見れば、閑散の地位に在り。嘗て、責任の舞臺に上らず。而して防禦には宜しく、殊に、攻擊、特に「詰手」に、之を利用して、尤も其の妙味を見る。

◉巧みに、桂馬を用ひ得る者は、將棊の能手たるを失はず。而して桂馬も亦た自から、平生、閑地に甘んずと雖も「詰手」に活動するを以て、時に、自から其の能力を發揮するの快味を自覺せずんばあらざるべし。

◉「詰手」に於ける第一の悲劇は、必ずしも雪隱詰にあらず。王將、漸く活路を失ふの時、桂馬を以て、包圍軍の頭上を飛び越えて、脅迫を加へらるゝに在り。「桂馬て王手」と來る。動けば乃ち包圍軍の手に死す。動くことを得ず。坐ながら桂馬の爲に斃る。王の首を擧ぐるものは、包圍軍たるかのように見ゆれども、其の死命を制する者は、桂馬なり。

◉政友會は、つねに桂馬に苦しめられつゝあり。公桂と、侯西園寺とは、嘗て、將棊を鬪はしゝや否を知らず。然れども『將棊の手』を活用するの妙腕に至つては侯は、遙かに公の下に在り。公桂は、將棊に於ては、桂馬の名手なり。而して此般の意味に於て、元老は桂馬たらずんばあらず。

◉桂馬の名手は、今、政海を退き、高く、雲上に隱れて、政爭に與らず。唯だ、世人は、彼が、自から桂馬となるあらん事を恐れつゝあり。

◉精練なる技術、思想は、やがて、人格化せずんばあらず。萬一、桂馬の名手が、桂馬化するの時は、乃ち、偉大なる桂馬とならん。

◉「桂馬で王手」の場合に於ける、桂馬と王との間隔中に在るものは、すべて邪魔物なり。味方たりとも手纒足纒たるべく、敵方ならば、桂馬の附屬物たるかの感觸を起さしむべし。

◉「桂馬て王手」と來る。王は動坐せんとして、敵の包圍軍に喰止めらる。此の時の包圍軍は、則ち貴族院なり。貴族院の政客といふは、此の際に於ける、飛車、角、金銀等、包圍軍の錚々たる者をいふ。

其四

◉公德川の貴族院に議長として命名あるは、趣味ある事實に屬す。彼は、議場に於て、舊藩大名及び新華族の牛耳を執りつゝあり。將軍は滅すと雖も、德川氏は依然たり、或者は、彼を目するに十六代將軍を以てす。

◉德川は十五代と稱す。然れども舊旗下の出身者は、往々、第十五代を認めず。德川は十四代なりと稱し、而して公德川を以て、直ちに第十四代に接續せしむるものあり。蓋し感情、情誼に本づくの論なり。

◉第十四代家茂將軍は、吾輩の知るところを以てすれば、豊頰圓滿、其の人物も亦た此の如し。其の德望の

纔なること、祖先以來、比すべきものを見ず。一代、八代、三代の人物を以てするも、第十四代には企及す可らざるに似たり。而して今の公德川は、無類圓滿、好箇の紳士なり。人格德望に於て、稍、第十四代と同型なる可きに似たり。

◉幕府政治の末路に當りて、德川氏の臣下を振はしめたるものは、第十四代の德望なり。廢藩置縣後、四十年を經過せる今日に當り。尙ほ、家系を尊重する貴族的感情の間に、貴族院議長の倚子を占めて、光彩あるものは、公德川也。或は、之を以て十六代とするも、太だ不可ならず。

◉貴族院の政客は、舊藩主より出る者は少し。舊諸侯公卿の振はざるは、家聲、門地を有すればなり。今に於ては、彼等は、既に得たるものを失はざらん事を力めつゝあり。故に活動も無く、人物も無し。這般の大氣中に在つては、舊將軍家の門地の尊貴なることは言ふ可らず。

◉舊堂上に、公近衛篤麿を出し、舊武門に、公德川家達を出だしたるは、前後、絶好の相對なり。公近衛にして尙ほ健在ならしめば、公德川の位地は如何なりしなる可きや。

◉舊公卿は、風雲の氣に富む。公近衛は、公德川に比すれば、覇氣多かりし。二人者は、共に、風格高華なり。其の豐頰圓滿なるも亦た相似たり。然れども、前者は後者よりも、過敏にして、細事に通曉す。才氣は前者勝り、渾厚は後者に多からん。

◉近時、大將乃木薨後、學習院長の後任を以て、公德川に擬する者ありき。また適材たるを失はず。然れども、彼の一身よりするも貴族院の爲に言ふも彼をして現職に留まらしむるを以て、得策なりとせん。

◉公近衛は、學習院長として令名ありき。然れども宿弊を一掃し、紈袴子弟を鞭韃するは、大將乃木の如き和煦、勁烈を兼有する人格に非ずんば不可なり。

其 五

◉舊大名にして、嘗て、大臣となりし者は、侯蜂須賀茂韶、子堀田正養、子岡部長職の三人者あり。いづれも上院の秀才といふべし。此の中、大諸侯は、侯蜂須賀一人にして、他の二人者は、小諸侯のみ。侯黑田長成は、多年、副議長の位地に在りと雖も、未だ大名臭を脫せず。

◉近世、尤も、柔弱驕奢の生活を爲しゝ者は、將軍と大諸侯と、大家老と、御用達の豪商となるべし。一は

殿様にして、一は旦那なり。殿様と旦那との中よりは人物の輩出すること少かり。

◉公卿及び小諸侯は、貧乏侍に近き生活と教育とを經來る。故に、同じく公卿諸侯の出身といふと雖も、其の舊藩の大小に依つて、全然、人格の色彩を異にす。

◉試みに、侯徳川賴倫と、子加納久宜とを對照す。前者は、南龍公の子孫なり。然れども金の指輪を嵌め、一種ハイカラなり。後者は、産業組合を經營し、自から組合長となり、夫人をして書記の事務を分擔せしめ其の子をして、舊領地の青年會長たらしめ、遂に、自から舊領地の町長をも奉職し、鋭意、地方の發展に從事す。其の人を見れば、撲實、剛健、其の生活は、大將乃木に近し。

◉小諸侯よりは「一騎打の出來る」秀才輩出す。大諸侯よりは、渾厚の長者出づべし。

◉侯蜂須賀の、多年、歴史地理學會の發達に助力しつゝある、侯徳川の南葵文庫及び名勝保存の計畫に腐心する、共に、舊大諸侯として、恰當の事業たるを失はず。

◉子堀田は、東京にて區長を奉職したる事もあり。其の人物、旣に大名臭を脱却するものあり。然れども、彼が功名に急なるは、貴族院に於ける地歩を失はしめたり。彼は、入閣の前に於て、却つて、名聲を有せし也。

◉子岡部は、小諸侯の俊才なるべし。彼は、外交官に歴任し、外務次官に進み、官途の實歴に富む。其の人洒脱、腰低くして處士に接見す。妙は、吏臭を發揮せざるに在り。彼は、依然として、上院の一頭目也。

◉彼は、趣味の人を以て聞ゆ。頗る酒豪也。歐洲殊に土耳其あたりより古酒を取寄せ、飲む者は、彼の外には多からざるべし。彼は、種々の酒瓶を列陳する、藥局の如くなり。

◉彼は、風采秀美、恐らくは、近來、大臣中に比類無からん。男後藤の秀美なるとは趣を異にす。

◉彼は、洋服を著するも、非常に秀美なり。若し、昔しながらの衣裳を爲さしめ、結髮、帶刀姿にして推出さしめば、稀覯の、立派なる老中たるべし。或は、阿部伊勢守以後の美なる老中ならん。彼の風貌は、大名美なり。

◉秀美なる子岡部は、殿様らしくして、思の外の手腕を有す。彼に奇談あり。彼の人物を想見すべし。

◉彼は、「認め印」の木印に、數尺の長き紐を結び付け

ポケットに入れ、以て登廳す。屬僚走りて、案件を說明す。彼、倚子に、仰ぎ、倚りかゝり、眼を細くして昏々として聽く。往々、半睡せるようにも見ゆ。說明畢る。彼曰く、皆、可。乃ち、長紐の木印をポイと投げ出す。紐の根はポケットに殘る。

◉屬僚、木印を受取り、捺印す。續いて、次々の書類にも捺印せんとす。刹那、眠れるようなる彼は、紐を手繰り込む。木印、既に、彼のポケットに在り。

◉彼曰く、次件、未だ詳細の說明を聞かず、試みに、之を說け。屬僚一々說き畢る。彼、乃ちまた、長紐の木印を投出す。彼が、東京府に知事たる、近年、司法大臣たりしときも、ともに此の如し。長紐を付するは、手繰り込むに、便利なればなり。

其 六

◉將來の、飛車角等の頭目に擬すべきものは、貴族院に在つては、准元老、若くは官僚流の前大臣の人々を主とす。今に於て、改めて、之を論議するの必要無かるべし。

◉貴族院に於て、尤も有力なるは、勅選議員の一團體也。參畫し、立案し、發言し、活動する者は、概ね勅選議員の一團體の中に在り。官僚內閣は、勅選議員を以て、勢力を扶植するの一法を案出せしより後ち、貴族院は、終に、官僚派の手中に歸し畢りぬ。

◉勿論、勅選以外にも秀才無きに非ず。然れども、勅選者は、其の閱歷功勞に依り、詮考されたる者にして多くは一癖ある者のみなりとす。

◉貴族院に於ける中心人物は、次第に、推移す。子谷干城、子曾我祐準の名、全院に震ひしも、今、子三島彌太郎の名、漸く頭角を拔く。彼は、大臣たらずんば則ち、貴族院に於ける一頭目たらん。

◉前後を通じて、貴族院に、尤も、人物を出さゞるは、長者議員の一團體なり。彼等は、數代旦那生活を營める者の子孫多く、大藩の大家老と同樣、農家に生るゝと雖も、菽麥を辨ぜざる者少からざれば也。初期に、渡邊甚吉、瀧口吉良の二人者、才名あり。爾來、長者議員は、勢力を爲さず。

◉博士桑田熊藏は、多額納稅者の中に在りては、つねに異彩を以て目せらる。彼は、社會政策を研究するを以て、警視廳より社會主義者と誤認せられし奇談あり彼は學者なるべし。然れども未だ政治家として、貴族院に重きを爲すにあらず。

其 七

●貴族院は、最近に於て、二箇の有力者を失へり。此の二人者は、割合に、世間より重要視せられざりしも、實際に於て、貴族院に於ける働役たりし也。男沖守固と、博士穂積八束との二人なり。不思議にも、此の二人者は、ともに、鎌倉に於て薨去せり。一は胃癌を以て、一は、肺病を以て。

●博士穂積は、生時に於て、曲學阿世の名高し。而して沒後、彼の友人に依つて、敬虔なる學者として紹介せらる。

●彼の學殖文章は、吾輩また敬意を表す。彼は、法科大學に於ける、創立以來、第一流の學者たるを失はず彼は、曲學阿世には非ざるべし。然れども彼は、尤も官僚內閣に親みたるを以て、世間より誤解されたるは事實なり。

●彼は、頭腦明晰、辯論透徹す。而して論調態度、ともに、冷靜に、莊重を加味し、敵手を攻擊すると共にまた之を冷殺す。彼の前に立ち、能く、旗鼓相當り得ん者法學博士の中に得易からず。

●彼は、形式主義を以て、吾が帝國憲法を說明す。彼は、紛々たる說明を避け、巧みに敵手の議論の全部を取つて、形式說上、之を抛擲し去るの妙手腕を具す。而して彼の形式說は、官僚內閣の國家說を飾るに餘あり

●彼は、公伊藤には、左まで用ひられざりき。彼は、當年、東京日々の社說を起草せし事も少からず。然れども、彼が、力を盡し、また重用されしは、官僚內閣にあり。

●官僚派が、彼を失ひたるは、一箇の實力者を失ひたる也。彼は、飛車、角にもあらず、香車、桂馬にもあらず。彼は、敢て、華麗なる動作を爲すこと無きも、首領の身邊を固むるに、必要なる人物たり。彼は、將棊に於けるは、金銀の位地に在り。

其八

●男沖守固は、多年、縣知事に歷遷して、名あり。彼は、風貌を一見して、其の人物を知るべし。彼は、學問少きも、頭腦明らかに、體力あり、氣力あり、才力あり。敢て、說客といふほどの辨論を有せざるも、膽略ある策士たるを失はず。

●彼は、クル〳〵圓るき頭と體とを有し、丈低く、鬚髯全く無く、巨眼を見張りて、稍、トボケタる表情を爲す。其の外見の、ゴム人形然たるに似ず、精悍にして、大勢力の間に斡旋し、計畫を經むるの力を有す。

●彼は、七十を過ぎて頗る强健に。つねに、自からは壯者の覺悟を有せり。日々、鎌倉より、東京に通ひ、幸倶樂部に出頭す。彼は幸倶樂部を以て、家と爲し、城と爲す。彼は、實に、幸倶樂部の重鎭たりし也。

●彼は、鳥取の舊藩士、元と畫師の家に生る。畫筆を投じて、劍を執りて、勤王を事とし、鳥取志士の一先鞭たり。晩年往々、畫筆を執りし事もあり。一面に於ては、趣味の人たりしなり。

●彼は、洒々落々、頗る飄逸なり。ものに拘泥せず、容易に、人と爭はず。外、甚だ、面白ろき人と見えて、其の主張は甚だ頑固なり。彼は、口に爭はず事實に於て爭ふ。

●彼は、官僚に於ける、一箇有力の機關たり。彼は、自から綱領を作らず。然れども綱領を發揮する人也。彼には學說無し。然れども、彼は、說明を得るときは之を遂行するの適材たり。

●彼は、一事を遂行するときは、馬車馬の勢を現はす。彼の老齡を以てして、連日、二人俥を乘り廻はし、其の間に、連々、通信を發し、恰も水スマシの如くに、東京中を馳けまわる。

●彼は、熱あり。力あり。其の性格は、水滸傳、或は三國志中の人物に近し。また近時、貴族院の一異才たらずんばあらず。

●彼は、水滸傳に在りては、天罡星に非ずして、地罡星なり。地罡星の雄なるものなるべし。

●彼は、嘗て、食卓に於て、談笑しつゝ、『如何なる說か、今、一邊聞かん。說が善ければ行る』と言ひしことありと聞く。彼は、自から說を造る人には非ず。善說と思ふものを、實行する人也。

●『說が善ければ行る』言畢りて、ゴム人形のやうに、肥えて、丸ろき頭と顏とにて、嫣然、冷然、一笑するとき、彼の人物、風采は、躍如として表現す。

●彼は、將棊にては、香車なるべし。しかも平凡の香車にはあらず。其の背後に、明敏なる頭惱の隱るゝあれば、大袈裟の效果を爲し得る香車なり。譬へば、王と飛車とを釣瓶打に仕留むる活動を、敢て爲し得る如き香車なり。此の場合に於て、飛車の外、能く、香車の働を爲し得るもの無し。公桂の如き、政壇に於ける將棊の名手的の人は、香車を失ひたるは、一大損害たるべし。

●男冲の鎌倉に薨ずるや、遺骸を東京に送り、幸倶樂部より出棺して送葬す。彼の家が、東京に無かりしに

依るとはいへ、或意味に於ては、之を幸倶樂部の嚴葬と爲さずんばあらず。

明治油滿及び油滿家は、今一回を以て完結す可らず。故に、暫らく續稿を明春に期す。貴族院に於ける各閥族の關係は、吾輩別に、記

するの時あるべし。今日、秋雨、寒し、インキの陶器壺の小高きに、白菊の大輪一枚を挿みて卓上に置く。書卷狼藉の中、清香を發して局面を美化するを覺ゆる也。

黒頭巾記

飛行機の現在及び將來

平山周

彼の有名なる佛國のブレリオーがドバー海峽を横斷して世界の耳目を驚かしたるは、一昨年の春であつたが。爾來二年の間に、飛行術は長足の進歩をなした。昨年七月中、巴里の飛行家數名は、倫敦スタンダード新聞社の歡迎に應じ、飛行機を飛ばして其宴會に列し翌日、倫敦の飛行家數名は、見送り旁〻、同じく飛行機を飛ばして巴里に行けるが如き、今や海峽の横斷位は眞に朝飯前の仕事となつた。

今其の進歩の跡を尋ねて現在のレコードを見るに、飛行の速力に於ては、第一回萬國飛行競爭は、一時間平均四十八哩を以て、カーチスの勝利に歸せしもの。第二回の競爭は、一時間平均六十一哩を以て、ホワイトの勝利に歸し。第三回の競爭は、一時間平均七十八哩を以て、ウエイマンの勝利に歸し。今年に於ける第四回の競爭は、一時間平均百〇五哩を以て、ベトリーヌの勝利に歸した。其後、氏は又デュペルダッサン式單葉飛行機に乘じ、一時間十分五十秒にて二百基米突を飛行し、自身によりて作られたるレコードを破りて更に一時間平均百〇七哩七分の一なる新レコードを作り、今や人は却て風を愚弄するに至つた。

騰上飛行に於ては、ラタムの三千三百餘呎を以て一昨年のレコードとせしが。昨年に至りて、ポーランは四千百四十六呎を以て此のレコードを破り。次でプルヨキンスは六千百七十五呎に達し。ドレキセルは六千七百五十呎。シヤヴエーは八千七百九十呎。ウキンマレンは九千百廿一呎。ジヨンストンは九千七百十四呎ドレキセルは更に九千九百三十呎。ガローは一萬三千九百四十呎に達した。而して本年七月に至り、此のレコードは澳國の一陸軍中尉の爲めに破られたるを以て氏は更に新レコードを作らんと企て、佛國ウールガード及びドーヴイユ間の飛行に於て、酸素吸入器を携へて騰上し、終に五千米突即ち約一萬七千四百呎の高空に達した。是れ殆んど人力の能ふ最高レコードならんと思はれしに、レガニーは同じく酸素吸入法を利用して、更により高く千六百呎を騰上し、一萬九千呎のレコードを作り、富士山の如きは遙かに下界のものとなつた。

長距離區劃飛行に於ては、巴里マドリツド間七百哩の競爭に次て、佛國一周飛行一千二百哩、獨逸一周飛行一千五百基米突、歐洲一周飛行一千五百哩、英國一周飛行一千十哩等の競爭行はれ。最近又た英國印度間約九千哩飛行の計畫が發表せらるゝに至つた。

長距離繼續飛行に於ては、一昨年タブトーの作りたる三百六十二哩のレコードを破り、ロリダンは時間に於ては十二時距離に於ては四百八十二哩のレコードを作つた。

乘客搭載飛行に於ては、從來二三人乃至四五人に過ぎざりしもの、昨年に至り、ブレゲーは拾一人を乘せて飛行し、ゾンメーは更に一人を加へ拾二人を乘せて飛行した。

水上飛行も亦た陸上飛行に伴ふて發達し、昨年、イーリーはカーチス式飛行機に乘じ、巡洋艦バーミンガム號の甲板より飛揚し、約五哩の海上を五分間に飛行して、最初の軍艦飛揚の名譽を得た。

此の如く、高きものは益々高くして天上の天に達せんとし、疾きものは益々疾くして彈丸の飛ぶよりも速

ならんと、距離の長きものは益々長くして世界を一周せんとし、彼の太西洋横斷や太平洋横斷の如きも、其の事實となるの日遠きにあらざるを思はしむるものがある。

而して之が交通の方面に利用せらるゝものを見れば、非常に興味がある。曾て汽船の一乘客が小荷物を失念せるに方り、一飛行家は其水上飛行機に乘じ、既に航海中にある汽船を追駈け、船上を廻飛しつゝ小荷物を投げて之を當人に渡した。又た汽船の出發時間に後れたる一乘客は、既に航海中なる汽船に追付かんことを企て、急ぎ水上飛行機を傭ふて之に同乘し、飛行後僅に數分間にして汽船に達し、飛行機は船上に二回の輪を畫きつゝ、難なく五百呎の空中より海上に下降し。汽船は早速航行を止めて端艇を下ろし、乘後れたる乘客を收容した。又た彼の有名なるベドリーヌは、倫敦巴里間の長距離飛行郵便を企てた。當日、氏は倫敦デイリー、メール社主幹より巴里デイリー、メール支社に宛てたる書翰を携帶して、午前六時にヘンドン飛行場を出發し、海峽を越えて途中一回も下降することなく、午前八時三十分にはディープに着し、次きに午後六時五分ディープを出發して、午後七時廿分巴里に到着した。即ち氏が最初の倫敦巴里間飛行郵便に費した時間は、僅々正味三時間五十分に過ぎなかつた。此等の飛行の後、昨年九月九日、英國に於て、倫敦ウヰンザー間の小距離飛行郵便が開始せられた。

更に之が軍事の方面に應用せらるゝものを見れば、一層の興味がある。昨年、佛國に於て行はれたる一試驗に於ては、四百米突の高空にある飛行機上より、深く海底に沈める三隻の潜航艇を明かに認め得た。又た今年、伊土戰爭に於ては實戰に於て其効力を示し、英國の陸軍大演習に於ても、飛行機の偵察は大體に於て成功を示し、最近我邦の陸軍大演習に於ても、飛行機の偵察は大成功を示してをる。飛行機部隊司令官井上工兵大佐は曰く『敵情偵察に際し、陸上斥候にては、敵の重砲兵及び總豫備隊の所在を知ること頗る困難なれども、飛行機飛行船の如き航空機上より之を偵察する

時は、寔に一目瞭然たり。航空機關の既に軍事上實用の時機に達せるは言ふまでもなし。唯今日までの狀態にては、研究改良を要すべき點猶ほ多々あり、未だ以て完全なりと言ふ可からざれども、此新機關の爲めに戰力偵察の上に一大變動を來すべきを確信す。幾何の軍隊に、幾何の航空機關を所屬せしむべきかは、猶ほ研究問題なれども、飛行機飛行船の數多ければ多きだけ其威力の益々增加すべきは疑ひの餘地なし』云々と。飛行機が軍事上必要の一機關となりたるは最早動かす可からざるの問題である。

今回我邦の陸軍大演習に於ては、飛行機上の無線電信は使用されなかつたが、若し之を使用せられたらば飛行機の效力をして更に大ならしめたに相違ない。昨年、佛國の二將校飛行家は、飛行中無線電信の實驗を企て丶大成功を收めた。此の二將校は佛國陸軍鐵道電線隊に所屬するブレノー大尉及びメナールド少尉にして、ファーマン式復葉飛行機に乘じ、一時間の航空をなしつ丶ありし際、巴里なる陸軍大臣及びエッフエル塔無線電信局に通信した。當日用ゐたる飛行機の發動機には、ヘルチアン電波を出す爲めに特種の磁力裝置をなし、アンテナの代りに電線のコイルを用ゐた。此のコイルを解きたる電線の長さは約百三十碼である。飛行機は先づセントシールの陸軍學校より出發して、ラムブイレーの森林上に周遊飛行を試み、千六百呎の高空に騰上したが、此時、アンテナは機の後尾と垂直の位置を保ち、無線電信は自由に火花を放つた。故に兩士官は高速度を以て飛行しつ丶、陸軍省の無線電信局と通信を始め、大臣に對して挨拶し、飛行機の位置を報告する二十二語の通信を發した。而して陸軍省は容易く此の通信を獲得した。此の通信に成功した兩士官は、次ぎに、佛國に於て最も強力なる無線電信裝置を有するエッフエル塔と通信を始めた。然るに此の通信の際、太だ興味ある事が起つた。兩士官が飛行機上よりエッフエル塔に向つて通信を始めたる其時、エッフエル塔無線電信局では、丁度アルゼリアのオーラン無線電信局を中繼として、佛國政府の國際問題に關す

る通信を、モロッコなるフエッツ市及びメッツ市に送りつゝあつたので、エッフエル塔の無線電信技師は、飛行機上の無線電信の價値を誇張せんが爲め、プレノー大尉の發したる通信の一を、オーラン無線電信局に送つた。オーラン無線電信局は更に之を土耳古首府の無線電信局に送つた。此の飛行機上無線電信機の位置と兩受信局即ち陸軍省及びエッフエル塔との最長距離は三十五哩であつたが、將來技術の熟練するに從ひ、遠距離の通信をなし得るに至るは疑ひないのである。

今日飛行機より敵を攻撃するは、機關銃を裝置すると爆彈投下との二種の方法なるが。今や佛國陸軍飛行家は爆彈投下の練習をなし、其結果非常の好成績にて七月六日、パルサン少尉は二百米突の高さより投下して、百發の中三十發を命中させ。又た八月中旬、ゴタの會に於て、ランバーは同じ高さより投下して、十發の中七發を命中させた。されば一旦國交破裂の場合に於ては、敵國が動員を完成せざる以前に、航空機を以て第一に各停車場、橋梁、鐵道並に隧道、港灣の波止場航空機の格納庫の如き樞要部分を攻撃するといふのて歐洲の如き敵と境壤を接せる邦國は、非常に苦心して居るとのことである。又た英國に於て飛行機にマキシム機關砲を裝置したといひ、佛國にては爆彈砲を裝置したといひ、瑞典のウンゲは空雷を發明したと傳へられて居るが、未だ其詳細を知ることが出來ぬ。

米國の發明家エヂソンは、飛行機が現今の如き滑走飛揚に據らずして、垂直飛揚を可能ならしめ、又た相當重量の貨物を搭載して、天候の如何に拘らず、自由の方向に航空し得るに至らずんば、未だ全く飛行問題を解決したものでないと言ふて居る。實に現今の飛行機は未だ完成したものではない。之を完成せんが爲めには、機體や翼や發動機に幾多の改良發明を要するのである。最近の報道によれば、燃料を要せざる窒素發動機發明せられたりといひ、又たヘリコプター式無滑走飛行機發明せられたと傳へて居る。エヂソンの理想も將來必ずや之を事實にするの人あり、亦た其日あるを信ずるのである。

以上は今日に於ける飛行機發達の狀態にして狹き意味に於ては交通軍事の進步、廣き意味に於ては人類の向上てある。交通上に於ては、未だ實用として遺憾なき程度に發達せず。軍事上に於ては、偵察及び陸上攻撃の機關として研究せらるゝに過ぎないが。現今の趨勢を以て將來を豫想すれば、飛行機は益々發達して、一方に於ては、空中の交通機關となり。一方に於ては空中の交戰機關となるに相違なく。空中の交通機關となるの日は、猶ほ遠き將來に在りとするも、空中の交戰機關となるの日は、遠き將來にあらずして、必ずや近數年の中に在らん、而して各國共に空中艦隊々創設するに至らん。既に空中艦隊を創設するに至れば、地上の戰に加ふるに、天と地との戰起り、更に飛行機とを以てする空中戰爭を現出するに至るは疑ひなきことてある。此時に至れば、今日の海戰に於て、軍艦の優劣が戰はずして先つ勝敗を決するが如く、飛行機の優劣は直に戰爭の勝敗を決するに至らん。飛行機の研究は單に空中の事として輕視すべからざる重大問題てある。

我邦に於ける飛行機の研究は日猶ほ淺く歐米と同日に論ずることは出來ぬが、我陸軍及び海軍の熱心なる研究は、最近の觀艦式及び陸軍大演習に於て、大に其成功を示して居る。民間に於ても亦た幾多の人士が熱心に研究しつゝあるが、飛行機の研究は大なる資力を要する問題にして、資力缺乏の爲めに遲々として其進步を見ることが出來ぬ。歐米に於ける飛行術の進步は素と政府當局者の雄大なる施設に本つくのだが、亦た民間の人士が、或は懸賞に或は後援に盛に之を奬勵するにも因るのてある。予は國家の爲め人類向上の爲め大方の紳士が資力を投じて飛行術の發達を助成せんことを希望して止まぬのてある。

江戸と江戸文學

文學博士　幸田露伴

江戸の風情がよく映つて居る文學とか、或は江戸作者の文學とかについて詳しく話さうと思へば、なかなか一朝一夕に出來ることではない。然し假りに德川期の文學を大體、元祿前後、天明前後、文化文政前後の三つに別けて見ると、御承知の通り元祿前後は其實所謂上方文學で、江戸文學とは言ひにくい。元祿前後でも江戸で出來た文學が全く無いではないが、然し小說とか淨瑠璃とかいふ方面よりは寧ろ小唄とか何とかいふものについて見る方が、江戸らしい姿がボンヤリ窺ひるやうである。小說はどうしても上方――つまり大阪の方の壇場で、淨瑠璃も巢林子の獨舞臺である。其外の雜書についても矢張りあちらの方が作者も輩出し、出版物も多く出來て居る。江戸の方には之といつて取り出していふべきものが少い。僅かに唄や何かで江戸の面影が窺はれるのみである。其他地理及び風俗の記述によつても少しは窺はれるが、其外には先づ無いといつてよい。

それが天明前後になれば大變に形勢が變つて來て居る。京阪の方は寶曆頃で衰へ、其以後は文壇の中心が江戸に移つたやうな觀がある。廣い意味の文學についていへば、江戸にも漢學者の一團が大變に振つた。そして其等の學者の手に成つた文學は、一般の上からいへば決して輕く見ることが出來ぬものである。然し漢學者といふものは直接に江戸の臭や姿を寫したものは少い。それだから學者としては誠に立派なものであるけれども、矢張り江戸文學といふものには交渉の薄いものである。漢學者が江戸の臭や江戸の色を寫したといふのは却て江戸の末期の事であつて、古い所では割

合にない。江戸を寫すよりは秦漢とか唐宋とかいふ支那文學に模擬することに骨を折つたので、所謂古文辭派の連中などは其努力と其熱心は驚く程であるが江戸との交渉は極めて薄い。只頻りに陽春白雪の辭をなすに腐心し、時代に密接する描寫を以て下俚巴人の曲てよくない事とした。

それが寶曆頃になるとソロ〳〵江戸の俗文學が芽ざし初め、安永天明になつては大變に盛んになつて來た。淨瑠璃は上方の專有物の如き觀があつて、其中に用ひられて居る言語も多くあちらの言葉であり、從つて其作に出て來る人物の風俗といひ情緒といひ皆上方の風情を帶びてゐた。處が平賀源内のやうな人が出て來て、そして淨瑠璃の中に用ひらるゝ場所は世話物であれば大抵上方に極つてゐたものが、關東の地を用ふるやうになり、源内のものは時代物が多いけれども人物は關東臭を帶びたものが多い。一例をいへば矢口渡の頓兵衞の如きものである。源内は江戸の人て無いけれども、一種の奇才であるから、長く江戸に住んて、淨瑠璃の中に江戸趣味を發揮せんとしたのである。然しまだ純粹の江戸といふ所まては行かぬ。只其才が鋭くあつて、且つ物の呑込みのよい人であるから當時の風俗を寫すについてもなか〳〵ソツはない。が、要するに西國の人て淨瑠璃をやり出したかと思はるゝのてあつて、江戸文學については先づ彗星的の人と見てもよいかと思ふ。

喜三二は純江戸の人といつてもよい人て、江戸の水に染み江戸の風て育つた人丈けあつて、此人の著述に於ては大變江戸を發揮して居る。其人の位置が自らにして當時の江戸の第一流の社會に觸れるに適した人て、其交友も皆一時の俊才であるから――それに此人は文學好き、美術好き、つまり其時代の道樂者てあつて又天品も聰明な人であるから、此人の著述にあらはれた江戸は、先づ信憑して當時の江戸と見てもよいのてある。

それから喜三二よりは少し位置は低いが、矢張り純江戸の人として生れた京傳、これもいはゞ道樂者てあ

る。然し身分は町人であり、且つ江戸に生れて道樂の水に浸み込んで居る人であるから充分に江戸の臭を嗅ぎ取り、又持つて生れた輕いユーモアの才と、程のよい交際振りの技量とは、此人をして當時の江戸を解剖し批評するに適當なる位置を持たせた。其れが爲めに京傳の書いた江戸は他の作者の書いたものよりは遙かに信を措くにも足り、又充分研究する價値もある。

其外當時の藝術の方面を見ても、歌麿の如きも江戸の風で大きくなり、江戸の水で肥つた畫家で、如何にも當時の實際に密着して居る。從て其書いた所の繪の如きは蓋し當時にあつては畫品の卑しいものであつたに相違ないが、然し繪も亦文學と同じ事で、當時の古文辭派とも見るべき狩野派の如きは上品であつても當時の時勢と密着してゐないのに反し、歌麿の如き人の一團は假令下品であつても、よく時代の姿を寫し出して居るのである。つまり歌麿も京傳も時勢の子であつて、此等の人の作品を透せば、先づ〳〵當時の社會の實況が窺へるのである。

京傳以後いろ〳〵の作者が出たが、その中の馬琴を除いては、多くの人は時勢といくらかの交渉を有つて其時の臭や姿を寫して居る。三馬とか種彥とかは京傳とは其作風が違つて居る爲めに、京傳程に時勢に密着して居らぬ。殊に種彥に至つては江戸の人で、江戸の事はよく呑み込んでゐる人ではあるが、其作風が狩野派程に畫風でないにしても、幾分か土佐風のやうなもので、王朝時代のものに憧れた風があり、其物語は時勢を寫すよりも、物語の筋を時勢に適應させ、脚色を發展させることに重きを置いた爲めに、時勢を直接に描寫するといふ方面からいふと値打が少い。之は一つは其人の位置がそれに適せぬ爲めもある。即ち微祿ではあるが士分であつて、忌憚なく社會市井の雜事を寫すに適しなかつたのである。それで態と皮を被つたやうな書き方をしてゐる。即ち薄紙を一枚被つて居る。三馬は種彥と違つて身分も卑くもあり、どういふことを書いても忌憚なき地位にあつたから、思ひ切つて世俗に親んで居る。三馬は其才の働きが京傳と違ふから、

其作品は京傳のやうに上品でないが、市井の姿を大膽に寫したといふ點では京傳に劣らない。只此人は京傳のやうな輕い諷刺の才が乏しく、又時代も京傳時代とは違つて來て、天明度の如き華やかな、裕かな調子の少い時代になつて居る爲めに、其作品は京傳のやうに面白くない。然し今日の三面記事の如く、世相を有りの儘に寫したものだから、後の人をして當時の社會を窺はしむるには究竟の材料である。只此人は才分が少し足らぬが爲めに動もすれば色々の斷片を補綴する癖がある。それで三馬の寫した事を直ちに三馬が見て寫したものとすることは出來ない。三馬を讀んで折角賞讃を與へんとして居ると、意外にも三馬以前のものに出て居ることも少くない。これは三馬の爲めに些か殘念に思ふ所である。其代り三馬は流行物を自分の作の中に取り込むことが一番勝れ、又市井の雜事を早く寫して喝采を得たいといふ念が先天的に強い人であるから、我々は三馬によつて當時の江戸といふものを敎へらるゝ事が多い。

種彥も亦三馬と同じく市井の雜事が好きであつたが、種彥は多く考證することが好きで、古からの材料の蒐集捃摭に傾いて居る。三馬は吉原の細見などいふ、つまらぬ短い本に對しては趣味を以て集めたり、窺いたりして居る。種彥は却て古い所に趣味を有ち、三馬は飛耳長目して當時の事を穿鑿することが好きだ。三馬の日記を見れば吉原に遊んで行つた其細見などが長々と寫して居る。さういふやうな一種の好事心の強かつた人であるから、三馬の作の中にあらはれて居るものは、割合に市井の雜事の眞相といつてもよい。只前にいつた如く前人のやつた面白いものゝ燒直しがあるのは情けない話だ。

一九に至ては之は江戸の人ではないけれども、矢張り江戸的の著述をなした人だ。然し最も一九の名を成したものは矢張り地方の事などを書いたものだ。東海道筋の道中の事を書いた彼の彌次喜多の膝栗毛の如き其適例である。

それから馬琴になると之は遠國の人ではない。又江

戸の事に暗い人でも決して無い。然し例の馬琴一流の理想があつて、其れに自分の著作を引入れて行つた爲めに、馬琴の著作には直接に江戸を描寫したものが少い。然し彼も其時代にあらざる別の時代に生きたのでないから、幾分の江戸の面影が見えぬでもない。彼は時勢に對して幾分の不滿を抱いた。京傳は時勢の謳歌者である。天明の春のやうな天地に醉ふた蝶々のやうな姿がある。然し馬琴は自分の時代に對して不滿であつた。不滿の本は彼に學問のあつた事と、又一種偏屈に近い道義心の强い爲めである。一つの藝術上の化石的思想があつた爲めに、江戸其物の產んだ作者とは思へぬものにした。儒敎の思想や何かゞ彼を縛つて、江戸の作物といふよりも、支那小說の化けたが如き作品を遺さしむるに至つた。然し馬琴の作にも少しも時代の影が映らぬといふ事はない。馬琴の作中のよい方の人物は全く馬琴の學問の影法師に過ぎないに引換へ、馬琴の作中のわるい方の人物として書いたものには、江戸の臭のするものがある。例へば八犬傳の中の蟇六、龜笹の如きは、馬琴が當時の人物を捉へ、それを實物よりもわるい方に誇張して書いたものである。馬琴の作中の端役を見れば稍々當時の社會を窺ふに足るのである。京傳の書くやうな色男は馬琴が好まない。京傳が謳歌して書いて居るものを馬琴は罵倒して書いて居る。丸で裏と表の差があるのは一種の奇蹟である。

馬琴の末頃になつて春水が威張り出して來た。世の中では春水を以て江戸趣味の代表者であるかの如くいふものもあるが、之は大いなる見當違ひである。春水は身分も低く、又學才もそんなになく、京傳の如きユーモアもないし、三馬のやうな奇警な所もない。又一九の如きノホーズもない、フザケタ所もない。實に俗な人である。俗な人であるから巧みに當時の人情の弱點につけ込んで喝采を博した丈けである。春水の描いた人物は寫實的ではなくて、當時の人物を世俗的に空想を逞くして捏ち上げたのに過ぎない。丹治郎であらうが、米八であらうが、世俗の心の中にはあつたかも知れないが、然し實際にはあつたのではなかつた。空

想てこね上げた一種のシンコ細工である。言葉も寫實てはない。其當時の言葉を寫實的に書いたものと合せて見ると違つて居るやうに思ふ。それて實際の觀察によつて書いたといふよりも低卑の理想を以て捏ち上げたもので、京傳、喜三二の如きウガチの才もなく、馬琴の如き堂々たる大伽藍を作る腕もない。又三馬、一九のやうにも行かぬ。どつちへ向いても行かぬ。そこて恰かも馬琴が儒教の仁義忠孝のよい人間を作つた如く、春水は當時の息子や娘のなりたいと思ふ人間をでつち上げて時勢に投じたのである。夫れ故に春水の作には時勢が描かれずして、時勢の形骸を借りて、時勢の慾望殊に下流の人の慾望を書いた觀がある。只春水の虚名を馳せた理由は、當時の人物や畫にあてるやうにして書いたが爲めてある。即ち音曲の大家とか、料理屋の誰とかにあてる氣味にして書き、それが世俗をして歡迎せしめるの一原因をなしたのてある。春水の作物の價値の低いといふ事は具眼の士は皆知つて居る所て、又春水の遣り口は春水に初つたのてはなく、春水の前に一九、三馬、田螺金魚のやうな遣り口を擴めてやつたのてある。然し春水が人情本て以て餘り當つたので、種彦の如き人も矢張り似寄つたものを作つた。然し種彦は下卑ることをすることが出來ず餘り喝采せられなかつた。馬琴も亦種彦が春水風にやつた事を聞き、自分も其意見は違つても其型を取つて一路を拓かんと企てたのてあつたが、書肆から、種彦の本はどうも思はしくないといふ事を聞いて其計畫をやめて了つた。之は私が種彦の弟子の梅彦から聞いた事だ。春水の作が大いに行はれた爲めに其作風の模倣者が澤山に出て來、此等の作物は市井の雜事を寫したかの如く思はるゝが、私は寧ろさう見ない方が當つて居ると考へる。馬琴と春水の有様を今日の世のものに譬へて見れば、馬琴は講釋師て、春水は人情話をやる落語家のやうなものだ。どちらも時勢とピッタリと密着いて居るとは思はれない。然し人情話の方は題材が卑近な爲めに時勢の鏡の如く思はるゝけれども、必ずしもさうてない。人情本の色男か實世間に少いのは講釋師の

豪傑が少いのと同じ事である。作者の本當に時勢を觀察して書いたものであるや否やは先づ言葉とか、風俗とか、衣服持物のやうなものから見破つて行くより外はない。其等の點から見ると春水の書いたものには空疎な書き方や、空疎な觀察が多くあつて賞讃を與へにくい。若し春水の書いたものを其儘信ずれば大いに觀察を謬ることになる。一々證據を上げることは出來ないが、江戸で生れた人は自ら分ることであらうと思ふ。言語などいふものは最も六づかしいもので、假令江戸で出來たもので、江戸の寫實を目的とした事が明かなものであつても、どうも時代が違ふと、後人から批評しにくい。例へば明和に出來てゐる所の「廓中奇談」といふ本があるが、屋根船の中で藝者が二人と客と幇間との騒いで居る繪を書いてあるが、中の文章を讀んで見ると、非常に助動詞が脱けてゐて、トンと上方の作者の書いたものゝやうな感じがする。そこでその時分には助動詞が脱けて居るのかどうか其本一つ丈けでは何とも評することが出來ない。同じ其時代の本を幾つか讀んで、その上で他の作者の書いたものに助動詞が脱けてゐないならば、「廓中奇談」の作者は拙いか、又は作者が他所の人であると思うてもよい。然し其本が拙くもなく又作者も他所の人でないとすれば、言語の判斷がしにくゝなる。さういふ譯で、春水のもののみでは春水の言葉を評するといふ事は無論出來ない。又衣服の事も同樣である。或本には頭巾の上に手拭を頰被りにして、粹(いき)な風體としてある　時代が違へば時々トボケタ事が出て來る。然しトボケタ事が噓かといへば噓ともいへぬ。又本當ともいへぬ。今の小説を見ても隨分間違が多いから、昔でも間違が多からう。然し段々攻究して、其作者がトボケタ事もなく間違ひもない人であるといふ事が分つて來ると、他の疑はしいものを解釋し得るやうになる。例へば「明けの烏」といふ唄に「聞かせともないみゝにても」といふメリヤスがあるが、京傳には「いなせともないみゝにても」とある。明治では十位の小供でも笑ふが、それが果して間違なるや否や、京傳は信用するに足らぬ人であれば格別、あの位

の人てあるから何ともいへぬ。それ故に春水の作中の江戸がアテにならぬといふのも、もとより粗い感じ丈けてあるけれども、どうも私にはさう思はれてならぬ。

漢學の方の畑の人て、所謂支那張りの事を頻りとやつてゐた人てあるが、寺門靜軒の「江戸繁昌記」などは德川末期の江戸をよく寫して居るといつてもよい。先づ此位の話て止めて置きませう。



閨秀十五名家一人一題

人物評論（三十三）

清浦奎吾論



△清浦子爵の美點

無名氏

自分は不幸にして清浦子爵の缺點とか短所とかいふものを知らない。又知るやうな事に出會はない。又知らうとして研究した事もない。若し強いていへば缺點とか短所とかいふものが、人の目につく所に無いのが、

人物評論（三十三）

清浦奎吾論



△清浦子爵の美點

無名氏

自分は不幸にして清浦子爵の缺點とか短所とかいふものを知らない。又知るやうな事に出會はない。又知らうとして研究した事もない。若し強いていへば缺點とか短所とかいふものが、人の目につく所に無いのが、

或は缺點であり短所であるかも知れない。エライ人は弱點で以て世の中に繋がるといふ事がある。何か隙間があれば、人は其隙間に乘ずるけれども、清浦子爵は實に立派に出來上つた人で、水も漏れず爪も立たぬといふやうな、殆んど五分の隙間もない人である。自分等が最も清浦子爵に感心するのは常識の圓滿に發達した事、凡そどういふ場所に持つて行つても向ふ所可ならざるなしといふやうな事である。どの座席に持つて行つても、それがチャント嵌る。こゝには合ふが、あすこには合はぬといふ事がない。法律は本職であるから固よりいふまでもない。一般行政の事にもよく通曉してゐる。それかといつて實業の事にも最もインテレストがある。外交の事や支那問題なども常に研究して居る。特許發明などいふ事については自ら其會長として奬勵をして居る。向ふ所可ならざるなしといふのは最もよく清浦子爵に嵌る言葉である。謠曲の會に出れば謠も歌ふし、圍碁の席に行けば碁も打つ。敢て緑酒紅燈の樂に耽けるといふ事はないが、美人に向て顏を顰めるといふ程の人でもない。寺に行けば寺僧と語る事も出來、會堂に行けば牧師と談ずることも出來る。眞に圓滿自在、縱横無碍といつてもよい。

總理大臣はどうであるか、それは先づ世間の所謂公論によつて判斷することゝして、其他の大臣ならば何大臣をやらしても出來ない事はなからうと思ふ。それから其れ程出來て居るけれども其出來たものを些とも濫用されぬといふ事は實に感心すべき事である。金儲けでもしようといふ事であれば、最も出來る人であつて、特設會社の總裁とか社長などに立派に出來る人である。現に最も收入の多い會社から招聘した事もあつたやうだが、さういふ事は辭して受けず、役人で出身した人は、役人としてのヂクニティを保つべきものとして居る。あれ丈けの才を有つて比較的清貧に甘んじて居るのは、恐らく是れ能はざるにあらず爲ざるなりであらう。

又あれ程の人であれば進むことを知つて退くことを知らず、何處までも狂奔することに行きさうなものであるが、さういふ事には一向頓着なく、安きに居て命を俟つといふ風がある。さればといつて隱遁をもせず、又狂奔をもせぬ。自ら知るの明ありといはうか、餘程感心すべきことゝ思ふ。

世間では清浦子爵は餘程賢しい人で、物事は只利害一遍で判斷する人のやうに思つて居るけれども、なか〳〵さうではない。伊藤公などから隨分睨まれたことがあるのであるが、自分の立場といふものは決して無暗に更ゆる人ではなく、出處進退皆立派に申譯の立つことをするので、其點も間然する所少しといつてよい。それに又感ずべきは友誼に厚くあつて常によく後進の世話をする。今日の少壯の人は勿論の事、其他の人でもあの人に直接間接世話にならぬ人は餘程少い。其點に於ては博愛といつてもよい。それは自分の乾兒として自分の勢力を張らうといふ風ではなく、世話好きといふ風がある。少い收入の中からいろ〳〵人にやる。自ら奉ずること薄くして人を俟つこと厚しといふべきである。然し此點は子爵の功と共に子爵夫人の功もあらうと思ふ。

若し清浦子爵が薩摩とか長州とかに生れたならば或は其カリーアがもつと華々しく行つたかも知れんが、何等門閥も持たず、又縁もゆかりもなく、熊本の片田舎の寒措大から飛び出して、何等先天的の幸運のなかつた位置から今日に至つたといふのは、全く彼の實力の然らしめた所であつて、どう安く積つても今日までの位置は清浦子爵自身の實力が之を贏ち得たといふ事の外にいふ事は出來ない。

黨派の首領などいふ事はモウ少し不透明な人でなければ出來ぬ。清浦子爵は極めて透明な人で、事の表裏に透徹して、一目瞭然ハツキリ分る人であるから、首領の資格といふよりも矢張り彼自身其物が一つの有力なる人といつた方がよからうと思ふ。

彼の悠々として今日に安んじて居る所は先天性にもよるであらうが、又彼の素養も之を然らしむる所がある。彼は廣瀬淡窓の咸宜園に學んだもので漢學の素養があり、詩も作れば書畫骨董の樂みもある。然し人と違つて何等執着する所がなく、愛玩した珍幅でも人に與れて惜まない。さういふ脱然たる所があるのは遠くから見て居る人は知らぬだらうと思ふ。特に又あの位の年配の人で、辯論の明晰にして巧妙なる事あれ程の人は恐らくなからうと思ふ。演説といひ、座談といひ、首尾貫徹、論理明白、音吐朗々、實になかなかのものだ。英國あたりに推し出しても堂々たる議論家としてフラント、ベンチの主もなる人てあらうと思ふ。

△清浦内閣の風説

石川半山

桂公は雲中に昇天し、山本伯は海軍大明神で水中を出でず、寺内伯は兎角不人氣で、内閣總理大臣の適材がないと云ふ所から、お鉢は清浦奎吾子に廻はり、清浦内閣を作らんとする連中が、日下血眼で運動して居ると云ふのか、成程、それは有りさうな事だ、必ずしも出來ない相談でも有るまい

山縣系の地位

清浦君が山縣系に於ける地位如何と云へば、先づ良い方だ、山縣公が内務大臣の時の次官は芳川顯正伯で有つた、陸軍に於ては桂公が山縣公の繼續者で有て、第一回帝國議會の開くる頃桂公は陸軍次官で有つた、それから元勳出揃内閣に於て山縣公が司法大臣を引受けた時の次官が、清浦君で有つた、外交は青木周藏子が山縣公の信任が有て、山縣内閣の時には青木子が常に外相の椅子に憑つた、それから曾禰荒助子なども、山縣公の信任の有つた人で、清浦君は此の曾禰君あたりと同じ列に坐すべき人だから先づ良い方だ、平田、大浦、小松原等の諸君よりは、一步を進めて居るかと思ふ、先づ桂公に次ぐべき位地を占めて居る樣だ

早く大臣になる

桂公は弘化の產で、淸浦君は嘉永三年の產だから、年齡も少し若かく、經歷も桂公が陸軍次官の時に、淸浦君は警保局長で、一步遲くれて居るが大臣になる時は、一內閣早かつた、例の松隈內閣の時に、淸浦君は司法大臣になつたが、桂公は其の次ぎの伊藤內閣の時に初めて陸軍大臣となつた、尤も實は桂公が同時に大臣になるべきで有つたのだ、松方內閣が出來る時に、松方侯は山縣公に陸軍大臣は誰れが宜しからうかと相談をかけ、當時臺灣總督たる桂公が適任ならんとの意見を聞て、直ちに電報を以て桂公の歸京を促した、ソコで桂公は陸軍大臣になる積りで、臺灣を出發したが、其の未だ門司に着せざるの前、高島鞆之助子が松方侯を說き、多年長州の手に奪はれて居た陸軍を、薩州の手に取り戾すは此時機で有る、拙者が陸軍大臣兼拓殖務大臣となるから、左樣御承知を願ひたいと言つたので、松方侯は其の氣になつて、內閣を發表し、桂公が門司へ着いた時には、最早や陸軍大臣は高島子として發表されて居た、ソコで桂公は大に怒て東京に入るや否や山縣公へ訴へる、山縣公から松方侯へ桂の立腹は尤もなればドウかせられたいと言ふと、松方侯は又其の氣になつて高島子に陸軍大臣を讓れと云ふ、高島子が怫然として之を辭せざる理由を說くと、又其の氣になり、松方首相の心は聽くに從て動いたので、時人之を稱して後入齋と云ふに至つた、而して後入又後入の結局、桂公は怒て臺灣總督をも辭し、それから松隈內閣の破壞運動を開始し、終に能く之を破壞して、明治三十一年の伊藤內閣に陸軍大臣となつて以來、永い間引續きて政權を離れず、今日に至ては元老の地位に立て居るが、淸浦子は此の松隈內閣に山縣系を代表して司法大臣の地位に居り、桂公が外から破壞運動をやつて居る間も、其の內閣に殘り、大隈伯が野に下て、松方首相が壇の浦沒落に至る迄も、其の內に居た人で有る、而して伊藤內閣、大隈內閣の間は、外に居たが、第二次山縣內閣の時には、又司法に入り、第一次桂內閣に於ても、司法大臣となり、平田子が議會の彈劾の爲めに農商務大臣を罷めると、之れに轉じ、後には內務大臣をも兼ねた悧巧な人で、往く所として可ならざるなく、伴食の地位に居ても、伴食の扱ひにされず、常に尤もらしい顏附をして、重味を以てやつて居た人だ

第二次桂內閣の役割

淸浦君が何故に第二次桂內閣に加入しなかつたかと云ふに、それには又自ら事情が有つたらしい、明治四十一年の總選擧の前に、官僚派が候補者を助くる運動費二十萬圓を作るに付て、桂公が十萬圓を提供し、殘る十萬圓を平田、大浦、小松原、關(淸英)一木の五君で借りたと云ふことだ、此の五君は次の桂內閣の大臣となるべき人と豫定され、平田內務、大浦遞信、小松原農商務、關司法、一木文部と大體の役割が附いて居たらしい、然るに總選擧後西園寺內閣が倒れた時に、後藤男が急に運動を始めたが、彼れは西園寺內閣を倒すに付て、功績の有つた者だから、之れを入れる事になり、遞信と云ふ事が定まつた、それから西園寺內閣が交迭の前に、急に貴族院へ手を附けて、研究會から堀田正養子、木曜會

から千家尊福男を取つたので、少くも一大臣だけは研究會から取らぬと貴族院で叫叫、千家其他の政友系が荒れると厄介な事が起らぬとも限らぬ、ソコで研究會へ候補と出す樣にと交渉し、研究會では正親町伯と岡部子の兩名を出して、此内から撰拔して呉れと言つたから、岡部子を取ることになり、之に司法を割り當てたので、五名の役割は變動を生じ、大浦農相、平田内務、小松原文部となり、一木君は氣の毒ながら平田門の下に次官で承知せしめ、關清英君には警視總監か又は司法次官と云ふことで有つたが、關君はア、云ふスネ者だから、ソンな者では收まらず局外に立つたゝ聞いて居る、此の最初の盟約の時から、清浦子は既に除外されて居た所を見ると、第二次桂内閣には最初から役の附かない運命で有つたことが分かる、悧巧な人だから其の位の事はチヤーンと知て居て、自分の面目にかゝらぬ樣に、自分は不入閣を標榜して、却て後藤男を推選し、暗に五人組の邪魔をした所は、拔け目のない所だ、貴族院の研究會から一名と云ふ説も、清浦子が山縣、桂兩公へ吹き込んだ者らしい、其の結果として農商務の積りで居た小松原君は割の惡るい文部へ廻はされて貧乏鬮を引き、關、一木兩君は大臣になれなかつた、

清浦内閣の役割

清浦君が愈々内閣を組織するとなれば、ドンな人が大臣になるかと云へば、先づ後藤男が一枚看板で入るだらう、外務と云ふ花やかな所を蹈るて有らふ、後藤夫人は肥後の安場男の令孃だから、其の中身は清浦君と同樣で有る、それから德富猪一郎君の文部大臣、波多野敬直君の司法大臣、それに若槻禮次郎君、仲小路廉君、其の餘は貴族院の研究會から取るかも知れぬ、又大浦子。平田子を入れる樣なことが有るかも知れぬ、芳川伯などを取り合せに、入れるかも知れぬ、要するに肥後内閣の中堅は、後藤男に德富君でやることになるて有らう、

政黨は如何

政友會から野田卯太郎君を筆頭として、大分清浦内閣に御用を達すべき傾觸れが有る、後藤男が手を着けて居るのも大分見える、此一派は分裂だ、それから國民黨から加藤政之助君及び其の黨與が馳せ加はる、中央俱樂部は肥後の安達謙藏君が統率して、新政黨の中堅となりて、一大政黨が出來るで有ろう。佐々友房君が生きて居れば、無論大臣の一椅子を取るワケだが、都合に依りては此際思ひ切て安達君あたりを大臣にして、大に政界を切り捲くらせることになるかも知れぬ、何れにして政黨は大混亂を生じ、現狀打破となるから面白い、ソウして二度か三度議會の解散を續けて、思ひ切て花々しい戰爭をやつて、肥後武士の意氣を天下に示し、大に所謂肥後イズムを發揮したら、一寸局面が變つて良からふ、我儕共は清浦内閣の成立は大贊成だ、但し非政府黨たるは勿論だが、コウ云ふ局面展開派が出て來て、一ト騷ぎやつて呉れないと、政界が沈滯して仕方がない、政治は水の如く、流れないと沈滯する、沈滯すれば腐敗して、衛生上の害になる、清浦内閣は現狀打破の望を以て之を歡迎せ

ざるを得ない、我輩の如きも清浦内閣が出來たら、大に奮て政府反對の運動をして見たいと思ふが、今日の如く政友會大多數て、反對しても倒す見込みのない時は、誠に張り合ひがなくて困まる

△舊式政治家

鷲城學人

一時鳴らした大役人で今日ウンともスンともいはず、世間からも忘れられた者は少くない。靑木周藏は日本一の大外交家だと山縣から褒められ桂なども一頃頭の上らなかつた男だが、今では店曝らしの骨董品になつた。伊東巳代治は一書記官長を以て大臣を顚で使ひ、海軍主事で大臣の事を行つた山本權兵衞と倂び稱せらた程のキケ者であつたが、これも緣日商人の手に渡つた。其他高島・樺山といひ、或は金子・末松といひ、野に捨てられた死人も同然の有樣である。宮中に雲隱をした太郎冠者も今に骨董の仲間入りをするだらう。

淸浦なども徵ひ生へ出した一人である。時代に棄てられたのか、自分が棄てたのか知らぬが、確に活動線から除かれた。然るに近頃淸浦内閣などゝいふ噂が耳に入る、貴族院では眞面目に話して居る老人もあるらしい。そんなことから淸浦の名は何處か世人の記憶を呼起したようである。枯木に花といふ諺があるから隱居同樣の淸浦も返咲せぬと限らぬが西園寺の後に出るなどは眞面目に受取れぬ。

熊本派は一時官界に相應の勢力があつた。古い處では井上毅・山田信道・木下廣次・古莊嘉門等が居たし、今では内田康哉・林田龜太郎・龜井英三郎・宗像政・神山閏次などが居る。井上の沒後、淸浦は熊本派の先輩といふので一番威張つて居る。皆が皆な心から推服してる譯でないが、當人は總大將の積りで居る。處が其總大將の淸浦は段々後すざりをして小僧のように見て居た内田の護謨人形が俄に膨れ出して、今では熊本派の出世頭になり、我れこそ總大將だといふ顏をして居る。

淸浦は幼年の頃、熊本のさる貧乏寺の小僧で、朝夕ナムカラタンノウトラヤーノヽを歌つて居たが、何でも十六七歲の時奮發をして、豐後日田の廣瀨淡窓塾に入つた。此塾は咸宜園といつたように記憶する。淡窓は旭莊と兄弟で、二人とも有名なる漢學者にして且つ詩人であつた。淸浦は塾生中でも成績の好い方であつたといふから、漢學の素養は可なりある。演說でも座談でも其儘筆記すれば直に立派な文章になる。ソレに辯舌が爽かであるから聽て居ても氣持が好い。一體今の官僚政治家で滿足に演說の出來る奴は一人も居ない、大槪草稿と首ッ引で朗讀するのが關の山であるが、淸浦はソレが出來る。議會での說明もなか〳〵振つて居た。

淸浦が淡窓塾を卒業して東京に上つて來たのは何年頃か知らぬが、明治六年には埼玉縣に奉職した。飛出しが十四等出仕で間もなく中屬に進み、それから學務課長になつた。水蜜桃を配つて副議長の運動を試みマンマと擲かれた加藤ウラテンも當時埼玉縣學務課出仕で、君僕と呼び合つた仲であるが、淸浦は頓々拍子に出世して大臣になつたのに、一方

は今も何國民黨に燻ぶつて副議長にもなれない。同じ人間でも斯くまで運不運があるかと思へば氣の毒になる。三年許り田舍住ひをして初めて東京の本舞臺に出たのは、何人の推薦に因つたか知らぬが、一年經つか經たぬ中に早くも司法省九等出仕から檢事に擧げられ、それから司法省に書記官・太政官權少書記官・參事院議官補・內務大書記官・警保局長といふ順序で、二十九年司法次官より司法大臣に進み、第一次桂內閣の時は農商務大臣であつたが、三十八年日比谷騷動の時、芳川顯正が引責辭職をしたので內務大臣を兼ね、內閣が潰れてから今日まで引續いて樞密院に隱居の身である。彼の官場に衣食すること四十年、其間閑地に就いたのは大隈內閣の四箇月間だけといふ幸棒人だから、辭令書積んで等身に及んだ譯である。

山縣系中一番早く大臣になつたのは淸浦で、桂と餘り前後の隔りがない。平田・大浦・寺內などはズツト後である。初めて山縣と關係の附いたのは參議院議官補時代で、仕事をさせても人に應對をさせてもテキパキ遣る、山縣も將來見處のある奴と認めたし、淸浦も閥のない者は閥に賴らねば鼠に翼が生へて蝙蝠になれぬと一生懸命に取入つた。彼が警保局長になつたのは明治十八年山縣が內務大臣になつた時、司法次官になつたのも、司法大臣になつたのも山縣の下であるから、世間は彼を山縣の子房と目し、又た實際帷幕に參畫した。何さま多年司法省に頑張つてドシ〳〵子分を植付けたから、彼の勢力は素晴らしいもので、松田正久が來ようが、堀田・千家が飛込もうが貧乏搖ぎもせぬ。今日でも淸浦の命令は忽ちにして行はれる。地方官中にも淸浦系と名の附く者が少くない。これは大書記官及び警保局長時代に種を蒔いたからであらう。

彼は樞密院に潜んで居ても貴族院に手を延して居る。大臣在職中及び貴族院議員時代に研究會內に勢力を作つた。平田が幸俱樂部に采配を揮れる如く、淸浦は研究會を操縱して居る。一時波多野敬直が目附役頭を勤めた。今でも目附役はいくらもある。三島彌太郎は表面大將顏をして居るが、實際淸浦の傀儡に過ぎぬ。岡部の飮んだくれなどは手も足も出ない。淸浦內閣云々の說も大方研究會邊から出て居るらしい。

淸浦と山縣の間は今も惡くない、が桂とは善くない。淸浦にしては同閥といふ氣があるから桂の節度の中に入るを快しとせぬし、桂も自由にならぬと知つて疎遠する氣味もある。本來なら第二次桂內閣に淸浦の入る可き筈であるのに獨りだけ拔けたのは、專ら桂が排斥したのだといひ、一說には當時桂は一應入閣を勸めたけれども、淸浦は內務とか大藏とかの一等省なら入つても好いが、二等省や三等省なら御免を蒙ると高く留つたとある。山縣を動かして桂を宮中に祭り込んだ策士は淸浦だといふ噂の起つたのも、或はソンナ事情から來て居るのではなからうか。

策士は伊藤系よりも山縣系に多い、而も其策が陰險である、毒殺的てある。淸浦も智慧者だけに策を遣ろ、ちよつと見ればそんな事をしさうにもないが、却々油斷がならぬ。そんなら新智識があるかといふに、元々漢學育ちの上に有司獨斷時代に固めた頭だから、少しも好い方にカルチベートされてない。面のヒョロ長い形から思想までが山縣式である。一

體治外法權時代の役人の精神は警察万能で、一は政略上より一は間違つた唯物主義から人民を牛馬奴隷の如く扱つたものだ。殊に其時代の警保局長は巡査の親分見たようなもので、道徳人道を無視した抑壓政策の命令官だ。明治十八年保安條例を發布して藩閥政府に反對する民間の志士を京城三里以外に放逐したのは、山縣・淸浦・三島の三人が力をして遣つた離れ業である。彼は各種の法律制度に多少功勞があるといへばあるが其法律も大抵獨斷主義のもので、立憲政治の本義からいへば淸浦などは國民共同の敵の一人である譯だ。

彼は屬吏から叩上りに上つた男だから、官僚の事務に慣れて居るかも知れぬが、日本を何う振り向けて行くか、國民を斯うしなければならぬかといふ國策上の經綸ある政治家でない。一言にして評すれば世渡りの上手な、小手の利く調法な人物といふに過ぎぬ。成程寺内に比べると融通が利くかも知れぬ。貴族院の通りも或は好いかも知れぬ。併しそんな事が一國の鼎を料理する上の保證とならぬ。淸浦を總理大臣とする位なら、少し意氣地はないが、まだ西園寺中納言の方がいくらかマシである。

本人に政治上の野心があるか無いか知らぬ、有つても七八年遠退いたから一寸出場を失つた形である。本人は政治よりも宮中に入り込んで餘生を安樂に送りたい希望であるかも知れぬ。已代治もソンナ野心があるようだから他日宮内大臣の人選問題でも起れば、差詰此二人が競爭者になるだらう。さすれば今更淸浦内閣を口にするのは痴人夢を說くの類である。たとひ夢にも淸浦の如き月經の上がつた人物を擔ぎ出さぬようにして貰いたい。今日は明治が過ぎて大正の新時代である。

△淸浦子爵と予

仲小路　廉

人物評は實に困る。何れ知つた人の事を問はるゝ譯であらうが、其知つた人の事を評論するといふのが實に困るのである。其人の事を褒めれば、好む所に偏するといふ事になるし、さればといつて、苟も知遇を得たものは其意氣に感ずるといふのは當然ではないか。夫れを指して好む所に偏するといふものがあれば、これはまだ人生の妙味を解し得ないものと言つてよいのである。

淸浦子爵は打開けて言つて、予が知遇を辱うしたる一人である。回顧すれば十數年以前、予が微々たる司法官として傍若無人に議論を戰はせ居たる際に屢々拔擢を蒙りたるは、淸浦子爵が山縣老公の下に司法官として勤務中の時であつたのである。予は今より其當時の事を顧みて窃かに汗背に堪へん事がある。當時實際予は傍若無人であつた。誰にでも議論を吹きかけ、同僚は勿論の事、少しく手に立つものと思へば上長者なるをも問はず、誰にでも喰つてかゝつて、之をへこますを以て最も愉快として居つた時代である。まかり間違へば論文を世上に發表して、之を天下に訴へんとするが如き稚氣を帶びてをつた事は實際である。甚だ相

済まぬ事ではあるが、屢々上官にも反抗した。検事長も院長も何の事か、大臣次官に對してまでも隨分反抗の戈を向けんでもなかつたである。然るに當時司法部内に於て、最も愼重に部内の整理、秩序の維持、法典の編纂、改革の實行、老朽の淘汰、少壯の拔擢、等に鋭意し、當時司法部内の空氣を一洗し、大いに舊來の面目を改め、更に振作鼓舞の實を擧げ、司法省をして内外に對して其威信を發揚するに最も力を効されたるは、清浦子爵が司法次官として山縣司法大臣を輔佐し専ら其力を効されたる時であつた。山縣老公が當時重望を負うたる身を以て司法大臣として其局に當られたるは、全く司法部に秩序の維持と、刷新改良を實行せざるべからざる時代であつたからである。其以前の狀況は實に混沌分裂、甚だしき不秩序の時代であつたので、即ち彼の有名なる弄花事件の如きも此時代にあつた事である。實に最高司法官にして斯かる聞くも忌しき事の世に聞えたる狀況を以て觀ても其部内の有樣は推して測られるのである斯くの如き狀況にして況んや改正條約の實施は已に目睫の間に迫り、帝國司法官として最も重要の時期にあるにも拘らず、部内の有樣は實に痛嘆すべき狀況であつたのである。玆に於てか大なる勢力と、大なる智力と兩々相俟つて、玆に部内の弊風を一洗し、秩序を確立し、統一の實を擧げ、以て内外に對して司法部の威信を增すの道を講ぜざるべからざる必要に迫られて居つた。即當て總理大臣として威望高かりし山縣公親ら是が大臣となり、その輔佐者たりし者が即清浦子爵であつた。清浦子爵は玆に全力を揮ひ、全智を絞り、緩急を計り、前後に顧み、蔚々として部内弊風を一新し、老朽を淘汰し、弊風を破り、玆に清新の氣風を注入して以て改正條約の實施に伴うて、外人抄法廷に立つも恥からぬ丈けの威信の確立せらるゝの時機であつたのである。

斯くの如くに當局の大臣次官巳にそれ〳〵抱負と計畫のあつたにも拘らず、恥しい哉、當時の予等の如き、青年司法官として、只一概に當時の情勢に憤慨し、刷新改良を呼ばはり、或は老朽の淘汰を主張する等、考へて見れば隨分淺果敢な事もあつたのである。然れども夫だけの勇氣がありたればこそ、又法律上の議論に於ても人には一歩も讓らんといふ氣慨も強かつたのである。即眼中殆ど長上者なしと云ふが如き意氣を以て猛り狂うてをつたのであつた。之が若しも局量の狹いものであつたならば寧ろ忌んで之を遠ざけられるかも知れなかつたのである。然るに意外にも拔擢に拔擢を蒙り、東京地方裁判所検事より一年四回の昇進をなし、終に東京控訴院検事となり、更に拔擢を蒙つて司法本省に擢用せられ、司法省參事官として大臣次官に直接し、直ちに其机邊に於て事務を執るに至つたのは全く清浦司法次官の知遇を蒙つたワケなのである。人生誰か意氣に感ぜざらん、予も亦全力を擧げて此知遇に報ひん決心をしたのである。

清浦子爵が事を執らるゝや、思慮は極めて周密である。殆ど遺漏はなしと言つてよい位である、又人に接して極めて穩和な、人をしてよく胸襟を攄べさしめらるゝのである。又法律上の知識に於ては勿論の事である。夫れは子が從來久しく警保局長として或は參議院議官として、或は法制

局參事官として、我維新以後帝國立法に對し參酌せらるゝも少なからざる經歷に因つて見ても帝國の法制史に就いて深き貢獻のある事が分るであらう。此點は殆んど言ふも無駄である位である。然し子爵は獨り法制を以て滿足せらるゝの人にあらずして、予は寧ろ同子爵は極めて常識に富み、極めて圓熟したる思慮を有し、法律の一小局部に偏するにあらずして、寧ろ大體に於て我帝國の發展興隆と國利民福の開發について最も力を効すを以て寧ろ其本懷とし、又已が長所と考へてをらるゝ人ではないかと思ふ。其後農商務大臣として、又内務大臣として着々施設經營せられたる事蹟によつて見るも明かなる所である。特に政治的運用の作用に就ては立憲の政に伴うて、之と相背馳せざる道を採り以て我國體の維持と其勢力を發揚せればならぬといふ深き決心を以て事に當られてをつた事は、子爵が嘗て研究會の常務員として盡されてをつた狀況によつても又明かな次第である。特に政治家として必要なる素質ともいふべき言論に雄たる事と文筆に堪能なる事、之亦餘り多く其類を見ない優者である。其朗々たる演說、事理明斷にしてよく常識に富みたる、聽く者をして心より之を首肯せしむるの技倆は確かに政治的資格の最も立ち優りたる點であるといつても過言ではなからうと思ふ。

回顧すれば明治三十三年改正條約實施の爲め、列强諸邦の司法制度を調査するが爲め數千名の司法官中より九人の選拔を蒙り、海外派遣の命を得たる、其後清浦子爵が次官より進んで、司法大臣として改正條約實施の爲めに最も力を効されつゝありし時代の事であつた。歸朝以來同子爵の力の下に、種々の施設を企うし、微力を効さん考であつたのでありしに政界の變動は一定不動を許さず、子爵は或は農商務大臣となり、或は内務大臣となられたのであつたが、予は又司法部に退いて以來、遞信省に奉職する事となり、再び内務省に轉じて土木局長となり、三轉して戰時中意外にも嘗て同子爵が久しく其局に當られをりし警保局長となりしも、亦一奇遇である。次で又内務大臣としての清浦子爵の下に警保局長として仕ふるに至つたのも誠に不思議な因緣といふべきである。其後同子爵は樞密院に於て最も力を効され、予は又轉じて再び遞信次官となり、或は運輸交通殖產興業と、先きに法律をのみいぢくり居りたる身は今は法律に暫く之を脇に置き、專ら實利實益を擧げ、微力ながらにも我帝國の爲めに國利民福の開發々揚について幾分の貢獻を致すことを得ば誠に本懷であると考ふるに至つたのは是れ亦同子爵の誘導提撕を受けた爲であるといつてもよい譯でないか知らんと思ふ。今や子爵は樞密院に於て力を効され、予は貴族院議員の末班に列してをるのであるが、今も尙古に變るとなく同子爵の好意と好誼は一日も忘れず、又其指導を受けてをるのも昨と變りはないのである。

清浦子爵の將來は如何といふ問は之は困る。何となれば、苟も國家の重臣となり政治を以て身を立つるの人は、其立つて朝にあるも、假令野にあるも國家の興隆發展と國利民福に對しては夙夜念頭を去らんといふのは蓋し當然のことであらうと思ふ。況んや子爵の今日は樞密顧問として最高諮詢の府に身を置いて、皇室國家の爲め、貢獻せられつゝあるのであ

る。又先きにもいふが如く、測り難きは政界の情勢である。將來如何なることが起り來るかは蓋し何人たりとも之を豫測するものはあるまいと思ふ。必要に迫れば廟堂に立つて直接國務の衝に當り以て國家國民の爲めに貢献せらるゝ事も、子爵たるもの之を躊躇せざるべく、又必要なしとせば身を閑地に置いて、靜かに皇室國家の爲めに其赤誠を効す事是れ亦重臣の本分なるべく、出處進退行藏是皆時に隨ふべきのみである。

△清浦か寺内か

南木摩天樓

一

△下馬評は何時もながら盛である。西園寺内閣が制度整理問題で行き惱み、二個師團増設問題のイキサツが昂じて來たと云ふ。ソコで宿題の寺内々閣說が、今にも取つて代りさうに取り沙汰せられる。これと共に一方には又清浦内閣說がチラホラ噂に上つて來て、物好きな向では既に役割まで出來て居るとて麗々と勝手な紙上の親任式迄掲げ立てる。其の實舞臺は存外默劇（だんまり）で靜まり返つて居るのであらうが、大向ふの評判だけは如何にも物々しい。

△二個師團問題では陸軍側の腰が存外強く、流石の西園寺首相も酷く持て餘しの氣味だと云ふから、夫でなくとも行政整理が思ふ程に捗々しく行かぬので一寸困つて居る處に、豫算の編成は最早目前に迫つて居る際であつて見れば、今の西園寺内閣の運命は決して不安でないとは云へぬ。殊に此の前の西園寺が投げ出し方の唐突であつた事を見せ付けられて居る世間は、これに對して又勢ひ異常の興味を感ずるのであらう。拙者個人の注文から云つても、西園寺が此の前の時の様に思ひ切りよく内閣を拋げ出して、一には官僚派連の鼻を明かして遣ると共に、一には自ら天下に公約せる政策と共に始終すると云ふ名分を正して、天下正義の味方を得るのが死中に活を求むる所以で、西園寺の必ず最後に採るべき策と思ふのであるが、併しそう注文通りに籤を引いて見せるかどうかは皆目見當がつかぬ。但し夫にも拘らず、早晩次いで來るべき幕の藝題の取沙汰をするのに少しも差支にない譯である。

二

△寺内内閣か或は清浦内閣かと云ふ事は、今の所可能不可能の問題ではなく、實は好惡の問題である。第一次の桂内閣が小山縣内閣と呼ばれた様に、此の次の内閣も勢ひ同じく小山縣内閣でなければならぬ——勿論桂が先以て雲の中から出現しないものとしての話である——とすれば其の首班の寺内たるか將た清浦たるかは、畢竟するに含雪老人の好惡によつて決すると觀て差支ない。乃で老人は孰れを舉げて何れを貶するかとなると、どうも强味は矢張り寺内の方にありそうに思はれる。

△假に拙者の好惡からすれば、首相としては寺内よりは清浦をとる。加之、之を適不適の範疇から見ても、世間の公平なる觀察者は寧ろ清浦を舉げる方が多からうと思はれるが、どうぢや。

△清浦が寺内より内閣に於ける經歷に於て遙かに先輩である事は云ふ迄もないが、單に先輩後輩の論だけで云へば、實は桂とても清浦より出身はやゝ後輩であるから、後輩必しも首相たるに於て先輩に敵せぬと云ふ譯に參らぬ事は勿論である。併し清浦と寺内との比較論に於ては、丁度清浦が寺内より先輩である程度に於て、夫だけ寺内よりも首相たる器量に勝れて居ると云へる。これを露骨に云へば、清浦には内輪に見積つても平大臣以上の、識量と貫目とがあるが、寺内では平大臣として見ても餘り上等の大臣の方ではない。貫目がないと云ふのではないが、識量と材幹とに缺けて居る。彼は矢張り殖民地の總督位の所が丁度手頃の役目である。

三

△寺内は文字通り一介の武辨で、一刻で愚直で苛細で秘密一點張りと云ふのだから、本家の陸軍あたりへ掘籠つて居る分には差當り支へは無からうが、内群雄を駕御し外列國の間に馳騁するの規模に於ては大いに申分がある。清浦とても申分は幾らでもあるが、之を寺内に比すれば未だ〳〵遙かに増しであらう。清浦は若し順當に行つて居たらば、桂が首相として收め得た成効位は夙に收め得たであらうと思はれる。

△彼の官歷は桂や小村の夫の樣に花々しい所は無いが、山縣の知遇となり股肱となつて働いた効績に至つては、前期の山縣系中恐らく彼に及ぶものはあるまい。山縣の參事院議長時代には議官補兼書記官として、その内務大臣時代には警保局長として、その司法大臣時代には次官として、その第一次内閣時代には即ち司法大臣として、いつも彼が最も有力なる參謀長なりし者は實に清浦であつた。その貴族院に在りて初期の研究會に牛耳をとり、山縣系をして貴族院に儼乎たる勢力を成さしめたのも、又これを以て憲政黨内閣に肉迫したのも、伊藤の政友會内閣に星亨を彈劾したのも、皆な主として彼清浦であつた。即ち彼れ清浦は當年の山縣系内にあつては最も知あり策ある者、最も仕事の出來る男として、敵も味方も一時は山縣の後繼者を以て彼を目したものであつた。

四

△前内閣の閣員では先づ後藤が一番辯論家であつた。併し後藤は根が功名心の爲の自己吹聰一點張りであるから、その辯論は常に稚氣滿々たるもので、これが爲には折々飛んでもない失敗を招く事などもあつた。これと全く反對なのは寺内である。彼は切迫詰つた必要の場合に會ふに非れば敢て輕々に口を開かぬ。而も言へば必ず面を犯してもピリヽと効目のある丈の事を言ふ。此點に於ても寺内は矢張一介の武辨式を發揮して居る、乃ち頭に些の餘裕がないから、應接にも掛引と云ふものがない。謂はゞ後藤は喋舌り過ぎてボロを出し、寺内は數語にして要領を得るが同時に同情者をも時としては怒らせて仕舞ふ。是等に比べて見ると清浦は辯論に於ても餘程の苦勞人である。

△清浦は政治家としては割合に趣味が該博である丈に、話柄の範圍が饒かである。恐らく座談に於て彼が如く巧みにして而も綏舒の氣に富んだものは世間餘り多くはあるまい。彼は又佛人ボアソナードの下に久し

く法典調査の事に從つて居たゞけに、舊時代の吏人としては割合に法制に精通し、且つ論理も稍精緻であるが爲に、一度議會などに立ちて議員と論難を往復する時には、周匝精密敵を納得せしめずんば止まざるの辯力と用意とを有つて居る。今日でも政府委員中には往々辯論の雄もあるが、而も概ね區々たる小理屈を並べて他の憫笑裡に葬られ去らるゝものならぬはない。之を初期議會時代の警保局長清浦が、當時の大問題たる集會政社法改正案に對して理路明晰なる辯駁を加へ、意氣軒昂なりし當年の民黨をして思はず感嘆せしめた手際に比し來れば、彼等は未だ〳〵苦勞が足らぬと言はざるを得ぬ。近來久しく政界を遠かつて居るので、委曲周到なる清浦の辯舌は、樞府以外に於て之を聞くことを得ぬけれども、思ふに老來益々圓熟して、その坐談に於けるが如く、滑脫枯淡の蔗境に入つて居ることであらう。

△人往々辯舌の末技などゝ謂つて、政治家に辯論の重要ならざることを諷するものもある樣であるが、苟も憲政によりて國政が料理せらるゝ時代にある國に在りては、辯論は政治家として少くとも主要なる資格の一つでなければならぬ。山縣は一體に口舌を無用とし、秘策にのみ是據る流義の老人であるが、今の時代はモー夫では遣れぬ。寺內は此點に於て最も山縣に私淑して居た男であるが、併し近頃では幾らか角がとれて來たせいか、或は年の加減か、段々少しづゝは開放主義になつて來て、時には愛嬌の一つ位振り蒔く氣になる事もあると云ふ事だ。そんな枝末の事は夫こそどうでもいゝが、愈々本氣に內閣でも組織しやうと云ふならば、モー少し所信を公開して、大いに天下と共に是れを公議するの雅度がなくてはならぬ。

五

△何れの方面から見ても、單純に適不適と云ふ觀察から云へば、總理として拙者は寺內よりは清浦を取るものであるが、扨て清浦に實際それが遣れるかどうか、又遣れるとしても寺內と比較してどれ丈立派に遣り得るかと云ふ段になると、是亦甚だ見當がつき兼ねる。

△遣れる遣れないは初にも云つた樣に、今では差當り椿山莊老人の好惡の問題て、謂はゞ遣らせる氣になれば寺內だとて清浦だとて結構遣るであらうが、その成績に至つては兩者の性質の甚だ異るが如く、行き方が大分違ふであらう。何方かと云へば寺內は山縣直傳の武斷主義のも一層手嚴しい所を行かうとする。之に反して清浦は桂式のも少し要領を得た圓滿主義で遣らうとするであらう。その結果、清浦に在つてはどこ迄も妥協政策で默し〳〵收められるだけの効果を收めて行かうと云ふ事になり、寺內の方は事と次第に依つては政友會なり國民黨なり相手構はず喧嘩を吹掛けて、解散なり干渉なり思ひ切つた武斷政策をとり、自己の思ふ所を赤裸々に斷行せんと試みる事であらうと思ふ。勿論何れにしても目白の大御所が承知し若くは默許しての事でなければならぬが。

△若し斯う註文通りに筋が參るものとすれば、清浦內閣は假令成立したにしても、形は第二の小山縣內閣であるが、その實は小桂內閣の樣なものとなり、又しても妥協政治が暫く續いて、約束通り西園寺（若くは

その後繼者）內閣が又これに代ると云ふ平穩無事の沒趣味に終るであらう。併し寺内々閣に至つては、模樣によつて或は遂に官僚黨と政黨との最後の大衝突を惹起し、これが結果として從來の政界の分野を破壞し去つて全く新にする樣な活劇が見られないとも限るまいと思ふ。されば猫者等見物側からいへば、八幡太郎義家の樣な衣冠束帶のキチンとした所よりも、寧ろ百日鬘の貞任宗任を出した方が、寧ろ目先が變つて結句見榮があるかも知れない。

△清浦奎吾君

田川大吉郎

◎清浦奎吾君の、宮相と爲り、若くば首相と爲らるゝことは、青年苦學生の爲に萬丈の氣を吐くものである、此點に於て、僕は、此頃の此種の風說に多少の興味を感じて居る、然も、其風說の有るが如く、無きが如く、本當に左樣な計畫があるのか知らん、本當らしくも無い噂だネー、まさか閣僚に人なしといへどもなどと、打ち消しがちの、之を信ずるを欲せざる氏の、寧ろ之あるを希望せざる意味の觀察を聞くのを、もどかしくも思ひ、殘念にも思ひ、情けない世の中だとも思ふて居る、何にせよ、彼の出世の前半世に就て想ひ見よ、苦學彼の如く、努力彼の如く、頴脫彼の如きは、確に一代の珍である、僕は、彼に不群の榮達を得させたい、成らう事なら、そうしてやりたいものだと思ふ、

◎彼が、政府委員若くば當路大臣としての議會に於る働き振は、僕は多くを知らない、只、相應に鑑識に長じたと信ずる僕の一友人は、彼の、議會に於る答辯振を以て、周詳にして懇切、能く痒い所に手が屆き、滴水をも漏さぬ用意がある、正に有らゆる政府の說明者中の白眉であると評して居た、而して議會では、之に對し、全く反感なしてではあるまいが、善く之を聽き納れて滿足し、滅多に紛議抗爭の態を見ない、つまり、彼の態度、彼の用意の、どこかに、衆心を懷き靡ける、爭議を和らげる妙處長處がある、又、彼の一德であると評して居た、僕は、悉く之に服するでも無いが、左りとて之を否定すべき材料も感想も無い、

◎桂公が、侍從長に祭り上げられたことは、どうしても其本懷で無つたらうと察すべき若干の理由がある、而して此暗中の畫策をたくんで、見事に其目的を成し遂げた者は、即ち、清浦奎吾其人であると猜せられて居る、これは猜する者の誤りか、若くば煙のあがる所には火の氣がある、幾分、其樣な畫策魂膽の有つたのか、僕には薩張分らない、又、僕は此樣な揣摩臆測に耽ることは嫌ひである、だが、清浦氏は肥後人である、肥後人は、人種的に、奇體に、陰謀に長じて居るとの世評である、而して清浦氏は、其風采から見ても、其閱歷から見ても、若くば其思想感情から見ても、肥後人の代表者たる資格を具有して居るらしく思はれる、即ち、此種の風說の眞事しやかに傳へらるゝ所以であらう、

◎記者足下、僕は、清浦氏其人に關しては、此上に言ふを欲しない、即ち、僕は、こゝらで、筆を轉じて、日本の政界の老閥化に關し一言した

い、清浦氏一人の進退が、日本政界の老閥化に關係があるといふのでは無い、日本の政界に比年老閥化の傾向がある、而して清浦氏再起の風說、其風說を捉へて、足下が、吾々に其評論を求めらるゝ此眼前口頭の一事實も、亦其老閥化を證する一箇の材料では無いかと思ふのである、而して僕は此老閥化を忌むものである、詛ふものである、悲しむものである、

◎但、それに就ても、くどいことは申さぬ、本年九月の十二日かと思ふ、英國の首相アスキス氏は、其滿六十歲の誕辰紀念會を擧げた、その際、同國の新聞に、英國の今の內閣には、五十歲以下の大臣が八人あると揭げてあつた、其顏觸は

チヤーチル	三十七歲
ロード、ビユーカンプ	四十歲
ヘルバート、サミユー	四十一歲
ウオーター、ランシマン	四十二歲
大佐シーレイ	四十四歲(陸相)
ロイド、ジヨージ	四十九歲
レウイス、ハーユート	四十九歲
マツケンナ	四十九歲

總理大臣が六十歲で、其餘の閣臣中に、五十歲以下の者が八人もある、ナント若手揃ひの內閣では無いか、而して此一事實は、英國の內閣が、世界に抽んでゝ、最も進步的政策を工夫し、大膽に、勇猛に、突進し、力戰する、其態度の活潑、生氣の橫溢せる、懸け離れた東洋の吾々にまで、多大の興味を感じさせ、絕えず手に汗握らせて、其行動進止に、最瞭明目さする所以の、最も確實なる證據で無いか、僕は、此樣なことが、何故に、かの英國に行はれて、日本に行はるゝ能はざるかを怪しむ者である、而して嗟嘆に堪へない者である、

◎獨り內閣に就てのみ言はない、今年の夏、英國自由黨の幹事長エリバンクは、貴族に叙せられて、下院を去り、幹事長を棄てた、彼の組織的、統御的才幹は、殆んど其天性に成るといはれ、敵味方に齊しく嘆服されて居た、而して彼は今年四十三歲である、彼が、幹事長として、最も鮮かに其卓越の技倆を顯したのは、千九百六年、即ち今より七年前の總選擧の時であつた、即ち、彼の三十七歲の時であつた、三十七歲の壯者を擧げて幹事長の位地に置く、英國の自由黨の活氣ある所以では無いか、彼れ去つて後、イリングウオルスは幹事長と爲つた、彼は今年四十四歲である、亦壯者の一人である、而して之を日本の政友會に較べたらどうか、更に保守黨の首領ボナローは今年四十四歲である、其前身は一省の次官たりしに過ぎない、而して一躍總理と爲り、保守黨の全運命を双肩に荷ひ、今や、全英國の視線を一身に集めて、辛辣錐の如き辯論に、政府黨を惱まし疲らしきつて居る、又一代の壯觀である、而して之を日本の國民黨、中央クラブに較べたらどうか、そこに、天淵の差を許多の方面に見る、最も悲むべきことは、其老閥化で無いか、

◎こゝまで言へば、僕もモー止めてもよからう、やむるに當つて尙清浦氏に關し一言を添へて置く、英國の現內閣には更にジヨンモーレイが居

る、彼は今年七十三歳である、而して重厚の質、練達の才、若者揃ひの現内閣に對し、見事な調停役、仲裁方、案内者だといふことである、淸浦氏は未だ彼の如くに老ひずとも、彼の如き位地を我政界に占めんとすれば、其從來伊藤公に善く、現に山縣公に善く、又、政黨分子にも、あまり惡からざる氏に取つて、最も安全な、而して稍有効な働きを爲し得る未來が未來に存するてあらう、

△淸浦子爵の人物

安達謙藏

▲幸運にして順境の人

我鄕里の熊本に於て、明治時代になつてから二人の傑物を出した。其一人は故井上毅子であつて、他の一人は淸浦奎吾子である。井上子は米田の微賤の家から起り、淸浦子は鹿本郡稻田村の一小寺院から出で、共に門地も爵位もない極めて寒素なる身分から出世したのであるが、然し二人の出世の仕方には餘程違つた所がある。井上子の履歷は人の知つて居る通り、あの絕代の文章家て、常に立言の第一流を以て任じて居つた人であるが、然し存外に敵の多かつた人て、或は奸物といはれた事もある。あの有力であつた伊東巳代治子の如きも、彼の激烈なる競爭者の一人で、あの人の行路には頗る難關があつた。之に反して淸浦子爵の行路は常に坦々として何等の障害もなく、終始順境を經て來たのである。

先づ話の順序として子爵の經歷の一斑をいうて見ると、豐後の廣瀨淡窓の私塾の咸宜園に入つて漢學を學んだ。そして俊才であつたからして郡講といふ、いはゞ塾の總理大臣となつた。さうして日田に於て縣令の野村盛秀に知られ、野村が埼玉縣令となつた時に、子爵は野村を便つて埼玉に行つた。初めは洋學をする積りで出て行つたらしい。が、野村がいふには、君は學問もあるし、却つて直ちに官界に出た方がよからうといふので縣の屬官となり、主もに教育の事に關係した。恰度學制改革のあつた時であるが、子爵は一方には吏員として働き、一方には教鞭を執つて居つた。それが明治五年から八年までの間である。そして白根專一の父の白根多助が埼玉縣令となつた時に大いに用ひられ、司法省に入ることになつた。確か岸良といふ大檢事に採られた。そして明治九年から十三年まで司法省に居り、彼の有名なるボアソナードを聘んで刑法治罪法の改正に當り、專ら法律の研究をなした。さうして元老院に刑法治罪法の説明をする爲めに太政官の書記官を兼任した。そして明治十四年に法政局に入り、內務の書記官を兼ねた。此時分に一つ書かねばならぬ事がある。十六年に山田顯義が內務大臣になつた。其時に淸浦子は靑森縣知事にやらるゝ筈てあつたが、當時井上毅は樞機に與つてその事を知つて居り、靑森には古莊嘉門が居る、同じ肥後人をやるのは宜しくないといつて其事は罷めになつた。若しあの難治の靑森にやられたら、子爵の後來の進路はどうなつてあつたか一寸疑問であつたが、井上子の爲めに、

行かなくてもよい事になつたので大變に得をした。さうして大森鍾一氏と共に樞密院の官房書記官となり、忽ち山縣公に知らるゝに至つた。山縣公が内務大臣となつた時に初めは官房に入つて居つたが、後に警保局長に任ぜられた。そして當時山縣の四天王といはれた。四天王とは白根專一、清浦奎吾、芳川顯正、曾禰荒助の四人である。扨で清浦子は非常に光彩を發揮して居るやうである。それは明治十七年頃の事である。其當時の時勢は廿三年から國會開設になるといふので政論勃發の結果、加波山事件、秩父の暴動、靜岡騷動等いろ〳〵の難局があつたが、子爵は皆此等の難局を處理して居る。そして一方には警察制度の改良を圖つて居る。此警察制度の改良の時、獨逸人のヘーンを傭入れた。そして十七年から廿四年まで足掛八年の間警保局長をして居る。此時に子爵が警保局長として非常に都合のよかつた事がある。それは當時の警部長は多くは薩人でなか〳〵六つかしかつた。處が清浦子は其以前永らく刑法治罪法などの講義をやつて居つたので、此等の警部長等と一種の情誼が出來て居つたらしい。それだから子の敏腕を揮ふに誠に都合よき狀態にあつた。そして廿四年の四月に警保局長をやめて直ちに貴族院議員になつた。そして洋行して廿五年に歸つた。洋行するに當つて監獄費國庫支辨の意見書を置土産にして行つた。それから子爵は誠に幸運の人であると思ふ事は、子爵が警保局長をやめて間もなく、湖南の露國皇太子の遭難事件があつた。當時の警保局長は小松原英太郎氏であつた。こういふ時に子爵が其局にゐなかつたといふのは確かに一つの幸運である。それから廿五年の例の選擧干涉騷ぎも子爵の留守中の事である。歸つて見ると選擧干涉やら、岐阜の震災やらで國内は大騷ぎで、白根專一が内務次官として大いに働いて居つた時代であつた。清浦子も閣外にあつて大いに政府の政策を助けた。此選擧干涉の爲めに松方内閣が倒れ、次いで伊藤の元老總出の内閣が出て來た。山縣公が所謂一介の武辨を以て司法大臣の職に就いた。就かなければならぬ事になつたのだ。當時弄花事件といふ大問題もあるし、又法典編纂の延期といふ難問題もある。山縣公は山田顯義伯に向て次官は誰にしたらよからうと相談したらしい、そして山田伯は清浦子を推薦したらしい。それで弄花事件とか法典編纂などの難問題大問題は清浦子が山縣公の威望によつてやつたのである。兒島などの首切役は主として清浦子が勤めたのである。二十九年松方内閣が出來た時に初めて司法大臣になつた。そして三十一年一月辭職し、議會解散があつて伊藤内閣が出來た。其時支那漫遊に出掛けた。漫遊中伊藤内閣の瓦解の事を聞き、十一月山縣内閣が出來た時再び司法大臣になつた。さうして三十三年十月に辭職した。伊藤内閣に星亨事件の起るや、貴族院に於て研究會を提げて大いに内閣に反抗した。三十四年六月桂内閣が出來た時三度目の司法大臣になつた。三十六年農商務大臣に轉任し、日比谷事件後暫らく内務大臣を兼任した。三十九年には樞密院に入つた。之は子爵の經歷の一斑であるが、要するに坦々として何等の障害なく、湖南事件や干涉事件などは皆其局に居らぬ時で、恰度順風に帆を上げた如き勢を以て一生の進路を開拓した人である。

▼議政壇上の人

清浦子爵は無論常識もあり又智の人でもあるが又辯の人である。徹頭徹尾議政壇上の人である。それで清浦子の進歩發展の跟を尋ね、先輩などに知らるゝ因緣を探つて見ると、多くは氏獨得の辯の力によつて居るやうである。第一に埼玉縣の縣屬から昇進の路を開いたのも辯の力である。即ち當時日本全國が五つの學區に分たれ、第一學區の總會は聖堂に於て開かれた。其時は清浦子も年が若いし、抱負も高いし、大氣焰を吐いて居る。清浦子は教育會議員の三番席であつたが、誰やらが「三番と聞いてヒヨコ〳〵立上り」といふ狂句をやつた位議論縱横であつた。第二に司法省に居つて刑法治罪法の說明をすることが餘程巧く出來た。それが書記官時代に大いに知られた主もなる原因である。それから其次には第一議會に警保局長としての答辯、之が又非常によく出來た。新聞紙條令の改正、出版條令の改正についての答辯は敵も味方も皆感服した。自由黨の議員の植木枝盛、末廣重恭などは政府攻擊でありながら敬服したのであつた。それから貴族院に入つて研究會の領袖として、あらゆる問題に逢着する每に研究會を代表して快辯を振つたのは世人の知る通りである。子爵の辯は子爵の今日あらしむるに最も大なる武器であつた。第一頭腦明晰にして音吐高朗、叙事明快なる故、飽くまで議政壇上の人と私は思つて居る。又子爵の先輩に知られ、出世するに至つたのも多くは辯の力であると思ふ。

▼高齢に似合はぬ新知識の人

子爵は廣瀨淡窓の咸宜園に學んで漢學の素養あるに加へて、歐洲の新智識を吸收するの機會に接觸した事が多い。第一刑法治罪法編纂の時にボアソナードについて法律及び佛蘭西學の研究をした。漢學ハ素養あり、あの才氣を以てしたから佛の大家を家に抱へたやうな位に得る所が多かつた。第二に警保局長として警察制度改正の時に獨人ヘーンを聘して獨逸の警察制度及び文物を知つた。之もゐながらにして獨逸に學んだと同じ結果を齎らした。之が清浦子の外國に學んだ事のないに拘らず、新知識を多量に有つて居る原因である。其點からいふと、まだ〳〵未來があつて、樞密院に隱居せらるゝは惜しい事と思ふ。序にいつて置くが子爵は非常の節制家、運動家で、身體も健康であるから、今後もなか〳〵事に堪へる人と思ふ。

▼郷里の爲めに盡す人

最後た同郷人としての私の立場からいふと、子爵は舊藩主の細川家にとつて御相談役として大いに盡力して居る。又肥後人の立てゝ居る肥後俱樂部、肥後奬學會等には會長をして居られ、又よく後進の子弟を世話し、熊本縣のあらゆる問題についていろ〳〵便宜を計られる。極く最近の事をいへば今度縣事業としてやつて居る埋築新地問題の如きも、黨派の盛んなる地方に拘らず縣論相一致してやるやうになつたのは子爵の力

に負ふ所が多い。又郷里の中學校には清浦文庫なるものを作り、地方の教育上に裨益を與へて居る。

△聞くもうるさき噂

伯爵　大隈重信

今は政治界の過渡期で、氣樂な人達はいろ〳〵な噂などをやつて居るが、さういふ事を批評する價値があるかどうか吾輩はよく知らん。然し清浦といふ人はなか〳〵策士のやうにも見える。山縣をどうとかして桂を宮中に祭り込んだとか、渡邊をどうとかして自分が宮内省に入るとか、或は自分で内閣を作らうとするとか、そんな噂をさるゝのもいくらか策士らしい所があるからの事であらう。然し吾輩はそんな噂は殆んど聞くもうるさい。吾輩はよく知らんが、なか〳〵悧巧な人ではあるやうだ。然し山縣によつて桂をどうするとか、渡邊をどうするとかいふ事はしない人のやうに思ふ。又さういふ時代はもう過ぎた。或元老の勢力を利用してどうするなどいふことは現在の進歩の上には有害なものである。よくは知らんが清浦もさういふ陰險な策士ではなからうと思ふ。さういふ策士ならば如何に才略ありと雖も世に有害なものと思ふ。之からは矢張り人物も現代の國家に適應し、文明に適應し、立憲政に適應する人物でなければならぬ。之まではさういふ事がなかつたが故に政治社會が總て墮落した。衆議院も貴族院も今日のやうな有樣で、何等の威嚴も信用もない。こんな形勢を繰り返す事ならば根本から不贊成である。さういふ陰險な、野卑な人と清浦を見るといふのは酷であらうと思ふ。

餘程難儀をして育つた人で薄給の屬吏から昇進した人であるから事務にはなか〳〵練達である。人間は矢張り難儀した人でなくてはならぬ。清浦は教育や法制の方面に働いて經驗を積んだ人で、相應の才略も經驗を有つた人であるが、世間にいふが如き噂は吾輩は全く聞くもうるさく感ずるのである。

△内閣組織も宮相も見込が無い

早川鐵治

清浦さんが内閣を組織するだらうなどいふ噂が此頃の新聞に出て居るが、兎角役人といふものは割がよいものである。政治家は誠に割のわるいもので、澤山の金錢を使つて政治界に打つて出ても一向に有難い事も無い。役人は月給を貰つて、それから恩給を貰つて、そして内閣組織の噂までされる。誠に割のよい話だ。清浦が政界に於て何れの點に勢力を有つて居るか、我輩はよく知らない。生れは閥族以外の人であるけれども山縣系の一屬僚から出世した。山縣系から出た大臣の數は多いが其中で一番早く大臣になつたのは確か白根專一と清浦との二人で、曾禰や桂よりも早い。芳川は山縣伊藤に對しては日清兩屬と云ふ間柄故純山縣系

とはいへぬ。其點からいふと、清浦は桂の先輩であらう。然し一日早く大臣になつたからとて必ずしも内閣組織の力があるとはいはれぬ。山本權兵衞なども吾輩が政務局長時代に軍務局長となつたものであるが今日では半元老の地位に居るではないか。桂の先輩であるからとて必ずしも内閣組織の役割は付くまい。山本抔は海軍に絶大の權力があり、今少し政界に力を得たならば、内閣を組織し得ぬとも限らぬが、清浦に至つては大に疑問である何分日清日露の二大戰役に於て勝利を得たものだから、それからずつとこつちは軍人跋扈、軍人萬能の世の中となつて居る。之から先きも當分はさうであらう。桂さんなども其勢を利用して總理大臣となつたのだ。今日ではどうしても陸海軍に勢力のある人で無くては旨く政治が出來ないそうだ。桂の次に官僚派を代表するものは先づ寺内といふ廻り合せであらう。官界の經歷からいへば寺内の少將時代に清浦が巳に司法大臣になつたのだから、其方の順序からいへば清浦が總理大臣になつた所で別に不思議はないが、どうも清浦は政治界に於て確乎たる根據がないし、サーベルも提げて居らぬし又薩長出身の人でもないし、只官界に長く居つて、官廳に仕事をした經驗が多いといふ丈けであるから、内閣組織は六つかしからうと思ふ。然し役人としては、若い時分から錬り上げて來た人丈けに事務に達者な人であるといふ事は吾々も早くから承知して居つた大藏の松尾、外務の淺田内務の清浦と云はれて名局長と稱されたのも早二十餘年前の昔である。今の日本に於ては元老の受けがよいといふ事も、内閣組織の一事件であるが、あの人は山縣公には受けがよい。又山縣といふ人も一度世話をしたら一生捨てぬといふ遣り口だ。然し親疎の點からいつたら後輩の平田とか桂とか寺内などいふ方が清浦よりも親しいだらうと思ふ。そして山縣以外の元老には清浦は餘り緣故が無いやうである。松方には更らに緣故がないやうだ。獨り松方さんばかりでなく、あの人はどうも薩派には丸で緣故が無いやうだ。又井上さんにも薄いやうに思ふ。山縣さんでも今日の桂さんとか、故人になつた白根專一ほどには重きを置いてゐない。清浦の全盛時代でも白根と比べては矢張り輕く見られて居つた。

然し清浦は熊本人である。由來熊本人は世の中の游泳術の達人である。德富蘇峯とか内田外相とかは熊本人の特徵をよくあらはして居る。餘程旨い巧妙な所がある。清浦も山縣系でありながら、或時には大隈などと、親善であるかの如く見せかけた事もある。然しそれは見せかけた丈けて、そんならといつて大隈と一所に本當に仕事をやらうといふ勇氣もない。只誰にでも一般に氣受けをよくやる人だ。國民黨あたりとでも近けば都合がよいと思へば色目を使ふ位の事はやる。然し之は熊本の昔からの國是ださうだ。即ち細川幽齋時代からさうであつた。幽齋は足利義昭に事へたる近臣で義昭の亡んだ時は、旨く織田家に取り入つて織田家に事へ、又織田家の亡ぶる時には、越中守忠興が明智の娘を貰つて居つたに拘らず巧みに秀吉に關係を着けた。關ケ原の役の時は誠につらい位置に立つて、舞鶴城などを圍まれた事があるが、それも上手に切り抜けて德川に事へることになつた。御維新の時でも佐幕黨であるか勤王黨であるか觀

後六十何萬石、實をいへば旗幟甚だ鮮明でなかつた。あれで智慧があつたからこそよかつたが、智慧が無ければ第二の筒井順慶だ。熊本の人は此國是を學んで、處世法がなか〳〵旨い。徳富もさうだし、内田もさうだ。清浦も矢張りさうであらう。時に彼はモト僧侶上りであるから、人の顏を見たり何かして世の中を渡ることは餘程上手らしい。御維新後閥族の盛んな時代に、兎に角小學校の教員から身を起して山縣系の大臣にまで漕ぎ附けた人であるから、確かに腕のある、旨い人に相違ない。彼の官界に於ける三十年間には閥族跋扈の時代もあり、ハイカラ全盛の時代もあり、又其反動の時代もあり、政黨を操縦せねばならぬ時代もあり、隨分いろ〳〵骨の折れた時代であつたが、國務大臣として其間を巧みに渡つて來たんだから、餘程悧巧者の、識のある人といはなくてはならぬ。然し今後内閣を組織する人であるかどうかは吾輩に分らない。尤も總理大臣だつてさせれば誰でも出來る。桂の第一次内閣の時には桂に總理大臣が勤まらうとは誰も信じなかつた。然し桂は立派にやつた。第二次の時には子爵の桂が伯となり侯となり、それから又公となつて、何時の間にか第一等の政治家に成り濟まして居る。我々が局長をしてゐた頃には桂は平（ヒラ）大臣の運動をしてゐたものだ。それは明治三十一年の春の頃であつた。人は馬鹿でない限りは、其位置に持つて行けば大抵の事は出來る。其中に苔がついて來る。苔がついて來れば誰にでも出來るのだ。然し今日内閣を組織するには、政黨も無視することが出來ず、又元老の同意も、宮中の御信用もなければならぬ。清浦の乾兒の波多野が宮内省に入つて居るから、清浦は宮内省に勢力があるといふが、然し波多野も今日では桂の直參かも知れぬ。桂と清浦との間柄はどうかといふに、若し其間が非常に親善であれば、清浦の都合がよからうが、今日ではさうも見えぬ。第一次桂内閣の時には清浦は桂の智嚢といはれた人であるが、第二次の時は閣員になつてゐない。之で以て見ても第一次の時ほど親しいかどうか疑問である。

又清浦は宮内大臣の野心があるなどいふ人もあるが、清浦は從來宮内省と何等の關係が無い人だ。御維新前は本願寺の門徒で勤王家でも何でもない。それから熊本藩といふものは勤王藩でない。米田狩猟頭の如き四十年君側に居る人もあるが、之は例外で、森武兵衛、山田信道などの外勤王家が無い。だから私には宮内大臣論も一寸受取れぬ。一體宮内大臣はなか〳〵面倒なものだ。今の渡邊宮相は桂さんともよし、又餘程上手に廻つて居るやうだから、一部の批難はあるけれども、先づ彼方邊がよからうと思ふ。金が出來たといふけれども、金の出來たのは歷代の宮相皆然りで、田中光顯でも土方久元でも皆金が出來た。金の出來ないのは伊藤さん丈けだ。兎に角宮内大臣はなか〳〵面倒なもので、普通の政治家の出來るものでもなし、渡邊千秋などが最適任者と思ふ。尤も渡邊は先帝に事へて最早や頽齢にも及んで居るから、自ら辭する時には　陛下御親任の人を以て之に代へらるゝであらうが、一體宮相は、初めは公卿の中から出て、後には宮中に縁故のある人から出たものだ。田中も田中顯助以來の勤王家だし、土方も土方楠左衛門といつて七卿落にお伴

じた人だ。今の渡邊に至つて初めて例外となつたが、勤王家でなければ、單に國務大臣であつたといふ丈けでは六つかしからうと思ふ。それで淸浦は此點に於ても私は見込がないやうに考へる。

△淸浦子爵

林田龜太郎

後進が先輩を評するは不遜である。故に折角の御賴みだが私は淸浦子爵を評する事は御斷り致します。併し子爵に就ての感想を語れとの事ならば一二御話し致しましよふ。

子爵は後進の者に對しては非常に親切に世話もし又引立てゝも下さる。現に肥後出身の者で一人として（內田外相を除く）子爵の庇護を受けぬ者はあるまい、新聞などにはよく子爵を大野心家のやうに書き立てゝ居るものもあるが、私は一向にそれを信じない。世人の所謂肥後人の權謀術數などいふ事は子爵には痕跡も認めぬ。又子爵は非常に淸廉で品行も非常に正しい私は現代の政治家中に在りても此點に就ては一二を爭ふべき人格と信ずる。加之子爵の演說を聞て御覽其音調といひ、態度といひ、實に見事なもので、今迄の內閣大臣の中で之に比すべき果して幾人ありましよふか。

子爵の功績については世間が已に知つて居るし、又世人の知つて居る以外の細かい事は私はよく知らない。政治家として、繪little

は乏しいかも知れぬが莊重な點は充分に有して居らるゝ。從つて赫々の光はないけれども失敗と云ふものは一もない。今世に才子は在り然れども莊重の人は乏し。莊重の政治家は在り然れども世界の大勢に通じ經綸に一點の私心なき者は夫れ果して幾人かある。藤公逝き桂公宮中に入りてより世人が子爵を未來の總理を以て擬する決して理なきにあらずと思考す。（談話）

和歌

尾上柴舟選

佐藤祿三郎

○

おごそかにあをき木の實を手にのせてそと久しうも見てある生命(いのち)

ひとりあれば涙わりなしひとり居の尊とき心けがすまじいぞ

篩もて粉などをふるふ音のする夜ふけひそかに秋はうまるる

嘉手納順絶

○

寸足らず闇の薄さにつつまるる命を思ふ恐ろしさかな

夜といふ繪の具の上に晝といふ繪の具をぬれる鮮やかさ見よ

君を見ず月日のたつをよろこびぬはた悲しみぬ二心とや

○

後藤むくろ

疲れたる午後の氣分のなつかしさまゝにねころぶ秋の草原

ながるゝは涙なるべし晩秋の午後のあかるき野の黄なる花

秋の日のにぶき感じもすてがたしこのまゝにあれこのまゝにあれ

人知れず泣いてあるよき咲きのこるひまはりの花鶏頭の花

○

高添翠

西洋の魔術女の如くにも消えゆく人とわれもなれかし

肋膜てはまだ中々に死ねぬてふ醫者の言葉を繰り返し聽く

どうしても人はつまらぬものなりと思へど死もまたつまらなさかな

○

安井竹美

中の間に針とるときの汝が心いかにしづかにくもりなからむ

袷をぬけてこしやと思ふ人の顔朧の前にあり息のくるしさ

○

田中清

裏山の雑木林につゞきたるほそながき畑蕎麥花咲けり

おもしろき人とのみ思ひ來し人の凡人なりし悲しき笑

きまぐれに泣いて見すればうろたへて機嫌をとりぬ弱き人かな

○　山邊溪韻

酒煙草やう／＼舌になれそめしわがあはれさに涙ぐまるゝ

さびしさにさからふ心たゞ一人狂者のごとく笑ひても見つ

身うごきもせてあるわれ等たゞ二人暮色のなかの父のつく息

○　西村桃里

思ふ事かきて送るは降伏の如しと思ひ火中するかな

樹作りが刈込むにつれ明るくも枝葉すかしに見ゆる秋空

秋の日の足らぬ心にふと思ふ黄昏時の酒のあぢなど

○　本間多市郎

ながながとわづらふ咽喉に泌みながら今日も雨降るうち伏になる

波に浮く鷗のゆるきみうごきは渚にうみてふせる身によし

○　前田黄昏

林木の影に小さくうすくまる夏の男のやせたる顔色

汽笛なる小蒸汽船の烟筒の黒くつかれをさそふひるすぎ

うれしくもはたくるしくも人々の噂の中に生きゆく二人

○　長谷川牛丸

親みし友の心のいつとけむ怒らせし吾死にたくもなる

何故か大聲あげて泣く事を心よろしく思ひしみたる

○　太田白翅

告知板に悲しき歌をかきしこととたゞそれだけの一日の日記

燈臺の紅き光りにほの見えて白くも浪のひるがへり行く

○　　　　鈴尾春醉

我を見れば必ず叱る母もなし世にひとり身のわれのわりなさ

我心ふと故里にあるごとし夜の明け方の室のともしび

泣きづかれ夕べしづかに歩み行くこの顔母よ見給ふなかれ

○　　　　鷲岡俊成

しのびやかに秋は來りぬうたゝ寢の酒場の女の髪にうなじに

いとかろきうらみごとにもおびえにしそのかみの日のこゝろ懷し

○　　　　田中清

新聞と萬年筆と原稿紙ほかなにもなし夏の小づくゑ

ものうげに濤は倒れぬ萎(しな)びたる乳のごとくも白帆は垂れぬ

○　　　　白川茂吉

一番好きな友にてありしが田舍にて巡査すときゝし時の哀しさ

遂に人並のこととしてゆかねばならぬかとしげくもそれのみ思ふこのごろ

○　　　　佐久良草迷

茫乎たるさ霧の中に國原は暮れてゆくなりあはれ上野

戶を引けば靑きさぎりに筑波嶺は浸るがごとし秋風のとぶ

○　　　　板谷漂葉

老祖母よ悲しからずや汝が孫は今夜病院に魘睡するぞや

ふと止めぬ妙な癖つくペン先に我がかたくなのさびしく現る

○　　　　高添翠

また會はむ事もあれかしまた會はむ事もあれかし老いてあれかし

かゝる歌をわれも詠む身となりぬてふそのことがまた悲しくなりぬ

○　　　　市橋栖川

雨の朝溫泉の香のなつかしや身體ふきつゝ思へり君を

わが寢臺家を出てむとせしときのさわがしさなど今も目にあり

○　柳　よしを

うら若き此旅人が莫蓙を着て行く高原の眞晝のこほろぎ

人よりはつむじまがりと呼はれても只自由なる天地をゆく

○　池田彩雨

つと入りて小暗き部屋にまちすりぬやがて默して灯を見守りぬ

ゆきゆきて街盡きし野の月見上げわれに返りし其の瞬間よ

○　戸田露子

放埓に男を弱きものとする女が憎やはつ秋にいる

天高く澄みとほりたる野邊の朝研ぎたる鎌をふりかざしゆく

○　中村三郎

父の眸その子の眸つめたくもはたと遇ひたる夜のきりぎりす

そば畑のあかるき風が遠く去る傾斜のはてに額見する海

○　吉水秀雄

ひそひそと話すに堪へて大聲に泣きし女のあはれなるかな

○　若海浪三

弱々とあたゝかみなき日ざしには白晝の夕べとかなしかりけり

○　守野午後草

燒けのこりし大たてものの蔭走るレールの雨にぬれ光る夕

○　土屋松枝

物思へ物思へとてかの人が頭の中に叫べる如し

○　實吉波矢雄

撒水車朝の街行くうしろより靜かにはしる初秋のかぜ

○　久金秋生

逢ひぬればわかき二人はより添うて爪摘みあへりなにごともなく

○　藤田訥鵡

レーゾルはわが喉もとをさわやかにゆききすちつと蘭をながめつ

○　西原微風

へとへとに疲れて見たきわが願ひかなはずなり

て久しくなりぬ

○　大眉朝果

雨に濡れていづこへかへるこほろぎかひたと見
入れば鳴きいてにけり

○　竹村天双

落しものしたかのやうに惜まるる何心なく語り
たる後

○　堀尾のぼる

うつらうつら我まどろめば悲しやな君の髪梳く
櫛の歯の鳴る

○　池尾紅花

寝不足の頭の重さ庭に出てカンナの花のすがれ
るを見る

○　村上夕人

あゝ少女かなしみの子の我をしもたのまんとす
る汝の素振りよ

病める眼にあてしガーゼに冷えびえと秋風通ふ
明るき夕べ

○　伊藤恕

眠るてふ一日(ひとひ)のをはりはやもきぬかくてぞわれ
も死に近づくや

○　坂東範幸

辻店のバーに強き酒をすゝるとき銀座のカフェ
ーがなつかしくなりぬ

○　岡田秋雨

君すてゝ緑酒のまむか緑酒すてゝ君を戀ひむか
いかにすべきか

○　宮本桂花

岸に沿ふて半丁程のポプラーに夕日のひかりう
す赤くさす

○　歌の宵女

惱やましく消毒の香の漂へる隔離舎の裏百舌鳥
ぞしば啼く

○　須賀紫浪

大刀根のお納戸いろの朝あけに泪ひえびえはて
しなく湧く

○　藤本香夢

稲妻の絶え間は淋し灯の一つづつこの村ぞこゝ
より見ゆるは

○　玉利美

氷嚢のあるかなきかも知らずして熟睡に入る君
の哀れさ

○ 由留木歌吉

浄瑠璃に涙にぬれて歸り來し其夜ばかりは秋もなつかし

○ 田村芳郎

他人の事そのまゝ他人の事として聞き得る我の少さき誇

○ 中田夢十

涙落ちてこはゞる顔に眞晝日の光ヶ苦し弱き心に

○ 土井牧子

前がみのふるへ我が手にふるゝ時男となりし心地するかな

○ 吉田花汀

あゝ故鄉かく言ひてだにおのづから涙するまでへだたりにけり

○ 坂部廣吉

この部屋に火鉢に對ひつつましく君の語るをききたき頃かな

○ 森白崖

不遇の子鰹會社のテーブルに筆ねぶり居り悲しき秋の日

○ 草見迷人

逃亡の子がかへり來し雪の日の膳にさびしや淺きさかずき

○ 樋口紅美

降りしめる冷たき土を踏む心地君に知られて幸多きかな

○ 大庭妖春

フラ〳〵とくびをゆらして熊のあり動物園の秋の靜けさ

○ 朝倉朝歌

うとましく何時かなりたる友の顔ふと思ひ出づ雨ひたに降る

○ 伊藤錄

われをそしるかなしきことのまたさらにふえゆく秋の一村の風

○ 大木多喜男

ひやゝけき袷の裏の肌ざはりめてつゝ朝の街をゆくかな

○ 田代落風

投げやりし「不二」の烟がいつまでもいつまでも草にいぶりてあるかな

○　　　　渡邊笛三
われつひに惡少年のかたわれか蟲の類かと髮かきむしる

○　　　　紅助
わがこゝろ馬に廣野をとぶが如踊りの前の樂の音を聞く

○　　　　叶ちはる
くらがりの夜の室をじつとみつむれは薄ら明るくなるがさびしき

○　　　　野々村淡霧
薄黃なる光線の映えてわが顏の凄くも見ゆる夜の鏡かな

○　　　　中山葵人
二三年に買ひたる本を取りいだしならべて笑める秋の宵かな

○　　　　中村紅夢
汗ばみし襟をふきしに黑きあとつきしハンケチ見てある心

○　　　　外山廉三
玉乘りのとんぼ返りをする子等の肌襦袢にもまつはれる秋

○　　　　葉山薫
蚊帳のつぎありありと眸に映る時朝の寐ざめのふと寂しかり

○　　　　廣瀨陽波
吾が足はまことなつかしこれのみぞ形よろしく生ひ立ちにけり

○　　　　中尾久
燕の古巣が日毎崩れゆくを見上げて母のかなしむ十月

○　　　　鈴木俊郎
朝な朝な夙く起き出でゝ日輪ををろがむ母の亡きは悲しき

○　　　　逸見紅夢
ねじけたる心がかなし秋の夜を蟋蟀のごとすみ佗びてなく

○　　　　田中壽夫
青ペンキ塗られしドアに葉鷄頭が色あざやかにさえて秋晴る

○　　　　湯澤迷步
今日もまた若き妹とむきあひて紫蘇の實をこく樂しき心

○　　　　青木白果
秋ざれは門の石垣ひま〳〵に韮の花などふるへ咲くかな

○　　　　槇原久子
秋風はビール會社の建物の屋根渡る時川の帆にふく

俳句

煤拂

高田蝶衣選

もの捨てし音も雨催ひ煤夕べ　雨霽人
竹徑に沓ねばる煤の名殘水　同
客迎ふ樹下用談も煤日かな　同
煤掃きし宵寢にひそと灯も消せり　同
煤拂つて寂寥の夜を四壁澄む　同
煤掃く日野に放つ鷄空も晴る　同
月に影す大杉や葉家煤燒ける　三石
水車休みを煤掃けば藪の晴れそよぐ　同
夜を煤に嵐聞く壽餅頒たれて　同
澁染めの網色も見て墻の煤も掃く　同
大額の煤拂ふ芭蕉晴るゝ寺　同
煤濟みし今朝晴を竹林も掃く　茶の門
開けずの門も煤の日に狐花咲いて　同
煤の戸の替へ離布も舟行かぬ川　同
船は皆よべに出て煤も拂ふ濱　同

船寄れど客もなし村寺煤日なる　同
煤の日の盜難に旅人疑へり　五黄
煤仕舞て庭木岩皺も掃除せり　同
庭泉に薦覆ふて煤を掃ける宿　同
一笈の書を出してすむ我煤日　同
水筋煤流る日や狩くらの布令　明兮
煤日納屋に大楔打ち繕へり　同
海苔屑の香たつ漉場や煤旦　同
海藻まじる煤塚に波汲ぶ磯　同
御文庫燒けて煤掃寂しかる　更二
猶系を離語して了へぬ煤拂　同
煤掃きの小諸の衆に來書あり　同
明け暮の讀經所も掃きぬ煤の香に　同
鶺鴒あづけに朝來しが母家煤掃す　杜桑子
煤に醉て顏ほてり軒の氷柱背む　同
煤仕舞の風呂あつし雪を婢がうめて　同
廐の煤雪に驅り出し留守なるを　同
庫裡普請終ふを待つ煤掃く事も　雨春草
煤拂ふ向河岸朝の霧裂くる　同
霜いたみの麥に捨つ掃ける掃のもの　同
一笑に附する旦暮の殘煤や　弟松子

釋迦寺の煤水漁る雁のあり　同
不老生煤掃くや堂上堂下佛　同
船宿は煤拂ふ頃碩佳し　楊杞子
隣人の晴れを舒して煤拂ふ朝　同
煤拂ふ船形沓の片われて　同
人手待ちし煤拂干汐雨となり　三光鳥
煤拂嫁がもの凡そ高干に　同
湖光ちらつく裏二階壁煤拂ふ　同
煤掃いて嫁せし日の思主の旅跡す　耳山
池落葉小照りて煤を掃く娼歌　同
煤一掃心のびしが寤さびる　同
煤掃きの果日の賜宴月もなき　國郎
江を渡る淋し娼樓の煤日見て　同
煤拂妻に秘す筐底の一事哉　同
誰れ迎ふ俄か人街は煤掃く日　水鳴子
水汲まんを阪下りぬ御堂煤掃いて　同
風馴れのにぶり樹や煤を掃ける寺　同
疎ら木を透く煤掃の家荷照る　香敬兒
斧の朽柄煤ばりてあり納屋を掃く旦　同
枯桑を撓め垣結ふ煤の暇　同
煤掃の人語の外の黄菊かな　湧漁聲

煤掃や海を渡りて着きし文　同
書替ゆる炊事五則や煤夕　雲洞
寄進心にお茶堂の煤拂ふ夕　同
月の雨の夜半に晴る煤を掃きし宿　三碧水
煤拂焚くもの庭に積まれあり　同
馬藥の大把煤に掃き捨てし　銀杏庵
煤掃の洗ひ惣取り後れたる　同
富みて歸る戸主迎ふ煤拂ひ居る　李邱
煤拂夕炊かんに筧水たえし　同
箕に盛りて運びつぐもの煤拂　梁生
松の間て仕舞の煤や掃き急ぐ　同
煤日和を亂れ飛ぶ鷺に浮樓晴る　冲雲
礒松に暮れ鳴く五位鷺を煤日きく　同
藪の日影澄む煤宿のほうけ木に　一幸
煤掃いて靜心を母の問はれける　同
僧多勢煤掃いて日課始む午後　天行子
酒家煤掃いて竈祭る灯の赤々と　同
町は煤日飛ぶ鳥に埃背さめせん　句瑠璃
煤終ひさゝやきもなく籠り居る　同
煤掃くと妹の機織り終ゆを待つ　琴星
禁猟守る山寺や煤日酒のあり　一箕

背配りも主が機智や煤はく日　馬風

煤掃に日の暮れ早しこぼれ村　笠聲

櫻島晴窓におぼろ煤拂ふ　水響

松下に軸梅下に額や煤拂　二巴子

佛洗ふ淸流もあり煤掃いて　思汀

臼に積む炊具あり煤にとざす家　觀葉樹

横川なる杉に來て煤靜まりぬ　刀水

殘柿一個爛るゝ日故家煤拂ふ　紫竹林

煤掃けば日和幸云ひ通る人　九天

煤の日の宵風呂に小雨僧も來て　鳳笑

煤仕舞ひ急ぐ夕棕梠の葉鳴り聞く　象眼

煤掃きの土間竈開く煙かな　歸雁

煤仕舞の背戸の水垣の月澄める　蘇枋子

煤掃きて落ちつけば浪もなき眠り　東皐（夢雪改）

課題　初空（拾句以下）十二月五日〆切

　　　寒梅（卅句以下）一月五日〆切

規定。用紙半紙、淡路假寓在高田蝶衣宛「中公句稿」と表記、

●新年號特別課題　新題の句（新年、冬、春）十二月五日限

投吟家諸君の見聞する年中行事名物及其他の飾物にして從來の季寄に漏れたるもの又は新事物△題數制限せず△各題別紙にし說明を詳記する事△句數一題に付拾句以下△原稿に住所氏名を明記の事

評論

ウッドロー、ウヰルソン

（當選せる米國新大統領）

一

今より二十一年前、微力なるウエスレヤン校の教鞭を抛ち、一躍、有力なるプリンストン大學の政治學教授となりたる人あり、顏面長く口唇締り、眼光烱々、人を射る、辯舌爽決、頭腦緻密、說く所整然として些の曖昧を許さず、理義透徹せざる所無し、居ること久しからずして、名聲隆々、米國東西の學生、相爭ふてその門に集るに至る、是時に當つて天下、彼が理想家たることを知る、學者たることを知る、然かも誰か彼か政事家たることを知らず、何んぞその遂に大統領たることを知らん哉、已に政事家たることを知らん哉、人間の運命、洵に料り知る可からざるものあり、一たび順潮に會せんか、功名望まずして來り、榮達求めずして至る、彼やプ校に教授たること十一年、擧げられてその總長として教務を見ること八年餘、富豪的學生と貴族的學生との反抗に惱み、貴族的身境面白からざる折柄、端なくも民主黨よりニユゼルシー州知事候補に擧げられき、然るに時恰も同州政權を左右せる共和黨が專恣と腐敗とに依りて民信を失へるに際し、彼や見事に敵派の金城鐵壁を破碎して、當選の榮を擔ひ、為めに全國の民主黨は「敵壘を奪ひ得たる勇將」として漸く彼に矚目するに至れりき、抑も何等の幸運ぞや、その結果二年の後（即ち本年七月）バルチモア民主黨大會は亦た彼を大統領候補に推薦し、人民は十一月五日の選擧に際し、ロオスエルト、タフトの兩雄の下に奔らずして彼の許に奔り、今や首尾善く大統領に當選す、人生一夢なりとせば、彼れは當さに夢中最も快味多き徑路に立てるものにあらずや、

彼とは何ぞや、民主黨の祖先たるトーマス、ジエフアソンと出生地を同うするウッドロー、ウヰルソン博士

是也、

二

ウヰルソン氏が幸運なりしが如く、民主黨も亦た幸運なりき、

蓋し南北戰爭以後約五十年、民主黨員にして大統領に擧げられたるは一クリーヴランド氏あるのみ、クリヴランド第二執政終りて以來十六年、共和黨はマッキンレー、ロオスエルト、タフトを擧げ、民主黨はブライアン氏を候補として三度び敗れ、パーカー氏を候補として一度び敗れたりき、然るに今やウヰルソン氏空前の大勝を博す、試みに下記の比較表を見よ、

選擧年	當選者	得票（選擧役の票數）	次點者	得票
一八九六	マクキンレー	二一七	ブライアン	一七一
一九〇〇	マッキンレー	二九二	ブライアン	一五五
一九〇四	ロオスエルト	三三九	パーカー	一四〇
一九〇八	タフト	三二一	ブライアン	一六二
一九一二	ウヰルソン	四四二	ロオスエルト	七七

是洵に絶大の勝利也、ウ氏が四百四十二票を得たるに對しロ氏は僅かに七十七票を得、第三位のタ氏に至ては僅かに十二票を得たるに過ぎざれば也、然かも此勝利を博せしめたる所以に至ては、民主黨の勢力回復よりも共和黨の分裂てふ勿怪の幸ひに依るもの多きを奈何せん。抑も米國大統領選擧は間接選擧に依る、即ち人民は選擧役（その州選出の上下兩院議員と同數の選擧役を各州より選出する規定也）を選擧し、選擧役は更らに大統領を選擧する組織たり、而して上記の如き多數の選擧役票數ウヰルソン氏に歸したる所以は如何と言ふに、民主黨が從前より多數の人民投票を得たる結果にあらずして、反對派投票分裂を見たるが爲めのみ、下記の表を見よ、

選擧年	民主黨候補	人民投票數	反對候補	人民投票數
一八九六	ブライアン	六、五〇二、九二五	マクキンレー	七、一〇四、七七九
一九〇〇	ブライアン	六、三五八、一三三	マツキンレー	七、二〇七、九二三
一九〇四	パーカー	五、〇七七、九七一	ロオスエルト	七、六二三、四八六
一九〇八	ブライアン	六、四〇九、一〇四	タフト	七、六七八、九〇八
一九一二	ウヰルソン	六、二九三、〇〇〇	ロオスエルト	四、一九二、〇〇〇
			タフト	三、五三七、〇〇〇

即ち知るウ氏に對する人民投票數は、三回敗北せるブ氏の得票よりも少きことを、是に至て民主黨たるものの誰がロ、タ兩派の分裂が勝利を齎らしたる幸運的出來事を感謝せざらん哉、蚌鷸爭つて漁夫の利となる、古人の喩語、眞に我を欺かざる也、

三

然らば則ちウォルソン氏は如何なる人ぞ、其來年三月實行せんとする政策は如何、

吾人は彼の當選を以て米國の慶事となさずんばあらず、先づ彼の略歴を記すれば則ち下記の如し、

一八五六年ワジニヤ州スタントンに生る△二十三歳プリンストン大學卒業文學士の稱號を受く△二十六歳ワーヂニヤ大學卒業法學士を受け同年辯護士となる△次でジョンスホプキンス大學入學三十歳にして哲學博士を受く△廿九歳より三十一歳迄ブリンマー女子大學教授たり次でウエスレヤ大學教授となり三十四歳の時ペリンストン大學政治學教授に擧げらる△教授在職十二年一九〇二年即ち十二年前に至りプリンストン大學總長となる△一昨年ニユゼルシー州知事に擧げられ本年七月民主黨大統領候補に選擧さる

要するに彼れや米國の碩儒也、憲法政治歴史の學に精通し、其好著「國會政治」の如き「政治汎論」「米國史」の如き天下學者の推稱、措かざる所也、然りと雖も彼は世の所謂専門家にあらず、自己の本職以外何物をも知らざる狭き賢者は彼の平素痛罵して止まざる所也、足一たびその書齋に入らんか、政治歴史等の著述以外、詩文哲學科學等諸子百家の書其中に充滿せり、又その平素詼諧百出なるが如き、辯舌文才共に希れに見る所なるが如き、いづれか彼の凡庸學者にあらざるを示さざるものぞや、

彼は又一片の理想家にあらずして實行家なり、由來米國の大學總長は學者たらんよりも寧ろ行政的手腕あるを要す、彼れプ大學に存るや、時に或は教授學生の激烈なる反抗を受けたるに係らず、巧みに其間に處して同大學の盛運今日の如くなるに至らしめたること、天下の共に驚嘆する所也、就中その州知事就任後、ニユゼルシーの腐政頓に革り、民庶狂喜の態あるが如き、何ぞ其卓絶せる巧手腕を立證せるものにあらざらん哉、

彼は又剛直嚴正、情實を無視し、信ずる所行はずんば止まず、形容的に言へば、彼は華盛頓の至誠と那波翁の勇氣とを幾分づゝ兼備せる良政事家と評するを得可き也、試みにその大學總長時代、飽く迄貴族主義、富豪的勢力が學窓を襲ふを制止するに力めたるを見よ更らに知事就任以後、自己の推擧者たる政治的ボス、スミスを排斥し、その上院議員たらんとする野心を破碎し去りたる經過を見よ、彼豈情實纒綿の裡に葬らるゝ現大統領タフト氏の類ならん哉、

四

然り、吾人は彼の過去に照し、必らず有爲有能の大統領たる可きを知る、然らば則ち彼の執政は如何なる

政策を執らんとする乎、

吾人は此疑問に答ふるの捷路が七月上旬バルチモア市民主黨全國大會決議の同黨綱領に依るに在るを信ずるものなり、而して該綱領に見れば、先づ民主黨がタフト執政時代以上に、眞面目にツラスト撲滅策を講ず可きを感ぜずんばあらず、綱領中に曰く

我黨はツラスト及ツラストの役員等に對して猛烈に刑、民兩訴訟を提起し、又必要なる新法律制定を試み、以て一切ツラストが米國に存在するを禁止せざる可からざるを主張す、共和黨執政がスタンダード石油會社、煙草ツラストと妥協し、且つ法廷が明かに排ツラスト法中の刑事規定に違反すと聲明せるに係らず刑事訴訟を提起せざるは、我黨が否認せざるを得ざる所なり、

則ち知る民主黨は現共和黨行政以上にツラスト征伐を斷行せんとするものなるを、然りと雖も對ツラスト刑事訴訟は共和、進歩兩黨亦た之を否認せず、若しそれ眞に他の兩黨と主張相異る問題に至ては、關税改革、非帝國主義、海軍擴張反對の三者に存せずんばあらざる也、

之を關税改革に見ん乎、タフト氏の共和黨は其政綱に於て「我黨は玆に再び保護關税に對する信仰を宣明す」と叫び、ロオスエルト氏の進歩黨は亦た其政綱に於て「我黨は米國及外國間の競爭狀態を均等にするが如き保護主義を信ず」と說けり、堅白異同の詭辯は如何やうにも弄するを得可けれども、保護論者たるものに向つて關税低減を希望するは、高利貸に向つて慈善資金を求むると何の擇ぶ所か之あらん、從て米國の關税低減は、其政綱に於て明かに

「我黨は現在の高率に且つ殆んど禁止的なる關税率の低減的修正を主張す」

と言明せる民主黨に求むるの外無きは瞭々昭々たるにあらずや、

之を非帝國主義に見ん乎、共和黨、進歩黨共に現在の殖民政策を固持せるに反し、民主黨に至ては獨り明かに非帝國主義を宣言せり、曰く

「我黨は過去三回の大會に於て聲明せる帝國主義反對の立場を再び玆に聲明す、我黨は帝國主義を目して、徒らに吾人に絶大なる費用を負擔せしめ、勢力を齎らさずして却て衰弱を來さしめ、我國民にその根底とする自治主義を放棄せりと言ふ非難を受けしむる誤謬的政策となし、深く之を否認す、我黨は玆

國民が比律賓に堅固なる政府確立せば直ちにその獨立を承認する志を有する旨を宣明せんと欲す」

讀み來つて一言の加ふ可き無きを見る、而して海軍政策に至ては、共和黨及び進歩黨の政綱、共に其の擴張を主張せるに反し、民主黨政綱は唯だ

「相當の比例を失はざる海軍」

の建造を主張せるに止まれるのみならず、他方に於て經費節減の必要を説くこと詳なるが故に、其少くとも共和黨時代より縮小政策に傾く可きは想像するに難からず、況んや今春民主黨多數を占めたる下院が戰艦二隻建造を否決したるは（尤も上院の反對ありて止む無く一隻建造を協定したれども）、其決心を示せるの感あるに於てをや、

之を要するにウヰルソン氏執政が如何なる政治を行はんとする乎は、自ら瞭然たり、唯望むらくは學者的政事家が、大統領執政に於ても、亦知事時代の如く成功の實を擧げんことを、思ふにウ氏の雄腕は必らず天下の期待に辜負することと無かる可き也、

土耳其軍連戰連敗

十月上旬以來、土耳其軍連戰連敗す、勃牙利軍はキルク、キリセ及びルレ、ブルガスを陷れ、チヤタルチヤに迫り、君斯丹丁堡危く、塞爾比軍はクマノウオ、ウスクフを占領し、サロニカ亦た塞希勃三軍の手に落つ、武力を以て國を建て世に誇りたる半月旗の末路、何ぞ其れ脆きや、然かも是恐らくは土國政事家、軍人、内訌を事とし、共同國を護る雅量を缺きたる罪重きにあらん、

事茲に至ては土耳其帝國も、やがて歐洲より放逐せられて亞細亞的邦國に復歸するの外無かる可し、吁嗟國家興亡の姿、眼前に在り悲劇を尋ぬるもの、亦た何ぞ必らずしも歴史を溯るを要せん哉、（懷沙隱客）

新刊批評

▲哲人主義

田中王堂著　廣文堂發行

現代の日本文明は不具の發達を爲してゐると謂つてよい。一方に物質文明が一代の面目を一變さしたと同時に、それに伴ふべき精神文明が無い。物質文明によつて複雑になつた我々の生活を、統一し指導するに足る

所の新道德がない。頑迷固陋の頭株は舊來の道德を墨守して時代の推移と要求とに思ひ及ばず。新しい空氣の呼吸によつて生きんとする青年は此等因襲の無意義と無權威とに疲れて、一身の歸趨に惑うてゐる。外徒らに粉飾の美觀を裝うても內に歸適の方針なくんば國家の前途又甚だ憂ふべきものがあるではなからうか。

此時に當つて、明晰なる頭腦と、高邁なる卓見と、眞摯なる態度とを以て一代の文運を判批し、實驗理想主義の旗幟を鮮明にして政治に道德に文藝に將た社會萬般に亘つて、指標となり木鐸とならんとする氏の如き思想家は、今の世に於て吾人の最も尊敬し渇仰する所のものである。

本書は王堂氏が所謂自覺の作はざる日本の現代を救濟し統一せん爲めには氏の哲人主義を以てせざるべからざる所以を說き、哲學は漠然たる抽象的概念を冥想し、不可思議荒唐の妄想を逞うするの謂ではない。飽く迄も民衆の欲望や活動や職業を會得したる上に、夫等を綜合し統一するを職とせなければならぬ。諸科學の興味と意義と志向とを無視せざる限り、第一義に於て人生觀又は處生法を案出せねばならぬと說いて居る。

本書上下二卷、收むる所の重なるものは、現代生活の意義。印象主義より象徵主義へ、岩野泡鳴氏の人生觀及び藝術觀を論ず。トルストイの絕對主義を論す。島村抱月氏の自然主義を論ず等外十數題。所論は別として、氏が現實を尊重し　現實を理解し、現實に立脚しながら、更に一步晴欲の半面たる新理想を把持して、論理的に明快なる議論を戰す所、假令多少論理に捉はれ形式に拘泥して、現實に突入すること淺く、其議論の情熱に乏しき憾あるにせよ、確かに現代稀に觀るの好著である。此書が尙未だ一般の歡迎を買はないとすれば、吾人はいかに日本の思想界が貧弱であるかを、又しても思はざるを得ない。(定價上下合二圓五拾錢)

▲二十世紀　　松居駿河町人譯　春陽堂發行

バアナアド・ショウの原作、ユー・ネバー・キヤン・テルの移譯であつて、嘗て早稻田文學に連載せられたる喜劇四幕である。喜劇と言つても我國家式のそれとは無論違つて、思想の衝突、矛盾から來る上品な喜劇で、皮肉もあり、罵倒もあり、諷刺もあれば冷笑もある、現代の世相が遺憾なく裸出して眼前に衝き付けられたる感がある。此譯文が飜譯脚本の上乘なることは逍遙氏の序文によつて明である。現代人は必ず一讀すべき價値があらう。(定價五十五錢)

▲大將乃木　　横山健堂著　敬文堂發行

久しく其出版を豫望せられて、尙今日迄其運びに至らなかつた書である。大將沒後、大將を敍するもの頗る多いが、本書は少くとも夫等と其選を異にせんことを期してをる。而して黑頭巾氏一流の興趣多き筆致は、乃木傳以外に讀者の期待を滿足せしめるものあるを疑はない。挿入されたる拾數葉の寫眞も、亦氏の好尙を表して興味のあるものである。(定價二圓二十錢)

▲通俗講話の理論と方法　　加藤咄堂著　丙午出版社發行

通俗講話に妙を得たる咄堂氏が通俗講話の理論と方法とを說くに通俗講話體を以てしたるもの也。教育上通俗講話の價値から說起して譬喩引例、最も通俗講話に成功したるものと謂ふべし。(定價九十錢)

▲無遠慮に申上候　　福澤桃介著　實業之世界社發行

實業界に關する著書が一種の社會觀、人生觀を披瀝したるものにして、

著者獨特の愉快なる面目書中に活躍す。(定價六十錢)

▲大政紀要　内務省藏版　大野書店發行

明治天皇陛下の敕撰によつて、岩倉山縣諸公編修委員となつて、我邦歷朝大政の綱要を略記したるものにして、南北朝正閏問題に鐵槌を加へたるは實に本書也と(定價壹圓六十錢)

▲死か藝術か　若山牧水著　東雲堂發行

「別離」以後の作五百首を集めたものである。自然に對して自己の寂しき歎懷を吐けるものが多い。(定價七十錢)

▲青空　吉江孤雁著　中興館發行

狹い人間といふものに執着することなしに、廣く自然といふものに對して、懐しい同感とデリケート感覺とを有つてをるものは現文壇孤雁氏を措いて外にあるまい。本書は氏の言ふ心の目醒めと情緒の伸張との自然に對する直接經驗を形に表はさんとしたものである。蓋し今の文壇に清新の氣を與ふるものであらう。(定價四十五錢)

▲マヒルノ山　森園天涙作　本郷書院發行

著者が生活の第一期を劃する紀念の短歌集也。小さき心の影也。比較的眞摯の氣溢る。裝幀いかにも詩集らしくて佳し。(定價五十錢)

▲新しき敍事文　山下寂水著　尚文館發行

章を分ち項を分つて文體を區別し各々作例を擧げて解説を施すあたり丁寧親切也。初學者に應む。(定價五十錢)

▲英語練習ノート　若月保治編　東亞堂發行

中學生が學業の閑に讀んでよき本也(定價四十八錢)

▲陰影　前田夕暮著　白日社發行

「收穫」の作者が第二の詩集也。網中女に對する情懷は若き人の胸裡に響くもの多し。(定價八十錢)

▲大奈翁日記　大住舜・神村興之共譯　東亞堂發行

世界の英雄ナポレオンが一代の歷史は眞に好個絕大の詩篇也。本書那翁自筆の日記を蒐めたるもの、扮飾なきナポレオンを知らんと欲する者は讀め。(正價壹圓五拾錢)

▲血氣時代の井上侯　伊藤仁太郎著　東亞堂發行

痴遊氏の講演は世既に定評あり。本書亦面白 讀みゆく中に井上侯の面目を伺ふことを得。(定價壹圓四十錢)

▲店員訓　瀬良俊喜太著　良明堂發行

店員の爲めを思うて諄々と敎ふる所ある書也。(定價三十五錢)

▲ポケツト俳諧季寄　今井柏浦編　博文館發行

俳諧を嗜むものにとつて重寶な本也。(定價四十錢)

▲通俗結核豫防法及養生法　石神亨著　青木嵩山堂發行

肺病になるのを恐るゝ者は讀んでおく必要もあるべし。(定價十五錢)

哀れに傷ましい思出である。

▲噫鎮遠　猪狩庄五郎著　明治出版社發行

▲ルードの出來事　マトン著　三才社取次

今から凡そ五十五年前に佛蘭西のルードといふ一小邑に俄に泉水が湧出した。其水を分析してみても普通の水と少しも異らないのに、不思議な事には此水を飲み此水に浴した患者は、いかなる難症も忽ちに平癒するといふ事實？がある。諸外國は非常なる興味を以て此出來事を注視してをるのに日本は何故に一言の此事に及ぶものなきやとの著者の意見により紹介せられたものが此書である。此書を讀んで此奇異なる事實をあらゆる方面から研究して見るのも亦面白からう。(定價七十五錢)

▲乃木大將論　人物社同人編　人物社發行

乃木大將の自殺は眠れる我國民に大なる鐵槌の一打を與へた。果然反響はあらゆる方面に起つた。此書與論の趣く所の大體を知るを得。(定價二十五錢)

▲九郎判官　笹川臨風著　同文館發行

萬朝報に連載された歴史小説である。行文流暢。歴史物語としては最も興味のあるものである。所謂健全なる讀物として青年諸君に推奨する。(定價壹圓)

▲蒙古王照山敗戦録　眞繼雲山著　雲山堂發行

犬養毅氏題して「敗亦榮」と言ふ。倒れても砂を掴んで立つは則蒙古王の意氣也。此書客觀的に見て能く遼東境裡の消息を語るものである。(定價八十錢)

▲新水滸傳　伊藤銀月著　鈴木書店發行

東洋の安危を叙したる小説也。而も小説にして歴史也。東洋の形勢に關し小説以外に得る所ある書也。又然らざれば比較的價値の少き書也。(定價七十錢)

▲維新五人男　清水孝教著　明治出版社發行

あるがまゝの歴史を書いて誠實な批評を加へんとする目的の下に、江藤、後藤、高杉、勝、西郷の五人を書いたものである。これからの青年は段々維新といふものに緣が遠くなつて來てをるから、斯ういふ書物を讀むのもよからう。(定價壹圓二十錢)

▲歐米の悪影響　前田不二三著　丸山舍書籍部發行

物質的文明の進歩は歐米の齎した賜である。それと同時に色々の悪影響も輸入されて來た。由來日本人は模倣好きの國民である。新物喰ひである。さうしてる間に日本固有の美點長所を忘れて了ひはしまいか。今の場合本書の一讀を促す。(定價壹圓)

▲豐臣秀吉　綠園生著　東亞堂發行

綠園氏は筆の達者な人也。面白く讀ませる手腕を有す。(定價壹圓二十錢)

▲コドモノ書　山口伊策編　中西屋發行

どんな下らないものでも誠實でありさへすれば何等かの意義がそこに見出される。何の考へもなく草紙や壁に落書をした子供の繪にも何等かの意味が伺はれるであらう。此篇五才から八才に至る女兒と、四才四ケ月から七才十一ヶ月に至る男兒の繪を集めて非常に趣味がある。(定價五十錢)

▲お伽圖書館　鹿島佐太郎著　中西屋發行

教訓的なものも良いには良いだらうが、何もさう理屈ばつたことばかり言はずと面白く讀ませる本もいゝじやないかと言つたやうな調子で坊ちやん孃ちやんのために書いた本であります。紙も良し、美しい本です。(定價七十錢)

▲乃木大將自殺論　鹿島增藏著　書道研究會發行

片々たる小冊子であるが灸所を衝いてゐる所もある。(定價五錢)

▲教育勅語と宗教　龜谷天尊著　名教學會出版部發行

我教育勅語は實に我國教育の根本義を定められたものである。此書は教育勅語を大本として宗教も倫理も將た教育も皆茲に其源を發してをるのを説いたものである。(定價五十錢)

▲勅語讀本　山海堂發行

勅語に宣はせられたる所を敷衍して、人として子として、將た臣としての道を教ふる所至れりと謂ふべし。(定價二十錢)

▲カーライル論説集　高橋五郎譯　有倫堂發行

由來カーライルの文章は難解を以て知らる。是れ其一代の名文をしてポピユラーたらしめざる怨みの因を爲す。此書奔放自由なる詩人の才筆を譯して、其眞を捉へ其微を穿たんことを力むる甚だ忠實也。(定價八十五錢)

▲青年の敵　野依秀一著　實業の世界社發行

著者は手の人也、口の人也、活動の人也、ゲンヽ氣の人也。本書は新渡戸博士を對手取りて其所論に向つて殆んど人身攻擊的の筆鋒を浴せかけたるもの、讀んで痛快ならざるにあらずと雖も、博士の如き一代の名士に對しては今少し謹嚴の態度あらんことを望む。只之を客觀的に見る時、そこに日本の現代なるものが開展せらるゝであらう。(定價一圓廿錢)

▲高節百話　内山散木樓著　萬劵書房發行

本書は乃木大將の偉大なる人格を永く記念せんが爲めに編みたるもの也。(定價一圓)

▲加賀騷動記　山路愛山著　敬文館發行

序して曰ふ。史學の批判よりすれば御家騷動は政黨の爭にして幾篇の權力爭奪史也。誠に之を研究するは政治的の人間を研究するものにして、科學的なればなる程、政界の陰陽二面に存在する秘密の鍵を捉へ得べきもの也と。目出度し〳〵に終る勸善懲惡の譯釋から離れて眞面目に之を研究するは興味あり裨益ある試みと言ふべし。(定價七十五錢)

▲足利十五代史　國史研究會編纂　大同館發行

足利時代は一概に暗黑時代として葬むらるべきではない。史家にとつ

て興味ある研究資料を提供する時代と言つてよい。此書は誠實なる史家的態度を以て十五代の歴史を叙述したるもの、文章紙質共に間然する處無し。良書と謂ふべきである。（定價壹圓五十錢）

▲口語文語對照辭典　古川喜九郎編　博報堂發行

口語體の文章が發達してから文章語とは益々縁遠くなつて其間に隔たりが出來た今日、此書も亦必要な物であらう。（定價五十錢）

▲夜　吉井勇著　春陽堂發行

現代文藝叢書第十七編也。土曜劇場の脚本「夜」及「白き鳥」「鼠」の三編を收む。（定價二十五錢）

▲新譯演義三國志（下）　久保天隨譯補　至誠堂發行

近代文學とは縁の遠い支那の小說を、忠實に譯出せられたる譯者の努力を多とす。（定價一圓廿錢）

▲第三快傑傳　伊藤痴遊著　東亞堂發行

第一、第二の快傑傳に漏れたるものを收む。肩の張らぬ面白き著也。（定價壹圓）

▲エピクテタス遺訓　高橋五郎譯　玄黃社發行

チーチング　オブ、エピクテタスを譯したるもの也。（定價壹圓）

▲乃木大將言行錄　鹿野千代夫著　東亞堂發行

題名の如く言行錄也。大將が平素の面目躍如として大將傳以外に親しく大將に接するの感あらしむ。（定價壹圓五十錢）

▲ナポレオン奇譚　岡本日亭譯補　東亞堂發行

コナンドイルの小說を譯したるもの也。史傳以外に一代の偉人ナポレオンの面目窺はれて面白し。（定價九十錢）

▲京城雜筆（定價三十五錢）　山縣五十雄著　内外出版協會發行

▲不破數右衞門（定價七十五錢）　春風樓主人著　隆文館發行

▲北方漁業の栞（非賣品）　樺太建網漁業水産組合聯合會著兼發行

▲武士としては（定價七十錢）　足立四郎吉著　中外出版社發行

東京帝國大學文科大學教師 哲學博士ラファエル・フォン・ケーベル先生序
東京帝國大學文科大學講師 文學博士波多野精一先生序 文學士安倍能成先生譯

大思想家の人生觀

◉洋裝頗美本紙數七百六十頁正價金參圓五十錢 送費拾六錢

本書は現時世界思想界の最大權威たる、オイケン博士の著書中、最も一般的にして最も萬人に切實なる代表的名著ヂー・レーベンスアンシャウウンゲン・デヤ・グローセン・デンカーを譯せるもの、プラトー以來現代に至る迄、流れて盡きざる生ける思想の大潮流を叙せし人生問題の發展史にして、又た哲學者、宗教家、文豪、詩人、經濟學者、自然科學者、社會主義者等、思想界の各方面に亙り、苟も吾人が生活の中心問題に寄與する所の諸偉人は、悉く網羅して洩す所なき古今大思想家の内面史也。オイケン博士の叙述と批評とが一方に於て客觀的なる公平と忠實とを得て、他方に於て現代の苦闘に光明を與へんとする熱烈なる豫言者的主張を含めるは眞に思想界の一大異彩とする所。世界に於ける最高最新の思想を解せんと欲する者、あまりに現代に忠實なるが故に、却て現代に滿足する能はざる人は、必ず此書に依て多大の希望を得ん。

獨逸エナ大學教授
ルドルフ・オイケン博士原著
（原著者自筆序文挿入）

日本に於けるオイケン紹介の卒先者
（最新刊）

京都帝國大學文科大學教授
文學博士
桑木嚴翼先生新著

哲學綱要

著者が『哲學概論』以後の一大著述爾來十幾年間の蘊蓄は収めて本書四百頁に充實せり

（全壹册） 印刷中

（中付の一）

東京市神田今川橋大通
東亞堂
電話本局八八四
振替東京一七一

此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

●世界的名著の唯一譯書●

農學士町井正路譯
山中古洞畫伯裝幀

好評●ゲーテ ファウスト●嘖々

●原書並英譯書中の名書を採りたる精巧三色版及寫眞銅版の口繪挿畫十六葉挿入●頰美裝全一冊定價金一圓送料八錢

時事新報評曰

●(前略)高橋氏のは原文を其儘に譯したといふだけで、あの●難解な大戲曲が逆も一般人にはこの譯書だけでは理解され●さうにもない其點にゆくと新渡戸博士のは泰西諸國によくある所謂「ファウスト」物語で(中略)隨つて原文其儘の紹介ではないのだ、然るに本書の譯者は前二者の中間に居り原文の紹介をつとめながら而も平易にして興味饒からんことを期し自ら叫んで文學者でもなければ世の所謂文士でもないと言つては居るが譯筆は流暢達意專門家の手に成つたものと稱しても恥かしくない書きこなしだ(中略)この書によつて難解の「ファウスト」一篇の作意が闡明せられ頃者再燃し來つた古文學の研究に多大の效果を齎らすものがあるとするならばそは本書の譯者の努力に對する應酬なのである敢て世の讀書子にこの譯書を薦めて一讀を促す云々

東京日々新報評曰

●ファウストが文豪ゲーテの半世の思索を絞つたものであ●る事は今更いふ迄もない、ファウストの譯本も從來數種は●これあるやうに思ふ併し乍ら此町井君の譯書のやうに親切な研究的な態度なものは未だこれなきと信ずる(中略)此書はゲーテのファウスト譯であると今時に又一面ファウストといふ材を持來つて縱横表裏から哲學的に深く研究する態度である、之れを讀で居る爲に何か斯う迫つた感じがゾクゾクと起つて來るのは全く譯者の態度の眞面目から來た獲物であらうと信ずる一體の譯風も穩當だしファウストの作出さるゝ系統傳說も却々よく書かれてある(下略)

万朝報評

●(前略)此劇の完成には實に前後六十年間の心血が注がれて居●る此著が世界の文壇に不朽の生命を有して居るのも偶然では●ない譯者は所謂文士でない現に實業に從事して居る人だ而もファウストは彼が會心の書で此譯本を完成せんが爲に前後十七年を費したと云ふ譯語が韻文式の難解なのでなく散文的に最も明快に言文一致で書いてあるのは何よりも嬉しい解題も註解も極めて親切である實費出版で營利を目的とせざる所にも本書の價値はおのづから窺はれるのである云々

學生評曰

●(上略)内容の整頓して居ることは眞に驚くばかりである譯文●も雅俗折衷の口語體で思切つて自由に筆を運びそれで居て原●著の價値は少しも損はれ居ないやうに思ふ自叙、解題、註解等にも自信と學識とが輝いて居る、挿畫とした十數葉の珍らしい寫眞が文著者の苦心を語り顏である本職の文學連中は本書を讀んで何と思ふだらふか(下略)

發賣所 東京神田 東京堂 電話本局二四八番 振替東京二七〇番

信用なき店舗及卑猥なる賣品の廣告掲載は謝絶す

(中付の二)

岡崎雪聲先生が畢生の傑作



眞に是れ萬古不朽の好紀念

故乃木將軍鑄銅胸像の提供

美術界に嘖々の名聲を馳せる鑄金大家岡崎雪聲先生が其愛婿渡邊長男氏と共に學習院に於て同院教授諸氏の熱誠なる鑑査の下に粉骨の赤誠を捧げて製作されたる故乃木將軍閣下の胸像は考證の密描寫の妙共に完絶する逸品にして絶代の忠雄乃木將軍の英姿を千歲に傳ふべき至善至高の美術的彫像として各新聞紙上筆を揃へて賞賛せられたる所也

既に學習院の鑑査と石黒男爵、大舘集作、玉木少佐其他遺族舊知諸氏の嚴密なる批評を經たる本胸像が將軍の風丰を髣髴する點に於て間然する所なきは云ふを俟たず然し乍ら其眞價値は寧ろ故將軍の精神上の面目を發揮する點に存し其高潔なる風格と溫乎たる性情の偲はるゝ所恰も生ける將軍に接するの感あらしめ殊に深刻にして幽遠なる彫刻の美は青銅の色彩と相俟つて一種崇高の氣を湛へ追慕の念をして更に一層深からしむる者あるを見る蓋し一基の胸像、克く幾百頁の傳記に勝り遙に甚大なる敎訓と痛切なる感慨を與ふるに充分也。作者中岡崎先生は二重橋畔楠公銅像の作者渡邊氏は廣瀨中佐銅像の作者にして、特に岡崎先生が前に先帝の御銅像謹製の光榮に浴し、同時に近き將來桃山々麓に建設せらるべき乃木將軍銅像の作者たるべきは誠に趣味多き對照と云ふべく此將軍の胸像をして一層價値あり權威あらしむる所以也

而も弊店の提供價格は眞に是れ實費の例外的廉價にして千金を以てするも容易に購ひ得ざる雪聲先生の傑作を極めて僅少なる代價を以て購求し得べき空前の機會に外ならず併し乍ら弊店が此の如き例外的廉價を以て申込に應じ得べき數は其性質上一定の制限あるが故に申込の豫定數に達する時は遺憾乍ら申込を謝絶して一切其需めに應ぜざるべし幸に此機を逸せず一刻も猶豫なく申込あらん事を

頒布實費

第壹號高サ八寸 壹體箱共金拾五圓也
第貳號高サ一尺同（岡崎先生箱書付）金貳拾五圓也
第參號高サ一尺五寸同 金七拾五圓也

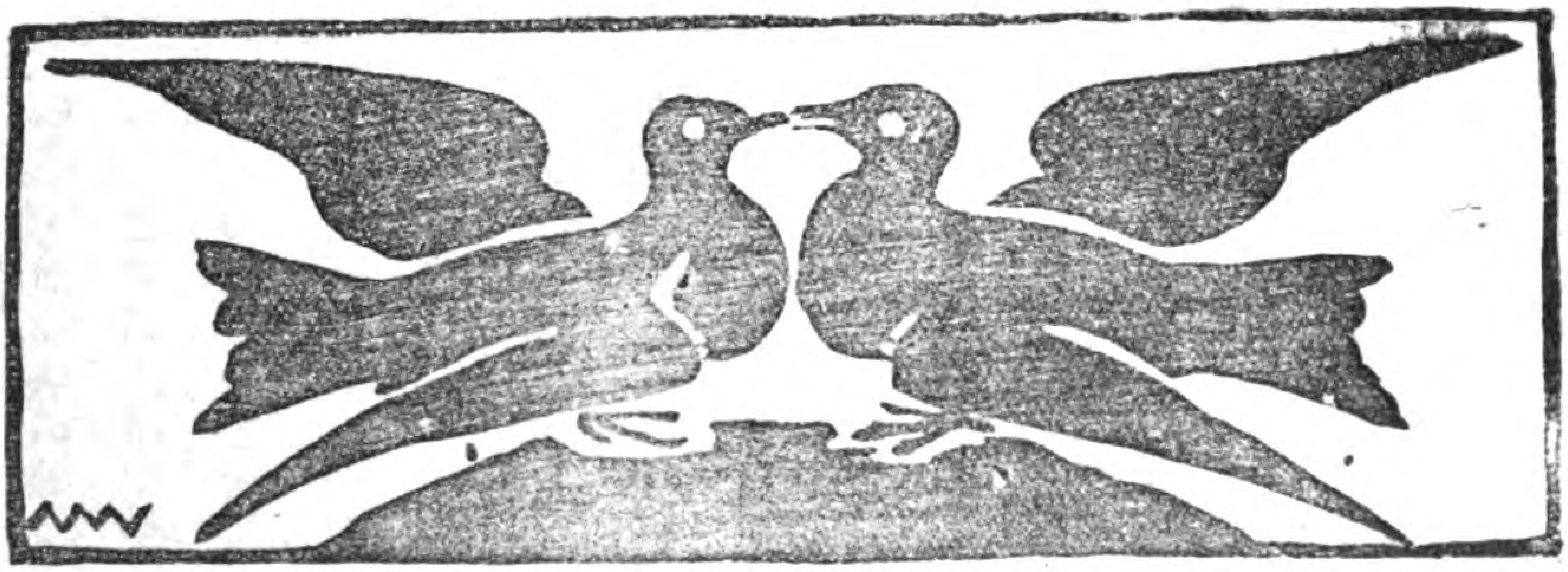
寫眞見本並に說明書は御申越次第御送呈申上候

市内は無料配達市外は送料を申受く

頒布元 東京京橋區尾張町二丁目十三番地 **中村美術店** 電話新橋二五三〇番 振替口座東京九三二三番

（中付の四）

信用なき店舗及び卑猥なる賣品の廣告の掲載は謝絶す



せつ子

小山内薫

（一）

小さとの一件が妙な羽目になつてから、正雄は益々福井さんと親しくなつた。福井さんは多少正雄を氣の毒に思つたのである。正雄は福井さんに對して何か濟まない事をしたやうな氣がしたのである。小さとは「つまり旦那が」さうさせたんだとは言つたが、正雄はそれを信じなかつた。正雄はやはり男の友達を頼りにしたかつた、そして女を疑ひたかつた。

十月の朔日であつた。正雄は福井さんに連れられて、築地の本願寺へ行つた。寺内の正心寺といふ寺に福井家先祖代々の墓があるのである。福井さんはどんなに遊びにほうけてゐる時でも、決して朔日といふ日を忘れなかつた。朔日の午前か午後には何を措いてもきつと正心寺へお參りをした。

「僕がこんな事をしてゐられるのも先祖のお蔭だからね。まあ墓参りだけは缺かずにするのさ。」

福井さんはいつも斯う言つた。正雄は福井さんが「遊ぶ人」であつても、何處か斯ういふ點に變つた所のあるのを常に懷しく思つてゐたので、いつも墓參りには一緒に行つた。腰巾着のやうに福井さんの周圍を離れなかつた藝人達も、このお墓參りの供だけは厭がつて、誰も一緒に行く者が無かつたのである。

福井さんは寺内の花屋で、樒を十幾束か買つた。この數もいつも極つてゐるのである。それから、櫻の木へ草鞋を投げて遊んでゐた墓掃除をする啞の男を呼んだ。この男も福井さんのお馴染で、福井さんの顏が見えると何處にゐても直ぐ飛んで來るのである。

啞は福井さんから樒の束を受け取ると、どん／＼正心寺の方へ驅けて行つた。二人が寺へ這入る時分には、墓はもう大抵洗はれてゐた。多くの墓の中に飛び／＼に離れてゐる福井家の墓を六つか七つ掃除するのであるが、啞は墓の在りかを一々よく知つてゐた。もう年數が立つて、字の丸で讀めないやうな墓でも啞は決して間違へなかつた。

福井さんは自ら墓の一つ一つに樒を供へて、一々墓の前に額突くのであつた。木場カネ何と臺石に彫つた墓がある。魚がし何德と墓石の横に彫つたのがある。福井さんは親類の墓を順々に拜んで來て、最後に一番大きな「福井家先祖代々之墓」の前に跪くのである。正雄はその間、寺の椽側に腰掛けて、ぼんやり小春日和の青い空を眺めてゐた。

お參りを濟まして、寺を出ると、福井さんはもういつもの遊び好きな福井さんになつてゐた。

「何處かで一杯頂戴したいものですな。」
二人は築地の電車道を新富町の方へぶら〳〵歩いた。
「どうです。新色も出來ませんか。」
福井さんはもう小さとの事は忘れて了つたやうな顔をして、斯う言つた。正雄もいつまでも未練のあるやうな顔をするのが厭だつた。
『別に新色も出來ませんが、好いのは中々ありますねえ。」
「へえ、あるかねえ。君の好きなのはいつでも一風流變つてゐるから、また何か不思議なのを見つけたね。」
「いえ、別に奇拔なのでもないんです。極平凡なんだらうと思ひますが。」
「一體誰だい。」
正雄は躊躇した。浮つかり言つて、口の惡い福井さんに罵倒されるやうな事があつてはならないと思つたのである。
「言ひ給へな。」
「さうですねえ。」
正雄は再び躊躇した。福井さんは自分を試驗するのではないかと思つたのである。これを言へば如何にも小さとに未練がないやうで、福井さんを安心させる種にはならうが、又これが爲に一度思つた女が

さう早く思ひ切れるのは、情の薄い證據だといふ風に取られるのも厭だつたのである。併し、正雄が既に或新らしい女を思つてゐた事は事實であつた。君太郎に逃げられ、小さとに見捨てられた正雄の胸は、もう一刻も空虛でゐる事は出來なかつた。

「こなひだあなたと一緒にここへ曾我の家を見に來たでせう。」

二人は新富座の前を歩いてゐた。

「ああ。」

「あの時、歸りに猿家であなたに挨拶した若い藝者があつたでせう。」

「あゝ、せつ子かい、辰巳家の。」

「せつ子ッて言ふんですか。葭町ですか、柳橋ですか。」

「葭町さ。あれが氣に入つたのかい。あれなら上等さ。大分君も眼が肥えて來たね。」

「併し、とても吾々の相手にはなりますまい。」

「なあにありや不見でさ。譯やありやしない。」

正雄は福井さんのこの言葉を少しも侮辱とは思はなかつた。寧ろ嬉しく感じた。「では俺でも近づけるな」と思つたのである。正雄はもう餘程この道に擦れて來てゐた。

「ほんとですか。」

「ほんとともを。何なら證據を擧げても好い。」

「けども、安い方ぢやありますまい。」

「さう高くもないだらう。まあ中どこだね。唯ゐる家が悪だから氣を附け給へ。中々絞るのが巧いんだから。」

「へええ。」

「まあ知れないやうに遣るんだね。あんまり凝りさへしなけりや知れるもんぢやないよ。」

「さうですねえ。ですけど、僕等のやうな者の言ふ事を聞くでせうか。」

『聞くともさ。何でも好いから行きなり突貫して見るんだ。今までの君のやうに遠廻しに愛だの戀だのと言つてゐちや駄目だ。あれぢや却て代物を逃がして了ふよ。先づ男の力で相手を捕まへて了ふんだね。理窟はそれからで好いぢやないか。」

「さうですかねえ。」

「自分の言ふ事を聞くんだか聞かないんだか分らない女の爲に一年も二年も頭を痛めるなんて愚な事さ。何でも好いから直ぐぶつかつて見て、いけなければ又外のを探すさ。遠くから見てゐて、自分だけその氣でゐて、あとで捨てられたとか見代へられたとか言つて泣く位ゐ馬鹿な話はないぢやないか。」

「でも行きなりそんな事を言ひ出して愛想を盡かされるのも厭ですからね。」

「笑談でせう。女といふものは決してそんな者ぢやないよ。行きなり口說いたから厭だの、遠廻しに口說いたから氣に入つたのと、決してそんな贅澤を言ふもんぢやないよ。自分の好い人なら、暴力を用ひ

られたつて少しも相手の人格を見下げたりなんかするもんぢやないよ。」

「さうですかねえ。」

「ぶつかつていけなけりや廢すまでの事さ。肱を食つたつて何が恥なもんか。散々欺された揚句、最後にズドンを食ふ位なら、行きなり一發喰らつちまつた方がどんなに氣が利いてるか知れやしない。第一ぐづ／＼してるなあ軍費のつひえだあね。」

「さうですねえ。」

正雄は生返事をしてゐる内に段々福井さんの説に引き入れられて來た。

「高が賣り物買ひ物だあね。向うて看板を掛けてゐるものを、無理に生娘扱ひにするにも當らないぢやないか。そんな事をすると却て甘く見られる計りだ。藝者に尊敬もへつたくれも入つたもんかね。」

正雄は自分の夢想を散々に踏み毀されたやうな氣がしたが、それでもやつぱり嬉しかつた。正雄の前には或新しい道が開けた。正雄は或新しい力を得た。正雄は漸く僞らない自分を見出したやうな氣がしたのである。

二人は八丁堀から茅場町を通つて、とう／＼水天宮の角まで歩いて了つた。

福井さんは正雄を岡田へ誘つた。二人は中の橋を渡ると、寫眞屋の角を右へ曲つた。

その晩、正雄はいつもと全く違つた心持て多くの藝者を見た。ふだん福井さんが藝者に對して取る態度て分らない／＼と思つてゐた點も大分分つて來た。

福井さんは正雄の爲にせつ子を呼んで吳れたが、せつ子は十二時を打つ迄とう〱顏を見せなかつた。

（二）

「今年は僕が遊びを始めてから十三年になるから、何か紀念に一騷ぎしたいと思ふ。」

福井さんはその頃頻にこんな事を言つてゐた。やがて岡田で素人芝居でもしたらといふ議が何處からともなく持ちがつて來た。福井さんは直ぐとそれに極めた。

福井さんの計畫は出來るだけ金の入るやうにしたやうな計畫だつた。岡田を二日借り切つて、當代の藝人といふ藝人をみんな招待して、御馳走をした上に芝居を見せて遣らう。福井さんの出し物は寺子屋の松王に鈴ヶ森の權八で、自分以外の役には一切本者の役者を使はう、女の役は一流どこの藝者で行かう、チヨボは歌舞伎座の競、お囃子もふだん贔負にしてゐる歌舞伎座の連中に遣つて貰はう。當日は岡田座と名づけて、村芝居の看板を表へ出し、福井さんは岡田の一室をすつかり樂屋らしく飾り立てて、座頭市川杢十郞と名乘つて出よう。斯う言つた計畫が忽ち出來上つた。

正雄は日夜その手傳ひに忙しかつた。福井さんは毎日稽古に熱中した。稽古の場所はいつでも岡田だつた、稽古の相手はいつも役者や藝者ばかりだつた。稽古が濟むと、毎日のやうにあとは酒宴になつた。

正雄は屢々せつ子に會ふ機會を得た。正雄は屢々酒に勇氣を借りてせつ子に思ふ所を仄めかした。せつ子も正雄の事を折々は友達の間に噂すると見えて、正雄は屢々せつ子の朋輩に冷やかされた。併し斯う言つた騷ぎの中だつたので、正雄は絕えず心でいら〱しながらも、容易に「突貫」する機會を得な

かつた。

もう舞臺稽古をするといふ一日二日前の晩であつた。正雄は福井さんに連れられて、岡田の直ぐ側の或待合へ行つた。この待合は門構への立派なやうに、この界隈での格式も高かつた。客はいづれも長年の得意ばかりで、知らない顏は一切客にしなかつた。名前がそれらしいからか、這入り口が宏大な爲か、ここへ出這入りする客や藝者は、みんなこの家を「お寺」「お寺」と呼んだ。

福井さんは稽古にかまけて暫く會はなかつた花子に、隱れて會はうと言ふのであつた。福井さんは毎日のやうに口の惡い老妓連に取り卷かれてゐたので、しみ〴〵花子に會ふ事が出來なかつたのである。福井さんは藝人達に隱れて遊ぶ時、いつも正雄だけ連れて歩いた。正雄は自分だけ特別扱ひにされるのが嬉しくて、いつも邪魔だらうとは思ひながら、福井さんの側を離れなかつた。

福井さんは正雄の爲に或種類の藝者を呼んで呉れた。併し、正雄はその藝者に少しの興味も持つ事が出來なかつた。正雄は福井さんに内證でその藝者を直ぐ歸して了つて、お菊といふこの家の女中と二人て、四方山の話をしてゐた。

お菊は丸髷に結つた年増盛りの女だつた。本を讀むのが好きださうで、遠から正雄の名も知つてゐるといふやうな話をした。

「一度お目に掛りたい掛りたいと思つてゐましたら、とう〳〵旦那のお陰でお目に掛れましたのねえ。先生の方ぢやあ御存じなくつても、あたしの方ぢや何もかも存じてゐるんですよ。」

と言つて、お菊は意味あり氣にニヤリと笑つた。

『あなたせつ子さんがお好きなんですつてねえ。可愛い人ですわ。あたし妹のやうに思つてゐますのよ。珍らしい人ですわ。先生、やつぱりお目が高いわねえ。』

正雄は不意討を食つて、少し驚いたが、態と平氣な顔をして、默つて笑つてゐた。

『せつ子さんの方でも大變なんですよ。あの人に限つて今まで浮氣のうの字程も噂を立てられた事のない人なんですから、先生ほんとに奢つても好いですよ。お似合の夫婦ですわねえ。』

お菊は一人でしやべつた。正雄はもうそんな話に乘る程初心ではなかつたのだが、それでも嬉しくない事はなかつた。

『みんな初めはそんな事を言つて、あとぢやあいつても駄目なんだから仕樣がない。』

正雄は嬉しさを隱して、探りを入れるやうな眼附で斯う言つた。

『大丈夫ですね。君ちやんとは人が違ひますからね。』

正雄は度膽を拔かれた。お菊は君太郎の事まで知つてゐるのである。

『君ちやんのやうな豪いんぢやありません。育ちが好いんですからね。あたしは何もかも知つてゐて申し上げるですから、默つて任してお置きなさいましよ。』

『だつてここて會ふ譯にや行かないんだらう。家が大層やかましいつて言ふぢやないか。』

『まあ默つて入らつしやいましよ。家の事なんか心配する人があるもんですか。あなたも存外坊ちやん

ですわねえ。」

正雄は烟に卷かれて、答へる語を知らなかつた。唯不思議に人の事に肩を入れる女もあればあるものだと思つて、その目鼻立のキリヽとした、一苦勞も二苦勞もしたらしい女の顏を凝と見てゐた。

「お菊姐さん。」

襖の外で小さい女の子の聲がした。お菊は直ぐ座を立つて、座敷の外へ出ると、暫く廊下でその女の子と何か話してるやうだつたが、やがて又這入つて來た。

「先生、丁度好うございましたわ。今、外のお座敷へ參つたさうですから、內證でお會はせしませう。何でも仰りたい事をしつかり仰らなけりや駄目ですよ。」

暫くして正雄は薄暗い廊下へ連れ出された。戀しい女は暗い廊下の隅に立つてゐた。

「今晚は。」

「今晚は。」

二人はこれ以上何も言へなかつた。お菊は矢庭に二人の手を引張つて、無理に握手をさせた。そして、「好いてせう、せつ子さん。好いてせう、先生。」

と言つた。せつ子も正雄も見えるやうに頷いた。せつ子も正雄も手を堅く握つた。正雄は自分の手が戀しい人の手に壓された時、始めてこの芝居らしいお菊の取持に、幾らか力ある希望を得た。

「せつ子さん。せつ子さん。」

二階の方で斯う呼ぶ聲がすると、せつ子は逃げるやうに姿を隱して了つた。正雄は座敷へ歸つて、崩れるやうに脇息の側へ座つた。

福井さんが車で歸ると、正雄も直ぐこの家を歩いて出た。

「なんだか馬鹿にされたやうな、おもちやにされたやうな氣がするなあ。ほんとかしら、今夜の事は。女は物を取消すのが巧いからなあ。併し、あの手には確に力が籠つてゐた。あの手は確に或者を語つてゐた。あの時あの手にどういふ力が籠つてゐたか。それはお菊も知らないのだ。それを知つてるのは俺ばかりだ。あの手。あの手。あの手はまさか嘘ぢやあるまい。」

正雄は眞面目にこんな事を考へながら、嬉しいやうな、不安心なやうな氣持て、家へ歸つた。

（三）

愈々芝居の當日となつた。

岡田の入口へは魚河岸から杢十郎へ來た幟が十幾本か立つた。積み樽も幾つかあつた。提灯も來た。旗も來た。福井さんに恩顧を受けてゐる盛り場からは酒が來る、菓子が來る、樽柿が來る。正雄はそれらの應接に忙しかつた。

杢十郎の福井さんは、岡田の女將の部屋に陣取つて、黑い襟の掛つたお召の部屋着を着て、大きな友染縮緬の座蒲團の上に大胡座をかいてゐた。部屋の用は濱町の多さんと柳橋の小さとがした。

正雄は福井さんの部屋へ這入る度に小さとと顏を合せたが、小さとはいつも權高な顏をしてゐた。正

雄は心の痛みを紛らはさうとして、努めて若い藝者の噂などをした。

客は在らゆる方面から在らゆる遊び好きな人が集まつて來た。中には村芝居といふので、態と娘を田舍者に仕立てて來る人などがあつた。村役場と書いた提灯を持つて、色の褪めた山高帽子を阿彌陀に冠つて、ぢんぢん端折て遣つて來る客もあつた。

福井さんの杢十部は、權八も松王も大眞面目で立派に遣つてのけた。一體物に凝り出すと、ねつい質なので、一擧一動一言一句の末に至るまで、自分に合點の行くまでに稽古を怠らなかつたからでもあらう。皮肉な鈴ヶ森のタテも、むつかしい首實檢の眼の配りも、お世辭氣なしに藝人達に舌を卷かせたのである。

せつ子は二日共岡田へ來た。正雄は幾度となくせつ子に會つたが、話をするやうな機會は一度もなかつた。それでゐて、正雄は何處へ行つてもせつ子の事をからかはれた。正雄は何だか今までの自分とは餘程勝手が違ふやうな氣がした。

（四）

二日の歡樂は夢のやうに過ぎた。

藝人達は勞れて暫く濱町へ出て來なかつた。福井ふんも溜つてゐた店の帳合に忙しくて、暫く顏を見せなかつた。

正雄の女を慕ふ心は、斯う言ふ間も休んでゐなかつた。彼はこの機會を利用して、一人でせつ子に會

ひに行かうと決心した。

正雄が一人で行ける家は外に無かつた。彼は一年振りで中洲の新布袋家の門を這入つた。

「まあ、よく道がお分りになりましてねえ。」

お今といふ馴染の女中は、斯う言ひながらいそ〳〵と正雄を夕顔の間へ案内した。福井さんがこの頃ぱッたりここへ來なくなつたので、何となく家が寂しい。

「なんと思つて入らして。」

「あんまり御不沙汰をして濟まないと思つたからね。」

「この頃はお忙しくつて入らつしやるさうですからねえ。」

「厭味は言ひつこなしさ。ほんとに家が近くなつてからすつかり御沙汰しちまつた。」

「岡田へは毎晩入らつしやるんでせう。お寺へもね。」

「そりやあ福井さんのお附き合ひぢやないか。」

「知つてますよ。」

「何を。」

「せつ子さんが大變ですわ。」

「ここへも來るのか。」

「ほらね、とう〳〵本音をお吐きなすつた。先生も暫くお目に掛らない内に、旦那のお仕込ですつかり

お人が惡くおなりなすつたのねえ。
「なぜ。」
「始終お寺で會つてらつしやるんでせう。」
「常談言つちやいけない。實は今日初めて差して合はうと思つて、それて君の所を賴つて來たんぢやないか。」
「ほんとですか。」
「ほんとさ。」
「何だか當てになりませんねえ。」
「常談ぢやない。直ぐ呼べるなら呼んて吳れ給へ。」
「ほんとですか。ぢやあまあ欺された積りて掛けて參りませう。」
お今は直ぐと梯子を降りた。
せつ子の來た時、正雄はまだ猪口に一杯の酒を干してゐなかつた。
「まあ。」
と言つた切り、せつ子は唯人の好ささうにニコ〳〵と笑つてゐる計りてあつた。その樣子がこんな所て正雄一人に自分一人が呼ばれるのが、何だか可笑しいといふやうな風てあつた。

「よく來て呉れましたね。」

正雄は自分で惡くなつた〳〵と思ひながら、まだ藝者に對してこんな挨拶をする癖が拔けなかつた。

「不思議だらう。」

「不思議ですわねえ。」

「一遍ゆつくり會ひたい會ひたいと思つてゐたんだけど、岡田の芝居でゴタ〳〵してゐたもんだから。」

「どうも有難う。」

と言つて、せつ子は態としかつめらしく手をつかへた。

如何にも曇りのない、晴れやかな微笑を見せる、何處かにまだお酌上りの匂の殘つた女であるが、又何處かに年だけの苦勞はして來たといふ跡の見える、弛みのない、しまつた所のある女だつた。

柄も大きい方ではないが、丈がスラリとしてゐて、朋輩にも姿の好いのを羨まれる方だつた。顏も規模が小さくて、大勢の中にゐて目立つといふ方ではなかつたが、色が透き通るやうに白く、眼が誼ましげに可愛く、耳が貝のやうに好い色をしてゐた。

髮の結ひ方にも、顏のこしらへにも、着物の好みにも、少しも異常な所がなかつた。何處までも地味に、何處までも上品に、何處までも人の後へ隱れるといふ風があつた。

子供らしい中に大人らしい所があつた。極めて意氣な姿の内に極めて堅い心持が見えた。群衆の中から男の眼を引く女ではなかつた。一人離れて始めて味のある女だつた。雜草の中にゐては道行く人の足

も留めぬ鳴子百合、一本我が庭へ移し植えて、始めて造化の微妙に眺めても眺めても飽かぬ眺めを見せる鳴子百合、せつ子はその鳴子百合であつた。

正雄は覺えず詩的な空想に陷つて、暫くぼんやり默つてゐたが、ふと思ひ出したのはこなひだ本願寺で福井さんの言つた言葉である。福井さんは「先づ相手を捕まへろ。」と言つた。「理窟は後で好いぢやないか。」と言つた。「どうせ賣り物買ひ物だ。」と言つた。「今日俺がこゝへ來たのも、福井さんの言葉を實行しやうと思つて來たのぢやないか。それだのにこんな事でどうなる。こんな事でどうなる。」正雄は窃に自分で自分を鞭打つた。

「どうして君を呼んだのか知つてるかい。」

「分りませんねえ。」

せつ子はませた笑ひ方をした。正雄も附け合せに強ひて笑つた。それでもこれで話の小口は切れた。

「君を口說きに來たんだよ。」

正雄は眞面目な顏をして斯う言つた。これでも正雄の方は滿身の勇氣を絞つて、極めて亂暴な、極めて強い一句を言ひ放つた積りだつたが、せつ子には何となくそれが滑稽に感じられた。丁度素人の役者が敎へられた通りの臺詞を何等の飾りもなく、何等の節廻しもなく、打切棒に言ひ放つのを聞くやうに、甚だしく言ふ事が言ふ人にそぐはなかつた。

女は聲を上げて笑つた。

「笑ひ事ぢやないよ。眞劍なんだから。」

「でも何だか可笑しいぢやありませんか。」

「少しも可笑しい事はない。ほんとにさう思つて來たんだもの。」

「大變ですわねえ。」

「どうか笑はないで眞面目に聞いて呉れ給へ。」

「伺つてますわ。何だか變だわねえ。」

正雄は又いつもの女の手が出たなと思つた。福井さんの言ふのは此處だな、此所が勇氣を出さなければならない所だなと思つた。

「長い事を言つても仕方がない。何處が好いとか何處に惚れたとか、言ひたい事は澤山にあるのだが、そんな事をお世辭らしく今列べて見た所で仕方がない。要するに僕は君が氣に入つたんだ。そこで要するにどうだと言ふんだ。」

「大層むつかしいんですねえ。」

「少しもむつかしい事はない。イエスかノォかさ。それだけ聞けば好いんだ。隨分厚かましい失敬な言ひ方だけど、要するに終ひはやつぱりそこへ來るんだからね。遠慮のない所を言つて呉れ給へ、遠慮のない所を。」

女はやつぱり笑つてゐた。

「笑つてちや分らない。君が厭だと言つたつて、僕は決して厭な顔なんぞしやしない。遠慮なく言つて吳れ給へ、遠慮なく。」

せつ子はそれでも落ち着き拂つて笑つてゐた。

「え。どうだい。好いの。惡いの。」

正雄はどうしても返事を聞かなければ止まなかつた。

女はやつと斯う言つた。併しそれでも正雄は安心しなかつた。

「結構ですわ。あたしのやうな者で宜しければ。」

「ほんとかい。お座なりは厭だよ。大丈夫かい。」

その心配に堪へないやうな、憫みを乞ふやうな正雄の顏が、女には又可笑しかつた。

せつ子は笑ひながら、

「大丈夫ですよ。大丈夫ですよ。」

と、幾度も正雄に頷いて見せた。

「だけど、この土地ぢや君も困るだらう。そりやあ僕も知つてる。君の迷惑になるやうな事をしたつて仕樣がない。何處かへ行かう。何處かへ。」

正雄は福井さんから與へられた僅少な智識で、何もかも分つた人に成り濟まさうとした。

「何處か離れた所で君の知つてる所があるだらう。」

女が斯う言ふ問に答へるものではないなどと言ふ事を、正雄は一向知らなかつた。
「あたし知りませんわ。あなた何處か御存じでせう。」
正雄は人に聞いて知つてはゐても、一度もまださう言ふ所へ行つた事は無かつた。
「困つたなあ。僕は全く知らないんだ。お今にでも相談して見ようか知ら。」
「さうですねえ。」
正雄は直ぐ手を打つてお今を呼んだ。お今は事もなげにこの「難問」を解決して呉れた。
「水神へ入らつしやいましな。宅から電話を掛けて置きますから。」
「さうか。さうして呉れりやあ、知らない人でも上げて呉れるね。有難い。」
「先生、一圓。一圓ぢや安いわねえ。」
と言つて、お今は片手を正雄の前へ出した。
「併し、君、家の方は好いかい。」
正雄はまだ心配さうな顔をして、せつ子に斯う聞くのであつた。
「大丈夫ですよ。」
「稲井さんと一緒で大勢で行くんだからとか何とか、巧く電話を掛けりや好いだらう。」
お今は態と呆れたやうに眼を丸くした。
「まあ人の悪い。坊ちやんだ坊ちやんだと思つてたら、中々もう隅へは置けませんのね。旦那に言附け

ますよ。」

「知れたら後で詫まるさ。そんな事をぐづ〳〵言ふ人ぢやないよ。」

お今もせつ子も電話を掛けに下へ降りた。正雄は一人後へ殘つて、一秒を一分とも、一分を一時間とも待つた。彼は今、自分がどう言ふ部屋にゐるかといふ事さへ氣が附かなかつた。月の夜、雨の宵、毎晩のやうに戀しい君太郎の顏を見た夕顏の間も、今の正雄には偶と休んだ道端の掛茶屋か何かのやうにしか思へなかつた。正雄は唯行くべき所へ行つて、一刻も早くせつ子と二人切りになりたかつたのである。

「あちらは宜しいさうですよ。時間が遲うございますから成るべくお早く入らして下さいッて。」

お今の返事は先づ首尾が好かつた。暫くするとせつ子が上つて來た。

「どうだつたい。」

せつ子は唯笑つてゐる。

「好いのかい。家は。」

せつ子は唯頷いた。

「大勢で行くつて言つたのかい。」

せつ子は默つて笑つてゐる。

「福井さんと一緒だつて言つたのかい。」

せつ子はやつぱり笑つてゐる。

「どうだつて好いぢやありませんか。行けさへすれば。」

お今は斯う言ひながら正雄の背中をドンと一つ遣つた。正雄はその儘自分の身體が何處かへ飛んで了ひさうに思つた。

（六）

二挺の車が新布袋家の門を出た、風の少し吹く、寒い寒い月夜である。

町は黒く戸を鎖してゐた。橋は黒く水の上に寐てゐた。車は黒く濱町河岸を兩國へ向つた。正雄は生れて始めて自分の願が人に聞かれたやうな氣がした。生れて始めて自分の我が儘が通つたやうな氣がした。一人の女は夢に來て夢に去る美しい影のやうに、散々正雄の心を焦らして、消えるやうに姿を隱して了つた。一人の女は暴君のやうに、好きな時は人を近づけ、嫌ひな時は人を遠ざけた。情火の流れに身も心も任して、正雄と一緒に行く所まで行かうとした女は、まだ今までに一人もなかつた。正雄は戀の夢想に眼覺めて、これからは寧ろ戀を飾りともし玩具ともしようとした。然るに正雄が初めて飾りともし玩具ともしようとした女は、逢ふと直ぐ正雄の物になつた。正雄は初々しい良心に責められて、ともすれば又昔の夢の世に這入らうとする。

車は宙を飛んで兩國橋を渡つた。狹い暗い道を少し通ると、直ぐ又横網の河岸へ出た。柳が黒く風に動いてゐる。舟が黒く岸に舫つてゐる。黒い長い塀は、二人だけの通る道を劃ふやうに、水に近く續い

てゐた。正雄は再び君太郎の事を思つた、小さとの事を思つた。さうして自分がせつ子と二人車を連ねて行く樣子を、二人の夢にても好いから見せて遣りたいと思つた。正雄は幾度か月を仰いて得意の微笑を洩らした。

吾妻橋の袂にはまだ客待の車が澤山提灯をつけてゐた。枕橋を渡ると一しほ寒い風が川の方から吹いて來た。

向島の土手は長かつた。枝ばかりになつた黑い櫻の木が何本も何本も、側へ來ては後へ去り、後へ去つては又側へ來た。一つの瓦斯燈に車が近くなると、又遠くに瓦斯燈が見えた。やがて道は川を離れた。

正雄の心は生れて始めて愛する女と唯二人道を行くといふ大きな喜びと誇りとに溢れてゐた。彼は近松が書いた道行の美しい文句を其處此所と思ひ出した。彼の心臟は記憶に殘る淨瑠璃三味線の旋律に拍子を合せて鼓動した。

いつもせつ子の車は正雄の車の前にあつた。車は決して入れ違ひもせず、決して一緒に並んでも步かなかつた。せつ子は土手へ來ると、寒さうに袖を合せて、ショオルへ深く襟を埋めた。正雄は瞬時も眼を放さずに戀しい人の後姿を見詰めてゐるのであつたが、せつ子はいつも前屈みに風を避けてゐて、一度も後を振返らなかつた。

正雄は堪らなくなつて、覺えず後から聲を掛けた。

「寒いだらう。」

「ええ。」

女は襟の中に籠つた聲で僅に斯う答へた。

「氣の毒だねえ。」

「いいえ。」

正雄はこれだけ女の聲を聞くと、もう滿足した。彼は再び元の沈默に歸つて、前屈みになつた女の寒さうな姿を、後から嬉しさうに見詰めるのであつた。

水神の森は二人を暗闇へ抱き入れるやうにして待つてゐた。二人は八百松の門を這入ると、飛石をカタ〳〵と踏み鳴らしながら、僅に一枚戸の外してある奥の上り口へ案内された。もう一時過ぎにもなるのであらう、家は靜かに寂靜まつて、女中は僅かに二人を案内した一人が二人の爲に起きてゐる計りだつた。

二人は新らしく建て直したらしい川沿ひの小さな座敷へ通された。座敷の入り口に小さな木の札が懸つてゐて、それに「冨士見の間」と書いてあつた。

「寒かつたらう。」

「ええ。」

「隨分遠いねえ。」

「ええ。」
「さあ、もつとこつちへ來て、火鉢へ當り給へ。」
「ええ。」
女は一向口數を利かなかつたが、態度は如何にも落ち着いてゐた　少しも恥づかしがるやうな風がなかつた。少しも恐れるやうな樣子がなかつた。せつ子はもう五年も六年も正雄に附き合つて、正雄の氣心を十分知つてゐる人のやうに、正雄が言ふ通りの事を少しも遠慮せずにしてゐた。茶を飮めと言へば直ぐ茶を飮んだ。菓子を食へと言へば、直ぐ菓子を喰べた。正雄は初めて自分を理解する女に會つたやうな氣がした。さうして、菓子一つも自分の前で喰べなかつた君太郎は、やつぱり自分が分らなかつたのだと思つた。
風は益々强くなつた。雨戶の中の硝子戶が折々激しい響を立てた。森の木の枝のキシ〳〵と鳴る聲も聞えた。川波は同じ程の間を違へずにドブン〳〵と岸を打つた。
「寒いから寐ようか。」
女は座つた儘、直ぐ羽織を脫いだ。
明くる朝の九時頃、二人は同時に眼を覺ました。雨戶はいつの間にかすつかり明いてゐて、曇つた朝の空が寒さうに硝子戶の外から覗いてゐた。

まだ風が吹いてゐる。濁つた川の水が縞のやうに波を立ててゐる。白く枯れた葦の洲が動いてゐる。その向うの岸に、何が建つのか積み掛けの赤い煉瓦と、大きな高い足場が見えた。

正雄は夜具に這入つたなり半分身を起こしたが、

「寒さうだねえ。」

と言つて、又横になつて了つた。

正雄はこの嬉しい境遇を一分でも長く續けようとした。一旦この境遇を破れば、いつ又この境遇を再びする事が出來るか分らないと思つたのである。一旦床を離れれば、せつ子は直ぐ歸らなければなるまいと思つたのである。正雄は十一時頃漸く床を離れた。

併し案外せつ子は落ち着いてゐた。正雄が床の中で愚圖々々してゐた間も、左程氣の急く様子はなかつた。床を出てからも、ゆつくり風呂へ這入つた。湯から出て、飯の來るのを待つ間も如何にも落着いてゐた。

心配性の正雄は默つてゐられなくなつた。

「直ぐ歸らなけりやいけないんだらう。」

「いいえ、まだ好いんですよ。」

「お約束はないの。」

「ええ。あるんですけど七時ですからゆつくりですわ。」

「何處。」
「『お寺』ですの。」
「ぢやお菊さんに會ふね。」
　正雄は意味あり氣に笑つた。
「ええ、會ひますわ。」
　せつ子も意味あり氣に笑つた。
「默つといてよ。」
「何をですの。」
「この事をさ。」
　せつ子は聲を立てて笑つた。併し正雄は飽くまで眞面目だつた。
「好いかい。」
「大丈夫ですよ。」
「折角あれだらう、君と僕をあすこで會はせようと思つて、骨を折つてるんだらう。何だか出し拔いたやうで惡いから。」
「構やしませんよ。」
「だけどあの人は君の事を隨分思つて呉れてるぜ。」

「そりやあ知つてますわ。」

「妹のやうに思つてるなんて言つてゐたぜ。ほんとかい。」

「ええ。」

「ぢやあ餘ッ程大事にしなけりやいけないぜ。」

「ええ。」

「僕も大事にしようねえ。」

正雄は覺えず斯う言つたが、何だか自分の言つた事が態とらしく聞えたので、自分の言葉を自分で遮つた。

「ほんとに君遅くなりやしないかい。家は大丈夫かい。叱られやしないかい。」

「大丈夫ですよ。」

「電話を掛けとく方が好いぜ。もう直き歸るからつて。」

「ええ。」

「せつ子は斯う言つたが、中々立たうとはしなかつた。」

「え。ほんとに掛け給へ。心配だから。」

二三度正雄に斯う促されて、せつ子は笑ひながら漸く座を立つた。」

暫くして漸く飯が來た。

正雄は蜆汁を三杯代へた。せつ子も負けずに二杯代へた。刺身や甘煮やさう言ふ物には二人とも餘り箸を附けなかつた。

食後の菓子を喰べ終ると、漸くせつ子は歸ると言ひ出した。正雄は直ぐ手を叩いて勘定書を取つた。勘定書には二人の喰べた物の外なんにも書いてなかつた。正雄は確と當惑した。

「これッきり。」

「はい。」

と言つて、女中は笑つてゐる。正雄は何かを尋ねるやうにせつ子の顏を見た。せつ子も矢張笑つてゐる。

「君、一寸顏を貸して吳れ給へ。」

正雄は女中を廊下へ連れ出した。女中はやつぱり笑つてゐる。

「白狀するが、實は僕始めてかういふ所へ來たんて、一向勝手が分らないんだ。」

「ほ、ほ、御常談でせう。」

「いえ、ほんとなんだよ。て、何かい。僕等の泊つたりなんかしたのは。」

「それはお思召てございますから。」

「ぢやあお帳場へ幾らか上げれば好いんだね。」

「それて宜しいんてす。」
「ぢやあ、それはそれて好いとして、あれに遣るのは。」
「それはわたくし共の方に關係がございませんの。お連れになつたんてございますから。」
女中は又笑ふのてある。
「大抵分つてるだらうから、君の方て聽いて來て、君の方から拂つて貰ふ譯には行かないもんか知ら。」
「それは困りますわ。どういふ事になつてをりますんてすか、存じませんかやすから。」
「さうかねえ。困つたなあ。」
正雄は暫く考へた。
「ぢやあ君濟まないけど、今ここへ寄越すから聞いて見て呉れないか。」
「宜しうございます。」
正雄は直ぐ座敷へ戻つて、せつ子を廊下へ遣つた。せつ子は笑ひながら直ぐ歸つて來た。正雄は又廊下へ出た。
「分つたかい。」
「やつぱり分らないつて言ひますの。」
「困つたなあ。」
「宜しいやうになさりやあ好いぢやございませんか。」

「宜しいやラッたつて。」
女中は煩に堪へないと言ふやうな顔をした。
「ぢやあ兎に角。」
と言つて、正雄は女中に勘定を渡した。そしてなにがしかを帳場へ、なにがしかを女中へ包んだ。女中は直ぐ顔を和らげた。
「それから、車を一臺。」
「どちらまで。」
「霞町。」
「畏りました。」
「お供も御祝儀もこつちて上げるよ。」
「畏りました。」
女中は駈けるやうにして行つて了つた。正雄は直ぐ座敷へ歸つた。
「ほんとにどうしようねえ。」
「何をてすの。」
「君に上げるものさ。」
「どうだつて好いぢやありませんか。」

「どういふ風にしたら好いか、知つてるなら教へて呉れ給へな。」

「分りませんわ。」

「そんな事を言はないでさ。」

「好いんですよ。」

「でもそれぢやあ家へ歸るのに工合が惡いだらう。決して澤山に上げようと言ふんぢやないから。」

「だつて好いんですもの。」

正雄は暫く默つて考へてゐたが、やがてせつ子に見えないやうに、何かを紙に包んだ。

「ぢやあ斯うして呉れ給へ。ここに少しあるから兎に角これを持つて歸つて呉れ給へ。さうして家で何か言つたら新布袋家へ聞いて呉れつて言つて呉れ給へ。あすこへ頼んどくから。」

女は幾度か紙包を推し戻した。併し正雄はどうしても聞かなかつた。せつ子は漸くそれを帶の間へ挿んだ。」

「ぢやあ僕は蒸汽で歸るから、一足先きへ行くよ。まだ車は來ないのか知ら。」

正雄が手を叩くと、女中が盆の上に受取と土産の手拭を載せて來た。

「車は。」

「只今催促をさせてをりますの。」

何處てか喇叭の鳴る音がした。

「あれて呼ぶのかい。」
「遠いもんてございますから。」
せつ子は正雄に構はず先きへ行つて呉れと言つた。
「ぢやあ二三日内に又會ふからね。」
と言つて、正雄は女中の顔を見た。
「小松島へ行くのと鐘ヶ淵へ行くのと、どつちが遠いだらう。」
「左樣てございますねえ。おんなし位なものてございませう。」
「ぢやあ鐘ヶ淵へ行かう。」
正雄は川の上から、も一度紀念の深い座敷が見たかつたのてある。
「お拾ひてございますか。」
「ああ。」
女中だけが正雄を送つて出た。風はまだ止まなかつた。正雄は石の門を出ると、外套の襟を立てた。
正雄は川蒸汽の窓から、しげ〳〵と富士見の間の硝子戸を見たが、船は忽ち懐しい家の前を通り過ぎて了つた。正雄は振り返り振り返り水神の森を見送つた。
船が言問を出ると、正雄はゆうべ夜遲く來た時の事を思つた。さうして、若しや車て土手を歸るせつ

子の姿が見えればと思つて、しきりに土手の方を見た。車は幾臺も通つたが、それらしい姿は一つも見えなかつた。やがて蒸汽は吾妻橋の上り場へ着いた。

その晩、正雄は柳家を尋ねた。「見返して遣らう」といふ程に思つたのではないが、何となく小さとの顔が見たくなつたのである。今日からの自分は今までの自分ではない、自分はもう小さとに捨てられただけの自分ではない、せつ子といふ新しい女を得た自分である。斯う言つた得意らしい感情は正雄に非常な強みを附けた。正雄はその強みを持つて、自分を捨てた女の顔を見て見ようと思つたのである。

小さとは十二時頃歸つて來た。併し、正雄が來てゐるのを見ても、別に厭だといふやうな顔はしなかつた。當り前に正雄と話しもし、當り前に正雄をもてなしもした。正雄は少し張り合が拔けたやうな氣がした。

正雄はもつと冷やかに取り扱つて貰ひたかつたのである、寧ろ虐待して貰ひたかつたのである。そして、その冷淡なり虐待なりを自分の强みで直視して、平氣で笑つて見たかつたのである。併し、小さとは一向冷淡でなかつた。

正雄は心の秘密を色にも見せずに、岡田の芝居の話だの福井さんの噂だのをして、一時頃ぼんやり家へ歸つた。

（七）

それから一日は我慢した。二日目も我慢した。三日目になると、堪らなくせつ子に會ひたくなつた。正雄は夜の十時頃そつと家を拔け出して、淺草橋の自働電話まで駈けるやうにして行つた。

『浪花の九百三十六番。』

正雄は「お寺」へ電話を掛けると、名を言はずにお菊を電話口まで呼んで貰つた。

『僕です。小川です。今夜上りたいと思ひますが如何でせう。』

『宜しうございますとも。どうぞ直ぐ入らして下さいまし。』

『だけど僕一人ですよ。一人でも好いんですか。』

『ええ、ええ、宜しうございますとも。どうぞ成ろべく早く。』

正雄はドキ〳〵しながら自働電話を出ると、直ぐ通り掛りの車に乘つた。

正雄はビク〳〵しながら「お寺」の門を這入つた。正雄はここの家の構へが、とても自分一人を客にして呉れさうに思はなかつたのである。正雄は女中のお菊一人を賴りにした。

お菊は女中頭といふ程の位置にはゐなかつたが、可なり古參の方で、多少は自由も利くやうであつた。正雄が一人で來たのを大層喜んで、正雄が何一つ言ひ附けないでも、正雄が賴まうとする程の事はして呉れた。

酒も來た。あつさりした肴も來た。せつ子も直ぐに來た。

正雄はお菊の取りなしの如何にも親切て氣が利いてゐるのを心から感謝すると同時に、お菊を出し拔いて水神へ行つたのを悔む心が腹の底からこみ上げて來た。

「濟まないねえ。濟まないねえ。」

正雄はお菊が何か一つして吳れる度に斯う言つた。併し水神の夜の事はとう〳〵言はなかつた。せつ子は始めから終まで平氣な顏をしてゐた。寧ろこないだの事はもう忘れて了つたやうな顏をしてゐた。正雄はそれを心細くも思つたり心强くも思つたりした。

お菊は少しも疑はなかつた。何處までも二人は今夜始めて差して會ふのだと思つた。そしてその仲立を自分がしてゐるのだと思つた。お菊は可愛いせつ子と可愛い正雄が仲好く話をするのを見て、心から喜んだ。

正雄は僅かの酒に顏を赤くしながら、遲くまで話してゐた。お菊は帳場へはせつ子を返した事にして、內證でせつ子を泊めて了つた。

その明くる日、正雄は福井さんを濱町の家に尋ねて、總ての事を打ち明けた。福井さんは正雄の斯うなつたのを寧ろ喜ぶやうに見えた。

「大出來。大出來。それでなけりや駄目だ。どうだい。案外女といふものは譯のないもんだらう。」

「まあ、さうですね。併しお菊にはなんだか濟まないやうな氣がします。」

「済むも済まないもあるもんかね。もう大抵察してるよ。あんな所の女中をしてゐて、その位な事が分らないでどうなるもんか。」

「さうですかねえ。」

正雄はやつぱりこの道の事は分らないと思つた。

（八）

始めは四日に一度か五日に一度、よく〳〵お菊の都合の好い時を選んで行つたのが、忽ち三日に一度になり二日に一度になつて、とう〳〵正雄は毎晩のやうに「お寺」へ通ふやうになつた。

併し正雄は君太郎の時分に通つた新布袋屋のやうに、どうもこの家には親しめなかつた。門の構への物々しいのと座敷の厭に廣くて立派過ぎるのもその原因の一つだつた。女將の外に「お帳場」と稱する男が一人ゐて、それが主人なのか女將が主人なのか分からないのも氣になつた。「お帳場」は滅多に客と顔を合せなかつた。たまに玄關などで客に會つても、逃げるやうにして自分の部屋へ這入つて了つた。女中の類が多くて、一々の女中と親しむ機會が無かつた事も、正雄は不滿足だつた。殊に女中頭の如何にも冷淡な、正雄を子供扱ひにするやうな眼附が氣に入らなかつた。毎晩のやうに來る客が、何れも實業社會や華胄界に名のある人計りで、正雄などが足元へ寄れさうになかつた事も、不安な感じを起させた。お菊が留守で、せつ子の來るのが遲い晩などは、正雄は廣い野原に一人置かれてもしたやうに思つた。

正雄は大抵夜來て夜歸つた。都合て泊る事も稀にはあつたが、さういふ時でもせつ子は一旦夜歸つて、又明くる朝早く來た。寢る所もいつも一つ離れた、誰にも知れないやうな座敷だつた。正雄を泊めるのも、せつ子を朝早く呼ぶのも、朋輩を憚りながらお菊が内證てしてゐる事は、樣子て正雄にも知れた。

或朝、二人の逢瀨の如何にも窮窟なのを正雄が嘆くと、せつ子は笑ひながら、斯う言つた。

「今にあたしだつて一人前になればねえ。」

その調子は如何にも輕くて常談らしかつたが、正雄はこの言葉をぞつとする程嬉しく感じた。正雄はこれまで毎日のやうにせつ子の顏を見てはゐたが、斯う言つた口を利くのを聞いた事は唯の一度もなかつたのである。正雄はこの一言を聞くと、せつ子の心が悉く自分の方へ傾いて來たやうに思つた。

正雄は始めせつ子計りを呼んでゐたが、お菊が一人で家に氣を兼ねてゐるのを見ると氣の毒になつて、三度目か四度目からはせつ子の朋輩藝者を一人か二人きつと一緒に掛ける事にした。せつ子が仲を好くしてゐる一人は德子といふ、肥つた、眼の丸い、いつも陽氣な女だつた。一人は時松といふ、柄の小さい、眼の可愛い、鼻の側に少し雀班のある、大人しい女だつた。德子は福井さんが贔負にしてゐる或老妓の抱だつたので、正雄に會はない前から、正雄の事を聞いて知つてゐた。或晩、三人が正雄の座敷で一緒になると、德子は君太郎の事で正雄を冷やかし始めた。

「あたし君ちやんのとこて、あなたの寫眞を幾つも拜見してよ。だからお目に掛らなくたつて、お顏だけはちやんと知つてゐましたわ。」

正雄は真赤になつてせつ子の顔を見た。併しせつ子は驚いたといふやうな顔もしなかつた。

「あたしだつて知つてゐますわ。お酌の時分、踊りのお稽古で毎日のやうに會つたんですもの。「先生」「先生」つて、あなたの事ばかり言つてゐましたわ。」

正雄は驚いた。

「なんだい。君も知つてるのかい。人が惡いなあ。今までなんにも言はないで。」

「そんなに言つて貰ひたいんですか。」

「さうぢやないけれど。」

正雄は言葉に窮した。

「この頃はちつともお會ひなさらないの。」

「會ふもんか。」

「まあ。薄情ねえ。」

「どつちが薄情だか分つたもんぢやない。」

「そんな譯なんですか。」

「さうとも。器量の惡い話さ。大の男が子供見たいな奴に脊負ひ投げを食はされたんだ。」

時松は始めて口を挾んだ。

「中々豪いんてすつてねえ。だけど、どうしてあなた見たいな方をねえ。」

『どうも僕は先からさうだよ。始めは附きが好いとか何んとか言ふんだねえ。それが直きにいけなくなつて了ふんだ。一人も僕の方で捨てた積りのは無いんだけれど、みんな向うで行つちまふんだ。僕はお世辭が使へないもんだからねえ。』

斯う言ひながら、正雄は意味ありげに凝とせつ子の顏を見た。

正雄は段々せつ子に對して眞面目になつて來た。始めは福井さんの言葉に動かされて、半分は遊戲的に近づいたのであつたが、今ではもうそこに出來た關係を遊戲の結果として考へる事が出來なかつた。せつ子は飾りにするには、余りに地味な女だつた、玩具にするには、餘りに堅い女だつた。正雄は女を知れば知る程、自分と女との關係が重大に思はれて來た。せつ子は決して浮氣て男に身を任す女ではなかつた。せつ子は決して福井さんが言ふやうな「不見轉」ではなかつた。

或朝、正雄はせつ子に、君太郎の事も小さとの事も細かに打ち明けた。そして最後に斯う言つた。『いつても今度こそは今度こそはと思ふんだけれど、いつでもお終にいけなくなつて了ふんだ。君だけは、どうかさうならずにいつまでも僕を見捨てないて呉れ給へ。僕は君を最後の人にしたいと思つてるだから。』

せつ子は默つて頷いた。その眼の色には自分はその人達とは違ふといふ誇りが見えた。

十二月へ這入ると、せつ子は時々病氣で商賣を休んだ。正雄はせつ子に會はれない晩は、德子や時松を呼んで、せつ子の噂をした。

「病院へ這入りたい這入りたいと言つてるんですけれど、中々家で入れて呉れないんですの。」

「何處が惡いんだらう。」

「痔ですつて。」

「痔。」

正雄は少し意外に思つたが、その晩お菊に聞いて病氣の原因が分つた。せつ子はお酌の時分、隨分厭なお座敷を勤めさせられた。せつ子はそれを口惜しがつて、夜の眼も寢ずに藝を勵んだ。せつ子が今日若いながら一流の一人に數へられて、藝で賣るやうになつたのは、全く自分の勉强一つからであつた。

正雄は始めて福井さんがせつ子を不見だと言つた譯が分つた。

「可哀さうにあなた、いまだにその時分の身體が本當にならないんですよ。」

お菊は斯う言つて、伏目に自分の膝を見た。正雄は愈々せつ子が可哀くなつた。

羽子板市の立つ時分になると、せつ子はぱつたり「お座敷」へ出なくなつて了つた。

（九）

大晦日の晩まで寢てゐたせつ子は、元日の朝から又「お座敷」をし始めた。

「可哀さうぢやございませんか。一年中の書き入れを稼ぎ人に寢て了はれちや堪らないつて言ふんで、

無理に床を片附けて了つたんださうでございますよ。」

「お寺」のお菊は正雄の顏を見ると、涙を零さない計りにして斯う言つた。

「そんなに虐待されてゐるのかねえ。」

「家ぢやあ少しも虐待してる積りぢやないらしいんですよ。なんしろ中々お座敷の多い人ですから、お正月遊ばれると大分違ひますからねえ。」

「病院へ入れてすつかり直して遣れば好いのにねえ。」

「費用は自分で持つから暇だけ呉れつて言つたんださうですが、どうしても聞いて呉れないんですつて、二月になつたらこつちで入れて遣るから、それまで待てつて言ふんですつて。お正月の三十一日まで稼がせる積りなんでせうよ。」

正雄は勞れた體を出の春着に包んだせつ子の姿を見ると、急いで座蒲團を無理に敷かせた。

「まだいけないんだらう。」

「えゝ。でも、みんなが稼ぐのに一人寢てもゐられないもんですから。」

「車が堪るまい。」

「車もさうですが、疊へぢかに座るんでせう、長いお座敷だと終に立てなくなつて了ふんですの。」

「でも、ここへ來てほつとしたでせう。」

お菊は慰めるやうに、側から斯う言つた。

「えゝ。」

と言つて、せつ子は始めて嬉しさうに笑つた。その寂しい笑ひ顏を見ると、正雄は堪らなくなつた。

七草までは大抵毎日會つた。正雄も福井さんに連れられて方々廻るのに忙しかつたが、せつ子はそれにも增して忙しさうだつた。併し、せつ子はどうにでも都合をして、ちよいとの間でも、正雄の座敷へ來た。

「あなたの所へ來るのは、休ませて貰ひに來るんですよ。」

お菊はよく斯う言つた。せつ子もよくさう言つた。それが正雄には此の上もなく嬉しかつた。

七草が過ぎると、時々せつ子に會へない晩があつた。正雄が尋ねるのを怠つた譯でもなければ、せつ子が忙しくて來られなかつたのでもなかつた。正雄の方は毎晩缺かさず電話を掛けるのであつたのが、「お寺」の方で三度に一度か二度に一度は、座敷が一杯だからとか、お約束でみんな塞がつてゐるからとか言つて斷るのであつた。

始めは正雄も氣が附かなかつた。正月の事でもあるし、いつも時間が遲いのだから、全く都合が惡いのだらうと思つて、いつも大人しく諦めてゐた。ところが、「お寺」の斷りやうは段々激しくなつて來た。三度に一度が三度に二度になつた。三度に二度が、三度に三度共になつた。時にはこつちの名を聞いた

だけて、用も言はない内に電話を切つて了ふやうなことがあつた。お菊を呼んで呉れと言つても、芝居へ行つて留守だとかお座敷の手が放せないからと言つて、一向呼んで呉れなくなつて了つた。

或晩、珍らしくも來ても好いと言ふ返事があつた。正雄は敵地へでも這入つて行くやうな心持て、あたりを兼ねながら「お寺」の大きな門を潜つた。

せつ子も時松も徳子もみんな來られなかつた。正雄はそれでもと思つて、番の女中に三度目の電話を掛けさせて、廣い座敷に一人ぼんやりと待つてゐると、そこへお菊が這入つて來た。

「少しお話ししたい事がございますの。」

斯う言つて、お菊は正雄の直ぐ前へ座つた。正雄は豫め期してゐた事にぶつかつたやうな氣がしたが、態と平氣な顔をした。

「何んだい。改まつて。」

「いいえ。つまらない事なんてすの。」

「なんだい。」

「あんまりつまらない事てすから、申し上げまいかとも思つてるんてすの。」

「なんだい。言つたら好いぢやないか。」

「お怒り遊ばしちや厭てすよ。」

「怒るもんか。僕は怒るのは嫌ひだ。」

「でも、あんまり馬鹿々々しい事なんですもの。」

「構はず言つたら好いぢやないか。」

「あたくし今日といふ今日は、つく〴〵こんな所に奉公してゐるのが厭になりましてすよ。」

「どうしたんだい。」

「あなた、ほんとにお怒り遊ばしちや厭でございますよ。」

「大丈夫だつたら。」

「まあ、なんにも分らない者の言ふ事だと思つて、笑つて聞いて入らして下さいましよ。」

「ああ。」

「お帳場さんはやつぱりあなたを唯の若旦那かなんかのやうに思つてゐるんでせう。小川さんといふお客様は、大層若い方のやうだが、あんまり若い方に遊ばせては悪いつて言ふんですの。」

「ふうん。そんな事を言つてゐるのかい。」

「えゝ。つい一年計り前にも、田所町の方の或大家の若旦那が、大層お遊びなさいましてね。あとでそのお袋様に恨まれた事がございましたの。御自分で入らして、なぜ黙つて遊ばして呉れたつて仰るんです。お帳場も困つたんでせう。それからと言ふものは若いお方つて言ふと直ぐ心配をするんですの。」

「勘定でも溜めると思つてるんだらう。」

「いいえ、決してそんな事を思ふお帳場さんぢやございませんの。決して御信用申すの申さないのつて、

そんな事を言ふんぢやない、若しあとて知れて親御様のお恨みを受けるやうな事があつては濟まないからつて、それ計り言つてるんですの。」

「ぢやあ、もう來て呉れるなと言ふんだね。」

「福井さんと御一緒の時だけにして戴きたいつて言ふんです。」

「それぢやあ、やつぱり僕を信用してないんぢやないか。新聞のモグリ記者か何かだと思つてるんだらう。」

「お怒りなすつちや困りますわ。もう少しあなたの爲すつて入らつしやる事がよく分ると好いんですけれど、何しろあんな禿ちやんてせう。隨分そ言つて見たんですけど、迚も分りませんの。」

「お上さんはなんて言つてるんだい。」

「お上さんはなんとも申しませんの。」

「唯默つてゐるのかい。」

「え丶。さういふ事はお帳場任せだもんですから。」

「ぢやあ、まあ仕方がない。無理に來たつて君が迷惑する計りだらうし、そんな風ぢやあ來たつて面白くもないから、もう來るのは廢めよう。」

「ほんとにお氣を惡くなすつちやあ困りますわ。お帳場でも決して御信用しないの何のつて言ふんぢやないんですから。唯お家へ惡いお家へ惡いつてそれ計り心配してるんですから。」

「僕の金を僕が使ふのに、誰が何を言ふもんか。」
「さあ、それが分つてさへゐりやあ好いんですけど、何しろお装や何かにもお構いなさらないでせう。」
「まあ今に八字髭でも生やして、ベラ〳〵した着物でも着るさ。さうすりや又客にする事もあるだらう。」
「いいえ、そんな事をなさらないだつて、少し福井さんと御一緒に入らつしやりあ、直ぐ分つて參りますわ。」
「やつぱりまだ人間に値打が無いんだねえ。帳場の見る所毫も誤りなしさ。」
「まあ家計りが世界でもございませんから。」
「さうだとも。會ふ所は幾らでもあるからね。」
「その内にきつと分る時も參りますから。暫くの御辛抱でございますわ。」
「君にも色々心配計り掛けて濟まなかつた。ぢやあ、まあ暫く御不沙汰する事にしやう。」
「こんな小さな事で大事なお頭をお痛めなすつたりなんかしちや厭ですよ。」
「誰が痛めるもんか。この帳場を相手にして苦しむ程僕は馬鹿ぢやないよ。」
「ほんとにさうでございますわ。」
　愈々せつ子が來られないといふ事が分ると、正雄は直ぐに歸り仕度をした。氣に掛けはしない氣に掛けはしないと言ひながらも、正雄の心は煮えくり返るやうであつた。正雄はもう一分時も長くこの不愉快な家にゐるのが厭になつたのである。正雄は何かに追はれるやうな氣持で、逃げるやうに「お寺」の門

を出た。

正雄はその晩遲くまで眠らなかつた。

一體どうしてこんな事になつたんだらう。せつ子と俺があの家で會はれると、何かあの家に都合が惡い事があるのだらう。それは始めから樣子で知れてゐた。併し、今夜のやうにきつぱり斷るには、よく〳〵何か譯が無くてはならない。せつ子は若しやあの家に旦那といふやうな者を持つてゐるのではなからうか。それならさうと明かに言つて吳れれば、俺は決してせつ子の迷惑になるやうな事はしない積りだ。だが、どうもさういふ樣子はない。あの家に旦那があるなら、幾ら何でもお菊があれを俺に取り持つ筈がない。恐らく今の問題ではなくて、將來の問題なんだらう。これから先きあの家で旦那といふやうな者を取り持たうとする時に、俺のやうな者があつては不都合だと思つたのだらう。きつとさうだ。きつとさうに違ひない。

お菊は信用不信用の問題ではないと言つたが、或は金の問題なのかも知れない。併し、俺はあの家へ行くやうになつてから、決してその點で不信用になるやうな事をした覺えはない。少し溜まると月に二度でも三度でも拂ふやうにしてゐるし、去年の暮れでも綺麗に借りただけの物は拂つてゐる。俺もそんな事で會ふ場所を失つてはならないと思つたから、その點は隨分氣を附けて來た積りだ。これも現在の問題ではなくて、將來の問題なのだらうか。今はまあ綺麗にして居るが、今にきつと困つて來るだらう

とても思つてるのだらうか。

それとも福井さんが又なんとか言つたのだらうか。あんまり遊ばせて吳れては困るとか何とか。いや、決してそんな筈はない。あの人はせつ子と俺に關係の出來たのを、寧ろ喜んでゐたやうではないか。小さとの事で少し沈んでゐた俺が、せつ子が出來て少しは浮いて來たのを、寧ろ安心したといふやうな程度で見てゐたてはないか。福井さんが何か言ふ筈はない。決してない。

要するに、相手は「お寺」の帳場だ。あの禿だ。あいつが俺を馬鹿にして、俺のやうな者を客にしたつて、どうせ碌な事はないとか何とか思つたんだ。あいつが俺を堰いたんだ。あいつに俺は堰かれたんだ。よし。今に見ろ。きつと俺は立派な人間になつて、向うから頭を下げて來させるやうにして見せるから。

正雄は樣々に思ひ惱んだが、決してお菊やせつ子を疑はなかつた。正雄は何處までも「お寺」を恨んだ。「お寺」の帳場を恨んだ。

お菊は毎日のやうに手紙を寄越した。手紙に依ると、其の後せつ子は毎晩のやうに「お寺」へ行くやうなのである。正雄は自分一人が除け者にされたやうな氣がした。

その春、歌舞伎座へ或る大阪の役者が這入る事になつた。福井さんは大阪から一流の藝人が上つて來ると、自分が知つてゐても知らないても、きつと一度は招待して、盛に歡迎する習慣があつた。丁度正

雄が「お寺」一件でムシャクシャしてゐる最中に、今度上つて來た役者の招待會が龜清であつた。正雄も誘はれて澁々出席した。

一座はその大阪役者を正客にして、歌舞伎座附の主な役者殘らずであつた。藝者は柳橋、葭町、新橋、赤坂などから、一流所計りが來てゐた。これは福井さんが、顔馴染のない役者の顔を成るべく廣く知らして遣らうと言ふので、いつも爲る爲來りなのである。

小さとも來て居た。小さとが好きだと言ふ若い役者も來てゐた。小さとはその役者の事で、ゴムだのバジヤアだのに冷かされてゐた。正雄は世を隔てて何かを見るやうな氣がした。

外にも約束があるとかで、大阪役者は二時間程ゐると歸つた。外の役者も一人立ち二人立ちする内、直ちにみんながゐなくなつてしまつた。

藝者達は役者達が喰べ汚した膳の廻りに群がつた。そして、これは誰の箸だとか、これは誰が使つた黑文字だとか言つて、そんな物を取り合つたり奪ひ合つたりした。

中でも小さとは激しかつた。行きなり例の若い役者の座つてゐた所へ馳けて行くと、引つたくるやうに膳を抱へて、逃げるやうに次の間へ這入つて了つた。あとでバジヤアに聞くと、小さとはお椀から刺身から口取から香の物まで、役者の使つた箸で、役者の喰べ殘した物を、殘らず綺麗に喰べてしまつたのである。

正雄はこれを聞くと、胸が塞がるやうな氣がした。水神の夜の明くる日、自分から柳家を尋ねた時は、

まだ〳〵こつちが强かつた。併し、もう今日の自分はどうであらう。つまらぬ奴に堰かれて、もうせつ子の顔を見る事さへ儘ならないのではないか。たとひ小さとに今のやうな事をされても、自分はもうそれに打ち勝つだけの事を言ふ事も出來なければ爲る事も出來ないではないか。自分は明かに弱者の地位にゐる、明かに敗北者の運命にゐる。正雄は斯う思つて、兩手に顔を埋めた。

「どうしたんだい。ひどく元氣が無いねえ。」

福井さんは慰めるやうに、斯う言つた。

「ええ。なんだか氣が進まないんです。」

「少し遣つて見給へ。」

「さうですねえ。」

正雄は福井さんの勸めるだけ盃を重ねて見たが、いつまで立つても醉へなかつた。

（十）

風の寒い二月が來た。

せつ子はやつと病院へ這入る事が出來た。

せつ子が病院へ這入つたと聞くと、正雄は愈々寂しい氣がした。たとひ「お寺」では斷られても、まだ「お座敷」へ出てゐる限りは、きつと何處かで會へると思つてゐた。商賣を休んで、病院へ這入られては、尋ねようにも尋ねるすべが無かつた。病院にはきつと家の者が附き添ひに行つてゐるだらう。そんな所

へうつかり尋ねて行つて、女に迷惑を掛けてはならない。自分は迚も表立つて旦那といふ者になる程の金力を持つてゐない。自分は何處までも蔭にゐなければならない人だ。隠れて忍はなければならない身の上だ。病院のやうな人目の多い所へ迚も出て行かれる境遇ぢやない。正雄は斯う思ふと、もういつせつ子に會へるか分らないやうな氣がした。

病院は鳥越の樂山堂病院であつた。女の寢てゐる場所が自分の家に近いといふ事は、正雄がせめてもの喜びであつた。正雄は毎晩のやうに二階の窓から鳥越の空を眺めた。

芝居はその頃やはり新富町で持つてゐた。三月の出し物は都新聞の續き物と極つたが、座附の狂言方が書いた臺帳が、如何にも冗漫なので、どうしても正雄が全部書き代へなければならぬ事になつた。そんな事で正雄は大分紛れてゐたが、それでもせつ子の事を思ひ出さない日は唯の一日も無かつた。正雄は忙しい最中でも日に一度はきつと見舞の手帋を書いた。

或晩、稽古の歸りに正雄は龍井の弟子の浪山といふ下廻りを連れて、源冶店の菊水といふ鳥料理をする家へ上つた。

正雄は一度も來た事のない家へ來て、一度も呼んだ事のない藝者を呼んだ。正雄は少しでも今の境遇を忘れようとしたのだが、浪山が一人ではしやぐのを見ると、結果は却て反對になつて來た。

正雄は堪らなく寂しくなつて、飲めぬ盃を幾度か重ねた。藝者達は正雄が默つて飲んで計りゐるのを見て、餘程の上戸とでも思つたのか、干すとは注ぎ干すとは注ぎした。

浪山の肩につかまつて、源治店の路次を出ると、正雄は自分の足元の危ないのに慾いた。

『先生、隱して入らして大分上れるんですな。』

『どうもこの頃少し飮めて來たよ。こなひだも福井さんと龜清て大分飮んだが、あの時はちつとも醉はなかつた。今夜はどうしたんだか、すつかり參つちまつた。』

『そりやあ、あつしといふ者がゐるからてさあ。どうか度々お連れなすつて。』

と言ひながら、師匠の龍井がするやうに、平手てピシャリと額をぶつた。

『時に近頃せつ子さんはどうしましたえ。』

龍井が福井さんから聞いたのを、浪山は又龍井から聞いて知つてゐるのてある。

『病院へ這入つてる。』

『へえ。何處が惡いんてすね。』

『痔ださうだ。』

『痔なら家の前の病院へ這入ると好いんだがなあ。』

『なんて病院だね。』

『樂山堂病院。』

『へえ。君はあんな所にゐるのか。』

『直ぐ筋向うてさあ。』

『さうか。ちつとも知らなかつた。實はその樂山堂に這入つてゐるんだ。』
『せつ子さんがてすか。へえ。不思議てすな。大抵あすこへ知つてる人が這入ると直ぐ分るんてすが。へえ。さうてすか。ちつとも知りませんてした。』
しきりに首を振る浪山の顔を見ながら、正雄はふと或事を思ひついた。
『すると君は毎日のやうに病院の前を通るんだね。』
『通るも通らないもありやしません。家に座つてて見えるんてす。』
『ぢやあ君濟まないが、僕に用を賴まれて呉れないか。』
『何かお傳言てすか。』
『いや、實はね、僕見舞に行きたい行きたいと思つてるんだけど、なんしろどんな奴が側に附いてるか分らないから、又何か言はれても煩さいと思つて、今日までまだ一度も行かなかつたんだ。若し君が僕の代理に行つて呉れれば非常に都合が好いんだがなあ。君なら若しバツが惡かつたら、師匠の代理だとても何とても言へるだらう。』
『ようがす。參りませう。今夜直ぐ參りませう。』
『今夜は遲いから廢し給へ。もう九時だもの。』
『なあに、あの病院なら知つてるから大丈夫てす。それに今頃行きやあ却て邪魔者がゐなくて好いかも知れません。』

「さう言やあ、まあさうだね。」

二人は丁度藥研堀を歩いてゐた。正雄は只ある大きな菓子屋へ這入ると、

「何か綺麗な入れ物へ這入つたお菓子はありませんか。」

と言つた。

二人は彼か是かと色々に迷つた揚句、トランクの形をした葉鐵の箱にチヨコレエト、クリイムが一杯這入つてるのを選んだ。

「見舞に行くなあ好いが、あんまり下らない事を言つちやあ困るぜ。」

「大丈夫てす。大變心配をして入らつしやいますから、大事になさいましとか何とか言つて來りやあ好いんてせう。」

「それて澤山。それて澤山。」

それ以上の事は賴みたいにも賴めなかつた。

明くる日、稽古場て浪山に會ふと、正雄は直ぐゆうべの樣子を聞いた。

「行つたかい。』

「參りました。」

「會へたかい。」

「會へました。」
「よくあんなに遲く行つて會へたねえ。」
「看護婦に知つてるのがあるもんですから、賴んで通して貰ひました。」
「どんな工合だつたい。」
「あつしが這入ると、寢てるやうてしたがね、看護婦に聲を掛けられると、直ぐ起きて、びつくりしたやうな顏をしてゐましたつけ。」
「側に誰もゐなかつたのかい。」
「お婆さんのやうな人が一人ゐました。」
「それツきりかい。」
「ええ。それツきりのやうてした。」
「それから、僕に賴まれて來たつて言つたのかい。」
「ええ。そしたら大層喜びましてね。くれ〴〵もどうか宜しく言つて吳れつてね。」
「買つてつた物は出したのかい。」
「さう、さう、そのお禮もありましたつけ。」
「容態はどんな風だつたい。」
「大分好いさうてす。もう療治の方はすつかり濟んだんてすつて。」

「驚いてたらう。」
「驚いてました。」
「別に話はなかつたかい。」
「別に話はありませんてした。」
浪山の見舞は一向賴りのないものであつた。それても正雄は一度てもせつ子に交通の出來た事を喜んだ。

せつ子が退院するといふ噂を聞いた時は、もう藥研堀に雛市が立つてゐた。病院を出れば直ぐ又家へ歸るんだらう。家へ歸れば直ぐ又商賣を始めるんだらう。商賣を始めれば又毎晩のやうに「お寺」へ行くんだらう。一體俺達は何處て會へば好いんだ。これから俺達は何處て一緒になれば好いんだ。正雄は自分がせつ子に會ひに行く場所のないのを、せつ子が病院を出て歸る家てもないやうに思ひ惱んだ。

「御不沙汰致しました。毎々お手紙有難うございます。いつも御返事差上げる筈てしたが、手紙を書くのがやかましいのてすから、それ故つひ〳〵御不沙汰、誠に濟みません。私は餘程宜しくなりました。ついては一兩日の内に退院致します。しばらくの内、淺草の内へ參つてをります。又お目に掛つていろ〳〵お話致します。さやうなら。せつ子より。正樣。」

正雄はこの手紙を讀むとほッと息をついた。せつ子は病院を出ても直ぐは葭町の家へ歸らないのである、從つて直ぐは「お寺」へ顏を出さないのである。淺草の家と言へば、いつも話す鳥越の伯母さんの家に違ひない。伯母さんの家では、病院より尙尋ねるすべを失ふ譯であるが、それでも葭町へ歸られて、「お寺」へ毎日行かれるよりは心持が好い。

正雄は人にも得られないといふ事を、自分に得られないといふ事の慰めにした。

もう女の所へ見舞を遣る事も出來ず、手紙を出す事も出來なくなつた。せめてゐる家の近所でも歩けたらと思つたが、それも唯ぼんやり鳥越と聞いてるだけで、町所も番地も一向分らなかつた。

お菊からは相變らず便りがあつた。せつ子が退院した事も、退院してから鳥越の家へ歸つた事も、一々知らして來た。併しせつ子自身から消息があつたと言ふ事は唯の一度も書いて寄越さなかつた。

『せつ子とお菊の間に消息がない事は、やがてせつ子と「お寺」の間に消息がない事だ。』

正雄は斯う思つて安心はしてゐたものの、やはり會ひたいと言ふ心に變りはなかつた。

その頃、正雄の母は毎年の例で、小田原へ避寒に行つてゐた。正雄は土曜日毎に母を尋ねたが、田舍へ行つて母の側にゐる間でも、せつ子の事は忘れなかつた。正雄はせつ子とお菊の間に消息がないのを知りながらも、お菊の所へ毎日のやうに手紙を出して、苦しい胸の內を訴へた。

或雨の降る晩、正雄は小田原から歸つて來た。母に賴まれた菓子を買はうと思つて、淺草橋で電車を降りると、雨の中をビショ〳〵茅町の方へ歩いた。風月堂でボンボンだのカドベリイのビスケットだのを買つて、ひよいと表へ出ると、夢寐にも忘れないせつ子の姿が、飾り窓の青白い瓦斯の光に照されて立つてゐた。

「まあ。」

正雄は夢かと思つた。

「暫くだつたねえ。」

「暫くでしたわねえ。」

二人は暫く默つて顏を見合つてゐた。

「どうしてこんな所に立つてゐたの。この近所なの。」

「ええ。直ぐこの裏通りですの。伯母さんと今買ひ物にこつちの方へ來たんですけど、どうも今ここの家へお這入んなさる樣子があなたのやうでしたから、立つて待つてゐましたの。」

「伯母さんは。」

「あすこに待つてゐますの。」

せつ子は天王樣の方を指さした。薄暗い社の石垣の側に、蛇の目をさした年寄の女らしい影が見えた。

「あんな所に待たしといて好いのかい。こつちへ呼び給へな。僕會つても好いぜ。」

「好いんですよ。構やしません。」

「併し、もうすつかり好いのかい。隨分長かつたねえ。」

「ええ、もうすつかり好いんですの。ですけど、家へ歸るのが厭ですから、當分伯母さんの所にゐようと思ひますの。まだ惡い積りにして。」

「だつて、さう長くはゐられまい。」

「ええ、でもまだ二週間位は構ひませんの。」

せつ子は髮を小さく結つて、黑つぽい地味な着物を着てゐた。下駄も傘も飽くまで堅氣らしい好みなのが、商賣人らしい風より幾倍か似つかはしく見えた。正雄はもうせつ子を藝者の一人として見る事が出來なくなつた。

「色々僕は君に話があるんだが、伯母さんの家にゐる間に一度ゆつくり會ひたいもんだねえ。僕の家へ來て呉れても構はない。丁度母が小田原へ行つてるんで、誰も家にやゐないから。」

「ええ、伺ひますわ。あたしも一度お禮に伺ひたいと思つてゐたんですから。」

「禮なんてどうでも好いから、唯遊びに來て呉れ給へ。眞面目に少し話したい事があるんだから。」

「ええ。ぢやあ明晩上つても宜しうございますか。」

「あしたの晩。好いとも。待つてるから、きつと來給へ。直ぐこの前の横町を這入ると、左つ側だから。」

「ぢやあ、御免下さいまし。」

『早く行き給へ。伯母さんが待遠しいだらう。』

正雄は遠くから、せつ子の伯母に頭を下げた。せつ子の伯母も遠くから正雄に挨拶をした。やがて姪と伯母は傘を並べて、須賀橋の中へ隠れて了つた。

正雄は待合といふ機關もなく、藝者屋といふ媒もなしに、計らず往來でせつ子に會つた事を、何よりも痛快に思つた。もう何が邪魔をしても好い、誰が妨害しても構はない。二人はきつと會へるのだ。會へる運命を持つてゐるのだ。「お寺」も入らない、お菊も入らない、電話も入らない、箱屋も入らない。二人が世の中に存存を續けてゐる限りは、二人はきつと何處かで會へるのだ。

（十一）

明くる日の晩、せつ子は約束通り正雄の家へ尋ねて來た。晩會つた時よりも餘程キチンとした裝をして來たのであつたが、ハイカラに結つた髪の形にも、紋の小さな黒縮緬の羽織にも、斜に締めた翡翠の帶止にも、袖をこぼれる長襦袢の柄にも、それ者らしい匂があつた。正雄はインキで汚れた疊や本で埋まつた壁を見廻して、背景と人物が如何にも調和しないのを、可笑しくも思つたが、また嬉しくも感じた。

せつ子は風月堂の大きな折を持つて來た。そして浪山が代理て見舞に行つた時の禮を述べた。

『丁度うと〳〵してゐましたの。なんだが聞き馴れない男の方の聲がすると思つて、眼を明くと、直ぐ

寢臺の前に浪山さんが立つてるんですから、あたしあの方をよく知らないもんですから、びつくりしましたの。』

『失敬、失敬。あの時は全く醉つた紛れにいたづらをしたんだ。さぞ迷惑をしたらうと思つて、あとで心配した。』

正雄はせつ子に話したい事が澤山あつた。どれから話して好いか分らない程澤山あつた。

『何から話さうなあ。さう〳〵「お寺」の一件からでも話さうか。君、知つてるかい、僕の「お寺」で斷られた話を。』

『ええ、なんだかそんなお話を伺ひました。』

『どういふ譯であんな事をするんだらう。何か君の事で不都合な事でもあるのか知ら。』

『いいえ、そんな筈はありませんわ。』

『ほんとに無いかい。隱さずに言つて呉れ給へ。』

『隱しやしませんわ。あたしも不思議に思つてるんですの。きつとお帳場さんがお上さんに言つたんでせう。』

『さうかねえ。それ以來僕はすつかり考へちまつたんだ。』

『何をお考へなすつたの。』

『どうせあんな家に受けの好い程金を使ふ事も出來ないんだし、又迚もそれ程金持になれる氣遣ひはな

いんだ。例へば君だつても僕に若しそれだけの力があるなら、旦那にでも何にでもなつて、保護して行きたいと思ふんだけど、迚もそんな事は出來やしない。だからもう僅か計りの金で遊んだりなんかするより、それだけの金でも君の小遣の足しにして上げたいと思つてるんだ。もう僕は藝者として君を取扱ふのが苦痛になつて來たんだ。妹とも思ひ、姉とも思つて、君の力になりたくなつたんだ。どうかその積りでこれから先き附き合つて呉れ給へ。どんな事でも僕の力で出來る事はするから、遠慮なく相談して呉れ給へ。」

せつ子は唯默つて頷いた。

「この商賣をしてゐる以上はどうも仕方がない。藝だけで賣るなんて事は迚も出來る事ぢやないんだから、旦那を持たうと何をしようと決して僕はそんな事をぐづ／＼言やしない僕は飽くまで蔭に隱れてゐて、君の事を心配してれば好いんだ。時機が來て、君の身體が自由になつた時、萬一君が僕のやうな者の所へでも來て遣らうといふ氣が起つたら遣つて來給へ。僕は喜んで迎へるから。」

正雄は飽くまで自我を沒したやうな口吻を用ひたが、その言葉の奥には、飽くまで自惚れた、虫の好い、一人極めた調子があつた。それでも、せつ子は別に厭な顔をしなかつた。

「あたしもまだ當分人の身體ですから、どうにも爲やうがないんですの。自分の身體にさへなればどうにでも爲やうと思つてるんですけど。」

「だから出來るだけ稼いで、一日も早く自由な身體になり給へ。僕もそれまでに勉強して相當な暮らし

の出來るだけにはして置くから。」

正雄は既にせつ子との間に、何か堅い約束でも出來てゐるやうに話した。併し、せつ子は別にそれを迷惑に思ふやうな樣子もなかつた。

せつ子の口から責任のある言葉を聞くよりも、せつ子のさうした樣子を見るのが、正雄には嬉しかつた。口へ出して言ふ確らしい言葉よりも、如何にも世を憚ると言つたやうな愼ましげな樣子が、幾倍正雄には賴もしく見えたらう。

せつ子は三十分計りゐると、もう歸らなければならないと言ひ出した。正雄はそこまで送らうと言つて一緒に家を出た。須賀町の通りへ出るまで二人は成るべく暗い道を步いた。

通りへ出ようとする時、正雄は幾度か出しそびれてゐた、なにがしかの紙包みをせつ子の手に握らせた。

「一度見舞に行かう〳〵と思ひながら、とう〳〵行けなかつたから、これは本のお見舞だと思つて。」せつ子は直ぐ紙包みを押し戻した。

「どうかそんな事をなさらないで。あたし入る時には入るつて言ひますから。」

「そんな事を言はないで取つとき給へ。心配する程の物は這入つちやゐないんだから。」

「でも、それはどうしても頂けませんは。」

女は男が又握らした紙包みを、又男の手へ押し附けた。

「僕は妹にお小遣てもやるやうな氣持てこれを君に上げるんだよ。決して君を藝者だと思つて、旦那が小遣でも渡すやうな積りで上げるんぢやないよ。だから僕ば平氣でこんな事をするんだ。どうか取つといて吳れ給へ。妹が兄さんに小遣を貰ふんだと思つて。」

正雄は無理にせつ子の帶の間へ紙包を押し込んだ。女は已むを得ずその儘步いた。

須賀町の通りは夜店て明るかつた。

「誰に見られないとも限りませんから、あたしここて失禮します。」

「だけど、君、大丈夫かい。」

「ぢやあ、あたし向う側を步いて歸りますから、あなたこつち側を步いて入らして下さいましな。」

二人は電車道を間に挿んて、向う側とこつち側の人道を離れて步いた。男は女の姿が柳の蔭に隱れたり、夜店のカンテラに明るくなつたりするのを、眼も放さずに見ながら步いた。女も二三度男の步いてゐる方を見て笑つた。

須賀橋の袂まて來ると、正雄は立ち留つて、せつ子が暗い橫町へ消えて這入つて了ふまて、ぢッと見送つてゐた。

(十二)

二週間程立つと、せつ子の所から、葭町の家へ歸つたといふ知らせが來た。

一つひきのふまてもう「お座敷」といふやうな所ては餘り會ふまい。「お座敷」などて會はなくても、二

人の世界は別にあるといふ風に信じてゐた正雄も、女が「お座敷」てなければ會へない境遇に歸つたと知ると、もうゐても立つてもゐられなくなつた。

併し、彼はもう「お寺」へ行く事は出來なかつた。新布袋家で會ふといふ事は君太郎に對する良心が許さなかつた。彼はこの二軒より外、知つてる家を持たなかつた。

正雄は或卑しい考へを起した。福井さんを誘ひ出して、一緒に行くより仕方がないと思つたのである。正雄はこれまで數へ切れぬ程、福井さんと一緒に方々のお茶屋へ行つたが、自分の方から福井さんを誘ひ出した事は唯の一度も無かつた。それがこの日は始めから誘ひ出す積りて、「濱町の家」を尋ねたのである。正雄はもう手段を選ぶ暇が無かつた。

正雄は首尾よく福井さんを連れ出して、首尾よく「お寺」の門を潜つた。併し、正雄が會はうとした人は幾度掛けても終に來なかつた。

「あの人だけはどうしても呼んぢやいけないッてお帳場て言ふんてす。」

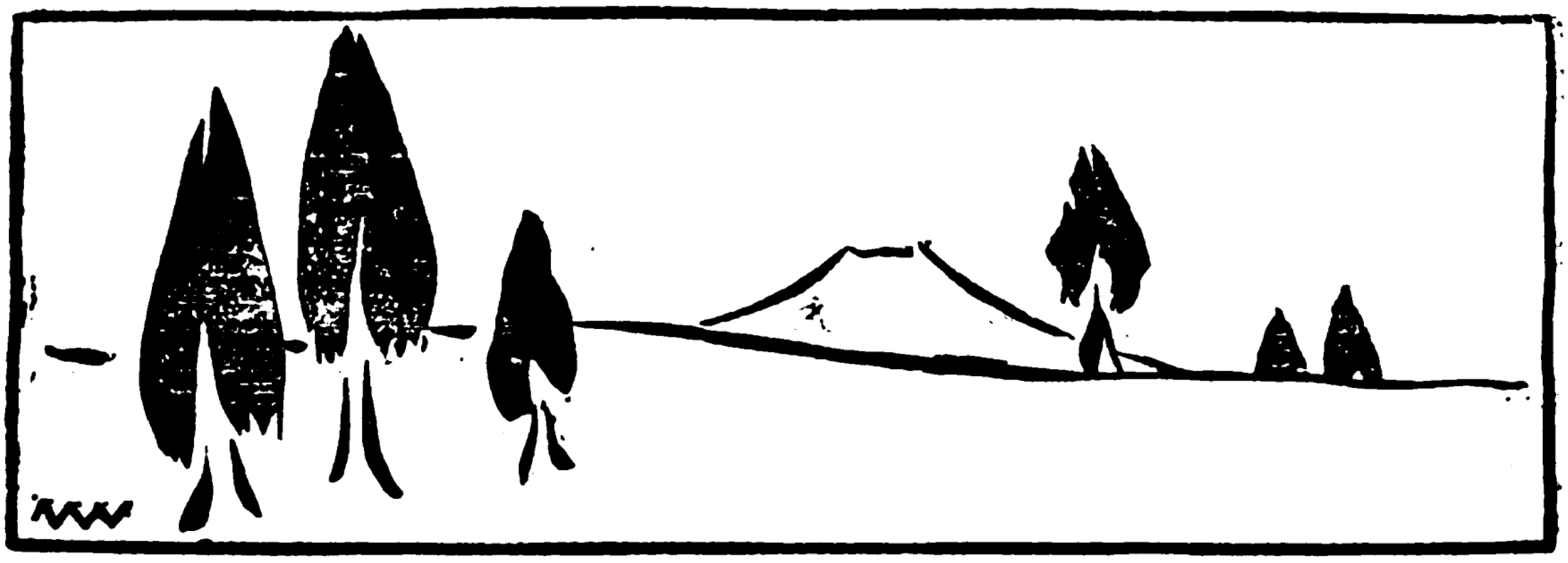
お菊は正雄が便所へ立つた時、廊下てそッと斯う言つた。

正雄はもう斷然こんな所へは來まいと思つた。こんな所へ來ない許りてはない、もうあんな女にも會ふまいと思つた。自分は欺されてゐるのだ、おもちやにされてゐるのだ、指の先て三番叟を踊らせられてゐるのだ。せつ子の言ふ事も當てにはならない。假りにも自分の客が理由もなく堰かれてゐるのに、それをどうする事も出來ないといふ法はない。それ位の事をどうする事も出來ないのは、自分に弱みが

あるからだ。男に對する情が足りないからだ。

福井さんを誘ひ出した正雄は、福井さんを急き立てるやうにして、「お寺」の門を出た。

それでも二三日すると、正雄は又せつ子に會ひたくなつて來た。どうかして何處かで會ひたいものだと思つて、色々に頭を痛めた。



別室

徳田秋聲

初めて其の夫人を見たのは、Ｋ―が或時その良人の山内の家へ、ある飜譯の仕事の手傳ひに行つた時のことであつた。―とＫ―が自身に語出した。―

Ｋ―はその頃、顏の蒼い、髮の長い、どこか粗野らしい、感傷的の靑年であつた。

ある先輩の紹介狀を持つて、麻布の垠(はづれ)にあつた山内の屋敷を訪ねて行くと、山内は丁度和洋折衷の廣い座敷で、大きな安樂椅子に凭れてゐた。山内は長く西洋をそつちこつち遊び廻つて、繪や劇などを見て來た人であつたが、年はまた若く、顏の輪廓などの能く整つた、立派な紳士であつた。

部屋には、友人の習作らしい小さい油繪などが、額緣にも入れられず、承塵(なげし)

のところに立かけてあつた。床の間にも、草花の繪がおかれてあつた。中には何か所縁のあるらしい洗髪の、目の大きい女のスケッチもあつた。夏の初めてあつたから、障子が開放されてあつたが、庭には西洋草花の大きい棚が、設はれてあつた。

室内の疊のうへには、日本風の低い卓子があつたり、臥椅子がおいてあつたりした。

K―が前んで挨拶をすると、どこからか丈の高い夫人もそこへ出て來た。

「これが僕の妻……」。

K―はさう言はれると、いきなり疊に坐つてお辭儀をしようとしたが、それが何となく駈出の青年にても見るような、唐突てあつたので、山内は「何うしたんだい」と呟いた。

良人よりか一つ二つ年上の夫人は、お俠らしい愛嬌のある目を持つてゐた。そして始終目元や口元に笑を漂へて、椅子や卓子の間を、ひら〱と歩いたり、金口の捲莨を喫したりしてゐた。夫人は學校にゐる時分から、山内と戀してゐたのてあつた。國文學から來たような文藝の作品なども、一つ二つ世に出てゐた。

その日K―は、山内から西洋の芝居の話などを聞かされた。山内は、駄々ッ子のような快活な調子て、今飜譯しようとしてゐる、西洋の脚本を朗讀した。そして、力のある太い聲て、時々その中の簡短な或白を團十郎の假聲などを使ひながら譯して聽かした。

夫人は時々笑顔をその方へ向けたが、K―は吃驚したように、默つて聞いてゐた。K―は團十郎が、どん

な聲の役者であるかすら知らなかつた。

輕い翅を擴げて、蝶がひら〱と、部屋のなかへ迷込みなどした。

K―は毎日の日課を了へると、邸から程近い或川縁に、別に假りてある家の一室へ歸つて、それを文飾するのが仕事であつた。然し其はそんなに手間の取れる事でもなかつた。其家は玄關を交ぜて三間ばかりの粗末な貸家であつたが、K―の外に、大きい頭顱のつる〱禿げた書生が一人居た。その男は松野といつて、山内の知合の或記者から託された法學生であつた。九州の或邊鄙から出た其青年は、文官試驗の準備をしてゐるのであつたが、飛出たような無氣味な目に近眼鏡をかけて、口を利く度に、筋肉が異樣に引つゝた。そして何事も獨斷的で、新來のK―などとは話をすら交へず、滑らかな砥石のような顏に始終苦い表情をしてゐた。

晩飯に呼ばれたときは、K―は其男と一緒に、山内夫婦の前へ出て行つた。そこにはニユームの新しい鍋や、紅い肉の盛られた皿などが並べられ、焜爐の火がかん〱熾つてゐた。と松野はいきなり、鍋に盈々ソツプを注いだ。白いソツプはチリ〱と音を立てゝ、熱い泡を八方に飛した。

「どうするんだい」。

山内と夫人が手も著げずに、笑ひながら見てゐると、松野は肩肱を張りながら、自分の思ひどほりに肉を皿から鍋へ打明けて、獨りで弄つてゐた。

山内は葡萄酒を飲みながら、それを眺めてゐたが、K—は夫妻の顔色を見ながら、獨てハラ〳〵してゐた。

山内とK—との間に、ふと文學の談などが出ると、松野は憎々しさうに「猪小才な」といはぬばかりの顔をして、頓着なしにさつさと飯を食つて出て行つた。

夫人はクス〳〵笑出した。

「變な男だよ」。山内も笑出した。

「それに、あの口元は奈何したんでせう」。

「厭に引つるね」。

「顔を甜めたやうにぺろりとしてゐるぢやありませんか。あの目がまた大變な目ね」。

その頃山内は、可也な負債を脊負つてゐた。そして少許ある夫人の衣類などの入つた行李が、松野やK—のゐる家の押入に收込れてあつた。そこには他にトランクや、シルクハットの入物や、こま〳〵した道具などが、一緒に投込まれてあつた。夫人は外出する度に、そこへ風通の被布や、繻珍の帯などを、女中に取りによこした。

川向の白金臺の木立の繁みが、段々濃くなつて、磧の夏草が伸出した。宵になると螢が水邊に、ちらちら光りはじめた。

仕事が時々途斷えた。山内は始終袴をつけて、草履ばきて、ステッキを抱へて、俥てどこかへ出かけ

た。Ｋ―は口述を受けた仕事を片もつけずに、毎日遣瀨ないような慵い日を送つてゐた。その仕事に興味がないばかりでなく、近頃まで一緒にゐた自分の愉快なグループから、かうして懸はなれてゐるよが、仲間から除外されてゐるようで、心寂しかつた。Ｋ―はその仲間を率ゐてゐる一人の先輩から、擇ばれて此處へ寄越されたのであつたが、それが如何かすると、Ｋ―に取つて、一種體の好い流竄の意味にもとれぬとはなかつた。

半日机にもたれて、莨を喫してゐたＫ―は、痛い頭をなやさうとして、窓際へ出て、外を眺めた。魚籃寺下の、單調な屋並が濃い緑色の木々の間から、初夏の日光を浴びて光つてゐた。それから裾の方の對岸には、新建の二階室がちらほら見えた。水に臨んだ小料理屋の旗なども目に着いた。

薄暗りから起出して、磧へ出て能く深呼吸などをやりながら、そこらを一ト廻りすると、ぴたッと机の前に坐つて、半日身動きもしずに讀書に耽つてゐる松野は、疲れた體をそこから離れて、フーフーと息をふきながら、次の室へ出て來た。そして土蜘蛛の精靈のような顏に、無氣味な笑をもらして、害心のないとの解つて來たＫ―に話をしかけた。

「君は吉原へ行つたとがあるかの」。なとゝ訊いた。

「そこの押入をあけて見い、面白いものが出よるぞ」。

松野はニタ〳〵笑いながら、押入の中の鞄の我樂駄のなかから、奇怪な書物を引張出して、そこへ跪坐んて、それを擴げはじめた。Ｋ―も傍へ寄つて見た。中には外國のものあつた。大陸人や、野蠻人の

らしい、不思議な裸體の寫眞なども、現はれた。Kーは長いあひだの獨坐と沈默とて、乾ききつたやうな咽喉に、唾液を呑みながら、それを眺めた。月がくら〳〵しさうであつた。取留のない妄想に耽つてゐた頭が、痺がきれたやうに、ぼッとしてゐた。

二人のあひだに、女の話などが出た。

「人間は美しい妻をもたんと一生の損ぢやね」。

自我の強い松野は試驗にさへ及第すれば、どんな美人とでも結婚できるやうな恃と希望とを持つてゐるらしく見えた。

Kーは美しい友禪縮緬の片で細工をした、蕃椒ほどの大きさの比翼……何とかいひさうなー、人形にでもさせさうな二つの枕を、ふと見つけ出して、掌にのせて眺めたりした。作り主にとつて、大切な甘い紀念を殘してゐるやうな媚かしい三十一文字が、美しい水莖で、そこに書つけられてあつた。

Kーは秘密を嗅出されてゐる人に、濟まないやうな氣がした。そして急いて、夫婦の愛のシムボルのやうな其品を行李の底の方へ押込んだ。

やがて松野はまた机の前へ行つて坐つた。Kーも押入の前を離れた。そして、ノートに向つて、いつからか取かゝらうとしてゐた創作に頭を浸さうとした。

暫らくすると、強い日のあたつてゐる、川岸の往來を、二人は打つれて晝飯を食ひに行つたが、松野の頭は冷たい法理に浴つてゐるらしく、條文でも暗誦するらしい目色をして、板草履を穿いて、そろり

そろりと歩いてゐた。

食堂で、二人は晝飯を食つた後、K―は獨り殘つて、廣い邸内を、そッち此方動いてゐた。そして卓子のうへにある呂宋葉を一本摘んで、喫はじめた。

書院の方では、夫人に少い女客があつた。夫人の妹らしい其令孃は紫地の矢絣の小袖などを着て、夫人と差向ひに、緣の端近に坐つてゐた。K―は夫人の顏を見ないやうにしてゐた。

橋の袂へ、晩方近所の人達が涼みに出る頃になつた。居なじむにつれて、K―は此界隈の人達や町に、一種の可懷みをもつやうになつた。能く莨などを買ふ、邸前の荒物屋も、氣をつけて見ると、可也繁昌してゐた。腹の水ッぽい時、貧しい財布から鮪鍋や鰻丼などを食べにあがる、小料理屋の二階の部屋も、そんなに氣味わるくはなかつた。

K―はその頃、不眠性に陷つてゐた。夜八時過ぐる比になると、定つてランプを吹消して寢てしまふ松野の鼾聲がしだすと、K―は初めて自分の世界が來たやうな安易さを感じないではゐられなかつた。そよ〳〵と流れ込む川風に搖れ〳〵する灯影の下で、何かしら下らないト書を描いたり、賤しいやうな追想や空想に耽つたりした。藝術上の競爭心や、世間的な刺戟などのない此頃の生活の懶さに馴れて來た彼の頭には、結句それが氣樂でもあつた。廢頽しきつたやうな心が、時々仲間の方を振顧らうとするさへが、不安であつた。

そして頭が疲れて來ると、灯を細くして臥床に就くのであたが、容易に寢つかれなかつた。薄暗い部屋のなかで、彼は時々何かに魘はれるように、苦しい夢から覺めた。疲切つた神經が、ゴーといふ夜風に戰いたり、幽かな水の音に顫へたりした。

午近くになるまで、不健康な眠に沈んでゐた彼は、目眩しい日影を浴びながら、川緣の往來を歩いて、山内の家へ行つて見た。

夫人は脹れぼつたいようなK―の顏を、嘲笑的な目をして不思議さうに眺めた。一日何も爲ることのない夫人はその時座敷で新聞を讀んでゐた。

K―は臺所へ出て見たが、何も食べるようなものがなかつた。二三日前に、女中が出て行つてからは、誰が食事の世話をするのかすら解らなかつた。

K―は夫人の姿を、ふと庭の方に見つけた。

「濟みませんが金を少し……」。

惡戲な夫人は、丁度煉瓦塀の側に繋いである猿に揶揄つてゐた。猿はキイ〳〵聲を立てゝ、夫人の胸に飛蒐つたり、裾に絡つたりしてゐた。

夫人はそこを離れると、帶際から幾許かの金を出してK―に渡した。

K―は、それを受取ると、毎時の小料理屋の二階へと上つて行つたが、生活の輪廓も内容も解らないような山内の傍にゐる事が、急に不安になつて來た。

三時頃になると、山内は網曳の車で、どこからか歸つて來たが、間もなく毎時(いつ)こゝへ來て、夫人に媚をさゝげながら、誰にでも開放されてある食堂で、飲んだり食つたりして、高話(たかばなし)をする人達が二三人、どや〳〵と上つて來た。中には戯文などの巧い、年とつた新聞記者もあつた。

Kーは見たとも、嗅(か)いだともないような、椰子(やし)の葉などに捲かれた莨を四五本、袂に入れて、その仲間から脱けて、ぶら〳〵と邸内を出ると、三田の道の方へ歩いていつた。

通の雜誌屋で、ふと可懷しい或文藝評論雜誌が彼の目を惹つけた。その中には、此處へ來ぬ前に發表した、彼の貧しい作物の批評などが載つてゐた。それが彼に取つての處女作であつた。讀んでゐるうちに、心臟(しんぞう)が不思議に躍りだした。暗い心に、微かな希望の影が閃いた。

その店を離れると、彼の足は自然にステーションの方へ嚮いて行つた。長く懸隔つてゐた仲間の顏が、急に可懷しくなつた。そして其人達と何かしら談がして見たくなつた。

牛込で汽車を降りると、Kーは長いあひだ通りなれた賑やかな狹い坂を、物希らしげに急いで上つて行つた。

「好い加減に休して歸つて來たまへ」。

仲間の一人は、ランプの下で、丹念に筆を入れつゝあつた原稿を押遣りながら、慰めた。

山内(やまのうち)を辭してからも、Kーは時々そこへ訪ねて行つた。山内の住居は、それから一度變つたが、Kー

自身の身のうへにも變遷があつた。

山内の新に移つて行つた家は、郊外に拓開いた雜木林の迹に建てられた大きな邸宅であつた。その頃下宿生活をしてゐたK—は、自分の周圍に飽きると、牛込から汽車に乘つて、いつも開放されてある其家へ遊びに行き〳〵した。ステーションから、五六町も奥へ入ると、附近の人家と懸離れて、栗や椎などの木立際に、幾棟かの其建物が直に目に入つた。K—は草鞋と一緒に赤い柿の枝などを吊してある荒物屋や、蜀黍の刈棄てられた田の畔や、野葡萄の蔓つた野原などを横つてそこへ急いだ。入口には、大きな石の門が建つてゐた。

松野はもう、そこに居なかつた。代りに温順な少い男が一人ゐた。いつも議會の議事筆記に傭はれる速記者なども、そこに寢泊してゐた。山内の探險物の飜譯などが、その速記者によつて速記された。K—はそんな人達と一緒に、寢轉んで無駄話に各々移した。其連中から、時々そこへ集まつて來る政治家や文學者の噂、山内などの連中の遊に行く、赤阪や新橋あたりの料理屋や、そこへ現はれる藝者の話を聞かされたりした。

何かしら、外を馳廻るとの好きな山内が、晩方に歸つて來ると、一同は一所に集つて、飲食をした。

夫人はその傍に、銀の延煙管で、五匁袋から刻莨を摘んでは喫しながら、口元に例のアイロニカルな微笑を漂へて座つてゐた。華族の家から縁づいて來た夫人は、動もすると、然した刻莨の小買もしなければならぬほど、手元の不自由を感ずるとすらあつた。年下の山内は、時々子供のやうに、夫人に揶揄

ひなどした。

「いやよ」。夫人は裾を抑へるようにして、立つて行つた。

「綾ア」などゝ、山内は厠のなかゝら、大聲で夫人の名を呼ひなどした。

K—はそこで、庫から取出された夜具や毛布などに包まつて、寂しい自分の下宿よりも暖かい寢床に眠ることが出來た。酒の廻つた頭腦が、がん／＼鳴つて、胸が劇しく動悸うつた。

出入の商人が、拂を取りに來ると、夫人は月々定つて何處からか來ることになつてゐる百圓札を取出して來た。

「おやまた今度にして頂きます」。

「困るわね」。夫人はその札を持つて、書生部屋の方へ行つた。そしてカレー粉やソースのようものを、町の方へ買ひに行くように吩咐けた。

「O—さんの奥さんは、どんな方です」。

K—は時々、先輩O—氏の夫人のことなどを聞かれた。

O—が、他の大家連と、一同食物などを持寄つて、そこへ集つた。O—は其日は、數尾の新しい魚を見繕つて、車夫に臺所へ屆けさした。劇の方の大家M—氏も、名高い鷄屋で誂へた、鷄肉の折詰などを提げて來た。大學出の若い評論の大家や、歷史小説の老大家なども集つて來た。

O—は銘選の仕立卸の袷に、茶色の羽織を着て、門の内で栗などを落してゐた。

丁度來合せたK—も、時々その席へ顏を出した。文藝談などが、盛に取交されてゐた。夫人は白いエプロンをかけて、臺所で料理に忙しかつた。そして疲れたような顏をして、茶の間に切つた爐の傍へ來て、莨を喫した。若い良人の食堂に、時の大家が多勢集つて來たと云ふとが、夫人の心に一種の優しい悋を感ぜしめた。食味通だと云はれてゐる、人氣作家のO—などの食べるものを拵へると云ふとも氣遣であつた。

時々山内が、そこへ出て來て、何かの打合せをしては、引込んで行つた。

K—は裏庭を、ぶらつきながら、七輪の前に跪坐んでゐる夫人の横顏などを見て通つた。そこには鷄頭などに交つて、壞れかゝつた垣根に絡む茘枝(れいし)の實が、爛れた女の舌のように熟し切つた眞紅の臟腑を見せてゐた。K—は充血したような目をして、そこに立つてゐた。

秋になつて、尫弱い夫人の顏は、一層蒼かつた。夫人は元から、肺が好くないといはれてゐた。

山内が、或老政治家に隨行して、暫らく洋行した留守を、夫人は足腰の立たぬ、年取つた良人の母親と一緒に日(ひ)を送つた。

ある寒い冬の晩方に、K—はまた放浪者か何ぞのように荒れた顏つきをして、そこへ入つて來た。

夫人は、老婆と一緒に、晩飯の膳を並べて、そこで葡萄酒を侑めたり、自分にも飮んだりしてゐた。老婆は男のような散髮頭で、表情のない顏をして、炬燵に入つてゐたが、どんな人が入つて來たかす

ら、威知しないらしかつた。

飯がすむと、夫人は三味線などを取出して來て、炬燵に坐つたまゝ、爪彈て何やら彈きはじめた。醉のまはつた老婆も、齒のない口をもが〳〵させて、にッこりともしないて、何やら謳ひだした。枯木のような其手て、三味線を彈く手振をしたり、空洞な聲を出して、笑つたりした。そして終に、そこへ坐つたまゝ、體に嬌態を作つて、仲上つて振事をやりはじめた。夫人の三味の音色も、燥いて來た。

「お婆さんは、なか〳〵お上手よ」。

夫人は笑ひながら、なよ〳〵した聲て、唄を謳つた。

やがて、夫人の義太夫なども出た。

「三十三間堂をやりませう」。

夫人は彈きながら、語りはじめた。所々文句に忘れた箇所があつたり、糸の突つかゝるような處が出て來たりした。

炬燵の片側に入つてゐたK—も、傍から加勢した。書生なども、そこへ寄つて來た。

その晩も、K—は衆と一緒に、妖怪談などに耽りながら、そこに泊つた。

明くる日、K—は黑い紋羽二重の羽織を引かけた夫人と一緒に、ふと外を歩いてゐた。夫人は何かしら心のはづむような調子て、草履を突かけながら、末枯の小逕を、輕い足取てひよい〳〵歩いゐた。小逕の片側には、枯芒などが、縮れた莖を風に戰かせてゐた。庭てふと一緒になつて、それから門の外

へ出たのであつた。K—は何の氣もなげに、歩いてゐた。
ふといたづらな笑を帶びた夫人の目が、K—の顏を振顧つた。
「何處へ行くの」。その目が呟いてゐるようてあつた。
「何しに來たの」。其口元が冷笑してゐるようてもあつた。
に志してゐたK—は、この夫人などから、出來るたけ女性に對する暗示を得ようと考へてゐたのてあつた。

歐洲漫遊の途に上る、ある女學者の送別園遊會が、次の年の夏の初めに、山内の廣庭で催された頃は、山内も歸朝してゐた。
K—はその頃、記者生活をしてゐたが、短かい作物などが、時々雜誌に載せられた。洋行しようとしてゐた其文學者とも、可也親しい方てあつた。
K—が新らしい袴などを穿いて、暫くぶりてそこへ行つた頃には、人がもう大分集まつてゐた。其文學者の關係してる出版會社に緣故のある人々が、各方面から寄つて來た。その中には、克明らしい平袴などを穿いてO—氏も來てゐた。
木立の蔭や芝生などに、ところ〳〵椅子やベンチが置かれて、生ビール、一品料理、おてん、正宗、團子などの屋臺店が、そこ此處に置かれてあつた。赤い襷などをかけた多勢の女が、持ち〳〵の店へ寄つ

て來る客の接待に忙しかつた。

そこ此處を彷徨いてゐるうちに、K―は何時のまにか赤い顏をしてゐた。

色々のグル―プが、そこにも此處にも機嫌の好い顏をして、高談をしたり、笑聲を立てたりしてゐた。

芝生の方で、或る痘痕面の大きい紳士が、多勢の人に圍まれながら、一場の送別演説を試みた頃には、日脚も大分傾いて、フロックコ―トや、黒い羽織に吸ひついた埃が、薄日に透かし視られた。郊外の風に曝らされた人々の顏には、一樣に荒い疲勞の色があつた。

「××君萬歳！」

相和する人々の聲が、そこから起つた。拍手の聲も聞えた。

その集りが崩壞して了ふと、蹈にじられた芝生に、四時頃の寒い風が吹いて、庭が一時間寂して來た。

長い顎髯を貯へた講釋師が、座敷で講釋を演りはじめた。そこへ人々が、ぞろ〱と上つて行つた。

何か要ありげに、手と手とを握つて、すいと人込のなかを横ぎつて行くO―氏の姿が、時々K―の目に入つた。その顏色は、快活な書齋のO―氏とは思はれぬほど、嚴肅であつた。

埃ッぽい芝生のうへに、日が段々かげつて來た。飲食店の周圍が、次第に寂れて來た。空のビル樽が、幾箇も、そこに並べられてあつた。

座敷の方へ上るとK—は目のぐら〳〵するのを覺えた。乾燥した外の空氣に、咽喉がへばりつくようであつた。

ふと、閉切つた書院の襖を開けて、K—は茶の室の方へ、飲物を搜しに入つて行かうとした。

茶の室は閴寂してゐた。爐の緣に坐つてゐるO—氏の姿が、ふと目についた。側に夫人もゐた。酒に弱いO—氏は、そこで好きな茶を飲んでゐるらしかつた。

靑いK—の顏が覗くと、

「そこを開けちや厭よ、K—さん——」。

夫人が顏を赧らめて聲をかけた。

O—氏は、きちんと坐つたきりであつた。

K—は急いて、そこから飛出した。夫人の姿は、其日一日、何處にも見られなかつた。婦人客のなかつた今日の集りに、夫人の服裝も、人々の目を避けしめた一つの原因らしく思つた。

それから幾年かを過ぎた。

K—は或る年の正月に、想出したように山内の家を訪ねた。山内は、そのころ牛込の奥の方に住つてゐた。

山内は仕立卸のフロツクを着込んで、夫人や若い人達と一緒に、二階にゐた。山内の生活は、その頃

大分豊かになつてゐた。

「どうしたい」。

然いつて元氣よくK—を見迎へた山内は、顔に酒氣を帶びてゐた。

「夫人は」。

大分たつてからK—は部屋を見まはしながら、訊ねた。

「そこだよ」。山内は半分襖を閉めた奥の座敷を顎てしやくつた。

そこへ顔を出して挨拶をしたK—の目に、黑紋附を着た夫人と並んで、小肥りに肥つた愛らしい若い女の、同じ黑の紋附姿が、目に映つた。それが山内の昵みの女であつた。

夫人は、そんな女と並んでゐるところを、素からの知人に見られたくはなかつた。

襖が後から直に閉切られた。

K—は、山内とも、そこに集つてゐる人達とも、大分隔りのあるとを感じた。そして階下て、結錫などて杜蘇を飲むと、間もなくそこを出た。（完）

▽歲末言△

▼烏兎匆々、本年も亦將さに本號を以て讀者諸君と相見ゆるの最終たらんとす。顧みて一種の淡き悲みの念なき能はずと雖も而かも本誌の改良については聊か力を盡したるの甲斐ありて、本年一ヶ年間に於ける發展は、創刊以來廿七年の比率を破り、昨年の本月と比して殆んど二倍の發行部數を見るに至りたるは密かに自ら喜び、且つ又讀者諸君に謝せざるべからざる所なり。未だ除去するを得ざる本誌幾多の缺點は、編者の努めざるにあらず、力の足らざるの致す所、將來益々經驗に鞭つて、嘗つて讀者諸君の知遇に酬いんことを期す

▼大正二年劈頭の文壇に上るべき新年號の內容は、卷頭の豫告に示すが如く、論文に於て、說苑に於て、將た又小說に於て、何れも海內第一流の人士を網羅し、趣味と實益とを兼ね備ふることを目的としたり。今や我邦內に於て刊行せらるる雜誌の數は恐らく數百種を下らざるべきも、其材料の精選と內容の充實とは本誌獨得の長所として自讃するを憚らざる所、乞ふ之を事實の上に徵せられんことを

▼中澤臨川氏の「藝術家としてのトルストイ」は今秋の「トルストイ論」の前半とも見るべきものにして精透にして深刻なる大論文、丘博士の「觸らぬ神の祟り」と共に文壇及び思想界の問題を惹き起すべきを疑はず。又永井柳太郎氏の「支那人に代つて日本人を嘲る文」及び報知新聞主筆須崎默堂氏の「經國の大本」も共に堂々たる大論議にして、一は人道の上より熱烈血性の文字をなし、一は國民の思想問題を論じて莊重雅典の詞章を綴る。右四編何れも論壇稀に觀るの大文章にして熟讀に値する者、發行の上敢て江湖の批判を乞はんと欲す

▼杉村楚人冠氏の「擬男爵」は「時子」以來例年本誌に寄せられたる如き事實譚にして、內容の珍奇先づ人を驚かし、松崎天民氏の「板新道の一隅」(藝者小若の半生)は「淪落の女」よりも更らに苦心の作にして殆んど狹斜文學の粹と稱すべし。靑柳有美氏の「斯くあるべき女」は女の各種類に亘つて著者の好む性格の女を描けるもの、觀察奇警、行文儁銳、著者一流の特徵を發揮し、黑頭巾氏の「勅選議員」は貴族院中最有力なる勅選議員の一團を捉へ來つて縱横に解剖す。薄田泣菫氏の「嘘」は懸想文賣と若き男の對話にして瀟洒淸涼の氣に滿つ

▼若し夫れ小說に至つては全卷の半ば以上を占め、正宗白鳥氏の百五十枚の長編「心中未遂」を初め、鈴木三重吉氏の「別れる日」森鷗外氏の「阿部一族」谷崎潤一郎氏の「惡魔續篇」長田幹彥氏の「船客」皆六七十枚以上の長篇、最も短き部に屬する田山花袋氏の「不思議な小包」島崎藤村氏の「蜂の巣」小川未明氏の「暗夜」も何れも四十枚を下らず。以上八篇皆著者渾身の心血を絞れる名篇にして、其紙數を併せ來れば優に五百枚以上の大册子となり、普通の單行小說二册に相當すべし。新春文壇何れも全力を濺いで妍を競ひ美を爭はんとすべしと雖も、其量に於て、其質に於て、又文壇大家の傑作を殆んど遺憾なく網羅せるに於て、本誌を推して巨擘となすべきを疑はざるなり

關東大賣捌所

東京神田表神保町 東京堂
仝 神田裏神保町 上田屋
仝 京橋尾張町 東海堂
仝 京橋元數寄屋町 北隆館
仝 京橋西紺屋町 良明堂
仝 日本橋本石町 至誠堂

關西大賣捌所

大阪東梅田町 盛文館
仝 京町堀 太華堂
京都佛光寺 東枝書肆

○定價 金貳拾五錢郵税金貳錢（海外郵税拾貳錢但清國を除く）

冊數／區別	内國	外國
六冊	金壹圓五拾錢	金貳圓拾錢
十二冊	金參圓	金四圓貳拾錢
以上郵税共		

▲但 新年號春秋二期附錄號は各倍册に付普通號二册の代金を申請くべし、即ち一ヶ年通計十五冊分の割合なれば一ヶ年分御注文の方は内國は金參圓七拾五錢外國は金五圓貳拾五錢拂込まるべし

送金注意

一郵便爲替 にて御送金の場合は 本郷西片町十番地反省社 と指定し拂渡局を 東京市東片町局 と指定あれば途中盗取の虞なし

一振替貯金 口座は東京三十四番なり、これにより御送金の方は外に登記料一錢を加えらるべし、然らざれば送金額より差引くにより端金となりて却て面倒となるべし

一郵券代用 必ず一割增の事

一集金郵便 の便法を利用せらるゝ方は、座ながらにして誌代の拂込をなすことを得べし、御希望の方は拂込金額以外に左記料金を加えたる其總額を前以て弊社へ通知せらるべし弊社は直ちに其取扱をなすべし

一金一圓迄 金五錢
一金三圓迄 金六錢
一金五圓迄 金七錢
（集金委托料及送達料）

一受領證請求 は必ず返信料金を要す

大正元年十一月廿八日印刷納本
大正元年十二月一日發行
（禁轉載）

發行兼編輯人 東京市本郷區駒込西片町十番地 麻田駒之助
印刷人 藤本兼吉

發行所 振替口座東京三十四番 電話下谷九一九 電信略號ハンセイ 反省社

印刷所 東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地 秀英舍第一工場

CHUO KORON (*The Central Review.*)
By The Hansei-sha Publishing Co., Published Monthly.
Terms of Subscription: annual subscription yen 5.25; Single copy 37 sen including postage. Entered at the Post Office at Los Angels, Cal. U.S.A. as second-class mail matter